明治四十三年七月廿五日印刷納本（毎月一回二十五日印刷納本）

女子文壇

八月號

第六年第拾號

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



愛らしき少女達の讀物には一等評判よい



一日發行　八月號　要目

少女

毎月一日發行　定價一册拾錢　送壹錢　半年六拾三錢　郵税共　口繪挿畫澤山



▲讀者少女小説　◎うたがひ……榎本紅香
▲少女史談　◎勾當の内侍……夢守人
科學
◎仔犬の育て方……内田獸醫士
◎驚くべき蟻の智惠と力　鯉岳小史
◎花子さんの修學旅行會　糟谷秋風
◎御美しき閑院姫宮殿下の御文藻……
◎休暇中の心得……K M
少女小説　◎女間諜……磯萍水
◎暗い心（續）……犬麻呂
◎まり子の避暑日記……一色醒川
おとぎ話　◎蝶の宮殿……田島曲琴
◎小さなお庭（續）……佐々木好母
◎涼み話……桂笑子
冒險小説　◎女人禁制……都その子
實話小説　◎暑中休暇から生れ變つた樣に勉强家となつた少女　朝井千とせ
◎どの府縣が一等よく出來たか……（優良府縣を選奬す）
◎投書家を驚かす新計畫……（本號投書の選拔讀者に托す）
◎べからずの國……ふみ子
◎凸坊の肖像……白羊

其他面白い繪さかし少女文壇の懸賞もの等澤山あり

發行所　東京京橋區大鋸町　女子文壇社　振替口座東京壹貳七九番　最寄書店に無くば直接御申込を乞ふ


IVORY
アイボリー
品良く價安き
無比絶品なり
近來類似品多
し御注意あれ
石鹸！
IVORY

女子文壇 八月號（第六年第拾號）目次

【卷頭口繪】

△上州榛名湖畔（水彩畫石版密刷）……大下藤次郎
△愛宕山より品川沖を望む（石版彩色密刷）……片山春帆
△山階宮故菊麿王妃常子殿下（近影）……寫眞版
△宮内大臣子爵渡邊千秋氏家庭……寫眞版
△名門の夫人（子爵松平賴和氏夫人保子、四條男爵令嗣隆英氏夫人駒子）……寫眞版
△名士の夫人（伯爵酒井忠道氏夫人績子、法學士高橋文五郎氏夫人いつ子令孃綾子 內務參事官水野錬太郎氏夫人、南滿鐵道會社理事淸野長太郎氏夫人國子）……寫眞版
△名士の令孃（南滿鐵道會社理事淸野長太郎氏令孃定子、東京市會議員大木宗保氏令孃やす子）……寫眞版
△法學士秋山源藏氏三令孃（長女えふ子、二女菊子、三女まさ子）……寫眞版
△誌友、各地風光……寫眞版

【本欄】（一－四八）

◎女子の職業を得んとするは世界の大勢……文學博士 黑板勝美
◎人間一生の身體の變化……ドクトル 富士川游
◎旅行心得八個條……加納子爵夫人 加納鉿子
◎美を愛する心……前學視總監安樂兼道氏夫人 安樂氏夫人
◎經濟と健康の爲にする避暑……藤原商會主夫人 藤原梅子
◎涼しい座敷遊びの趣向……秋山辯護士令孃 秋山えふ子

◎白晝男子に尾行されたる事實……夕に咲く花
◎東京灣を一周したる女生徒の談話……婦人記者
◎女子判任官と語る……野に降る雨
◎踊のお浚ひ……萬壽子
◎水平線……河井醉茗
◎エーツの詩……川路柳虹
◎追はれし人……横瀬夜雨
◎小園より……窪田空穗
◎お蝶……兒玉花外
◎夏の野路……水野仙子
◎婦人旅行談……數十項

【短篇小説】（四九—六二）
▲濤子……流水女
▲彷徨……S H子

【詩】（六三—七〇）
▲十八歳の春に歌へる……金田代志子
▲慾心……田中落葉子
▲迷ひ泣くかげ……章子

【散文】（七一—八八）
▲昨夢……夢の夜
▲夜の室にて……柴井やよ子
▲—無垢……安木はる子

【和歌】（八九—九五）
▲森文尾子　▲菅原芳子　▲浮草子

【日記】（九六—一〇九）
▲お稽古がよい……野の百合
▲午后……瞎志緒

【論文】（一一〇—一一八）
▲鑑劇趣味の變遷……吉田紫花
▲初めて見たる東京……篠田とみ子
▲はなれ／＼の家庭と學校……花子

【書簡文】（一一九—一二八）
▲肩揚を下して……橋村伊都子
▲雨の日友に……香野子

【短文】（一二九—一三五）
▲狂氣の友……みどり子
▲蚊帳の内……齋藤八重子

【俳句】（一三六—一三七）
▲菅原芳子　▲林美津子　▲淸田芳枝

▲誌友作家の進境（中）……（一三八—一四〇）
【誌友倶樂部】（一四一—一四九）
【編輯通信】（一五〇）
【雜報】（一五一—一五三）

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登録商標

壽美禮おしろい

五二會品評會 功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製

錫蓋附乳白硝子器入



ヴワイオレツト水製

ぬり製 大壜二十錢 小壜十二錢
水製 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢
玉製
粉製
肉色各種
錫栓附乳白硝子壜入

◎**壽美禮白粉**は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白さに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、觀席、雜踏の場所に臨むに衞生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑**壽美禮あらひ粉の特性**

鑵詰 鐵、藍、紅彩蝶番ひ 八錢
別製鑵詰 五拾錢
大袋 二錢
小袋 一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美しくなす◎壽美禮あらひ粉は御髪洗に御用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は溫湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登録商標

西洋白色くなるあらひ劑
SUMIRE
WASHLNG IOWDER
壽美禮あらひ粉



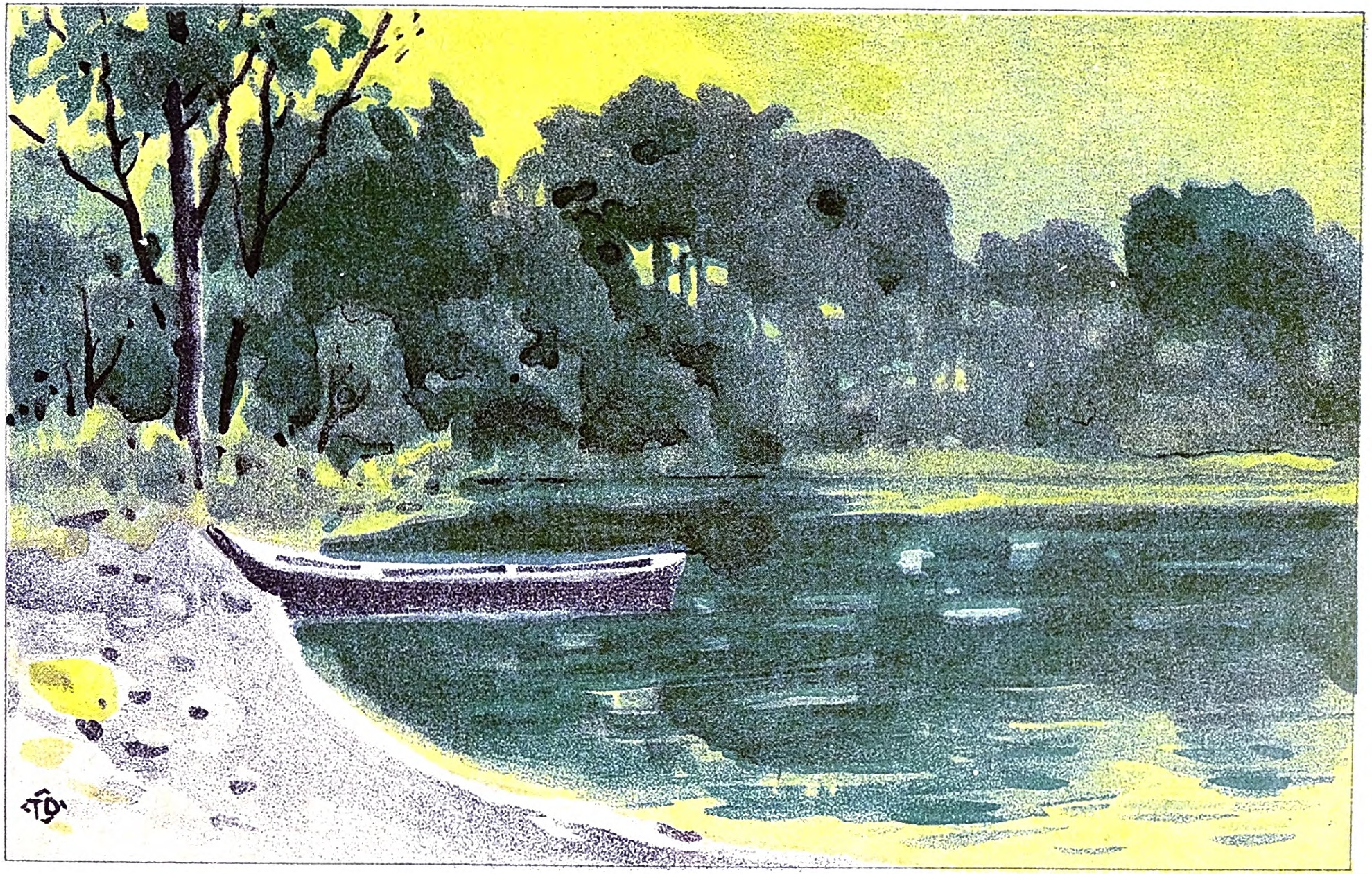
製造本舖 東京兩國元町(兩國橋際) **壽美禮堂謹製** (電話浪花二七六五番)

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

(扉ノ四)

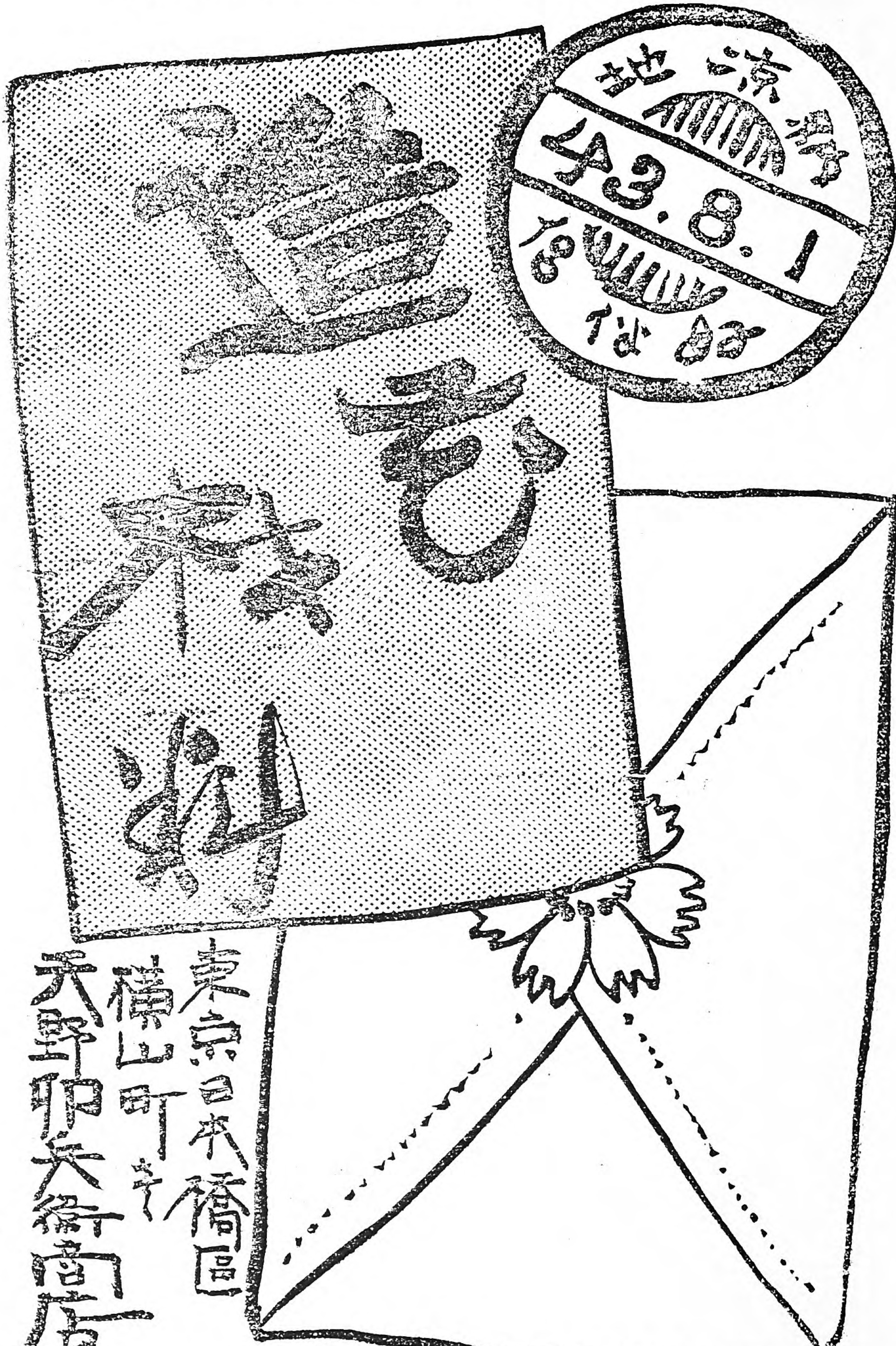
女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

上州榛名湖畔



大下藤次郎筆

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



正確なる時計と流行せる指輪と

時計は器械の堅牢にして時間を示すこと正確なるものを撰ばざるべからず。『安もの買ひの錢失ひ』を爲さるゝ勿れ。三越の如き確實なる店について御求め遊ばせば、かゝる御心配は御無用なるべし。

指輪は十八金製寶石入が大流行なり。千圓のダイヤモンドと十錢の新ダイヤとは外見頗る相似たり。されば指輪は三越の如き信用を重んずる店へ御注文遊ばさるが、最も安全の策といふべけれ。

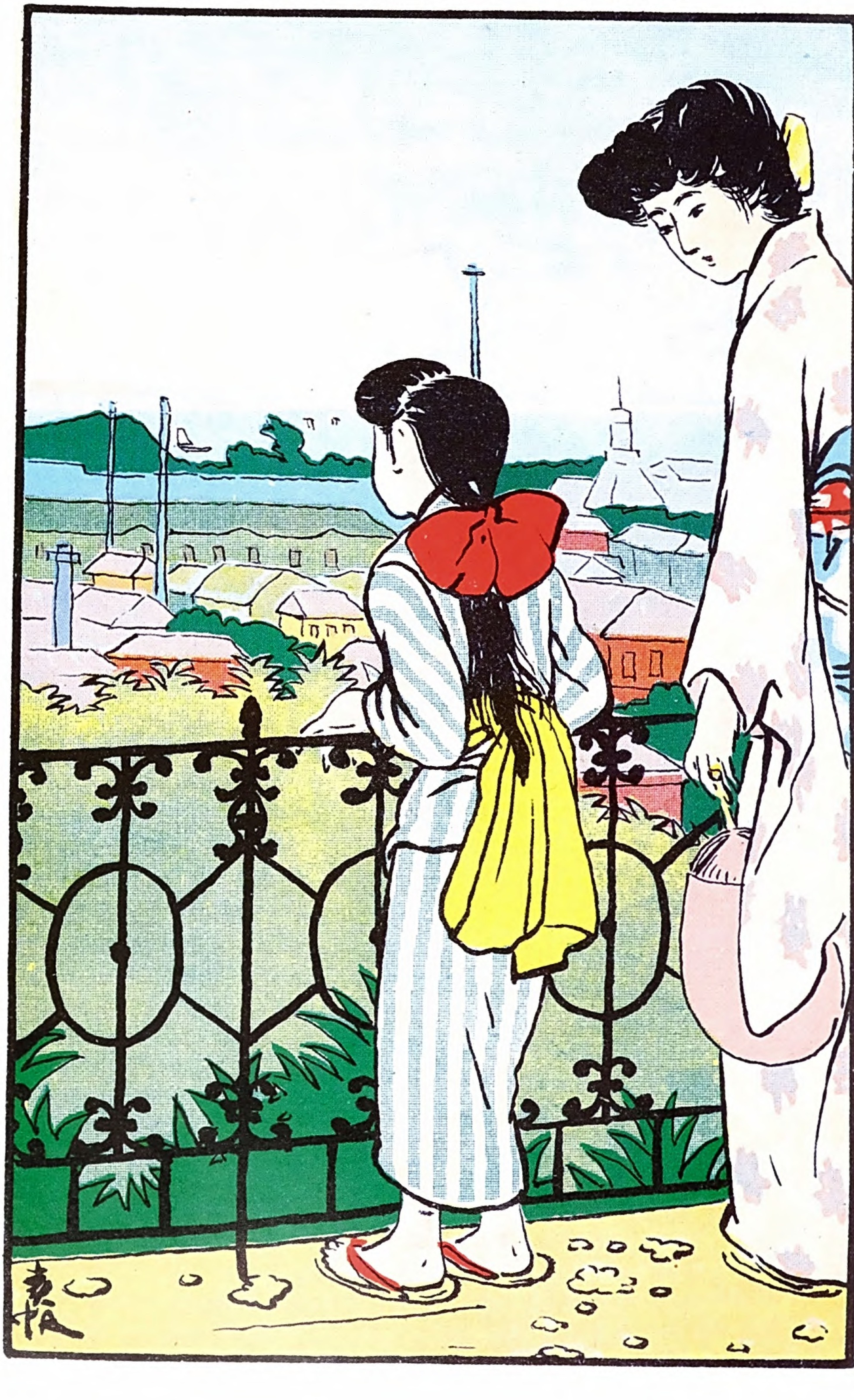
地方御注文案内書「時計と指輪」は御申込み次第無代進呈

東京駿河町

三越呉服店

（振替貯金口座東京三〇〇番）

愛宕山より品川冲を望む



東京錦石堂石印

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

山階宮故菊麿王妃常子殿下



殿下の御寫眞は嘗て本誌に掲載の榮を得たるも、更に今回特に本誌の爲に最近の御撮影を貸與されたるものなり

宮内大臣子爵渡邊千秋氏の家庭



前列(右より)中川氏夫人、千春氏令孃、松本氏夫人、隨川氏夫人、高山氏母堂、渡邊宮相、仝夫人、渡邊國武子、千春氏夫人及令孃、千冬氏夫人、高山氏夫人

後列(右より)松本修氏、隨川氏、中川氏、國武子令嗣千冬氏、高山氏、宮相令嗣千春氏、仝令息覺麿氏

名門夫人



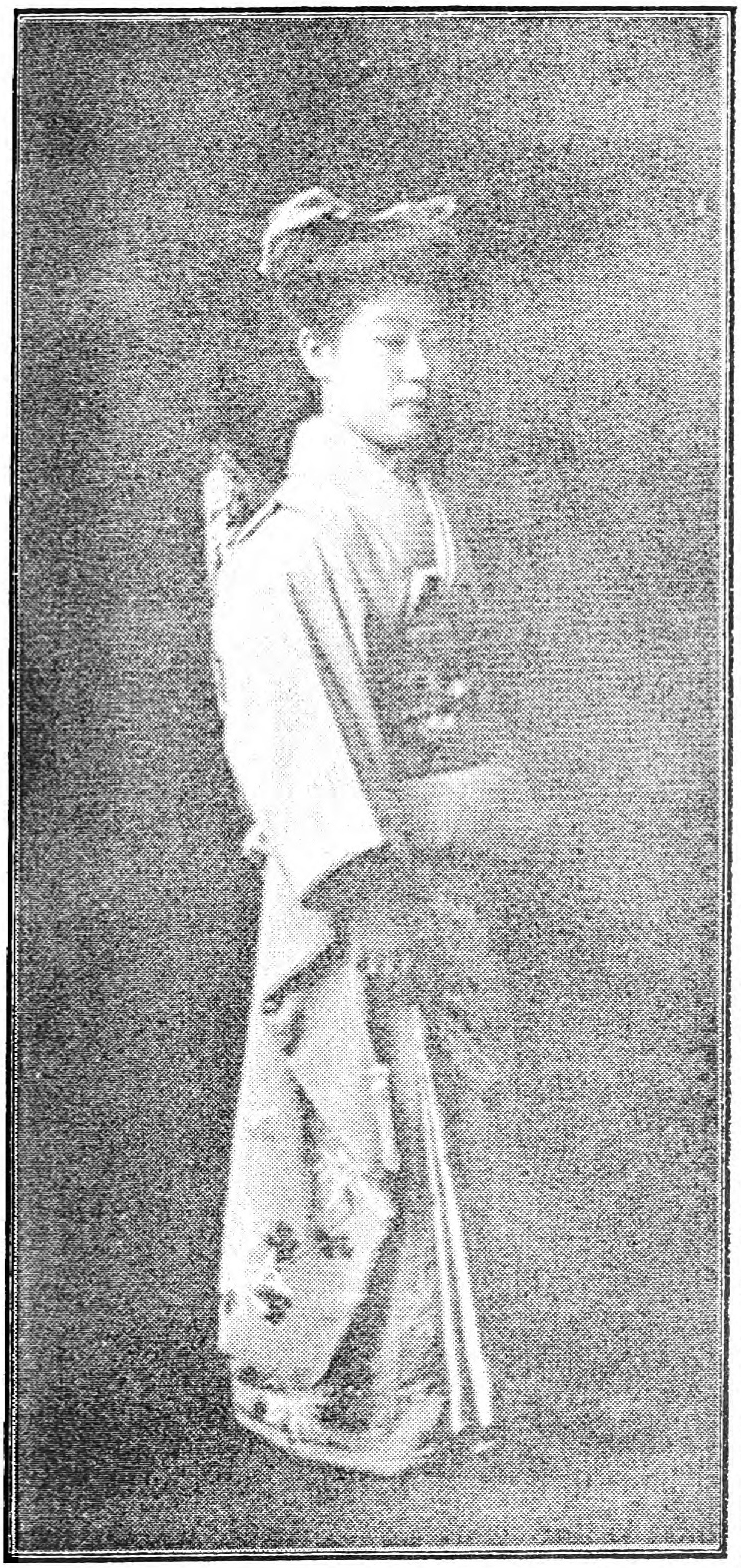
子爵松平頼和氏夫人保子



四條男爵令嗣隆英氏夫人駒子

南滿洲鐵道會社理事
清野長太郎氏令孃定子





東京市々會議員
大木宗保氏令孃やす子

惡筆は一生の損

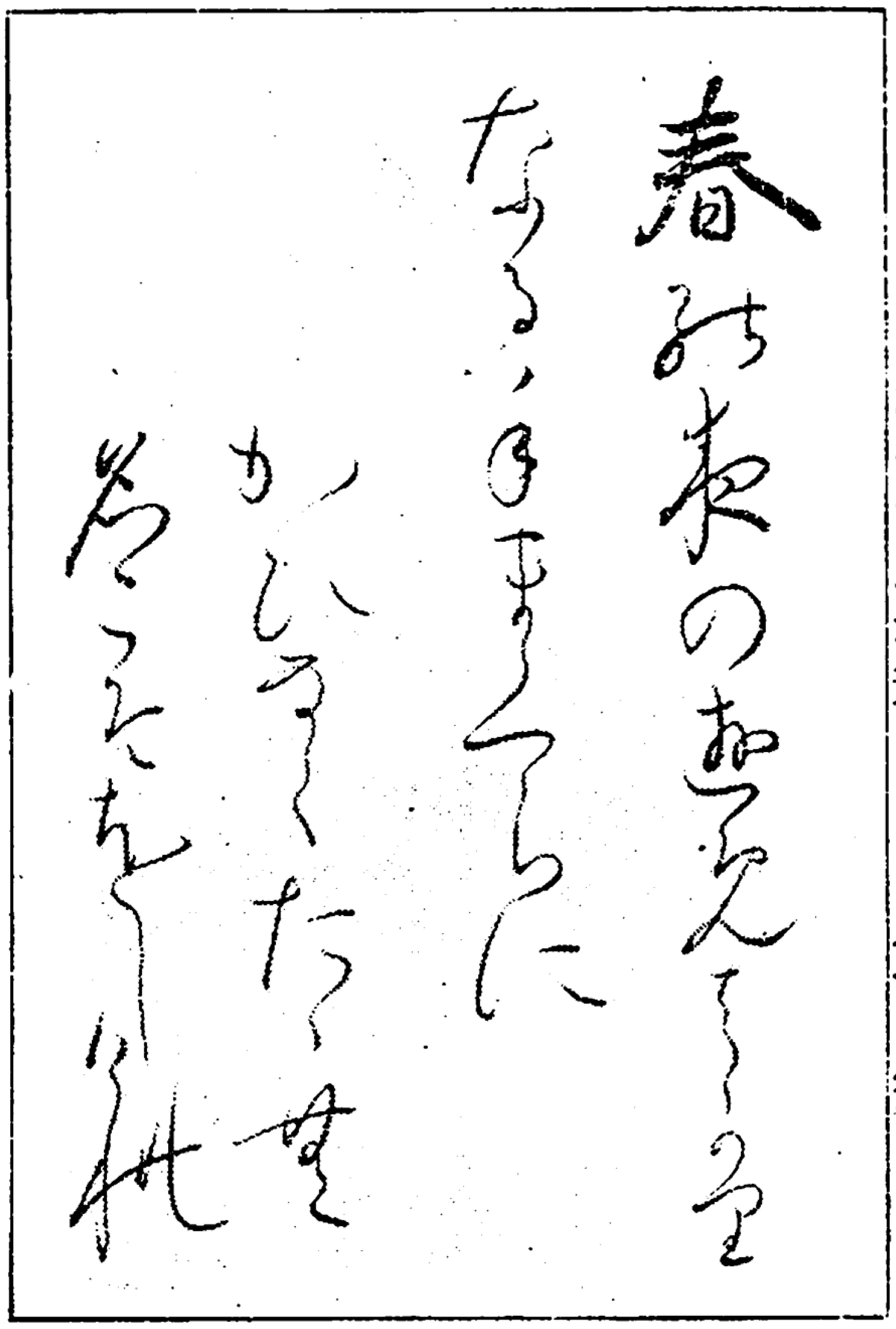
習へば斯くの如く直ちに上達する

本會獨特の特許速成通信敎授の方法にて練習すれば如何なる性來の惡筆にても最も短日にて上達すること全く機械的也

▼女子部の書者
小野鵞堂先生

▼男子部小學部書者
稻川雲谿先生
玉木愛石先生

外講師大家數拾名



三ケ月目の清書　福岡縣八幡町　小田安江

（見本詳細會則無代進呈す）

東京本郷區大學正門前
電話下谷三〇壹壹番
電話下谷三貳一〇番

帝國習字速成學會

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



名士夫人



伯爵酒井忠道氏夫人 綾子



內務參事官水野錬太郎氏夫人



法學士高橋文五郎氏夫人いつ子と令孃綾子



南滿鐵道會社理事清野長太郎氏夫人國子

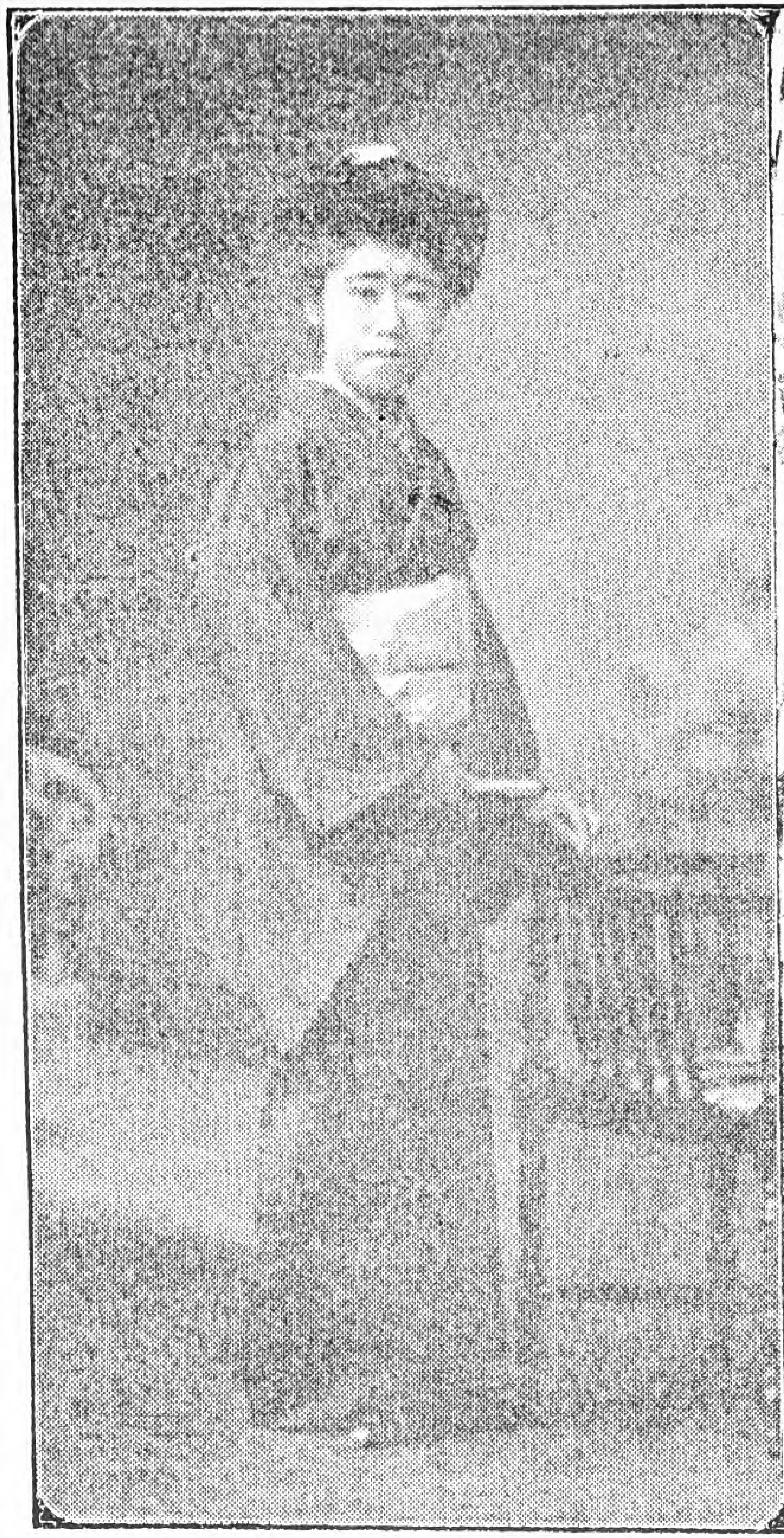
法學士辯護士秋山源藏氏の三令嬢



三女さま子（東京女學館在學）



二女菊子（東京女學館卒業）



長女よふ子（東京女學館卒業）

夢二畫集

旅の巻

若き旅人は、たゞもう何のあてもなく、南へ、南へと辿つてゆくのだつた。海のあなたへ！東の島の紙の家よ、さらば。

——夢二——

（旅の巻の第一集成るの日）

新装四六判
定價七十錢
送料六錢

初版即日賣切
再版出來
三版着手

春の巻
六版
定價五十錢
送料八錢

夏の巻
五版
定價五十錢
送料八錢

花の巻
四版
定價四十錢
送料四錢

秋の巻
近刊

東京麴町二丁目二番地
發行所 洛陽堂
（振替口座東京二〇一九四番）



梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の**ばい毒**根治特効新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓つて根治**するを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絕し天賦の生命健康を保全せよ。

藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

生殖機病特効新劑……（獨逸新輸入藥）

内服 ヨヒンビン

拾錠入壹劑 藥價送料共 壹圓九拾錢 郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授博士スピーゲル氏の發見に係る

る男女**生殖機不能**即ち**陰萎病。腎虛。神經衰弱**遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖虛弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不姙娠。冷症。發育不全等に用ひ天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力を增進**し生殖器を强健ならしめんと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**世にありふれたる無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

奏効確證美容新劑 やせる藥

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顏赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質過多質脂肪の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓廿錢着金即刻送藥す

世界唯一 麻病消渴の根治新藥

麻（りん）滅（めつ）

麻滅は最も進步したる最新の麻病消渴即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を內服して**麻病消渴**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より**根治**するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢

郵券代用貳割增しの事

わきが 腋臭 全治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても忽ち**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ 價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓參拾錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は獨逸醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

特別製分 金五圓三拾錢 大瓶貳圓卅錢 中瓶壹圓廿錢

以上六藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

（ほノ二）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

婦人画報

八月一日發行 八月の卷 一冊 廿五錢 郵税二錢 六冊税共壹圓五拾錢 十二冊税共二圓八拾八錢

畫報

◉水邊 齋藤五百枝 彩色石版…
◉花氷◉涼しき海と川…
◉女學生の仕事いろ〳〵…
◉待宵會◉單身渡米の少女…
◉清水谷高女校長の訓話と園藝
◉聖心女學院◉夏の小兒いろ〳〵
◉鳩山秀夫氏同夫人◉日向氏と夫人
◉女學生東京灣周遊…
◉皇后陛下より前田家への御下賜品…
◉將校婦人會へ總會行啓御光景…
◉伏見宮博恭王同妃兩殿下英京にて御撮影の御眞影
◉兩殿下の御歸朝 王子王女殿下の御出迎…
◉御新築の竹田宮御邸…
◉獨逸皇族妃殿下 赤十字社病院にて撮影…
◉令孃鑑◉京都佛光寺裏方蓬子の方…
◉寫眞織と其手本◉露國觀光團…
◉長崎幼兒保育所と土浦女式會員
◉三州豐橋に於る活花大會…
◉神戸松蔭高女の薙刀術…
◉鍋町女學校の謝恩會…
◉溝口伯培養のダリア…
◉朝と夕(夏の婦人)…

讀物

▼今日の婦人に同情せよ… 侯爵 徳川頼倫
▼女學生の得ぬ忘れ恨み… 文學博士 上田萬年
▼女大學と現代の婦人… 男爵 澁澤榮一
▼暑中休暇… 文學士 三輪田元道
▼明治式女… 宮田修
子守網女… 遠山稻子
夏期の婦人と小兒… 藤井學士
素人に出來る園藝
氷の家に棲む土人
暑中の米國婦人…
手輕なお惣菜
▼婦人の癖いろ〳〵
▼現代貴婦人の應接
▼文學に囚はれ身を誤まりし女
▼女中と我家 乃木夫人…宇山夫人 佐々木夫人…日向夫人
▼婦人美と虚榮心… 藤島武二
▼上流婦人と自重心… 安井哲子

東京飯田町四町の四 東京社 電話番町二三三九 振替口座一一八一八

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

皆様のお蔭で少女も一週年を迎へました

少女 一週年紀念號

九月一日發行 ◎ 紙數增加百五十頁 ◎ 定價金拾五錢 (面白き記事滿載) 郵税壹錢

◉光彩ある一週年紀念號の發行

新學期は來月から始まります稻の穂も色づいて來ました、安息の後活動!!に天も地も共に鬱勃たる元氣の充溢して居るのを御覽なさい『少女』もこゝにいよ〳〵大飛躍をするの時が來ました。

どう云ふ面白い少女小説があるか、どう云ふ爲になるお話があるか、どんな奇抜な懸賞募集があるか、それは態と此處には述べません。

◎皆さん少女は來月紀念號を出します

記者は今一生懸命面白い雜誌を作らうと思つて汗を流して苦心して居ます。今から算へて三十日目を樂んでお待ち下さい

▲來る九月一日をお待ち下さい

過去一ヶ年間に於ける讀者諸孃の眷顧に酬いんが爲め、少女が如何に美裝して諸孃の前に現れるか、百聞は一見に如かず、御覽になつた上で記者の骨折を充分に御會得下さい、あゝ待遠しき九月一日(紀念號一冊拾五錢)

◉ページ數は平常の五割以上增

發行所 女子文壇社 東京市京橋大鋸町

誌友

中央上ヨリ（東京）伊藤清子、（香川縣）大西彰子ミ學友、（大阪府）樫木輝子

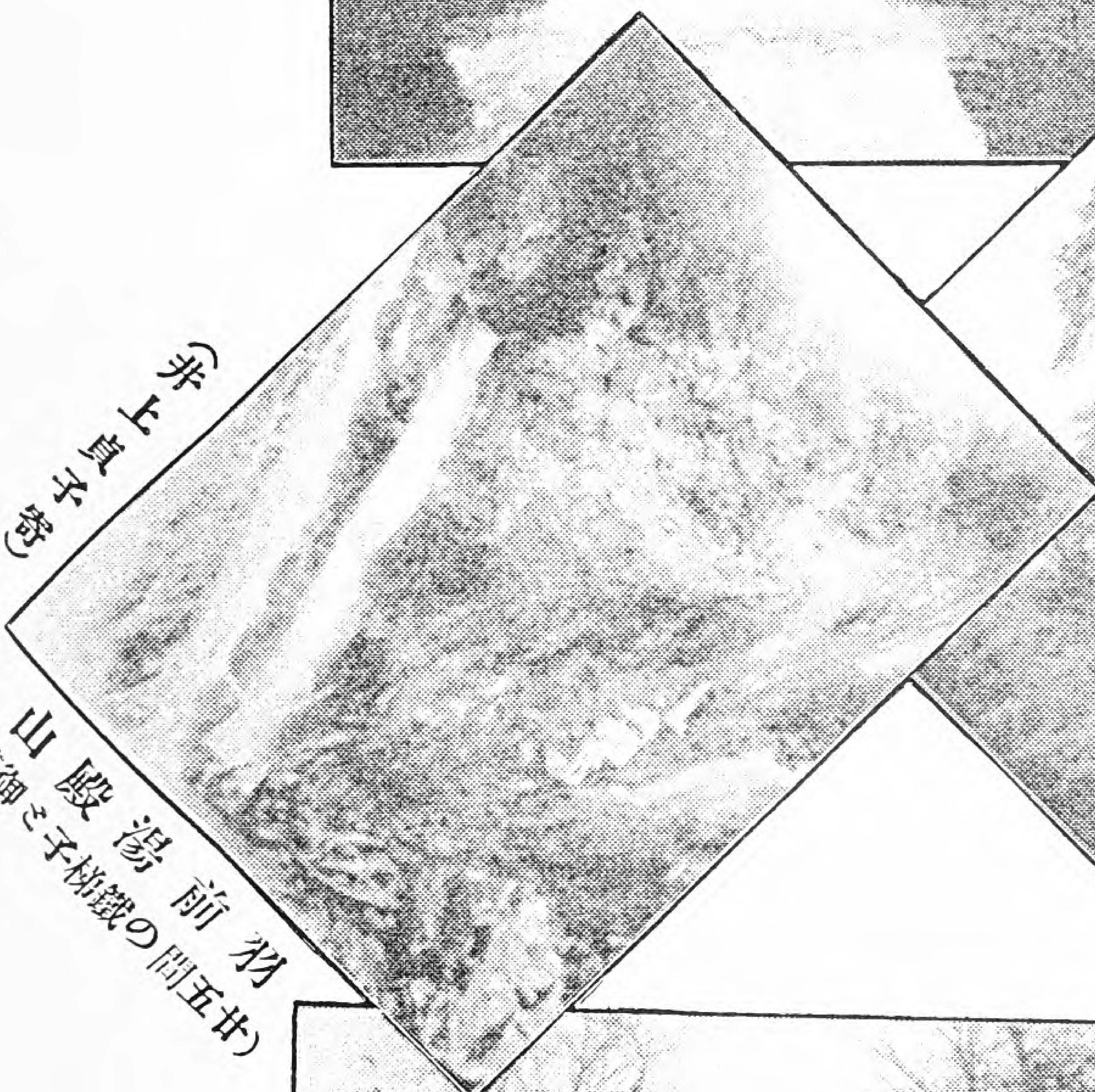


（東京市）服部峯子
（新潟縣）秋野綾子
（岩手縣）橘滿子
（千葉縣）石塚澄子
（横濱市）高橋岸子
（靜岡縣）鈴木さかえ

（誌友諸孃の寫眞お送り下さい既掲の方にても新しき撮影なれば差支なし）

武州井の頭辨天

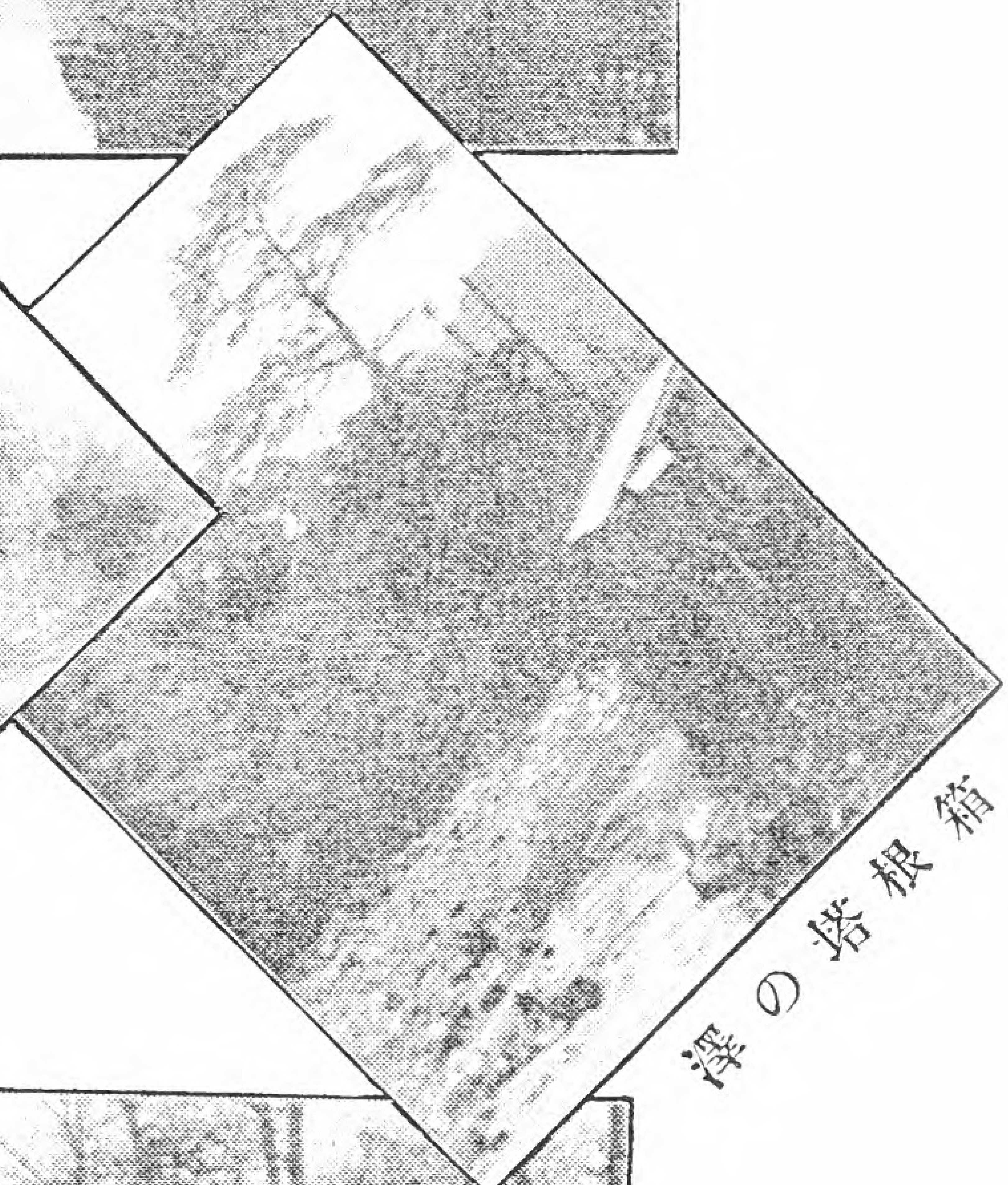




羽前湯殿山

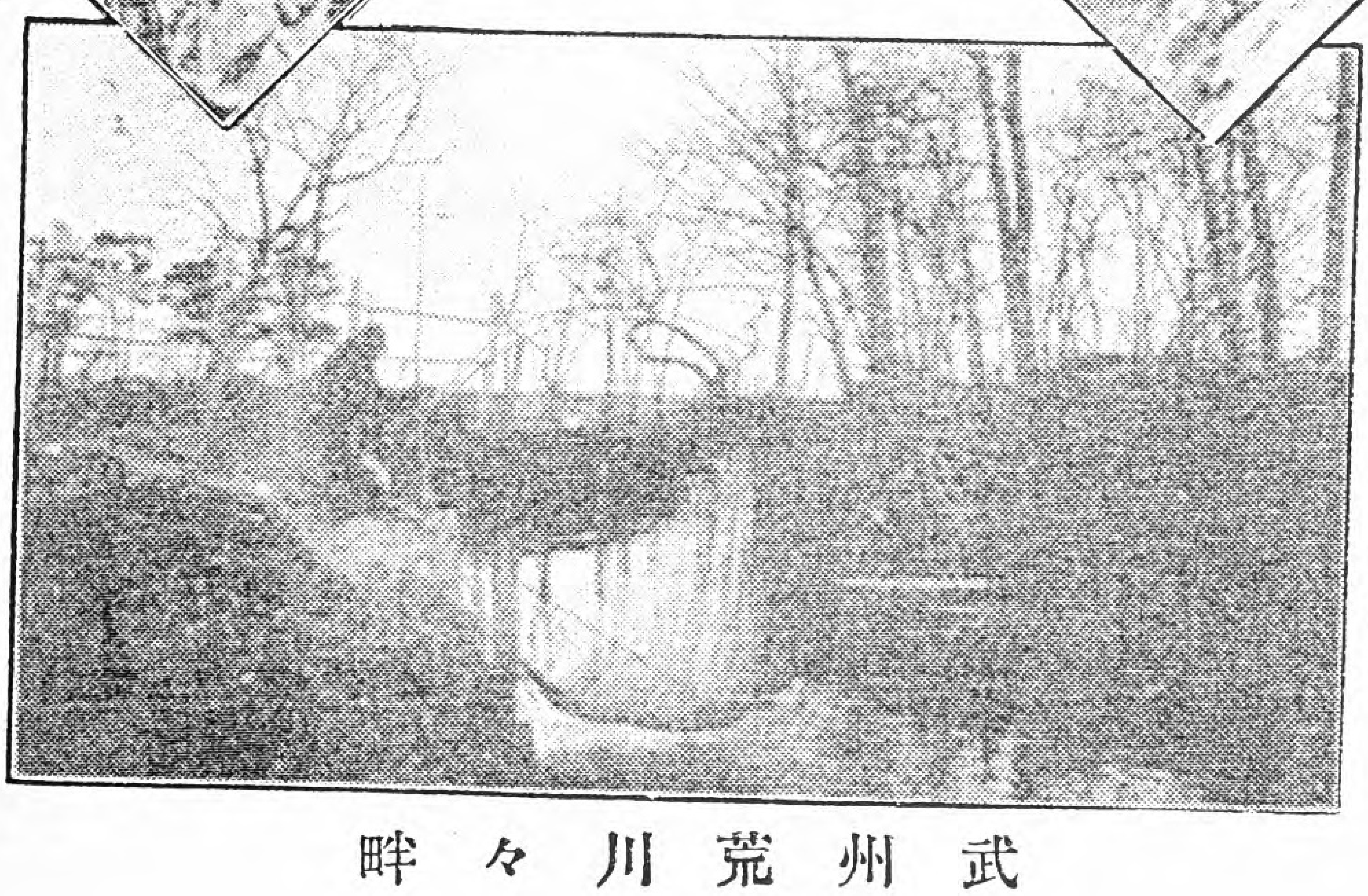
(廿五間の鐵梯子と御瀧)

(井上眞子寄)



箱根塔の澤

(以上三景堀桃園子寄)



武州荒川々畔

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御申添を乞ふ

行け！海に山に！！讀め旅を！！

秀才文壇夏期增刊

旅

附錄

名家紀行文範

○箱根越……高濱虛子氏
○白、黑、黃色、寢臺車、……戶川秋骨氏
○淺間山の頂上……大町桂月氏
○ネバダの沙漠、鹽湖……中村春雨氏
○夜の日本海……遲塚麗水氏
○ノルマンデーの野景色……永井荷風氏

募集文發表

○紀行文……吉江孤雁選
○旅行と冒險……前田夕暮選
○隱れたる避暑地の紹介……編輯局選
○旅行を取材とせる（和歌……前田夕暮選
小品……白柳秀湖選）
○天然を取材とせる（俳句……高田蝶衣選）

○峽谷……小島烏水氏
○東北へ……水野葉舟氏
○莊內の山水……沼波瓊音氏
○笹子トンネル……窪田空穗氏
○紐育の二夜……澁川玄耳氏

△嘗てなしたる我旅の印象……島村抱月氏外數氏
△歸朝者の歐米山水談……小波、松魚、碎雨、透、夏葉外數氏
△旅行及避暑地としての好適地
是我社が『貴下は旅行及避暑地として如何なる地を好まるゝや』との質問に對して島崎藤村氏外文壇大家五十餘氏が懇切なる解答を與へられしもの涼氣誌上に滿ち、名家各樣の趣味、性格を窺ふに足るべく銷夏の讀物として最も趣味あるものゝ也
△沙漠の旅（モーパッサン）……吉江孤雁
△河津の宿……白柳秀湖△伊豆半島……高濱長江
△桐油物語……前田夕暮△木更津……村田犀川
△秩父山中（冒險談）……小林春湖

◎八月拾日發行
◎本號に限り一册定價金貳拾錢也 郵税金壹錢五厘

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂（振替東京一九五五）

賣捌 東京堂 東海堂 ○北隆館 上田屋 ○至誠堂 良明堂

らい病根治新劑

▲藥名……レプロイス

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治することは到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ。輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共壹劑分五圓拾錢特別製分拾圓拾錢

美き聲の出る新藥

（うつくし　こゑ　で　しんやく）

發聲藥は古來甚だ多し然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし獨り本劑の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり本劑は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑也何程音聲惡しき方又は聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發することを確證す

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記臆力を增進する靈劑

腦記臆增進丸

本劑は獨逸大醫スクリーボワト氏の新處方に基き醫學的の元理に徵し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記臆力大に增進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に增進すること誓て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絕顯著なる奇効を知れ

（藥價）七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢（送料各拾錢宛）

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速に安全快通に流下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を連用せば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず安全に流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及び惡血毒血を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衞生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効なる類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



世界無比

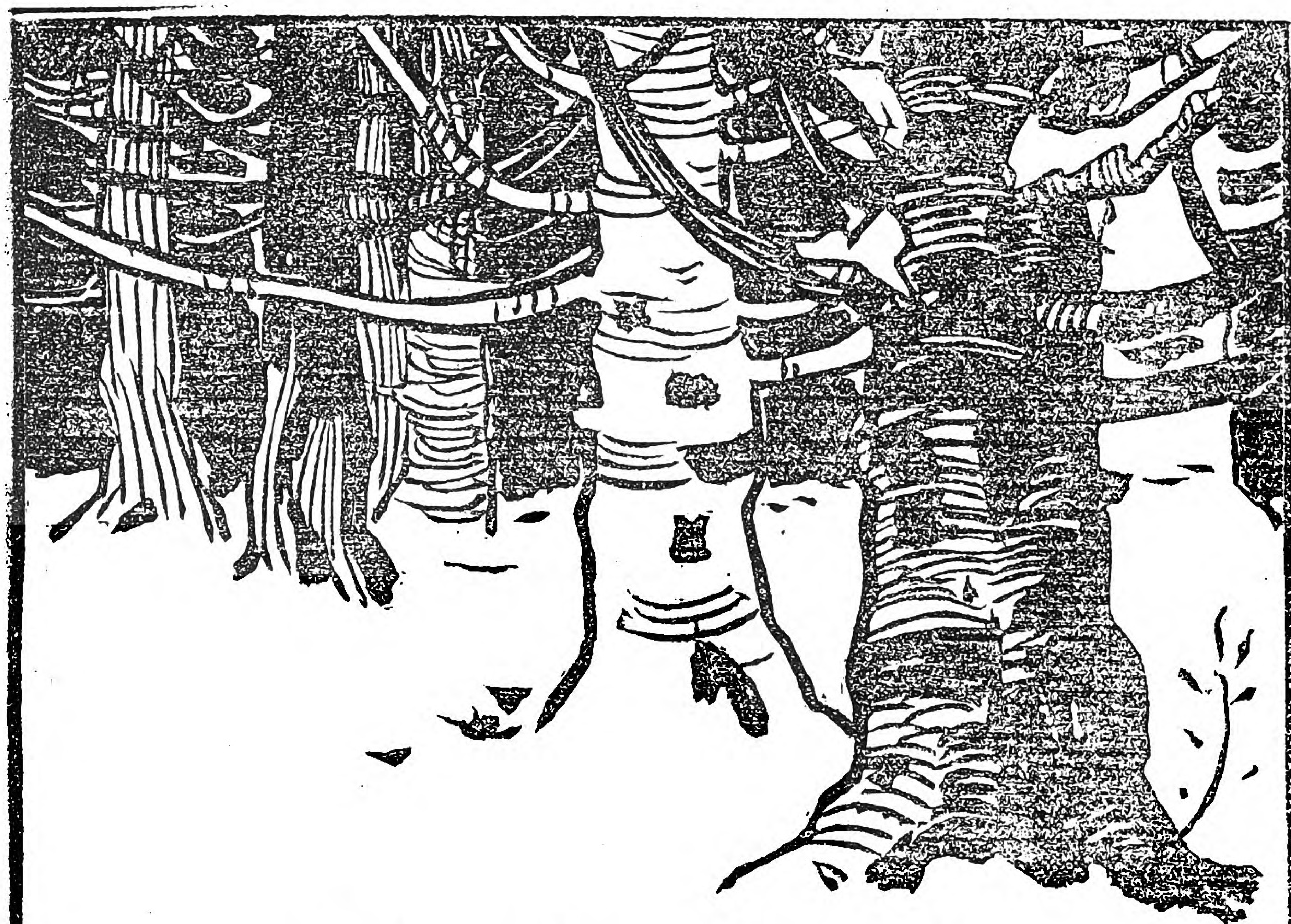
最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまず、いぼは拾日目に必ず美麗に除去すること保險附

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝことを確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）着金即刻小包郵送す

以上五藥專賣元　東京市神田五軒町拾九番地　日新館藥房



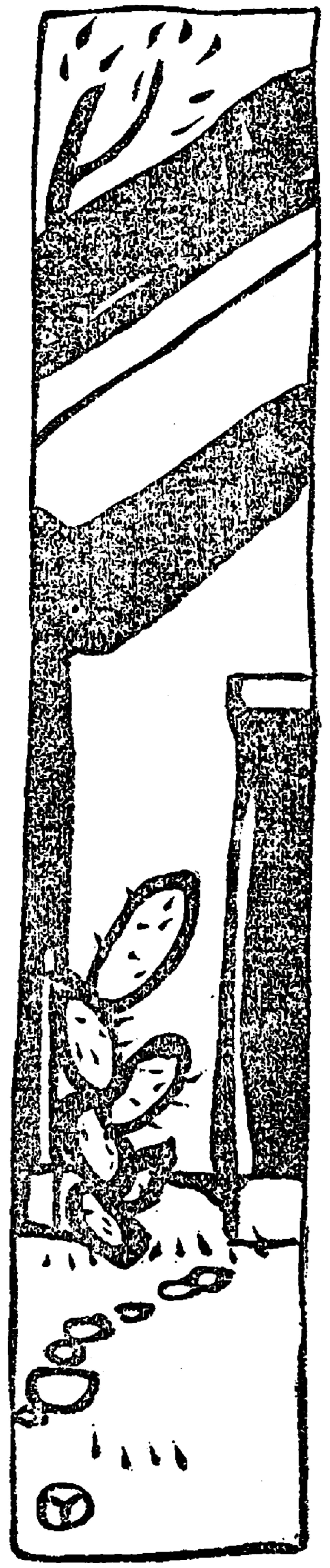
女子文壇

第六年第拾號

明治四十三年八月一日發行

涼味

海拔五千尺、深呼吸する毎に雲往き、雲來る
毛蟲の落ちさうな樹蔭で髮を洗ふ
日の昇るまでに籠一ぱいの山百合の花を取る
硝子の大皿に盛られたるアイスクリーム
水百杯、裸足で井戸から瓜畠に運ぶ
輕く刷いた白粉も心持好く乘つて、氣輕に
表まで出て見る
胸を太平洋の波浪に打たす
街頭に疲れたる瓦斯の燈光、晴れやらぬ朝霧
に透いて見ゆ
大粒の雨二三滴、落來る常磐木の青い落葉
羅の袖、織物の帶、足を草行く水に浸す
大夕立を衝いて、みる／＼出來た街道端の川
へ泳ぎ出す男の子、女の子



女子の職業を得んとするは世界の大勢なり

文學博士　黑板勝美

英吉利、獨逸などでは婦人の職業と云ふことは、それほど問題になつて居りません、婦人の自活と云ふことは、もう當然の話で、一般の考になつて居ますからそれほど特種な問題ではないのです。それと云ふも日本などでは家庭の事情も違つて居るからでせう、歐洲では、女に限らず男子でも中等教育を終るまでは、親の義務として養ひますけれど、それから後は銘々獨立して生活して行くことになつて居るのです、勿論同じ家に居ても然うなんです、職業と云ひますと、商店の賣子、又は書記、タイプライターや、電話や郵便の事務は勿論で、日本などよりもずつと廣い範圍に及んでゐる事は申すまでもありますまい。

日本では、女の子は中等教育を終つても、嫁入するまでは、親の手で育てゝゆく習慣になつて居りますが其れが出來てゐる間は結構ですけれど、頓ては處女でも自分の職業の爲に働かねばならぬやうになるかも知れません。

一つは結婚と云ふ問題に伴つてゐるのです、兎に角

結婚をして幸福なる家庭を作るには、何うしても金がなければならぬと云ふことに歸着しますから、其結婚後の幸福を豫望する爲に働くのです、此點は男子も同じです。

歐洲では處女の道德とでも云ふべきものが進んで居ますから、處女が職業に與つたからとて、格別の迫害を受けることもないのです、處女自らも節操を重んじますが、男子も亦處女の道德を傷けるやうなことを致しません、日本では未だ處女の道德を尊敬しない男子が多いやうに思はれますが、何うでせう。此等の事も日本の女子が職業を得る妨げの一つになつて居るのでせう。

それで女子の職業は結婚を重んずる理由から來てゐる事は分りましたが、此結婚と云ふことは彼我殆ど事情を異にしてゐます。

歐洲では婚約といふ事が行はれます、此婚約の時期は比較的長いのです、其間に雙方の意思を疏通させて能く〳〵見込が立たなければ、容易に結婚を急ぎません其間に於て、男子は公然女子の家に赴くのです、大抵毎日顏を見せるとか、心を書いた手紙を送るとか、出來る丈け誠實に女子に盡くすのです、女子の方の父母なり其他の家人も之を監視してゐるのです、然うして愈よとなつた曉には結婚をします、そんなに結婚を重く見てゐますから、容易に離婚はしないのです、離婚するのは歐洲では甚だ面倒なことで、訴訟費用だけでも大したものですから、容易に離婚はしません、其代り初めに於て雙方とも能く人間を見定めると云ふ事があるのです。

此點なども、日本とは餘程事情が違ふやうです、日本では結婚を輕く見てゐます、嫁を貰ふにしても仲人が來て、寫眞を見せるとか、話をするとかして、容易く纒つて了ふのが多いやうです。一種の富籤を引くやうなもので、宜いのに當れば仕合せだが、下手をやると貧乏籤を引きます。歐洲では結婚は富籤でなくて取引であると云ふことを言つて居ます、成程然うでせう、賣る方も買ふ方も價値を見極めてから取引するのです

から。

婚約期間の雙方の交情は何うかと申しますと、前に云つた通り男子(女子も然うでせうけれど)の辛棒强いことです、熱心に往來はしますけれど、決して手取早く結婚をして了ふなど云ふことはありません、只精神的に淸らかな交際を續けてゆくのです、女子の方でも然うです、婚約期間は對者の男子と肉體的關係をつけません。極端な例ではありますが、婚約した男子には淸潔な交際を持續しながら、却つて他の男子に許すと云ふやうな話も聞きました、畢竟結婚をする爲の方便(金品を得たい爲などに)に然うした事も全く無いとは云へますまい、それで見ても婚約期間の交情は眞面目にすると云ふことは略分ります。

婚約期も隨分長いのがありまして、婚約者は隣同士に住みながら、十年間も結婚をしなかつたと云ふやうな一例もあります。

日本の女子、殊に現代の若い女子が熱烈な愛を捧げて、直ぐ結婚をして了ふのと、歐米の女が段々義理詰になつて結婚して、後に愛情を捧げ合ふのとは、一寸趣の違つてゐる話です。日本の結婚は愛情が初めで、後に義理が生ずる、歐米のは初めは義理から起つて、後に結婚をする。ですから今の日本の若い婦人などが戀愛の爲に後悔するやうなことが起るのでせう。

結婚以前の婦人の職業は當然のことであるとして、却つて結婚後の婦人の職業問題が歐米の間に唱へられてゐるやうです。米國の或る學者が、一家の細君たるものが、朝の内に用事を濟まして、八時なり九時なりから後、正午まで四時間を職業にたづさはつても宜いといふやうな問題を提出したので、英國の婦人界でも之が評論を新聞紙などに發表してあるやうに思ひました。

日本では處女が嫁入までの保護を父母から受ける如く、嫁入して後も良人に賴つてさへ行けば、生活も安全だと云ふ風ですから、まだ大いに平和な境にあるのです。今後、生活が進んで來るほど婦人の職業問題も進んで行くに相違ありません。(談)



人間一生の身體の變化

ドクトル　富士川游

◎人間は何うして大きくなるか

人間は生れて死ぬ、何故死ぬかと云ふ問題は他日に讓つて、生れた人間が何うして大きくなるか、その大きくなると云ふのは小さい球を膨かして大きくするやうなものではない、言ひ換へれば、一歳の子供の寸を取つて、それを二十倍に伸せば、大人が出來るかと云ふに、決して爾うではないのです、併し世間の人は、大抵子供と云ふ者は大人の小さいのだと思つて居ります、子供と云つてもその年齢に因て一樣でないが、假に十二歳の子供の丈を量つて見ると、頭が全身の四分の一ある、若し大人の丈にして其丈の四分の一の頭を拵へたならば、福助のやうな恰好の者が出來上がります。そこを熟く考へて綿密に調べないと間違ひます、子供と云ふものは生れて乳を飲むときから二十歳までの間を云ふので、此間に充實と伸張とが二度繰返される、さうして始めて大人になるのであります。

◎男女の差別が明に分る年齢

一歳から四歳までは、横の方に廣くなり、五歳から七歳迄は丈が伸び、又八歳から十歳までは横の方に廣くなり、十一歳から十五歳までは丈が伸びる、斯樣にして人間の身體が出來上がるのであります。併しその間は大變に醜い形であります、先づ哺乳兒は脚の根付

が膨れ、足頸に皺がない、さうして四歳までは頭が顔に比し大變大きく、四肢はその長さが胴と同じです、それのみならず前から見ても後から見ても、殆ど男女の區別が分りませぬ、それ故此時期には、衣服や髪の形で判ずるのみで、其體格では男の兒だか、女の兒だか少しも分りませぬが、五歳から七歳までの間に男兒女兒の差は稍や現はれて來ます。卽ち男の兒は脚部が瘦せ、女の兒は脚部が肥つて居ります。それより漸次に男兒は聲が變り、女兒は體に圓味を持つて來まして、十一歳から十五歳までには、男女の別が明かになります。

◎老若の境は分らぬ

大人になりましても、二十五歳までの間は未だ〳〵發育し、丈も伸びます、此時は青年と言ひます。人間と云ふものは生後此中年青年成人期間が隨分永く續きまして、それからいつとなしに年を取ります。いつ年を老るかと云ふことは醫師の方でも生理學者の方でも此處が老人と若い者との境でござると云ふことは好く分つて居りませぬ。樂觀的の考へでは七十歳までも八十歳までも、年は老らぬと云ひ、又悲觀する人は五十歳になるとモウ不可ない駄目だと言ひます、子供が大人になるのは二十歳、それから二十五歳までは伸びると云ふことが明確に分つて居るが、老人になるのはいつと云ふことは分らない。只各々の身體の脈が硬くなり、腦の作用が弱くなれば、それを以て老人になつたと云ふので、爾う云ふ時になると、皮膚には皺が寄り、頭髮は白くなり、視力は薄くなつて來ます、醫師の方で申すと、膈膜に老人環と云ふものが出來ます、それから丈も低くなり、齒も脱落し、顎の皮は弛み、一種の老人顏が出來ます。而して其姿の變るが如く、その精神にも變りがあることは言ふまでもありませぬ。

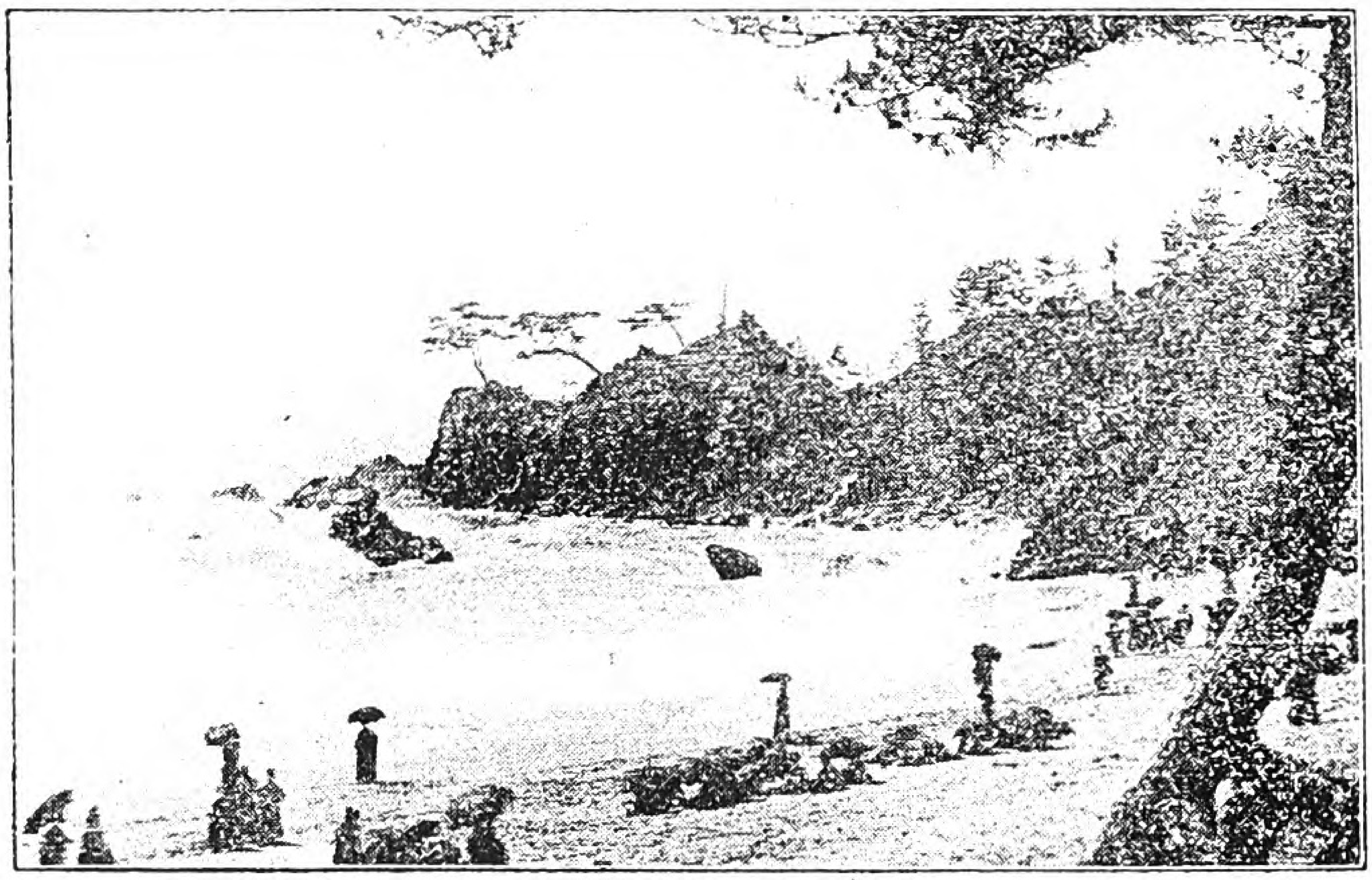
◎子供は死ぬことを知らぬ

一體子供の精神と云ふものは、大人とは餘程變つて居つて、子供の精神を大人になるまでも持續すること

は出來ませぬ。子供と云ふものは想像力が強く、記憶力が強い。俗に年を老ると子供になると云ひますが、成程一寸見ると子供のやうであるが大變に違ふ點がある、と云ふのは子供には死と云ふ觀念は兎も角も有つて居ない、只發達する一方の考へである、それ故冒險も出來れば、勇進も出來るけれども、老人の心裡には、死と云ふ念が去らない。一見子供の樣に見えても、此精神作用が、疾病又は死と云ふことに、大なる關係を生ずるのであります。

◎長壽の資格は生後一年に得る

偖て前述の如くにして造り上げられた人間と云ふものが、病氣に對して抵抗をして行く體力と云ふものは、老若に因て餘程の差がある。又男女に因て大變な違があります、人間が此世に生れ出ると、哺乳期の間に澤山死んで仕舞ひます、これ故若し



土佐桂濱に於ける女生徒の海水浴　津野千枝子寄

生れて一年の間を無事に生存し得たとすれば、其人間は餘程長壽をする資格を得たものと云つて宜い。弱い人間は、大方一年の間に死にます、其死方も他の年齢の長けた人の死方とは少し違ひます、例之ば一年の子供の死ぬのは、夏六七八月の暑い時候に於て死ぬものと、一二三の月卽ち春の初めに於て死ぬのと、二通りあります。夏死ぬのは人工營養に屬する方、則ち其病氣は腸加答兒が多い、春の初めに死ぬのは先天的の虛弱に屬するのです。

◎一年でも長く生きねばならぬ

此二つの關所を過ぎると、前に申す通り、長壽を保ち得るの資格が備つたので、親たるものは安心をして宜いのであります。と云ても少くて死んで了ふ人も澤山ありますが、それはその人の運命でありまして、人力では如何とも致し方が無いのでありますが、一般の規則として、獨逸の保險會社の死亡數に就て統計を取つて見ますと、例へば人が二十歳になると、其先は四十三年活きる、則ち其人は六十三で死ぬ、三十歳になつたら其先は三十四年、則ち六十四まで活きる、四十歳に達すれば、其先は二十六年則ち六十六歳で死ぬと云ふやうな勘定になつて居りまして、年齢の多くなるに從ひ、其死ぬ時は遲くなるのであります、人はなんでも一年毎の關所を通過して長壽をしなければなりませぬ。

◎年齢に由りて罹る病氣

此人間の體と云ふものは、外から來て之に害をするものが幾らもありますが、傳染病などに對する人間の抵抗力と云ふものは、二十歳から三十五歳までが一番强い。けれども亦之に罹るのも、此年頃が一番多い、老年になると抵抗力も弱いが、病に罹ることも亦甚だ少ないのであります。であるから病氣と云ふものは、老人に多いものと、壯年及び年少者に多いものと、いろ〳〵あるのです。其例を擧げて見ると、瘟腫は五十歳より上のものに多く、以下の者に少ない、氣管支炎は若い人に多く、肋膜炎は半々です、卒中、糖尿病、脂胖等は老人に多く傳染病、結核、肋膜炎、怪我、自殺、酒の飲み過ぎ、神經病等は年の若い人に多いのです。

◎婦人は男子より病氣が少い

若い人に多い病氣の中で、特にお話をしたいのは、乳兒の時は腸加答兒が多く、學齢中の子女には佝僂、近眼、貧血、頭痛、鼻血、神經質等が多く是等は殆ど學校病と云つても宜い位です。殊に貧血は小學校中學校女學校等に非常に多く、厄介な病氣であります。其

學校の調査に依ると、十三から十四までの年齢に於て、男子は百人の中九人六分、女子は十六人六分であります。そして其貧血が原因になつて、婦人に肺結核が多い、一體婦人の身體と云ふものは、病氣に對する抵抗力が強くはないが、併し病氣に罹る機會が少ない爲め、何の病氣でも婦人の方が男子より少ないのであります、併し肺結核だけは、婦人の方に多い。英吉利の表に依りますと、十五歳以下の年齢に於ては、男女同じでありますが、それから以上、二十歳位までは、婦人が非常に多い。これは前にお話した貧血が此場合に於て多いからであります。

◎出産は危險でない



東京上野女學校の飼鳩

今日は保險會社と云ふものが非常に流行して、多くの人を勸誘して居るが、婦人に保險を附すには條件がある。例之ば姙娠中は取らぬとか、これまでの出産數は何うと云ふ樣に何の會社でも出産に對する婦人の生命が危い樣に思つて居りますが、私は、是れは甚だ間違であらうと思ひます。婦人が姙娠して子を生むと云ふことは、生理的の作用で、それ程危險なことではない、若し婦人の出産が危險な事であるとすれば、男子にも自殺をして死ぬ等の危險なことが澤山あつて、是れは婦人の出産に於ける死亡數に比較して、倍以上の數になるのであります。保險會社はそんな考へは少しもしないが、實際の處十歳から二十歳までの間に、婦人が餘計死ぬのは、出産に關してゞはなく、全く結核の爲めであります。

◎所謂學校頭痛

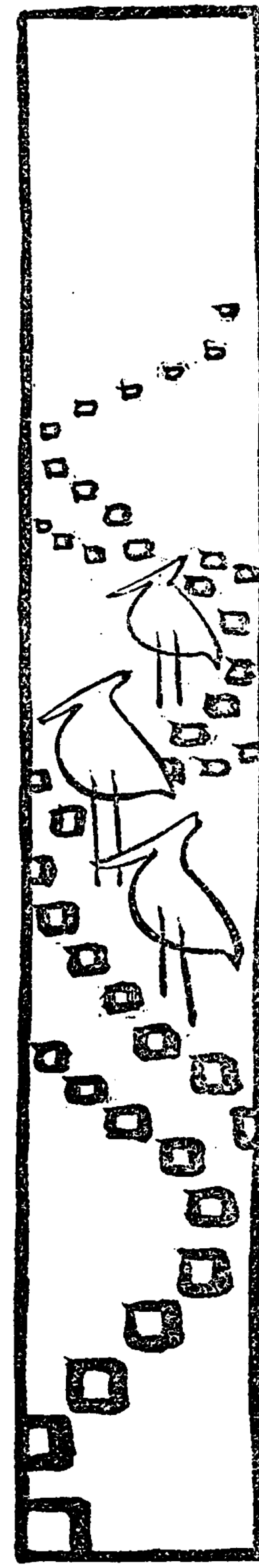
それから學校時代には教場に入ると、直ぐに頭が痛み出し、そして家へ歸ると、忽ち治つて仕舞ふと云ふ病氣があります。西洋では此頭痛を學校頭痛と申して居ります、これは神經質の人に有る處の病氣ですけれど、此頭痛はそんなに堪へ難い程痛くはないのであります。又爾う云ふやうな子供のお母さんは、必ず神經質でありまして、一寸子供が頭が痛いなどゝ申しますと、サア醫者を呼ぶ、藥を飲ませる、痛いか何うかと大騷ぎをするので、病氣は益々募つて來ます。其頭痛は普通の頭とは少し違つて、主に額が痛み、時には髪を梳すことの出來ない程痛みます、學校に通ふ時代の人々は此學校頭痛に注意しなければなりませぬ。

◎一旦罹つたら男子より弱い

中年から老年になると、病氣に對する抵抗が弱くなる、人間は一年長壽をすると、其先が漸々長くなると云ふ事は、前に申す通りでありますが、若し其間に病氣に罹つたら何うかと云ふに、抵抗力の弱い婦人の體は病氣にはなか〳〵罹らぬが、一旦罹つたら男子よりは弱い。又病氣になつて寢る數は何うかと云ふに、西洋の調査に依ると何の年齡に於ても、婦人は男子よりも餘計寢るさうです。それは姑く措き兎に角年を取るに從つて、壽命が長くなると云ふことは爭ふべからざる事實でありますから、各自個人的衛生を守らうとする場合には、自己の年齡、體質を念頭に置いて、それぞれ注意をし、養生の道を講じて行かなければならぬと思ひます。

特に若き婦人は衛生上の智識を心得て居て、病氣に罹る機會が少いのだから、危惧の念を抱かずに、一年でも向ふへ、向ふへと長く生きるやうにしなければなりません、現在の養生は、つまり永い將來の命の爲であります。

右は富士川氏が大日本婦人衛生會の席上で演說されたものでありますが、衛生上有益なる談話であると思ひますから「時事新報」より轉載したのであります。



旅行心得八ヶ條

加納子爵夫人　加納鎰子

主人が例も日本の婦人も單身で歐米大陸の漫遊を試みてくる位の勇氣がなければならぬと申しまして、娘等にも單身で、年に一度は近縣旅行をさせるのでございます。先年其第一回の試みとして、千葉縣大原地方へ遣りましたが、都合が宜しうございましたので、其後毎年四月の學期休みには、旅行をさせて居ります、汽車は三等の外、乘せないことにして居ります、雨さへ降らなければ電車にも乘せないやうにして居ります平素も大森から新橋まで汽車で參りまして、それから先は歩いて學習院女學部に通つて居るのでございます

旅行も幾許長途でも、新橋から下の關まで汽車で直行すると云ふ樣では、何の役にも立ちません、それ位のことはお金さへあれば誰でも出來ることで、然う云ふ旅行ばかりして居る人は、少し不便な土地へ行くとなると、附添人の二三人も要ると云ふ樣な始末で、汽車に乘り、馬車に乘り、車に乘りして行くのでは、却つて眞の旅行の趣味も又利益もございません。

昨年の夏には長男を北海道各地方に旅行させましたのも、一つには眞の旅行の目的を果させる爲でございました。

一定の場所で暑氣を凌ぎますよりは、旅行する方が何んなに爲にもなり、又趣味も多いか知れません。旅行の準備と申しましても、別に大したことはございません、成る可く身輕に便利を主といたします、衣服は加納式改良服を纏ひ、一種の大黒頭巾のやうなものを被り、柳行李と手提を各一個宛、其中には寢衣、襦袢、足袋、靴下、手拭、石鹼、ブラシ、郵便はがき洗面器、筆墨紙等を入れて置きます。

費用は時に依りて違ひますが、先年の時は往復四日間と見て、宿泊料、晝飯料、電車料、汽車代、茶代、雜費、豫備費等を合せて、豫算を一人前金六圓宛と定めました。

なほ主人は旅行中の訓示として、左のやうな心得書を拵へました。

一、旅行と散歩を取違へること勿れ。

二、途中の事物に留意して、各自の所感を手帖に記し、歸宅後これを演說する資料とせよ。

三、ばら〳〵になりて行く可からず、旅行中は殊に睦くして、互に忘れ物などせぬように氣を附け合ふべし。

四、汽車の停車に注意し、且乘り降りの地點を誤ること勿れ。

五、勝手に買物などなす勿れ。

六、旅行中の經費は各手帖に書き留め、計算に間違ひなき樣注意すべし。

七、宿屋に着きたる後に外出する時は、荷物を宿屋に托し置きて外出すること。

八、途中萬一道に迷ひ、又は當惑することが出來たる場合は、巡査に尋ねて保護を乞ふべし、若し巡査が見當らぬ時は、風俗賤しからざる年寄に依賴せよ。

> 子女獨立旅行習修の爲め貴地方面差遣致し候
> に付萬一途中にて不意の出來事に遭遇候はゞ
> 何卒相當の保護被成下度候

記者曰、此輪廓中の文字は加納子爵が自ら名刺の裏に記して、令孃の旅行に際し渡し置かるゝものなり。



美を愛する心

前警視總監 安樂氏夫人

上はやんごとなき雲井の御庭より貴顯紳士の庭園、下は九尺二間の裏店に到るまで、此節で申せば上流なら西洋及び日本の種々の花卉類、下流では縁日で買つた草花の一鉢位は必ず家に置いて娯むと云つたやうに凡そ人間の美を愛する心は天性でありまして、そこが他の動物と異つた點でありませう。若し此の美を愛する念の無い人があつたらそれは禽獸に等しいので人間仲間から除外しても宜しいのです美の觀念は實に人間の通有性でございます。

野に遊んでゐる子供を見ましても、屹度其邊等に咲いてゐる蓮華草や、蒲公英や、菫などの花を摘んで花束にしたり、おまゝごとをしたりして居りますが、之れ頑是のない子供心にも、美を愛するといふ念のある證據です。

また子供を背負つて道を歩いてゐる母親などが、背中で子供が泣出すと、道端に咲いてゐる花を見せて、其子の泣くのを宥めてゐるやうなことも能く見受けます、子供も母親も知らず〳〵の間に花の美に感化されて居りますので、此等の一寸したことでも、人の心が美に傾いた爲に、何れだけ良い感化を蒙るか知れません。

人は決して殺伐な心を持つてはいけません、毎も優美な思想を抱いてゐて、外面自ら凜々しく、侵すことの出來ない威嚴を持つてゐなければなりません、其優美な思想を養ふには、自然の美、例へば花を翫賞することなども確に其一つです、花の美を感じ得るやうな人なら決して殺伐な氣象は持ちませぬ、ですから子供の間から花の美といふやうなことに始終心を向けるやうにさせたいものです。

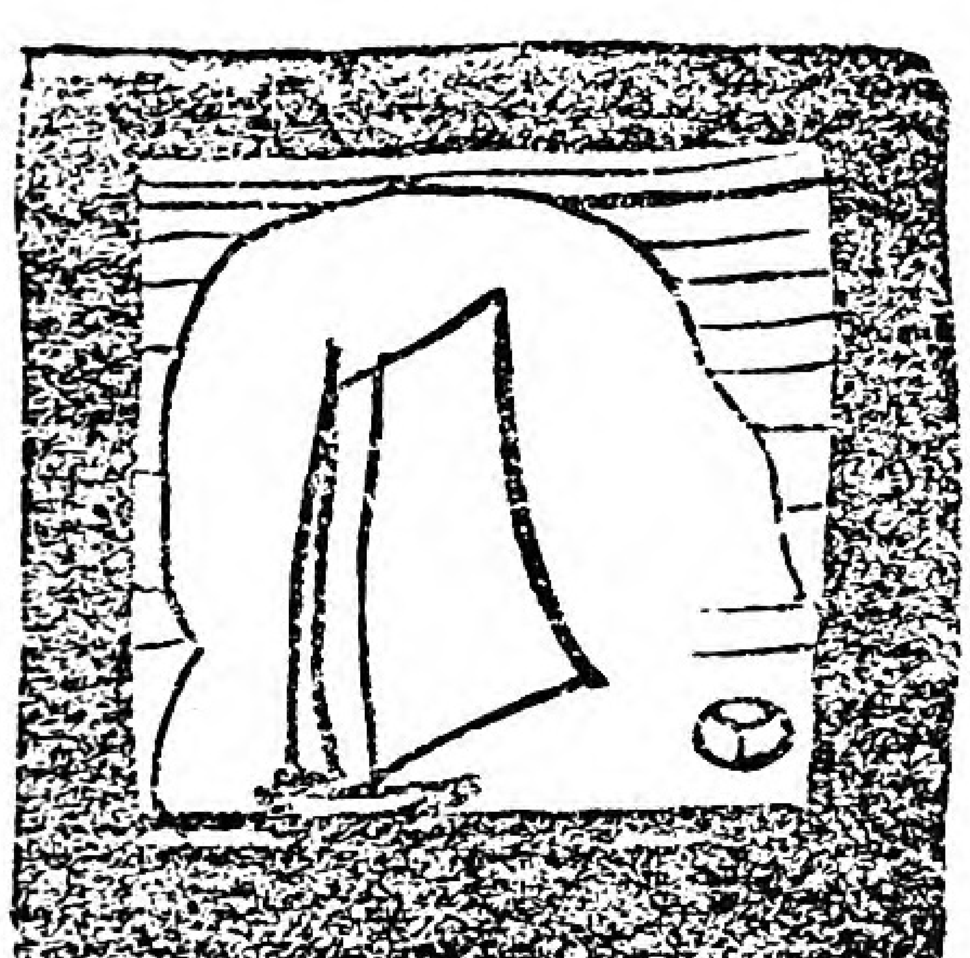
花に對しては怒なしといふ語がありますが、成程、何んな人も花に向つて怒る人はありますまい、人は感情の動物でありますから周圍の事情に依つて喜怒哀樂の情が起るものであります、四圍の事情は直に人の氣性品格に及ぼすもので、常に美麗高雅な花に接してゐれば、心は常に娯しく些の煩悶もありますまい、たと

へ或る煩悶があつたにしろ、花に接したならば、端麗な爲に其煩悶を打消すことが出來やうと思ひます。
監獄の統計を見ますと、植木師に刑事上の犯罪人が少數でありますが、これは如何なる現象でありませう、常に花卉草木に接してゐますから、其心も何時しか高尙溫雅になつて、刑事上の犯罪など〻云ふ厭はしき恐しい心が起らないのであります。
又感化院での成績を聞きますと、農業部の者が極めて感化し易く、又性質も至極溫順でありますと、これは常に其耳目に觸れつ〻ある自然の美即ち花卉草木に依つて、自ら感化を受けた好個の例證であります。
併しながら花の美を愛する心から、往々穿き違へた考を起す人がありますのは如何にも痛歎の至りです、先達のことですが、私方の庭苑の植込の中でポキ〱と何か樹の枝を折るやうな音が頻りとしますので、近よつて見ますと、八九歳程の小兒が、垣に昇つて庭の椿の枝を折つてゐるのでありました。
私は彼の小兒を捉へて、椿が欲しければ幾らでも上げるから、默つて折つてはいけないと云ふと、ところが小兒の答には、彼處の庭に椿が咲いてゐるから、取つて來いと兄さんが云ひましたと。此兄さんなる人が花を折つて來いといふたのは、花の美を愛する心から椿を得やうといふ慾心が起つたので、敢て惡むべき心ではあるまいと思ひますが、併し小兒に折つて來いと命じましたのは、花を愛する餘り遂に彼の小兒に偸盜を敎唆することになつたのです、如何にも淺墓と云はねばなりませぬ。

經濟と健康の爲にする避暑

歐米直輸出入商 藤原俊雄氏夫人　藤原梅子

暑いとか、寒いとか、氣候に變化のあるのは、萬の物の發育する爲ばかりでなく、人間の心を單調にしないだけでも、此氣候の變化は大切なことでございます。況て虛榮の爲や、贅澤の爲に避暑の流行を趁ふのではございません。私共が毎年海濱に參りま



すのは、東京に居りますよりは、經濟になるのでございます。
今年は森戸へ參る筈でございますから、前月に家も借りて置きましたので、先年よりは家賃も安うございます。室數が六七間でございまして、十人も住めるやうな家で、家賃なら七八二月で、八九十圓から百二三十圓迄です。家賃などは東京に家があるものには不經濟なやうに思はれますが、實際は家賃位は知れたものなんです、東京に居りますと毎日〳〵お客が參りますそれに男の子が五人と、今年生れた女の子と六人の子供が居りますので其五人の男の子は、何とか彼とか申して、思ひがけない費用を使ひます。
避暑に參つて居りますと第一お客がございません、假令ありました處が大した待遇も要らない譯でございます。
東京に居りますとツイ樂なものですから電話で料理を誂へると云つたやうなこともございますが、遠方だとそんな事も出來ませず、電燈だの、瓦斯だのいふものもございませんから、不自由ながら間に合せて置くといふやうな次第で、家賃位は其間から割出して何でもないのでございます。



渡邊宮相邸庭園の一部

私のやうに子供が多勢あり、例も來客に忙殺されて居りますと、年に一度は世事を離れて、ゆつくりと生活てみたいとも思ひますが、それも私獨自なら、天より授けられた仕事だと思つて居りますから、何んな煩雜な家事でも嫌とは思ひませんし、避暑などに出掛やうともしないでせうけれど、主に子供の爲に參るやうなものでございます。
海岸の景色の好い事は申すまでもございませんし、海水には鹽類が含まつて居りますから皮膚を強壯にいたします、又波浪の動搖する中に居りますと、自然に筋肉の運動が足ると同時に、體内の燃燒作用を助けて、

消化機の働きが盛んになります。空氣は勿論酸素が多うございますし、腐つた瓦斯や、塵埃などを吸うて居る都會とは比べものになりません、で身體を丈夫にするには海岸に限るやうでございます。

子供達も海岸に参りますと、それはもう夢中で、能く遊びます、貝をあさるやら、蟹を逐ふやら大騒ぎでございます。お蔭で冬になりましても病氣もいたしません、若し一人に風邪でも引かれると、忽ち五六十圓は飛んで了ひます。

先年アメリカに居りました時、海岸にも行つて見ましたが、なか／＼盛んなものです。上流の方々でも家に居るより質素な方法で、金錢の掛らぬやうにして、テント生活をするとか、不便な土地を選むとか、家ではコックも置き、下婢も使つてゐる奥樣や令孃達が、自炊をなさる、洗濯もなさる、出來るだけ不自由をして、夏を涼しい場處で送ると云ふやうな有樣でございました。

日本の御婦人方にも勸誘したいと思ひます、暑中は學校も休みになり、交際も少くなりますから、夫人は夫人、令孃は令孃と、生活の方法を更へて見るのも、健康の爲にも、興味の上からも、宜しいことかと思ひます。

海岸に行つたからとて、何もしないで、ぶら／＼怠惰けて居るのは宜くございません、寢たり轉んだりして遊惰に日を送る爲に避暑するのではございません、自炊もすれば、洗濯もする、また海にも飛込むと云ふ風に、奥樣でも令孃でも、自ら身體を動かし、手足を働かして、精神と身體の健康を計らねばつまらないと思ひます。金のある方はヨットでも造つて、海上や、湖水を乘り廻つたなら、何んなに愉快でもあり、又爲にもなることでせう。

船に弱いのを上品だと心得、水を怖がるのを優美だとするやうな婦人は、到底新興國の母たる資格はないと云つてよろしいでせう。塵の都會に在つて、熱い熱いと云つてゐるよりも、早く海邊へ行つて、娯しく、又爲にもなる海水浴を試みた方が何んなに宜しいか知れません。

健康の爲に海岸の宜いことは勿論ですが、經濟の爲には宜しくないと仰る方は多からうと思ひますけれど、それは經濟の取り方一つで、大きければ大きいやうに小さければ小さいやうに、上手に經濟を取つてゆけば東京で夏を過すのとさしたる違はムいますまい。

涼しい座敷遊びの趣向



秋山法學士令孃　秋山えふ子

起きても暑い、寢ても暑いと云ふやうな時に、暑さ忘れの涼しいお遊びが一つでございます。

此は花すだれと申ます遊びで、手輕で、上品で、家に居て出來ることでございます。先づ葭簾を少し用意いたします、それから數々の花籠、若し置籠の大きいのがあれば、それも三つ四つ揃へば結構でございますそれから草なり、花なり、又は木でも、竹でも生々とした夏の植物を充分に用意いたします、そこで以上の材料を使つて、一つの涼み座敷をこしらへると云ふ趣向なんでございます。

普通のやりかたは、先づ八疊か十疊ぐらゐの室を綺麗にいたしまして、見付の好い、壁の方を後に、ずらりと葭簾を掛下して、それに幾個ともなく花籠を掛け列ねて、お客樣方に思ひ〳〵の花を生け頂のでございます。

生方も遠州なり、石州なり、池の坊なり、投込なりつかみ挿なり、お好み次第自由にするのが宜しうございます。

若し其お室が床附ならば一段の幸ひ、早速其幅物を外して、跡に力味のある花籠をかけ、思ひ切つてドサリとした垂柳などを投入れ、下に白伊萬里の香爐などを置きます。

凡て香の類は、惡い臭を拂ふばかりでなく、暑さの勢ひさへ抑へるものですから、例へ床のない室であつても、此香の嗜みは時節柄殊にあつて欲しいと思ひます、それから違棚には料紙、文庫、硯箱なども備へて置きたい、又室の中で恰好の位置を見立てて、二組か三組かの大花籠を排置し、成るたけふつさりと賑やかに澤山の植物を生けますと、自ら

暑き日の寶とやまをす小藪かな

の趣にもかなひまして、其上縁先には清水の盛られた水盤などを置きましたら、何んなに涼味が加はるでせう、是で普通りの新しい涼み座敷が出來上つたのでございます。

一寸億劫に聞えますけれど、其實銘々が持寄た草花や籠などで、修飾るのですから、ホヽヽヽヽと笑つて居る間に造作もなく出來て了ひます、あつさりした琴の一曲か、ピアノ位の合奏も、餘興には一しほでございませう。

まだ爲ることがございます、花しらべと申しまして生花の評話、意匠、水揚のことから、少しむづかしくなりますが、植物學上の分類や、栽培のことや、播殖のこと、それから植物に就ての詩歌傳説のことなど各自知つてゐることを話したり、知らないことを聞合つたりしたならば、談笑の間に植物學の復習も出來、文學、美術、園藝、粧飾などの智識を得ます。

兎角暑中は不養生をしたり、怠惰に暮しやすいものですが、斯う云ふ遊びをして、友達同士順番に廻つてやりましたら、何時の間にか夏が去つて、オヤもう秋風が吹くのかと驚かれるでございませう。

申すまでもなく此お遊びは、御馳走をしたり、美しい服粧をしたり、凡て奢侈がましいことは一切抜きにして、何處までも淸らかな心持を樂むと云ふ主意で行はねばならぬのでございます。



白晝、男子に尾行されたる事實

夕に咲く花

是は小野樣が東京から歸りに、私の家に用事があつて寄つた時、親しい仲の友達同志のありのまゝを話して笑つた其話なんです。故國にゐた時、隨分、雜誌や新聞で、東京には女を尾行する墮落書生や無賴漢の事は讀んでましたけれども、實際出逢したのは是が始でした。ああ、是が所謂女釣りの墮落書生だなと思ふと、恐しいのぢやなくて、一種の可笑さを感じましたの。私はよく其男の顏や形を今でもはつきりと覺えてゐます、これが、まあ白晝だつたからこそよかつたものの萬が一暮れ方とか、人通りの少い所だとかなら、どうなつたでせう。笑ひごとではありません、指を食ひ切つて、やつと危急を免れた女教師のした事は、身を守る爲の火急の戰ひが僅にほめられるのみで、夜中女一人出歩いたたしなみのない行はきつと誰にも眉をしかめさせます。女に求める、自由はそんな、自由な夜歩きや、自由な、單身の寄席行きぢやありますまいにね。隨分、鐵面皮な奴は、酒臭い息を火のやうに吐きながらぢれぢれと、女の顏を見つめてゐて、女の手を握らうとすり寄つて來る事は電車や汽車の中でない事はありませんもの。外出はきつと一人では不都合よ。不謹愼よ。

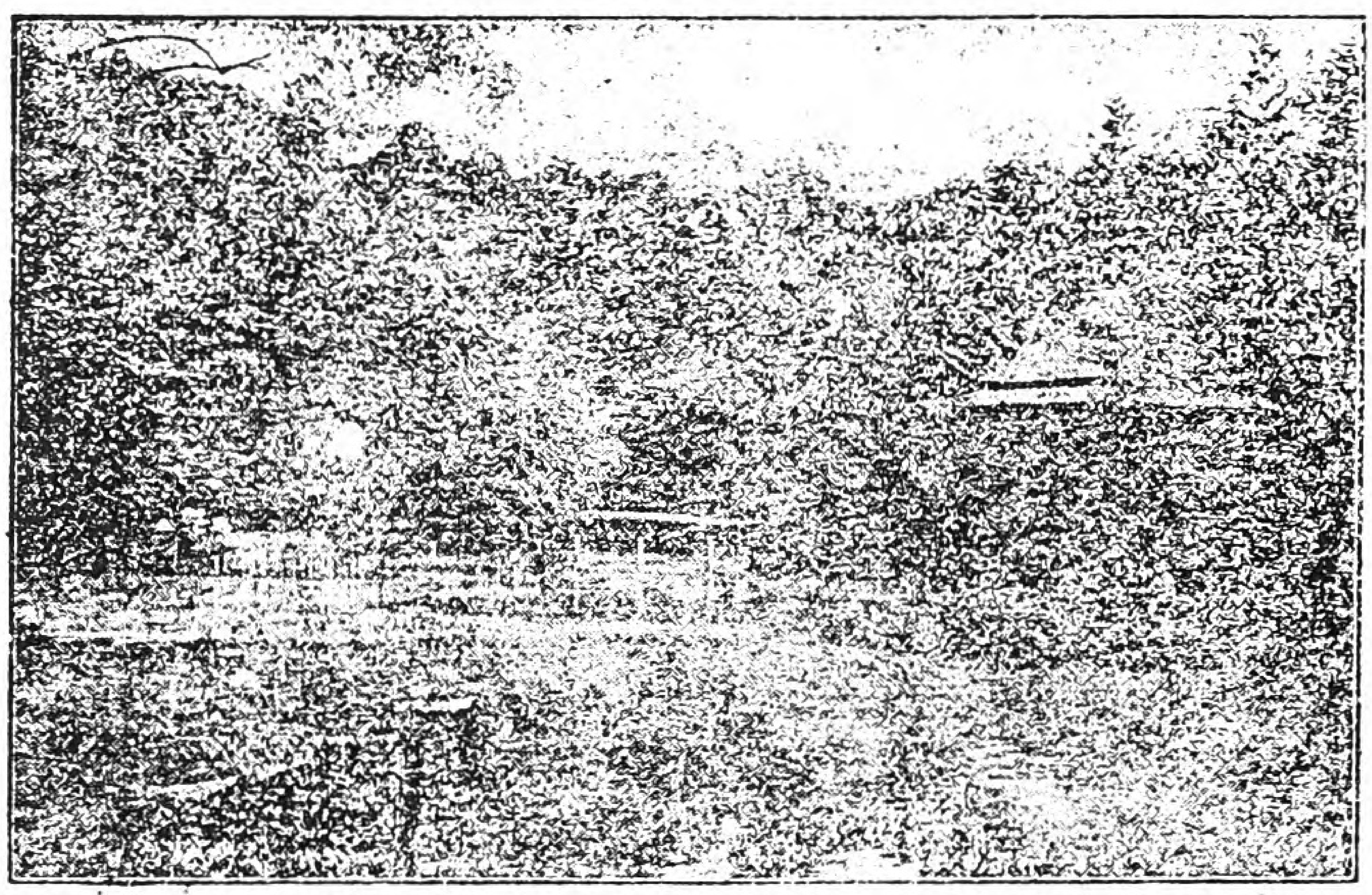
ざうなの！　ほんとうにうるさいのね。私がまた、東京になじまない

から、田舎女とおもつたもので餘程やり方は拙いんだつたけど、東京の女を尾行するのなどは、きつと、もすこし執拗くつて、うるさくて功妙でせう。と此の樣な話を互にして別れました。

偖て小野さんは、是非知人に用があるので、日曜日の朝の、十時の汽車で、東京へ行く積で停車場へいつたのでした。切符をきつてもらつて、溢れるやうに乘客が、ブラットフオームから出て、一二分汽車の來るのを待つてゐました。其中に、驛夫があちこちと走つて、今にもと思ふ時、ふと、小野さんの傍に、中脊の色の白い、眼の大きい、どちらかと云へば顏の整つた、學生でもないらしくされぱとて職工らしくも商人らしくもない二十五六の男が立つてゐて、やはり汽車を待つてゐましたさうです。

それを見て、小野さんは、何でも、其男の顏が、誰かに似てゐる樣に思はれて、正面に其眼を見たので、男は、氣付いて、にやりと笑つたさうです。けれどもこんな事は停車場によくある事で、偶然其男が小野さんに尾行する氣になつたのが不思議な位です。やがて、上野行と、赤札を掛けた、隨分長い、列車が、轟然と、驛内にはいつて來ました。降りる人乘る人、雜沓してゐる時、小野さんが、人少なの列車を見付けて、そのしまつてゐる扉に手をかけて開けようと急いてゐましたら、後から、男の手がのびて、造作なく開けて呉れて、さあお入りなさいと、云ひます。

場合が場合故、何の心もつかず中にはいつて、地方の紳士と、參詣らしい老婆二人きりの席の、窓際に、小野さんは、腰をかけて、そして、後へつゞいた人を見ると、扉をあけてくれた人は、にやりと笑つた以前の男で、それに、何事、ぴつたりと、小野さんの方に、すりよつて、腰かける。膝と膝とが、春の花見の時のこんざつで、並ぶ事はあつても、今、こんな人は空いてるのに、すり



渡邊宮相邸庭園の一部

よせようとするぢやありませんか。

氣がついて薄氣味惡くなつて、小野さんは立つて、窓に肘をかけて、外の景色を眺めるそぶりをして、男に背をむけてしまひました。

身體を妙にねぢらせて、手を、嫌に、後にひいて、腰架のもたれに押しつけてゐた男は、さすが、立つてまで來はしませんでした。小野さんは汽車とか電車とかに乘るのは極く弱い方だのに、仕方ありません。外を覗いて青々した丘がいつても／＼盡きぬのを眺めてゐました驛が三つ位すんだ頃、ほと／＼、弱つて、それに眩暈もかゐくするので、どうなるものかと腰をおろして、袖をかきあはして胸にあてて固く押へました。男はどうしても、すりの樣に思はれて、にらみ付けてゐますと、にやりとして、そして大きい眼をぎら／＼と、蕩らすやうに光らせて、優しさを功妙に表情して、ぢつと、いつまでもいつまでも見つめようとする。

小野さんは、うつむいたり、眼をそらしたりして、身をすぼめてゐましたが日暮里驛についたので、ほつと安心して、もう今におりるのをたのしんでゐました。地方の紳士は、うと／＼と睡つてゐるやうな眼をしてゐるし、老婆も、それに、後からきた、夫婦者も、田端からのつた子供も皆ぽかんとした顔をしてゐます。

今に降りると心強くなつてゐた所が、ぢり／＼と、すりよつてくるので、腹立たしくなつて、また窓によらうと立ちかけると、後から手を私の方に延ばして、白々しい顔で、

「何處へゐらつしやるですか……。」

「……………。」

小野さんは默まつて、その男の顔をつまらなく眺めてゐたさうです。

「僕は、下谷のもので、一寸用があつて昨日から出たんですが今は歸りなんですが、何處へゐらつしやるですか……。」

と、さゝやかに問ひはじめたので小野さんはむづかしい顔をして、

「何の爲それをお問ひなさるのです……。」

「何の爲つてね……は、は、僕は是から上野へ着くと品川まであそびに行かうと思つてたんですね。けれどあなたが動物園とか、圖書館とか、淺草とかへゐらつしやるおつもりでお出掛なら、おとも致しますよ。それでね。實は……。」

「……………。」

默つて答へずに立つて窓にもたれてしまつてしばらくして、上野の驛にはひりました。

小野さんが降りようとすると、後に立つて、危ないですよと、言葉をかけて、靴を鳴らして下に降ります。それから長い長い道を通つて札を渡す所へきました。其間もどうかして、男にはぐれてしまひたいと、多くの人のかげになりかげになつて行つたけれども駄目で札を渡すと、男もわたしして、小野さんの後にひつそうて來るのです。

口惜しくなつて、少しほど持つてゐた荷物のたるみを直すために、便所の方へいつて、板のかこゐのところで、包をひきしめてゐると、男も亦やつてきて、用を足します。

あまり執念いので、事によれば、交番に行つてもい丶と、思ひながら、上野驛前の砂利をふんで、電車の線路を横切つて、少しばかりあるいた時、追ひ付いて、

「ほんたうに、何處へゐらつしやるのです。」

「どちらでもい丶ぢやありませんか、私は、あなたに、云ふ必要ありませんもの。」

「それは、冷酷といふものです。聞かせたつて、い丶ぢやありませんか。それに、私の家は、そんなに遠くはなし、二人で、上野を歩いて、私の處へゐらしつて、お茶でものみませんか。それとも、私の行かうと思つてゐた品川へ行きませんか。ね。どうです。」

小野さんは知らない顏して、後から後から來る電車のどれに乘らうかと、公園の入口の停留所で立留りました。

「何處行の電車にお乘りです。ほんとうにどこへ行くのです。」

「あ丶、うるさい……。」

それでも男は、腹も立たないか何か云ひかけようとする時小野さんは、大門行の電車に乘つて、車掌に

「青山へ……。」

といつたら、男は、

「僕は品川へ行くんですがね……。」

車掌は、

「品川は、違ひます……。」

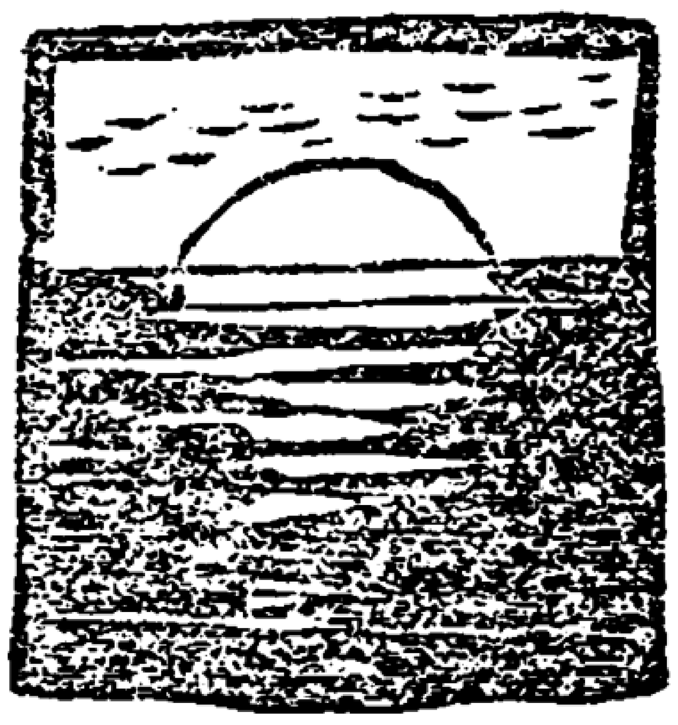
「え。これぢやないですか。」

と云ひもきらぬに、車掌は、男を降りさせて、チンチンと、軋り初めました。早稻田大學生が二人のつてた側に腰かけた、小野さんは、思はず快よさに窓から下を見下すと、男は、白い眼をして此方を見上げ眉を

しかめて、にらめるので、小野さんも見下して嘲笑の眼をそゝいでやつた、――其時の小氣味よさといへばかつてない感じであつて、今に、其時のみじめだつた男の顔が思ひ出せると云つて笑ひました。

東京灣を一週したる女生徒の實話

日本高等女學校本科四年 高野むさし



暮れ行く春を惜む頃から待つて居りました航海旅行も、六月二十七日に、一二年生十名、三年生十五名、四年生二十四名、五年生五十八名卒業生二十五名、合計百三十二名が校長先生以下、十八名の職員のお方に引率せられて、本校創立委員締明圭造氏所有の二千三百噸もある大汽船嘉代丸に乘せられまして、東京灣を周遊しました。

定刻の午前四時半に殘らず新橋停車場に揃ひました、おの〳〵今日のたのしい想像をしながら、貸切り列車で横濱に着きました、七時半にははや嘉代丸の乘客となり、思ひ〳〵に甲板の上で、移り行く景色を眺め、手帖にはや何やらお書きになる優しい方や、聲高らかに唱歌をおうたひになる方もあるし、お賑やかなこと、一通りでありませんでした。

航行中要處〳〵で教頭秋山花子先生は熱心に歷史や地理上の說明をして下さいました、とかくする内に横須賀に着き、こゝにて走水の橘比賣の碑を拜し、師の君には御事蹟に就て一場の講話をなされました、浦賀港通過の際はペルリの來港當時の俤を偲び、景行天皇の行在所でございました浮島勝島野島なども、一周する筈であつたそうでしたが、船の解纜する頃から、濛氣海面を籠めて折角樂しみにして居りました沿岸の風光を見る事も出來ませんでしたが、甲板では御持參になつた望遠鏡を翳しになる方もあり、又雜談に餘念のない方もあり、それ〴〵興味がございました。

船は軍港の口に碇を下し、浪速、石見を始め、小山を浮べた樣な軍艦十數隻が指呼の裡に堂々と横はつて居る其樣を見ました時は、壯觀に感じました。

鎭守府から迎ひに來ました小蒸汽船に乘り移つて、軍艦香取を觀覽しました、一組に一人の水兵のお方が叮嚀に案内され、艦橋より上中下の甲板を足に委せて說明して下さいました、生れて始めて戰艦を私どもの樣なはしたないものが觀覽することの出來たのを、無上の光榮として終生忘れることが出來ません。

艦内の規律の正しい事、殊に上官の下士卒に對する慈仁の心、下士卒の上官に對する敬意の深き樣など、見るにつれ我身に比べて今更恥かしく思ひました、上甲板に旗もて兩の手をふれる水兵がございましたので、なにかと思ひましたら、信號旗と云つて言葉を通ずるものでありました、下甲板は晝も小暗く電氣を點けて業とる有樣のいさましさをも見終りまして、一周本船嘉代丸に歸りました。

思ひ〳〵に御持參になりました、晝飯をひらきましたが、其のおいしさは又何とも申上げ樣がございません、皆さんも御同感であつたでせう

中甲板に据ゑ附けのピアノ、音に連れて、離れ小島や、須磨の曲、配所の月など彈き鳴すと、廣き船内も唱歌と、音樂と樂しい笑ひ聲とに

充ちて、私達は此上もない快樂を覺えました。

船は早くも波靜かなる鏡ケ浦に入ると、動搖も止まり、浮島の新綠は眼近に綠の繪具を溶き流した樣で、繪心のある方は何やら寫しになる方もありました。

豫定は此處で一同上陸して、舘山有志の歡迎に應じて參る筈でございましたが、軍艦見物に意外の時間を費しました爲めに只た三十分程碇泊して、舘山の星野金吉氏に無線電信の實物講話をきゝました。此處が舘山、向ふが富津の岬、彼所が觀音岬の燈臺などと互ひにかたらひながら、浦賀港を向に見て横濱港口に到着しました。

この時特に同乘せられた松波法學博士、伯爵嗣子東久世通敏氏其他十數名のお方は、中甲板に御集りになりまして、簡單なる祝盃をお擧げになりました、博士はその時に西校長先生の美擧と、また緒明船主の篤志を頌されました、校長の發聲で緒明氏の万歳を唱して上陸し、かうして樂しい一日も夢のやうに過し、無事に東京に歸りました。(談)

白木屋の前より

白木屋の前で乘つた、姉弟らしいのは大分御懇密で、姉さんは風通の單衣に博多の晝夜帶、髮は餘り振はない束髮だ、笑ふ都度金齒が光る入口の方には女學生が三人引張り合つて婦人畫報を見て居た。

入梅の濕氣ゝ含んだ風は、生溫く車窓から吹入るゝ。

禿頭の男が水呑を握つてる、三ツ矢サイダーの廣告板にすれ〳〵になつて電車が假橋を渡り始めた時。

「姉さん、駿河町で止りましやうかね」

といきなり、私に聲を掛けた四十前後の年増がある。

「え、駿河町……、止りますでしやう」

唐突だつたので、吾ながら怪しい返事をすると、

「へゝえ」仔細らしく乘換切符をひねくりながら、

「何ですね此處には書いて有ませんね、須田町つて處が切つて有ますが可いんでしやうか」

「一番終の所が切つて有るんですよ、だから途中で下りても構はないんです」とにべもなく敎へたら、

「へえ」まだ解らないのか、まじり〳〵して「銀座、雷門、上野、白山、江戸川、姉さんこりや奈何いふ所なんですかね書いてある理由は」

こんな頭の鈍い女に何を云たつて解りやしない

「へ……どうも始めてゞすからねえ」と媚るやうな追從笑ひをした、何だか厭な心持ちがして、ついと外方を向いたら、可い鹽梅に三越の前に來た、鶉縮緬に朱や朽葉色で源氏車を染めだした帶側や、羽二重絞り、光琳風アールヌーボー式、夏向の品々が陳列棚からカツキリと車内にまで映る。

「おや三越前ですね」四十女はあたふたと下車した。

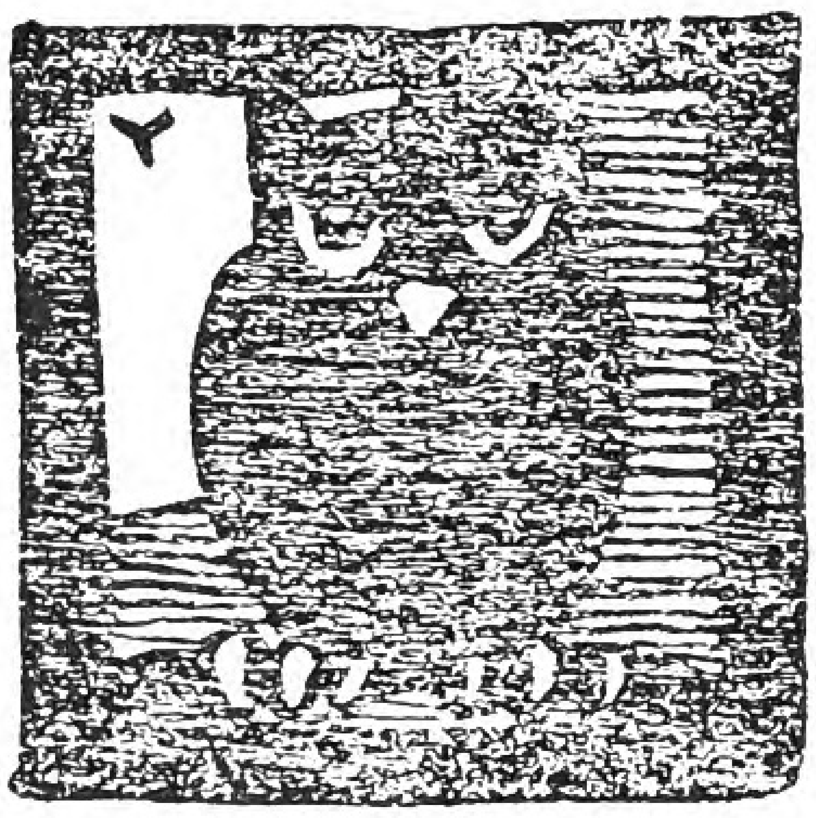
ドヤ〳〵と大分乘り手が多くなつた、最後に茶屋女風の二人が這入つて來たら、生憎腰掛の空地がなかつたので、革に摑る。

「お掛なさい」會社員らしいのが席を讓ると、

「おや澄みませんね、春ちやんお前お掛けよ」

渦巻の中形を着た年下の方が掛けた、二人とも、中々安くない服裝だ然し何處となく下司つぽい浮々した影が付まとふてゐるのは、矢張り川立ちは川で果てる行末かと他事ながら、輕い暗愁を覺えた。

本石町で乘つた、白粉を眞白に塗つた同型の二人の女は、密接合つては秘々話しあつてゐるから何となく氣になる大形の浴衣を着た、安芝居に出さうな女だ、何の階級に屬してゐるのだか鳥渡判斷に苦しまれる。



女子判任官と語る

野に降る雨

◎世間から冷笑される

或る婦人の判任官を訪ふ。

谷中近い青葉の小路で小體な一構へ。通された六疊の小窓に掛けた青すだれがはたく／＼と風に搖れる。何やらむつかしい碑文を寫した樣な詩句の一軸が掛つた床には、折ふしの桔梗の花がしほらしく活けてある。

「おや、もう桔梗が可う御座んすね、七草は奈何でせう」

「さうですねまだ——早いでせう、私も百花園にでも行つて見たいものですけど、何しろ暇が御座いませんでねえ」「はあ、今日はお休み？」「いゝえ、昨夜宿直の明で御座いますの」「宿直つて徹夜遊ばすの……隨分大變ね、嘸お務めなさいますのに、悲しい事や樂しい事がお有りで入らつしやいませうね」「そらあ貴女、何しろ大勢の中に這入つて揉まれて居ますもの、奈何心を廣く持ちましたつて、愁い事口惜しい事は御座いますよ、ですけれどね、私達は一層外部の壓迫の方を染々感じますわ、外部の壓迫なんて變挺ですけど、まあ鳥渡申しますと事務員に對する若い女の方々の眼は冷やかなものですね、ですから私、往來でも電車の中だつても、女學生や貴婦人の前へ立つと實際氣が引けて仕樣がありませんの、自分ぢや吾が天職に安んじて居ますが……え何ですつて、私が判任官だからもう結構だつて、それだつて貴女、女の官吏なんか到底人樣が眞面目に考へてはくれませんわ、「ふん、判任官か」つて調子で底にはある冷笑が含んで居ります、そんな事はないつて？ホヽヽ、貴女だつて奈何だか知れません

こと……………」
頗る意氣が旺盛だ。
「慥か獨歩の書いたのでしたよ、誇と誇と衝突すると冷笑になるつてですから、私等の誇と世間のお孃樣方の誇が衝突する時は冷笑になるでせうホヽヽ、ロジックの樣な事だが實際私達の身邊には四面冷笑の聲ですからね……と云ふと大分悲觀し了ひますが、全く何ですよ、女子の職業に就ては今少し位置を高める樣に當局者にお願ひしたいわ、おや大變生意氣な事を云て了つた……あッ貴女、例に依つてお書き遊ばしちや厭よ、本當に、ね」とボーと赤くなつて、其處にあつた團扇を採つて、てれがくしに煽いで居る。

◎初の話題が活動寫眞

お年は二十歳、昨年通信書記補を拜命し、至つて職務に敏腕、お容色も十人並、私は動く團扇越しに白いお顏を見ながら、「局へ被行しつて、什麼お勤務遊ばすの」「務つて、まあ判任官だつて格別變つた事は御座いませんね、詰り帳簿の整理、通信の事務を採りますしそれから部員の監督の任も帶びて居ますの、否精しくお話申したつてさつぱり興味のない事業で御座いますよ。

執務中の出來事？之だけは堪忍して頂戴、遞信公報で嚴禁されてありますから、元朋友の好誼にもつと變つた話を……驚きましたね、では宿直のお話を致しませう、あ、それよりか私可いものお目に掛けませう」と云ひながら、手箱から改良半紙を赤いリボンで綴ぢた帳面を見せてくれた。這麼事が書いてある。

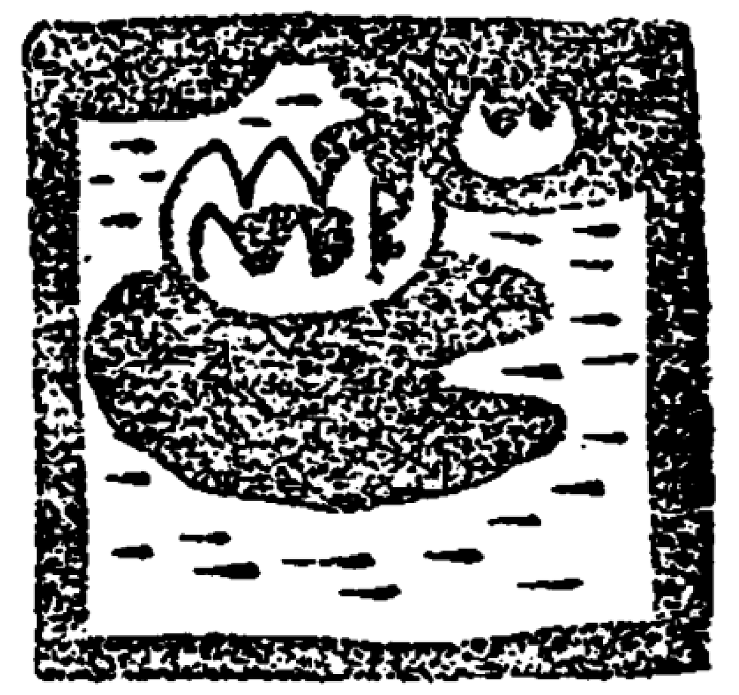
食堂の卓に大きな青磁僞ひの花瓶が乘つた。グラジオラスと夏菊とを差したら、皆が美しいと喜んで、花の下で愉快さうに食事をする皆喋喋として口數が多いが、近來不平談が比較的減つたのは、奈何いふ傾向か、話題に登るのは第一活動寫眞だ。K樣が大勝館の黄菊白菊が可憐さうだと云ひ出すと、M樣が身振聲色で何とかいふ喜劇のお話上手には、一同轉げて大笑ひ。このH樣は恬として鏡と首引のお化粧だ。洗面所で誰かゞチャブ〳〵水を使つてる。また或る時、誰か云ふともなく、言葉使ひを丁寧にしようと發言した「馬鹿、畜生」と粗暴の言を弄した者は金一錢の罰金となると、A樣つたら、一錢ぢや高い五厘にしないかと際どい處で直切る「ぢやあ、五厘に負けて遣はす」「あらまあ遣はすなんて……馬鹿」とA樣いの一番だ「そうら五厘」「さあお出しなさいよ〳〵」あ、之れは番外」と今更口を押へたが追付かない逐々五厘の徴收だ、すると私に「貴女だつても、遣はすなんて女らしくない言葉をお使ひだわね」と逆襲「否あれは例外よ」「づるい〳〵」「A樣出したから、お出しなさいよ逃げるなんて卑劣だわ」隅の方へ追ひ立てられ五厘とられた、これぢや近々五厘銀行設立されるだらう……
……。
這麼他愛もない串戯してるが本當に吾々の天國である。

「ほヽヽ大相面白いぢや御座いませんか」
「えゝ〳〵可い年をして、子供見たいな氣で居ります

のよ、尤もさうでもしなければ、遣りきれませんわ、ですけど私なんか、なまじに責任があるんでさう〳〵馬鹿げた眞似も出來ません、上官の信用が落たら、もう萬事休すですからね」「全くですね、それでまあ、貴女が部員の方との中間にたつて、蛇度お感想が御座いませうね」「え……一つね、簡短に云つて見ますと、規則〻情實が統一しないと云ふ事ですの、現に規則上充分取締るべき事だと思つても、其人の心情を汲んではさう規律本位に冷然とした處置も採れませんものね」「成程そりあさうに違ひありますまい、で徹夜なんで什麼風？」

◎辛いのは午前二時から

「ほゝ隨分お喋りしました事、えゝもう序でに何でも打明けて了ひませうね、徹夜は半夜交代です、寂と水を打つた樣な十二時――一時、彼邊は夜商人が夜明しするのがありますよ、其呼び聲がいかにも陰氣でしてね、心淋しいもんですよ、貴女なぞ未だ深夜の都會は御經驗がないのでせう。二階から外を眺めますとね、蒼いやうな月の光が重りあつた屋根に流れて向ふの會社の電燈が高く輝いて居るばかり、流石都會の中心でも、眠つた樣に靜まり返るの、私等雜誌を讀んだりぐるりと圓くなつてお話なんかして居ますが、時にはお船をこぎだす方もありますわ、辛いのは二時以後です、宿直室にはづらりと床が幷べてあります、毛布の中へ潛ぐり込んで、横になりますが、兎角寢つかれません、處へ補充といふ一連が寢に來ると、さあ賑やかになる、大分面白いお話が出る、始めは秘々やつてるのがだん〳〵高くなる、押し殺した樣にキウ〳〵笑ふ、釣り込まれてまじり〳〵して居ます內、其連中はいつか倦怠を感じたと見えて、幽かな鼾が起る、やれやれと一ねむりするとまもなく起され、覺め切らぬ眼をこすりながら交代です、二三十分は胸が閉がつた樣で、生欠伸しては厭な唾を吐く。別のお話ですが、奈何も、職業をもつた女子は、神經衰弱に掛りますね、奈何いうものですか、體質の點では全く男子に敵ひませんよ、何有仕事なんか男子に負るものですか」「でも俸給が大相違ひますつてね」「あら、隨分失敬ですこと、そりあ貴女、女子は結婚といふ運命が付き纏つて居ますから、勤續の問題で一割損で御座いますよ、然し俸給日の當日其紙袋を見ると皆の眼は意味ありげの喜びが溢れて居ます。



踊のお浚ひ

萬壽子

藤間と書した御神燈——遲い〳〵染子どの——お御匠さん——自分ながら恍惚するほどの美さ——乳母踊拜見——一面に松を描いた舞臺の背景——細い絃の調子がピンと響いて——撥と云ふものより外に何者もない——動かぬ御代こそ目出度けれ——男の弟子がごろ〳〵と來た——目的があるからよ——五人組の一人が缺けた——五十萬圓の財産家の娘が親を捨てて——よい氣味——うたゝね——寢てゐる間に松の緑と山姥——歌舞伎座で演る下稽古——一分の隙もない足拍子——今日の御褒美は——五臺の俥は音もなく電燈輝く門内へ——

箒の痕鮮に打水しつとりとした綺麗な通りの家毎に、宵の灯火は華ぎそめて、御待合と記した家の門内から緑の色活々と、涼しげな柳の枝が火に映つて、ふつさりと垂て居る。

二三軒先の露路口から湯歸りと見えて、襟首だけ白く塗た若い藝者が二人、お召の粗い立縞の單に、伊達巻一本のしどけない風俗をして、褄を高く取上ながら、○○家の格子戸をくゞつた、後から入つた妓が閉しなに瞥と妾の方を視ると、慌て連の背を打つた。兩妓の視線が凝と妾にそゝがれた、何か囁き合ながら通過るまで見て居る、青い顏、薄い髮の毛、卑い瞳、輕薄らしい口元、化粧せぬ藝者のもの嫉ましげな顏、黒ずんだ眼の光を見た時、妾は自分をかへりみて、或一種の誇?——自然に湧出る微笑を禁じ得なかつた。

X家と云ふ待合の露路を入つて少し行くと、今何か終たと見えて、拍手の音が此處まで聞えて來た。

突當つて左へ行くと粋な格子戸の内、藤間○○○と記した御神燈が、ぼうーとした淡い光で、すきまなしに並んでゐる小さな履物の、赤や牡丹や藤や白の模樣を置たのや種々の美しい鼻緒をやはらかに照して居る正面の丸窓に、パッと桃割姿が影繪を造つたが、すぐ消えた、横手の昇り口に籠行燈が人待顏に置て在る。

家内では小供等の騷ぐ聲が喧しい、足の入場がないので仕方なしに庭口へ行く、横手へ出ると此處は見物人が七八人許り開放した窓の青簾を透して覗き込んで居る。

庭の切戸を開くと、緣側に居た露子さんと房子さんが庭下駄を突掛てがたく云はせながら飛んで來た「おそいおそい染子どの、これさ今まで何をして御座つた」と露子さんは嫌に氣取つて、ゆるやかに持た金扇をそつと妾の胸に押付て、淺い笑窪を見せた、美しい眼の愛嬌はこぼれさうなのに聲許り嚴しう云つて反返る。

「ほゝゝおよしなさいよ露ちやん、妾の可愛い妹を虐ると酷い事よだけど、實際待くたびれちやつたわさあ皆さんお待兼のお染樣の御入りで御座ますう」房子さんは嬉しさうにはしやいで、まだ一言も口を開かない妾の腕を抱へ込で、引ずる樣に座敷へ上つた。

「今晩は」と大勢をくるりと視廻して、誰に云ふともなく挨拶した、とたん「染子さんお供は？乳母さんは？」と露子さんは不思議相な顔をして聞た「一人よ」と妾は濟してやつた、案の如く露子さんも房子さんも「えッ」と驚いて噓、噓」と云ふ。「あら妾赤ちやんぢやないんですもの、一人だつて來れるわ」と云つて笑ふと「餘りさうでも……」と房子さんが云つたので皆が笑つた、妾はきまりが惡るかつた。

「まあ恰度いゝ處でした、今ね、御迎ひを差上樣と思つて居りましたのですよ、子供方の方が今終ひになりましたので、是から皆さんのなさる始めに、あなたと玉子さんに子寶三番を踊て頂かうと思ますの、宜でせう」。

粹な粂三の根へ、奴元結をかけて水のしたゝる樣な鼈甲の中差をさゝたお師匠さん、此の髮が一番よく似合ふ、藤ねずみの絽縮緬の羽織に、白縮緬へ今年のお揃を染た浴衣を着て、黑繻子と絽の腹合帶を締て居る何日見てもすつきりした粹な人だ。

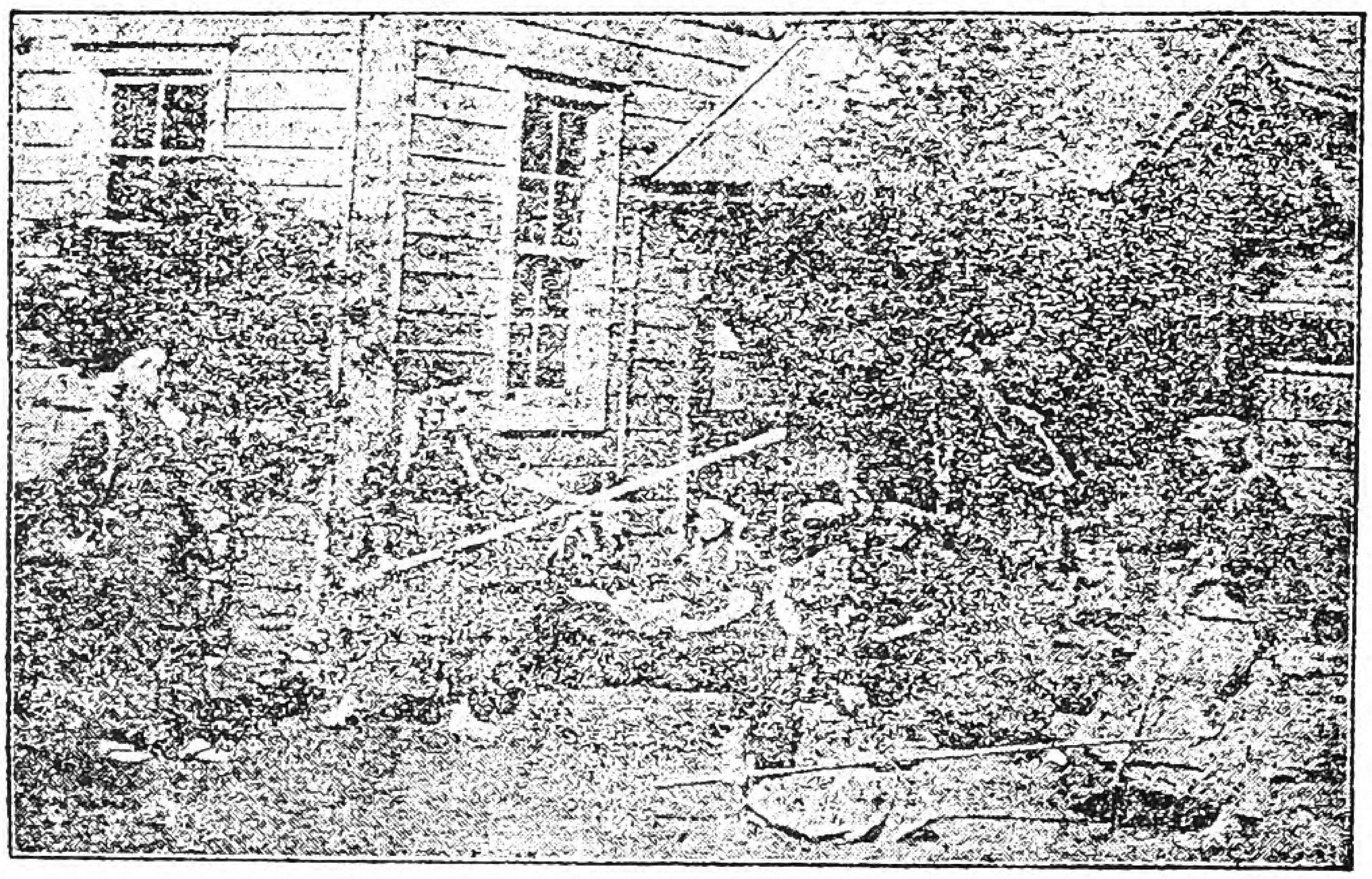
「染子さんが被入つたの」樂屋に當た奥の八疊から甲高な聲が聞えて、緣側の仕切にした麻に黑繪の夏暖簾の間から、輪廓の瞭然した白い顔がぽつかりと浮た。表情に富だ瞳が光つた、動くと白い丸々した手が頰の處へ來た、と指がお出くをする、嫣然して眼でうなづくと其の儘消えた。

玉子さんは旣支度が出來て大姿見の前に立ながら「たけきはなほもいさぎよく——合の手——ひまゆく

てまのたけのをにむちをくれないたづなかいくりりんりん〳〵」と云ふ處の腰が旨く据らないと云つて、一生懸命にやつて居る、妾は水紅色縮緬の長襦袢をふわりと引掛て、顔直しをして居ると、乳母と母様が入被つた。

「なぜ黙つて來たの、一人であぶないぢやあ有りませんか眞箇に心配して居ましたよ」と被仰る、乳母もくど〳〵と種々な事を云ふ。孃様の踊を拝見したいと云つて辰も末も來た

藤色絽縮緬の五ッ紋、垣に朝顔の袖模様の大振袖、白襟をつと抜いて肩を落すと宜い格好に成た、四季の音と云ふ樂器と、四季の草木を散した絽繻珍の帯を胸高に締て、きりゝとした品のよい蝶々結びに、側へ綠色のしごきをだらりと結び下て支度が出來た。金扇を斜にかまへて、つと姿見の前へ立つた、自分ながら恍然する程の美しさ、後に母様の嬉しさうな顔が昵と交睫もせずに私を視て居る。



東京上野女學校の薙刀體操

玉子さんと顔見合て嫣然爲ながら、手を引合て舞臺へ上つた、後影は一面松を書いた布を張て、下手に緋毛氈を掛た床の上には、お師匠さんがにこやかに三味線をひかへて整然座つて居る、上調子は豊菊さん、云ふ若い藝者、唄の立が房子さんで流れが露子さん、中に居る人は此頃あがつた靜子さんと云ふ唐物屋の娘さん、後見がお師匠さんのお母さん、是れで皆な揃つた。

玉子さんは後向に座つた、私は立てかまへた。チヨン、チヨンと拍子木がなると大變靜に成た、白縮緬へ藤間の紋を染出して、下へ私等四人の名前と、左へお師匠さんえと記した幕が、しづかに絞られる。私の胸は波立た。テンテンツンツンと小實の前びきが始まる細い絃の高調子がピンと響て私の手が自然に動いた。

「佐保姫の霞長閑に明染て今朝白々と富士の顔寫る鏡

の影添へて松と竹との二柱——」細い澄だ美しい三人の聲が一ッに成つて、心の底まで泌入つた。

室内は靜寂として、扇使ひする人も少なく成つた、銀杏返、桃割、かつら下地と種々な髮の白い顏にまじつて、附添女の赫ら顏や、小僧の淺黑い顏が、華な花斯の光にくつきりと浮て、一樣に舞臺を眤た幾十の眼光が耀て居た。

唄に連れ、三味線に連れて私は只わけもなく夢中に舞た。動く度に振りかけたスミレの香が身邊に漂つて摘細工の前差のぴら〱が、ちやら〱と音を立る。

私の心には舞と云ふ物より外に何者もなかつた。

「賑ふ春の幼子と」で玉子さんをまねいで兩人で踊る「……ひな遊びッツンテットン」で私が引く、見物に背を向て座ると、後見が手巾で顏を密とふいたり、前髮をかいたりして下さる。

「納涼にいそぐ螢狩柳の水の影いそぐ」を一人で踊て「手に手を取りて鵲の逢瀬を渡す天の河——」から又二人になつた。長い袖と袖とがからまる、と見る間にさつと左右へ別れる、金扇と銀扇とが花に狂ふ蝶の如に思ふ通りひら〱と舞つて、見る人も、唄ふ人も踊る人も只既醉た樣に恍然して了ふ。

「——千代に八千代にさゞれ石の動かぬ御代こそ目出度けれ」唄が終ると同時に幕が引れる、見物人は待かまへた樣に手を拍た。

今、お壽司が配られて、仲の好さゝうな桃割とかつら下地の一群が、ぐるりと圓形を造つて、友禪の單に赤色の勝た帶の貝の口やおはさみに小さく結んだのや水紅色紋縮緬の兵兒帶を下げたのやが、美しうならんで何か話しながら食べて居る。

男の弟子がぞろ〱と來始めた、お師匠さんは奧で母さんや乳母や六七人の方とお話しをして居る。

私等四人はお揃の縮緬の浴衣に、薄紫地へ白百合と紅百合との形を置た是もお揃の帶を締て、隅の方へ座つて居た「注意なさいよ、あの人等の爲に私等五人組の一人が缺けたんだもの」房子さんは劒のある美しい眼で男弟子の方を盻然と見ながら、力のある低い聲で三人に云つた。

「ほんとうにさうだわ、藝人なら仕方がないけれど、男のくせに踊を習ふなんて云ふのからして間違て居るわ……氣障ね」と露子さんは合槌を打ながら横眼で彼方を些時白眼で、直ぐ其の眼を玉子さんに向けて、にやりと笑つた。

「其れが何よ、私等を皆な……ねえ……花子さんの樣
にしようと云ふ目的が有るからよ……ふゝん忌な奴？
玉子さんは終の句を口の內に呟いて冷やかに笑つた
「花子さんは意志が薄弱だつたからあんな事に成て了
たんだけれど、私等四人はねえ」と云つて房子さんは
凝と私の顏を眺めながら「染子さんはしじう乳母さん
や女中さんが附て居るから其麽事もないでせうけれど
もし面倒な事云つたら私等に被仰よ、素破拔て恥かゝ
してやるわ、ほゝゝゝ」と房子さんは一人で面白さう
に笑つた。

花子さんと云つたのは私より二ツ上の十八歲、房子さんとは同じ年である、露子さんと玉子さんが十七歲、皆な五歲六歲の時からの幼馴染、親や兄妹にさへ話さぬ事も五人寄れば明し合ふと云ふ親しい中であつた。

　そして不思議な事には、各々特色は違ふけれど、優り劣のない縹緻で、今年の正月舞臺開の時、何かの話しから、新橋には七人組と云ふ綺麗な半玉が居るさうな、けれど寫眞を見れば私等よりはねえ、と云ふ玉子さんの言葉に皆な贊成して、二人少ないけれど宜わ五人組と云ふ事にしませうと、忽ち相談一決して何を爲るにも五人で相談する、何から何迄お揃にして居た。

　處が花子さんは三月の半頃から少しも姿を見せなかつた、私は病氣に成たと許り思つて、四人逢た時に、御見舞に見きませうと云つたら三人で顏を見合して淋しく笑つた。

「貴孃の樣な小さい方には聞したくはないけれど……實はねえ、花子さんは惡い男にだまされて駈落して了たのよ」と云つた房子さんの聲が顫へて、堪がたさうに俯向た、露子さんも玉子さんも俯向た。

「えッ」私は驚いて眼を睜つた。俯向た三人のかつらをかむつた樣にふつくりした髮を見て居る內、何とも知れず悲しさがこみあげて瞳が潤だ。

　何云ふわけ、どうして其麽？と種々の事を聞て見たかつた、けれど仲間から子供扱ひされて居るのと、其の譯を聞くのが何だか處女といふ淸い名がけがれる樣に思はれて、氣許りはわく〳〵しても顏が赧く成つて唇は動いても聲は出なかつた。

「其れがねえ、全然知らない人ならまだあきらめも付くけれど、憎らしいぢやあ有りませんか、ほら、ツヒ去年の十一月から來始たハイカラな太田と云ふ氣障な奴ね？彼なんですもの、私もう口惜くつて〳〵爲樣が

ないわ……花子さんも餘程どうかして居るのねえ」

房子さんは口惜さうに涙を浮めて嘆息した。

花子さんの家は請負師で五十萬位の財産家であつた花子さんは駈落する時現金七千圓を銀行から引出して持つて逃たと云ふ話しを乳母から聞て、私は思はず頤いた。可愛がつて呉れたあの優しい花子さんが、まさか？と打消たけれど、一度胸に刻まれた話はどうしても取る事は出來なかつた。

搜索願ひを出すと新聞に書れて家の恥に成るからと云ふので、花子さんの家では三月後の今も熱心に探して居る。惡魔に魅られた哀な花子さんが、一日も早く悔悟して歸る樣と妾は祈つて居る。

「此度は北州なんですがねえ、四人で唄つて下さいませんか」お師匠さんは房子さんに賴んだ。

房子さんは口元に笑を含んで、縮緬の浴衣の袖にどつしり重を見せて、袖屏風をすると、其の蔭で手を振た。お師匠さんは怪訝さうな顏をして「なぜ」と云ふ、房子さんは嫣然して「でも、かたきですもの」「大變執念深いのねえ」「えゝ巳年ですからねえ、ほゝゝゝ」と艶美に笑つた。お師匠さんは露子さんにも玉子さんにも賴んだけれど、二人とも笑つて返事を爲なかつたので、お師匠さんは困つた樣な顏をしてすご〱と樂屋へ行つた。

三人は顏見合せて意味有りげに笑かはした、不思議さうに三人を見くらべた私に氣が付と、云合せた樣に房子さんと露子さんが私の手をにぎつて「宜氣味ね」と云ふ、わからないので默つて眼をぱちつかせると「染子さんにはまだわからないわ」と玉子さんが、大人ぶつて云つた。

幕があく〱と床には眉毛を立ない十位の娘が兩人、小さな手を膝の上へ重ねてちよこんと座つてた。

頭の光つた、横顏にそれと知られる薄化粧のニヤケたのが羽織、袴の粉粧は立派だけれど、腰や足元のふらく〱するが如何にもあぶなかしくつて、見て居る者の方が汗になる。

「あれだもの、おほゝゝ唄ひもしないわねえ」と玉子さんは笑つた、私も思はず微笑で、側に居た乳母の膝へ肱を凭せて突伏た。

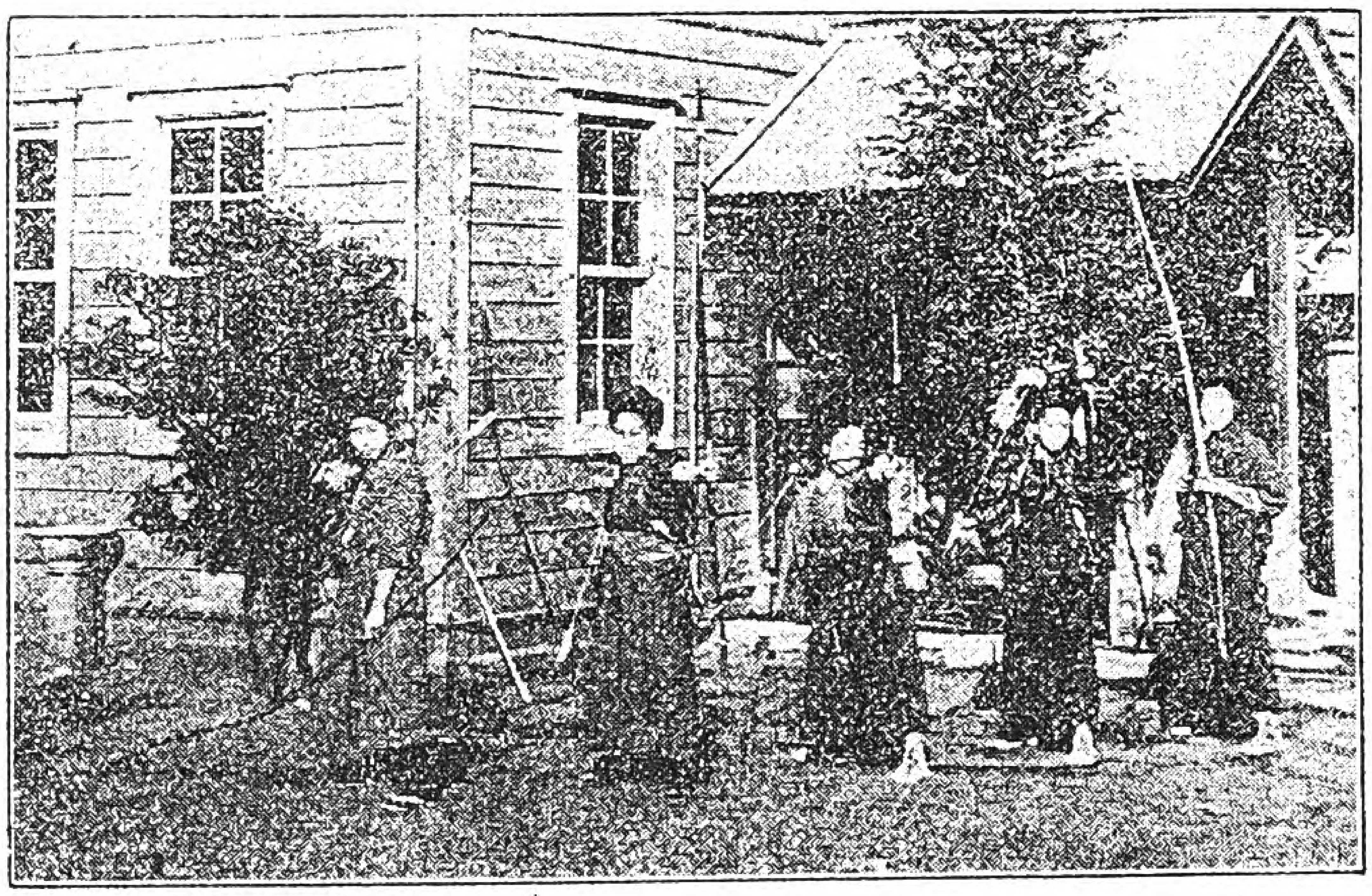
乳母が襟元へ送つてくれる團扇の風がやはらかく肌に通つて、心地よく恍然すると、皆の聲や、三味線の音が遠く〱成つて行く、自分の體もだん〱輕く成

つて來て終には煙の樣に成つて了た。頰へ生溫かい柔かな物が觸れたので、愕然して夢からさめた。

「何て無邪氣な方でせうねえ」洞然と開いた眼の前へ房子さんと露子さんの顏が覗いて、房子さんのきやしやな白い手が引込處だつた。

「餘邪氣なさすぎて困つて了ひます、染子、漸くお目覺かえ、眞個に困つた孃だね、御覽なさい小さい方が皆な笑つて被居るぢやあ有りませんか」

母樣は切の長い美しい眼で、優しう白眼ながら被仰る。大勢の居る中で寢入つて仕舞た、と我にかへつた時さう思つて恥しさに赫と成て居る所へ、又母樣に白眼まれて眼の遣場に困つた私は、思はず乳母の胸に顏を押付ると「おや〳〵孃樣は今に成つて又乳母のお乳が召上り度ので御座ますか」と眞黑な艶々しく染た齒を出して笑つた。



東京上野女學校の弓術體操

私はいよ〳〵慌惶て、哀憐を乞ふ樣に密と房子さんを見ると「染子さん、北州に中毒られたんでせうよ」とてう云つて莞爾笑つて居る、好機逸す可らずと思つて乳母の胸から顏を放すと直ぐ彼方へ眼をやつて「さうよ、あの人さへ踊なければ私寢やしないんだけど」と遂々可哀相だけれど、國ちやんと、云ふ若旦那に罪をきせて了つた。

寢て居る間に、松の綠と、山うばをして仕舞たと露子さんが話して「あれを見たら又一時間許り寢なきやあならなかつたでせう」と云つたので皆が洪然笑つた。

當日第一の呼物たる房子さんの保名狂亂が始まつた、秋のお浚ひは歌舞伎座へ持出すので、此度のお浚ひはほんの內輪許り、囃子もなければ衣裳も着けないので、房子さんに踊らせるのは勿體ない樣だ、唄は私等三人でやる。

「戀風が來ては袂にかいもつれ思ふ中をば吹わくる花に嵐の狂ひてし心そゞろにいづくとも道行く人に言問へど岩せく本と我胸とくだけておつる涙に悲しく袖の片思ひ」三人の聲が和して、足の爪先まで沁む様な、何ともたとへられない宜い氣持に成つた。

花道がないから房子さんは床の横手から出て來る

「姿もいつか亂髪誰取上て結事も菜種の畑に狂ふ蝶つばさかはしてうらやまし野べのかげろふ春草をすほう袴にふみしだき狂ひ〳〵て來りける」

唄つて居る悲しさにはまさかに横眼で見て居る事も出來ず、三味線にぴつたりと合て一分の隙もない様な足拍子ばかり聞えて、時たま金扇のひら〳〵舞のが、ちら、ちらと眼を射るだけ、見臺の上へ瞳を落して身動も出來ない。

窓外には見物が三倍も増た、青簾をはづして了たので飛だ宜い正面棧敷だ。

唄も踊もます〳〵佳境に入つて、窓外の見物さへ水を打つた様、咳一ッする者もなかつた。

踊が終ると人々は云合せた様に、ほッと息をして急に礚々團扇や扇子をつかひ始める。

賞る人、感心する人、夢見る様な眼光で凝と引幕を視つめる人、歸り支度を始める人、今までの靜寂をやぶつて喧々とまるでむされる様だ。

「どうも有難う、御苦勞様」

「どう致しまして貴女こそ御苦勞様」四人で笑かはしてお茶をすゝつた。

「染子さんの美聲つて、何日もながら實に心持が宜わ是からかん處は皆な染子さんにおゆづり致しませうねえ」と云つて露子さんは笑つた。

「寢起でさぞぼんやりした聲が出るだらうと思つたら大違ひ」と玉子さんは、わざと大きな眼をくり〳〵させる「此度は露子さんと染子さんの三社祭祭、露子さんの惡玉でせう、染子さんが善玉？兩玉ともしつかりして頂戴よ」と房子さんはお扇子で輕く二人の脊を打つた「既是れでお仕舞なんですからねえ、晝間踊つてつかれて居るでせうけれど、一生懸命に踊て下さいね」とお師匠さんが露子さんに云つた。

目出度終つたのは十時半、二番とも自分ながら心持よく出來たから母様や、乳母にはどんなにかよく見えたに違ひない、明日お父様に吹聽して頂いて、さて其御褒美は？と歸りにごむ輪の人力車を五臺並べて涼しい風吹く柳の下を通つた時、偶思出して一人微笑だ。

エーツの詩

川路柳虹譯

愛の悲み

檐に燕の騒ぎ、
滿ちた圓かな月と沙子の星の空、
歌ひつゞけてゐる木の葉の聲高い調は
地の衰へてゆくものゝ音を隱し去つた。

かゝるとき汝は眞赤な煩み多い唇をして
きた。
汝につれてこの世のあらゆる涙が來り、
その勞役の船のなやみと、
數知れぬ年月の困みがはこばれた。

いま、檐には燕のもの噪ぎ、
凝つた乳のやうに蒼ざめた月、白んだ空
の星
靜まらぬ樹の葉の聲高い騷ぎは
地の老い疲れた叫びにうち消されゆく。

君が老いて

君が老い更けて睡り勝ちに、
爐の傍に居睡むるとき、この本を取り出し
靜かに讀め、かくてまた君が昔の眼、
その柔かい眺めを、その深い影を夢みよ。

人はみな君の歡しい氣高い束の間を愛し
た、
眞にも偽りにもみな愛の心で君の美しさ
を愛した、
しかしその中の一人は君の移りゆく心を
愛した、
そして、君の面變はるその悲みを愛した。

いま、熱つた壁の傍によりかゝり、
やゝ悲しげにつぶやく言、あゝ愛は逃げた、
あの遠い山を越えて步み、
星の群の中にその面をかくした。



水平線

河井醉茗

水平線、之を地平線と換言ても差支ない、此處に謂ふ水平線とは、心の水平線を云ふ。

心の水平線を保てない人が、殊に女性に多いと思ふから一言するのである。

動搖も、矛盾も、刺戟も、誘惑も、昏迷も、凡て、現代の相であるから、驚くことはない、否、驚くことには大いに驚いて宜いが、全力を擧げて驚倒し、眩惑し、判斷力を失つて了ふまでには及ぶまい。

感情に傾いて、理性が不在になるといふことは女子の通有性であつても、それで貫徹せない場合が却つて多いのである。世間は然う感情的に出來てない、寧ろ感情を殺すやうに出來てゐる。

で、其事は大分氣がついて來たやうで、女の唇が引締つて來た如く、理性の勝つた女子が追々現れて來るやうだ。それは結構だが、今度は又理性に傾き過ぎて二重にも、三重にも自個を僞つて而かも自分は欺かざるつもりで居る女性が出來上りさうだ、是も考へものである。

要するに現代的婦人の模型は、一方で强烈なる感情的の刺戟を受け、一方では冷酷なる理性的の壓迫を蒙り、未だ熟してゐない頭腦は、それが爲に昏迷して、言ふことと行ふことに一致を缺き、可惜聰明に生れながら、自ら韜晦してゐるものが少くない。

今や婦人界の世界的潮流は、二つに大別することが出來ようと思ふ。

一つは、女子も男子と同じく、働き、營み、能力あるものは進んで男子と同じやうな事業に身を置かうとするもの。

一つは、女子は女子として、飽くまで男子と異りた

る方面に發展して行かうとするもの。

此二つの問題を解決するのは容易なことではない。問題として解決することが出來ても、其結果は何時になつて分るだらうか、殆んど見當さへつかない有樣である。

性の研究といふことは、豫て學者間の大問題である先づ其研究から緒に就かねば、女性問題の解決はつかぬ。

其通り時代が眞個に自覺してゐないのに、一個の女子が自覺したと心得て自ら誇つて居たら、大いなる間違ひが生ずる、自覺は自覺で宜い、何人も其自覺の權威は冒さないから、より以上價値のある自覺をして欲しいと思ふ、一つの壓迫、一つの苦痛が來ても、直ぐ運命に縋りつかうとするやうな賴りない自覺はして欲くない。それには何うしても狹い範圍の間に彷徨してゐるのは宜くない。何でも廣く世の中に觸れてみねばならぬ、然うして心の水平線を保つてゐなければならぬ。

三昧に入るとか、覺を開くとか、心を丹田に收めるとか、昔の人の云つたやうな、むやみに沈着き拂つた冷靜なる態度をのみ水平線とは云はない、度胸の据つてゐるのも不良はないが、馬鹿沈着に沈着いてゐる者は存外實際の役に立たぬことがある、心を沈着かす稽古を指すのではない、動搖しても大きく動搖する、地球が公轉するやうに、眼に見えないで、始終動搖してゐるのは、眞の活動である、生命である。

心の水平線を保てないやうな女子に、もつと廣い世の中にお出なさいと勸めることが、甚だ危險であるから、畢竟其事を云ふ前提として、先づ心の水平線をお定めなさいと云ふ。

心の水平線上には森もあれば、山もある、丘もあれば、樹もある、解放もあれば、自由もある、苦痛もあれば、享樂もある、何でも彼でも、有るが儘に、跳梁するがまゝに、善く生きるといふ事の爲なら、小さな羈絆に捉はれずに進取的行動を取るのが、現代的婦人の方針であらう。

追はれし人

横瀬夜雨

をんな等の立つるちかひは笹の葉の黒鳥の小水にあたひせずあり
はかなしやななもとざくらななたりをうしなひながら生くる命の
子ウ買オのおやに囚られしわれなれば戀も石城にふうじられけむ
目さむれば石楠木の花散りてありたへ子が眉のにほへる床に
顔をあげよなみだ口でもりつらからむ二てうの弓を控きし子よ汝
君もまたうしろを見する萬人のひとりとなりぬかねておもひし
柄目木の二縦草蘆のこぶけやき日に五千石石油噴く家
お下して白きリボンはかけたれど十七なるをあはれとおもひぬ
千とせ子は玉のやうなる指もてりにしきのおびをあをのリボンを
植うれども挿せども根かぬしら百合の白きを君のえりに見しかな
さし汐の中洲にのぼるゆふぐれは君が二かいの灯も流るらむ
夏がすみ阿波のうみどにくれてよりきみがひとみは沈み行きけむ
獺の棲むかもねこたんのあをぶちをそに交りてわがねどにせむ

小園より

窪田空穗

下町にある社から、手紙を持つて使に來た小使の爺さんは、私が返事を書く間、茶を飲みながら庭をまじまじと眺めて居たが、

「惜しいもんですねえ！此れだけの庭があると私だと綺麗なものにして見せますがねえ。」と言つて、氣を置いたやうな笑顏を作つて私を見た。

「さうだねえ、爺さんだといぢり廻すだらうねえ。」と私は筆を止めて、爺さんの植木好きの事を思出して言つた。

爺さんは得意な顏になつて、

「一週間！それも朝晩にチョイ〱手を入れますとね其れは綺麗なものにしますよ。……かうと、あの山の彼方側はズーッと萩の植込にしましてね、此處へはかう、種々と一年中花の見られますやうにね。」

「さうだらうねえ、遣り方によつちや庭らしくなるねえ。」と私は返事を書いてしまつて、爺さんの前に置いた。

「さうですとも！——此れぢや如何な事つても。」と爺さんは高笑ひをした。

爺さんの批評は私の胸に殘つた。爺さんの歸つて行つた後、私は一人で、障子のガラス越しに、今更のやうに見馴れて居る庭を眺め廻した。

庭は六七坪もあらう。家に合せては廣い方だ。が其れは庭として態々築いたものでは無く、前の家と私と家とを較べると、此方が一段地盤が低くなつて居るので、其境に自然堤が出來て居る。その堤に少しばかり手を入れて、築山の恰好にした、——其れが殆ど庭の全部を成して居る。

その不自然な庭には、庭の生命である所の木も石も無い。たゞ築山の上に一本、梅の可なりな老木と、開戸の側に、山椒の若木がある、其れぎりである。築山の土は雨に流されて赤土の肌を露はして居る。

此家を借りて引越して來た當座、つまらない庭だ、

まるで空地のやうだ、と思つた事があつた。其れは去年の秋の初めの頃で、庭に蔓つて居た雜草も、そろそろと黄くなりかゝつて居た頃であつた。其れから冬、春と、私は何一つ見るものも無い庭に對ひ馴れてしまつた。

成る程爺さんの見た通り、餘りな庭だ——其れにしても私は、何れ位な時間この庭を眺めたのだらう？、とツイ思つても見ない事までも思ひ續けて來た。

私は隨分この庭を眺めた譯だ。朝起きて第一に日光を見るのも此庭である。夕方歸つて來て此所へ座ると眼は自然庭へ行く。人と對つて話をして居る合間、一つの事から他の事へ移らうとする繋ぎの時間、それらの長い時間は皆な此庭で費されて居る譯だ。

さう思つて來ると、私は庭の貧しいといふ事よりも此貧しい庭に馴れて、別に何とも思はず平氣で過して來た自分の心持といふものが、ふと憐れなものに感じられて來た。

私は眼を離せないもののやうに、しげ〳〵と見馴れて居る庭を眺めて居た。そして心は、俄に其所に出來た空虚に悸くやうになつて居た…………

荒れた庭、荒れた心——

私はホッと溜息を吐いた。

お蝶

兒玉花外

お蝶は着物に綿を入れながら、臺所の隣りの間に考へ事をしてゐる。柘榴の綠したゝるやうな若葉の裏から夏の光が一パイに、椽側から疊の面へ滑込む晝。

女中にしては品があるやさしい廂髮、それが六筋も額に糸のやうに紊れて、可愛いゝ睫の長い目元になやましう懸る。

淸い〳〵泪が血のやうになつて、眞白い綿の上にホロ〳〵と滾れ染める。女の指は軟かな綿を揉つて柔かに輕う置く……。

お蝶の胸の中には、柘榴の緋赤の花よりか濃い、眞

から火のやうな戀が燃えてゐる。細くて弱い女の骨を熔蕩かすほどの、強い苦しい戀――十七八處女の純潔な無垢の骨は、熱い涙と化つて雨のやうに流れ出る。

田舍から出て來て、此の家に奉公を爲るまでは、東京で何年かの後では勤人の所へ、緣に附きたい積りだつた。風儀の惡い田舍は、ドウ思つてもお蝶の氣に添は莫つた。いつも水々しい廂髮に結つてたも其の爲めであつた。

お蝶は、主人の家に遊びに來る若い詩人に戀をした臺所の障子の蔭で華奢な體を小さく座つて、まめな指端で縫針を運ばせながら、奧の間で談す熱烈沈痛な口調をしみ〴〵と聞いた時、心は未だ覺えぬ美しい快い光るもので深う〳〵ツいかれた。油畫で見たやうな長髮が眉の邊までも蔽ふ顏に會つた折、田舍の河添で夕立の前に急流の水面の美しい何ともしれぬ光を認たやうに、胸は騷いで顏は火のやうに眞赤にほ照つた。總の男を卑猥のものとみて居た觀念が俄に破れた直覺から、胸元の乳房に重い赤味を感じた。

夏は那の桑の葉のコンモリの繁みに見える、白い建物の學校でも少し本を習へば善かつた。歌を作る人といふが如何な歌かしらぬ？ 桑摘みの唄を一寸と口づさむで思はず笑つた。笑つたと同時に自身の是迄の胸に描いてゐた幸福は崩壞されて、不安は毒藥のやうに循はる。――恰ど宗教や詩歌が一面人間の平和を破り紅魔の狂的に爲るがやうに――。

普通の人のお嫁を夢みたお蝶は、都で不運なものに出會つたのだ。

お蝶は昨日、主人の手紙を持つていそ〳〵詩人の許へ往つた、廂髮には燃えるやうな虞美人草を一輪挿して、顏には珍らしくも綺麗に白粉を塗つて居つた、背中に負うた四歳になる主家の女の兒にも、美しくお化粧をさせてあつたが、之れは自身の顏のおつき合せで有つたらしい。

お蝶はいま、きのふの夕景詩人と逢つた事を思出した……。自分の眼も、庭前の柘榴の葉も、着物に入れる綿も、兩方の指の端までも、ドレモコレモ悉皆な眞

赤になつて了つた。

夏の路

水野仙子

平らかに、時々は廣く迫く、紆曲つては叢のかげに隱れて、またから／＼と白く現はれる村の路に、牛乳屋の車が新らしく轍の跡を薄くつけて行つた。白い脚袢に白い腰卷を下げて、浴衣に締めた黒繻子の帶に、端折つた裾を挾んで、袋を袈裟がけにした肥つた老女が、同じやうな裝束をした二人の男の連れと並んで、手拭ひで汗を拭きながら擦れ違つて行つた。札所廻りの人達であらう。

そよ／＼と無暖い風が吹くと、右手の左手の、南瓜畑に丸い葉が搖めいて、一樣に葉の裏の白いのを見せる。黄色い花の間々の下には、まだ花の名殘りをとどめた青い不格好な實が、覗いてるのもあれば隱れて居るのもある。

刈られて野に伏した麥の畝の間には、紫の莖の色濃い茄子や、畑によつては小豆と思はれる葉の形の、柔かさうなのがふら／＼して居る。胡瓜の手に蔓も背高くのびて、白い粉を着た細やかなのが、葉隱れのところ／＼に下つてるのが見える。馬鈴薯畑、大根畑、隅には坊主になつた葱などが寄せられてある。脛深く泥につかつて、水田を搔いて居る人の影が青葉とともに搖れた。

樹陰を々々と選つてつい草の繁つた道に外れると、薊や草苺の色がまづ目を引く。黒い程綠の濃い杉の低い森、すく／＼とした其足間から、新らしい家の腰が見えて、柵の中には白と黒の斑や茶の斑の牝牛が、寢たり起きたりして、懶さうに體を扱かつてるのが見える。

楢の林の小路を潜れば、足音に驚いて枝から枝にところを變へた小鳥の羽音に、不意のことゝて此方も少からず驚かされて、心持ち濕つた草深い路に日かげが折々さして、風吹けば音なく搖れる草に音があり、落

葉を踏む響とも違ふ一種のそよめきは、青葉の下の細い徑をわけてはじめてそれを知ることが出來る。

徑を出外れて萱の繁みに隱れることしばし、竹藪の涼しい中に路は續いた。根元に皮の袴を拔いた今年竹が、冴え〲として發育の色を見せて背丈を競つて居る。間もなく藁屋根の一つ二つが、歩くにつれて青葉を搖くるやうに現はれて來た。低い軒の前には、緋のやうな石榴の花と、毬のやうに咲いた紫陽花の花の下に、一家の人達はそれ〲な仕事にうつむいて居る。まだ生々しい土の馬鈴薯が、薄紅い色を覗かして山のやうに積まれてあつた。いづれも足音に顏を振りあげて私を見る。こゝこゝと何かを啄んで居た鷄の一族が汗を拭く半巾のひらめきに怖れて、玉椿の垣の根元を潜つて去つた。樫の樹を心にして積みあげた藁にふの下には、去年の落葉が朽ちもせずに喰み出て居る。

いつかまた稍々廣やかな村の路に合して、當て途もなく歩いて行くと、路の曲り角に一二軒の家が見える

「はい四十三錢五厘！」と突然聲が起つて、汚い服裝をした女が店先に立つた。古煤けた家には燐寸やら煙草やら駄菓子などが並べられてある。和洋御菓子と箱車に書いた卸し屋が、

「へえ有難う」と言つて箱の戸をぴたんと音たてて閉めた。

「四十三錢五厘、あるでせう、よく數へておくんなさい」

私の後には錢の音が高く殘つた。

輕い欠伸が口を衝いて出ようとしたので、私は初めて足の疲れを知つた。歸らうとするでもなく、また何處かへ出ようといふ目的もなく、たゞ道の續くがまゝ曲るがまゝに委せて歩いて居る。かうして今日も午後の散歩の日課を踏んだ。

ふと朽ちた山門を控へた藁葺のお堂の前に出た。桑の葉の繁つた垣を分けて、横から境内にはいつて見ると、松や櫻や樅などの樹陰に、箒の跡が涼しげに行き屆いて居る。

不動明王と金文字の出た正面の額を見あげて、試に

鰐口の綱をとつて一波打たせると、鈍い籠つた音が思ひの外低く響いて、途端に白い鳩が一羽お堂の中に翼の音をたてた。

下駄の音が堂の床に高かつたので、心して寄つて暗い格子の中を覗いて見ると、炎の中に劍を手にして立つた不動明王の御像を正面にして、赤地の幕には定紋打ち太鼓やら提灯やら、眞鍮の燈蓋などが飾りたてられてある、暗いなかに光つて居る御鏡には青葉の影がうつつて居た。

一通り奉納の額を見廻して、まづ目の据つたものを調べると、牡丹に唐獅子の大きなのには、天明二壬寅年七月吉祥日と書かれてある。加藤清正が虎退治の繪の幼なげなのもあれば、日露戰役に出征した村人の名がづらりと書かつて額になつて居るのもある。大關とある菰包みの酒樽を書いて、その前に大きな和錠を書き、明王の前に手を合せて居る男を書いたのなぞは、禁酒の願の積りであらうと微笑まれ、明和五年戊子七月吉日、願主市村座留場市右衛門とやう／＼判じ讀まれる古びた額には、白拍子と殿樣風な立つた男と、碁盤に腕を掛けた奴風な男が書いてあつて、顏を染めた胡粉ばかりが白く繪の名殘りをとゞめて居る。

そのうちに珍らしいのが一つあつた。額の大きさは一間もあらうと思はれる程で、馬具を置いた栗毛の馬が、何かに驚いて白い眼を剝き出して躍り狂つて居る足の下に、商人風に髮を束ねた旅裝束の男が踏み倒されて居る。笠を着たり挾み箱を擔いだ男が二三人驚いた形裝をして居る中に、手綱を持つた馬子の驚き顏は至極おどけて居る。猶よく／＼見ると、馬子の後に袖無しを着た童が、奴凧を持つたまゝ逃げて行かうとして居る。すると今度は畫面の右に持つて來て、石垣を書き竹の矢來を書き松の樹を描き、馬の脚の下の男と同じ着物を着た男が、床をのべて寢て居る枕許に藥の袋と茶碗が一つお盆に乘つて居るのは、病床のことを意味してるのであらう。取り廻した二枚屛風のかげからは、淺黄の風呂敷包みが覗いて居る。遙かに上の方に當つては、二人の童子を連れた不動王の尊體が雲

に乘つてあらはれて居る。左の隅にはお宮があつて、突き袖をした内儀が、縞の羽織を着た夫と子供の一行に、供の者を連れて鳥居を潜らうとしてるところがある。全面に渡つて一面に金箔を散らしてあるので、群青色や朱や胡粉などの、けば〳〵しい色と相俟つてなか〳〵華やかである。

繪もかう具體的に書かれては、はゝあと其の意味が呑み込めて、ひとりて興を催して居ると、猶其額の傍に御家流の字で由緒書きがしてあるのに目がついた。書かれた板が古びて居るところへ、ところ〴〵汚點も出來て居るので、いくら目を瞪いても〳〵續けて讀み得ることが出來ない。嘉永四年正月本多樣お成……と讀んであとはわからず、私儀廿五歳の春家業修行の爲とやう〳〵判じてまた躓く。子供凧揚げ居たるが、ふと右の凧絲馬の首にかゝり、右馬驚きて……氣絶えたり。よふ〳〵氣が付き候へども足骨くぢきて痛み強き故、道遙かなる醫師たのみ、且早々歸府いたし、種々養生いたし候へども捗々しくもなく難儀……。首が痛くなつた。涙が溢れさうになつた眼を押へて猶讀み取らうと苦心する。

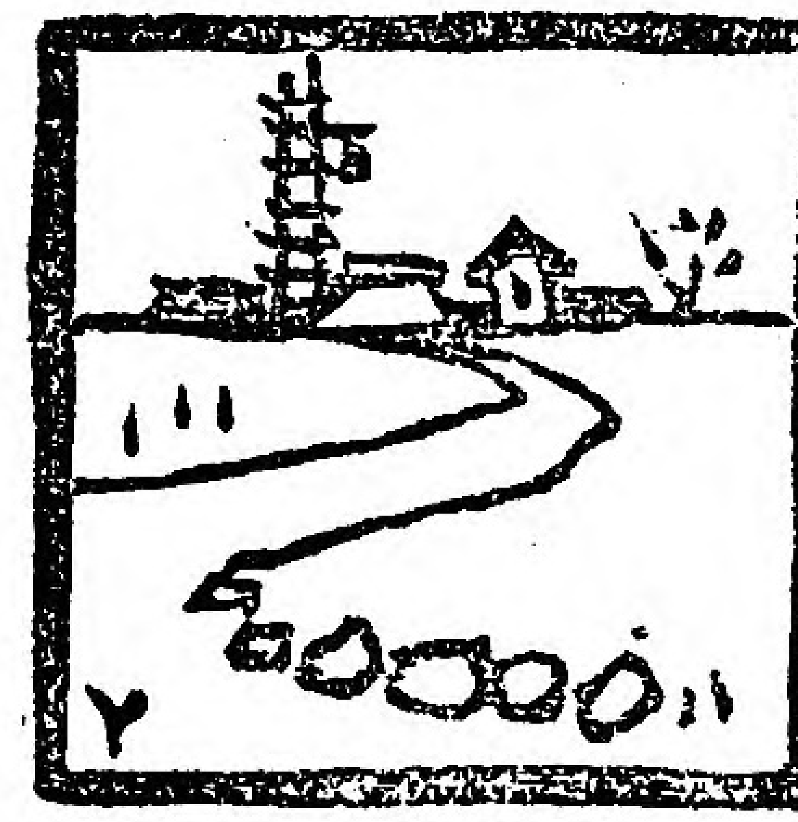
ある夜兩親夢のうちいづくともなく病人怪我はもとの身になほす……といふものあり、ゆめさめほつと思ひかゝるも兼ねてねんずる不動尊のおつげとお寺參詣して……大丈夫なり行家事向諸御大名樣御出入は勿論萬事盛運となる事まつたく當不動尊のお影、利益々廣大御禮のため右少額を奉致 敬 白 もの 也、

安政四丁巳稔春王正月 元旦。

骨を折つてから讀み取つて、熱く痛くなつた目をしばたゝいて、も一度額面をずらりと見渡した。いかにしても長らく上ばかり見つめて居たので首が痛い。ぶらりと其處を出て境内を横切らうとすると、松樹の根元によせかけた圓みがゝつた石に、誰の句か彫んであるのが目についたので、今度は其前に蹲んでためつすがめつして見る。はせをとしてある。

昏おそき山谷過ぎけり紙草履。

夕日にいつか樹の間を洩れて居た。葉といふ葉をそよめかす風は、夕べとなつて殊に武藏野の野の面にさゞめき渡つた。



婦人旅行談

馬の牧場

盛岡以北は一大平原。青い〳〵草原は遙かにつらなつて、はてに東北山脈がスックリと空をくぎつて、カラリとはれた初夏の瑞々しい風が、窓から窓へとぬけてゆきます。此邊は馬の産地。幾百とも知れぬ馬は自由に草原にはなされて、いう〳〵と草をはんだり輕く蹄を蹴つて駈てゐます。中には線路近くまで來て汽笛におどろかされてゐるのもあります。不意に汽笛が長くなつたので、皆窓から首を出すと、私の隣に腰かけてゐた男が、馬が線路に入つたのだと云ひました。行手を見ると汽車の先きに立つて白馬がドン〳〵駈てゐます。が程なくそれた。夕方馬の歸つてゆく話も聞きました。笛をかるく吹くと、ゾロリ〳〵散らばつてゐた馬が集まつて、馬番の男は先きに立つて里へ連れて歸ります、馬の長いラインは山道の細い間を消えてゆくのです。私は夕ぐれに馬のかへつてゆくのを一度でも見たいと思ひました。（白百合）



玄海灘上の産聲

昨年の初夏關釜連絡船で歸國の途次でした、船が玄海にかゝつた頃、三等客の中の若い姙婦が急に産氣付いたといふので、乘客一同呆然として居る間に、甲斐甲斐しい船員の助けで、無事男子を産み落しました。船では非常に吉例として、船長が早速名命親となり、玄海にちなんで玄太郎と命け、玄海の荒波上に産聲上げた海國男子の將來を祝するとて、乘客一同へ葡萄酒の盃杯が廻されました、船員連中では更に盛んな祝宴

が催ほされました、私は冒險談の主人公には能く此んな子が成るのではないかと好奇な想像をしてみました（露荻子）

汽車を呼止る

はじめて鳥取に汽車が出來た頃でした、千代川の鐵橋にかゝると皆が珍しがつて片方の窓からのぞきますと、或る立派な風采をした男の方が、「あッそんなに片方によると汽車が反覆るぞ」と眞面目な顔で云ふと皆が驚いて眞青な顔をしました、私もおどろいた仲間です。

それから、これは一月も後だつたでせうか、加露に遊んで歸途は湖山から汽車に乘らうと思ひましたが、まだ停車場まで二町餘もあるのに、汽車はヒユーと汽笛をならして出ました、それが終列車なのですから、思はずあゝと溜息つくと、車夫が大聲で「オーイ、その汽車待つて――」と云ふと、殆ど一町も出てゐた汽車が止まりました、宛然芝居がゝりでせう、今でも一つばなしにしてゐます。（春子）

クッチャン

北海道鐵道の汽車は今變な名の驛についた。倶知安々々と驛夫がよんで行つた後から又變な物賣がきた。驚く勿れ！ウドンにソバ、全く珍らしい。オイ蕎麥アと義兄さんが呼んだ。どこへ行つてもお蕎麥の味の忘られない義兄さんは瞬間に二杯を平げて早くも三杯目に箸がついた。サア大變。汽笛がなつた。車は徐ろに動き出した。蕎麥屋の若者は窓に寄つて連りに早く／＼と促して居る、ハラ／＼して見て居た私はまあ驚いた義兄さんてば。白銅二つ摑み込んだと思ふと、ソレとばかりなげ出した三つのお鉢は大地にあたつてカチヤン！。呆氣にとられた蕎麥屋の顏にすまし込んだ義兄さんの顏、汽車は見る／＼此二人を遠ざけてゆく。（淺野柏葉）

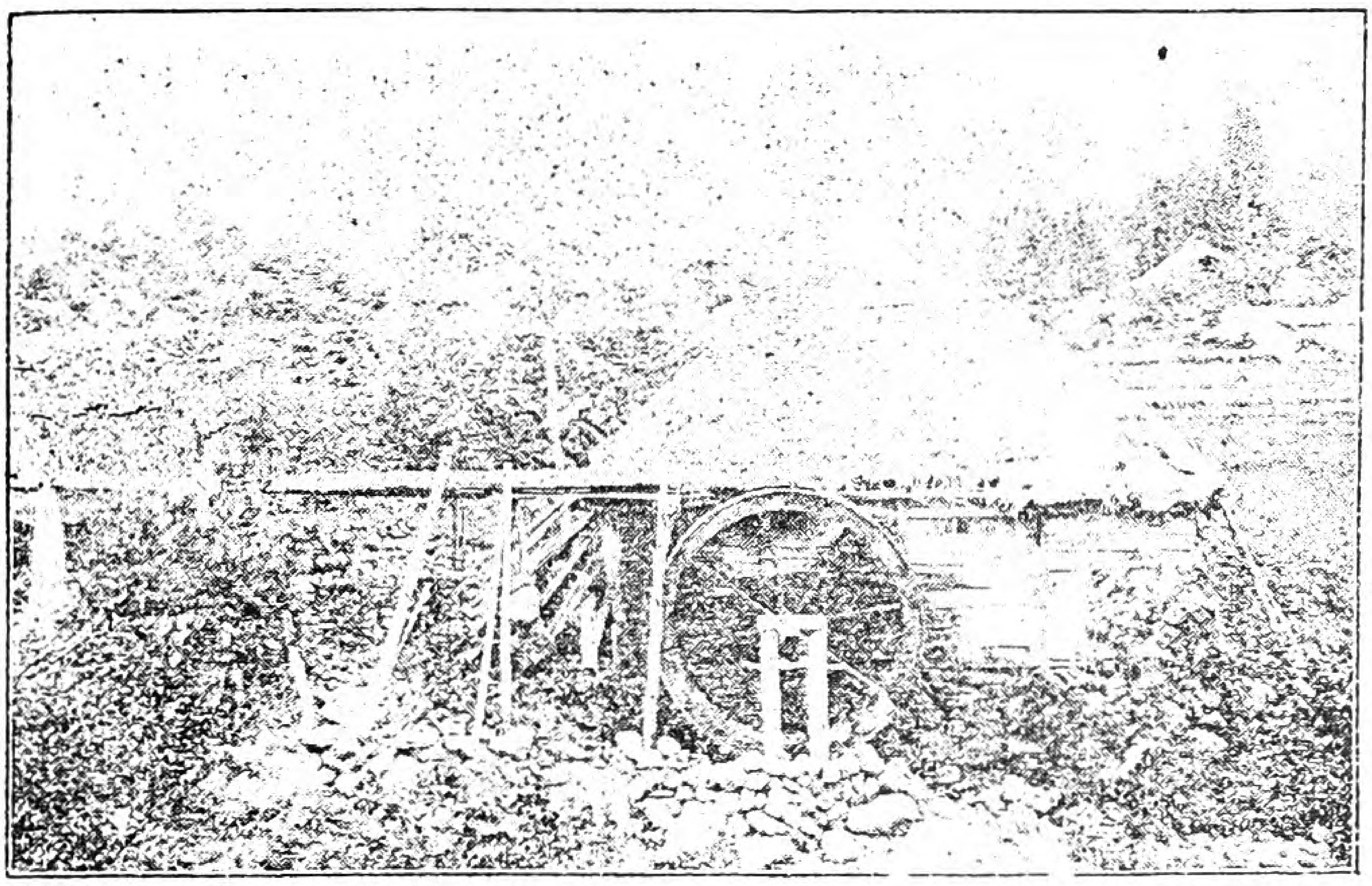
船と車

歩くのとさほど相違ないのは番船です、そのかはり賃金が非常に安く、一里二錢位の割合ですから、私の村から東京へ行くのに、歩くのはよほど船の嫌な人です。それより早いのは通運丸ですが、夏など暑くて蒸し殺されさうです。外で見る程苦しくないのが石油蒸汽で、割合ひに早うでございますが、一番乘り心地よい

のは隅田川の川蒸汽でございませう。電車は乘り換へが煩い、汽車は石炭の煙の臭ひが實にたまりませんが、このニつにはどうしても厄介にならなければなりません。それから平らな道は俥がようございますが、山道ばかりは歩くのが一番です、骨の折れる坂へ行けば下ろされるのですもの、そして馬や柴車にでも出逢ふと、どつちか横道のある所まで引きかへさねばなりません。（葭子）

今のは何語

新橋から神戸に參る時でした、三等室に一人の角帽が乘つてゐました、兎に角十幾時間の旅行ですから、旅は道連、世は情で、彼方でも、此方でも、談話がはづみました。私の傍に居た角帽も、いろいろの事を私に話しましたが、法學生と見えて、法科大學の地位の高いことを、さんざん語つた末、英語で思ひがけぬ？を出されて、私は内心頭る驚きましたけれど、素知らぬ顔して、今のは何語ですかと云つてやりましたら、對手の變な顔つきつたら、今でも思ひ出すと可笑くなります。（勝江）



鹽原の景

トンネルを歩く

昨年、相摸を旅行して、松田から横濱へ歸る道で、少し近道を取りました、一つの隧道の入口へ出ました。「禁通行」の建札を見て、一時はぎよッとしましたが、半ば好奇心に驅られて進みました。隧道はなかなか長い、出口は容易に見えず、闇黒の中を手探り足探りに進んで行きますと、先頭に立つた友が、大變〳〵と叫びますから、一時に不安と、驚愕に襲はれた刹那、パチヤンと水の中に踏込みました、偖てこそ、隧道が破損して雨の水が漏り、こんなに溜つてゐるものだから、「禁通行」の札が建ててあつたのだと、漸く分りましたが、禁を犯して入つた罰で、隧道を出ると濡鼠のやう。（郁代）

◀婦人雜誌中に嘗て見ざりし新しき材料に滿つ▶

女子文壇 八月十日 第三增刊

地方の婦人

紙數二百餘頁 挿畫澤山 **定價貳拾錢** 郵稅壹錢五厘

△自重すべき地方の婦人……下田文學士
△婦人を中心とせる地方の農業……橫井農學博士
△後れながらも都會化して行く……田山花袋
△女性の自然の觀かた……小島烏水
△天然の美と婦人の美……大下藤次郎
△海豹島の婦人生活……岩野泡鳴

◎下京の女……兒玉花外
◎杉坂峠……澤村文學士
◎わが故鄉……尾上文學士
◎伊豆の海岸より……中村文學士
◎雲雀鳴く野より……橫瀨夜雨
◎淡路……一色醒川
◎海岸……河井醉茗
◎旅より……川路柳虹

◎東京近くの女……遊蝶花
◎神戶……羅漢柏
◎岡山……よし子
◎富山……下枝子
◎五年以前……山田國子
◎都會より地方へ……きく

△漁師の母……小栗籌子
△賣り桑……水野仙子
（ローカルカラーを表はしたる二個の短篇小說）

◎名流婦人談
目賀田男爵夫人、仲小路遞信次官夫人、中野武營氏夫人、辻村靖子、岸すみ子、遠山稻子、其他名流婦人の地方婦人話、旅行の談など

◎都會に憧るゝ若き女の叫び……數篇

△山岳、海岸、町村
△石油の噴出△橇の旅△熱海△房州△秩父△高尾△揚梅の里△大江山の鑪△△山城の北△善光寺△岐阜△山形△裏日本の一部△越後の海△越後甚句△各地の田植時△北海道の一漁村△浪花節△外數項

◎本州の南端と北端より
（薩南と北海道の通信）

發行所 東京京橋區大鋸町 **女子文壇社** （振替口座東京第壹七貳九番）

最寄書店に無くば直接御申込を乞ふ

好機逸す可らす……………………………特賣提供

大好評 紀念保存の價値あり 殘本僅少

女子文壇 紀念號 滿五週年

一月一日發行 ◎ 例號二倍三百廿頁 ◎ 定價金三拾錢 ◎ 特賣提供 金拾五錢 外に郵税二錢五厘

△松の葉……………………泉鏡花
△敵地……………………中村星湖
△市街を散歩する人の心持……………木下杢太郎
△脚本 落潮……………………河井醉茗

◎額繪附錄 溫室（石川寅治筆）（石版極彩色）妙齢の一美人、溫室の戸を開いて草花を剪る所、其表情の嬌艷と色彩の鮮美とは一見して恍惚たらしむ、新春無類の粧飾。

◎光澤紙刷 口繪 ◎名畵雪みち（原色版）外◎山階宮、東伏見宮兩妃殿下◎鷹司公爵松平伯爵兩夫人◎德川家達公三令孃◎一條實孝公夫人◎加藤弘之男家庭◎金子子爵令孃◎跡見玉枝女史と其門下◎仲小路遞信次官の家外和樂◎盛裝の六孃◎誌友面影◎鳥海山外二景の十四頁（寫眞）

釣……………………森鷗外
演劇の種類……………………坪内逍遙
女性の文藝……………………片上天弦
T氏とK氏……………………眞山青果
月のたまもの……………………蒲原有明
響動……………………吉江孤雁
三味線林……………………小島烏水
赤色……………………兒玉花外
金ほうけ……………………與謝野晶子
落葉林……………………若山牧水
憂愁の庭……………………三木露風
薄暮の瞳……………………川路柳虹
黄落葉……………………前田夕暮
女學生と小説……………………柳川春葉
御題と御歌所……………………松原至文
弱者……………………溝口白羊
歐米の若き婦人……………………寺木定芳
婦人の寂滑生活……………………木下尚江

文士と家庭……………………佐野天聲 國木田治子
花束の用ゐ方……………………水野葉舟
男性の爲に與へられたる刺戟……………五人女
露西亞婦人の過激なる活動……………エリミヤ、バルト、パザン

名流婦人の日記

○跡見花蹊○山脇房子○加藤照麿夫人○石川博士夫人○嘉悦孝子○羽仁もと子○佐々木雪子○長谷川千代子○北川美那子○加納國子○谷内せい子○木下眞子○吉田賢子○たけ子○千鳥○棚橋絢子

形式的の艶書……………………マックスオレール
表情體操……………………白井規矩郎
女性と色彩の觀念……………………澤村胡夷
お琴の先生と其流派……………………きく
英文……………………星野久成

投稿傑作 百四十頁 滿載

東京京橋大鋸町 女子文壇社發行（振替口座東京壹七貳九）賣捌 全國雜誌書店 若し品切の時は發行元へ速に御注文あれ

新美文

全一冊二百三十頁
口繪數葉入美裝
定價貳拾錢
郵稅壹錢五厘

現代の若き女子は如何なる感情を抱きつゝありや又如何なる趣味を持ちつゝありや之を窺んとする者は本書を見よ、或は家庭を材とし或は自然を描き或は人事を歌ひ或は都會を寫す百人百様の觀察は讀者をして送迎に遑なからしむ、選擇の嚴正にして批評の痛切なる蓋し最新式の文章を學ばんとする者には無双の寶典たるべし

附録

◉小寒記……薄田泣菫
◉褒の日家……吉江孤雁
◉壜環……小川未明
◉一轉機……高須梅溪
◉女床屋……兒玉花外
◉拾て犬……岡田八千代
◉火葉……澤村胡夷

家庭日記

全一冊二百三十頁
口繪數葉入美裝
定價貳拾錢
郵稅一錢五厘

本書内容

▲お七夜の赤飯と棟上の餅拾ひ
▲草生水日記
▲初めて丸髷に結ふ
▲大呉服店のバーゲンデー
▲憚る處なき女學生の境遇
▲開放したる心の扉
▲晴れの日が近くなる
▲同じ女と生れながら陰と日向の違つた身上
▲未來の博士達の爲に
▲舞臺に出づる迄と、出たる後
他數項

（附録）

最近の日記

三宅花圃
大塚楠緒子
與謝野晶子
岡田八千代
長谷川時雨
國木田治子
尾島菊子
荒川澄子

短篇小説

全一冊二百三十頁
口繪數葉入美裝
定價貳拾錢
郵稅一錢五厘

▲奉公人……島崎藤村作
▲水死……森田草平作

懸賞傑作

◉破疊……秋葉清子
◉女客……加藤貞子
◉町の出水……赤崎愛子
◉桃代……佐藤增子
◉朝顔……吉田駒子

其他美文、書簡文、新體詩、日記文、和歌、俳句、論文、小説總評
豐富滿載

女子名文 新作家



全一冊二百卅頁
口繪數葉入美裝
定價貳拾錢
郵稅壹錢五厘

若き女子が大懸賞小說、應募の美文、詩歌俳の文藝を興味ある新式編輯法にて統一せるもの別に日課表あり登載各自の住所年齢家庭等作物と對照し其人物を一目瞭然たらしむ

附録

○闇の夜……服部貞子
○敗者……加藤菊子
○火事……永代美知代
○氣まぐれ者……太田樂子
○新粧……尾島菊子
○六月……山田くにえ
○姉……故田中久子

東京市京橋大鋸町十三番地
女子文壇社出版
振替口座（東京第壹七貳九番）
賣捌 全國書店

好評 女子文壇第二增刊 製本發賣

都會の婦人

表紙口繪挿畫 竹久夢二氏筆

五月十五日發行

定價金貳拾錢 郵稅壹錢五厘

女の見たる東京印象記……執筆婦人十餘名

日比谷▲上野▲不忍▲神田▲神樂坂▲芝公園▲西片町▲根津▲洲崎▲谷中▲銀座▲魚河岸▲深川其他

都會の濁渦に漂ふ若き女の眞情……婦人執筆

▲濁つた室に輝く電燈▲入京記▲闘ひ疲れて▲熱涙冷涙▲造物主は何故私の鼻の土を儉約したのでせう▲心の活動寫眞

都會の實際的生活

▲生活の階級▲卒業式の前▲バザーの當日▲某子爵邸に遊ぶ▲お孃樣のお供

東京の地と東京の女……諸大家談

▲暗愁に囚はれたる女性……澤村文學士

▲詩に表はれたる都會……河井醉茗

▲婦人席にて……さわらび女

▲東海道線……一色醒川

▲西の郊外より……水野千枝子

▲南の郊外より……荒川澄子

▲上野より(對話)——うす雪

▲湯屋の三助に不快を感ず▲開放されたのが落伍したのか▲欺かれたる工女の懺悔▲東京、大阪、京都

創作 小說。散文。詩。和歌。俳句。

都會を歩める女の印象

▲植物園で逢つた女(北原白秋)▲僅に殘れる印象(水野葉舟)▲街の夕月(森川葵村)▲三人の女(吉井勇)▲油繪に入る女(木下杢太郎)

日比谷大神宮結婚式の記事……

東京市京橋大鋸町 女子文壇社發行 振替口座東京壹七貳九

最寄雜誌書店品切ならば發行所へ申込を乞ふ

(と/八)



短篇小説

水野葉舟選

○清子（地賞）

牛込　流水女

清子は今日も夕日を浴びて編物所を出た。涼しい表情に富んだ眼を凝と地に落して江戸川の葉櫻の下を歩いた。石切橋の傍迄くると、ふと思出した樣に一寸曲つて、煙草屋の前に有つた金水堂のうらなひの箱の中へ、ポンと一錢入れたが、急いで御封を帶の間へはさんで、今度はテク〳〵と歩き出した。

學生や種々の人の往來の劇しい山吹町の通りをぬけて、特殊學校の空地へ折れ右手へ田圃を見た道へ這入ると、ホツとして先程の御封を出してひろげて凝と見ながら、細い道を歩いた。

「何か今迄の事を止めて新規の方に變動仕て見度思ふ事がある樣ですが新規に移り變ると石を負ふて水を渡る如く……

獨身の者はお樂み筋の人の事で大分心配が有樣ですが此緣は必ず調ひます……

住所の迷ひは動く〳〵と必ず病難か盜難が有ますから」

清子は讀終へると、情無い淋しい氣持になつた。あと二十日過迄凝と待つて居なくちやならないのか！おたよりが有つたら直ぐ芝へ行かう。二十日迄！その二十日迄の間が甚麼に淋しく苦しいだらう……十日や二十日位凝と待つてる事が出來ないなんて我ながら情無くなる。

早稻田分署の前を通つて喜久井町の通へ出る頃はつく〴〵家へ歸へるのが厭でならなかつた、青い色のむツつりした姉の顏、ぢろ〳〵と睨める兄の眼、其等に

逢ふのが堪らない程厭だ——、足が自然と遲くなる。電氣燈や洋燈の光がまだ薄暮らい中に輝いてゐた。夏芽坂を上つて、倦る相に格子を開けて、空屋がずらりとならんだ前を奥へと行く。柘榴の花が三ッ四ッ散つてゐる。

そうつと入口へ立止つた。

「其麽に邪魔なら今直ぐ出て行きます！。」兄の聲が鋭い。

「何も其様に怒る事無いぢやないか、只言つて見た許なんだから」言譯がましい父の聲が續いた。

「只そのつもりで働いて呉れりや宜いんだからな」

戸を開けて家の中へ這入つた。

母は臺所にゐるらしい。つるりと禿げ上つた頭、しよぼ〳〵生えた口髯、煙草盆を片手に父の姿は淋しい

「只今！」と手をついたが、直ぐ臺所へ行つた。

三十二歳にもなつて、何の業も無く只ぶら〳〵遊んでる兄を困つた者だと、父が少し意見した所怒り出してと母は聲をひそめて語つた。

清子は然う言ふ話聞くと只厭で堪らなかつた。

皆無言の儘食卓に向ふ。局から歸つた姉の顔見ると無性に腹立たしくなる。食事が濟むとぷいと二階へ上つて、燈火の影に進まない手を編物に運ばせた。

二三日前、遲く迄編物してる、石油が損だ、つて事で姉と口論した。清子は負けて居ぬ、油代位自分で出す、と散々姉を言ひ込めてやつた。それからはもう、母も誰も何とも言はない。清子は何とも言ふ事もなしにいつまでも起きて居たかつたのだ。

食客！と言ふ言葉が此頃の清子の胸に往來してる。親でも無い！兄妹でもない！只私は食客なんだ！いらいらした分らない氣持になつて來る。

紫の風呂敷を開けて、中から日記帳を取り出した紅インクで書いてある昨日の一節を懐かし相に見た紅は眞情を表す、と清子は思つてゐた。

「戀しき夫は遠きアメリカにゐらつしやる、毎日々々思にあまつて泣いてる私を、ちつとも〳〵御存知無いだらう。

姉も兄も二十八にも三十二にもなつて、未だ獨身でゐるものだから、必つと妬いてゐるんだ。

二十日過には分る、二十日前後には手紙がくるだらう手紙の模様次第で私は直ぐ芝へ行かう、否何でも斯でも此家にゐるのは厭だ、一刻も早く此家から逃れ度。

世の人は姑と言へば直ぐ意地惡の嫉妬家を思ふが、私

は然うは思はぬ、又然うにした所で、この枯野をたどるやうな寂しい生活よりは、いくらか勝つてゐよう。夫の爲〱と只其のみ心に思てゐれば私は甚麼事でも堪へる。二三年の内には私もアメリカへ行かう、芝で行かして呉れるだらう。もしや駄目だつたら？……十五年！長い月日だ、けど構はぬ！獨身で生涯淸い生活を送る……

淸子は性來男嫌の性質であつた、男嫌と云ふより、只絶對に肉體を人にふれるのが厭でならなかつた。戀しい夫（許嫁の）、戀しいと言つて自分で自分を欺いてゐる、日記にも戀しいと書けば心でも然う思ふ、けどそれは表面許の事だ、心でも、うはツつらの所だ。夫とは戀すべきもの、愛すべきもの、と敎へられた淸子は愛さなければ、何か偉大なる神の罰でも當る樣な氣がした、仕方無に愛、戀で心を縛つた。それが習慣になつて、うはツつらながら毎日の樣に夫を思つた。然し其も生活の不平に伴なつての事だ、淸子は只此家にゐるのが厭でならなかつた。

蛙が一匹淋しい聲で鳴き出した。と續いて二匹、三匹とふえてゆく。

下の寺から尺八の音が靜かに響いてきた。淸子は强いて心を落付けて凝つと其を聞いた。

寂しい、徹る、哀れな音が、ゆるい夜の大氣に流れる……

いら〱した心が、、、そこらへ沈んで行く樣な氣がする。淸子は茫とした心で耳をすませた。

まだ徹底せぬが、讀んで見て、深く人間を見ようとして居る作者の心持が感じられる。（評）

○彷徨（人賞）

栃木 SH子

讀んで見ようと思つて先週の日曜日に態々買つて來た書は其まゝ書棚に載せてある。今日は少し讀んで見ようかと机の前に坐つて見た。一通り本の體裁などを眺めた後、一頁を繰り繙げて讀み始めたが此頃暫く讀書を手にしないせいか何となく大儀に思はれて讀めなかつた。五頁も讀まないうちに最早厭になつてパッタリ本を閉ぢたまゝ「何うも駄目だ」と獨言云ひながら仰向きに寢て仕舞つた。後隣の箏の師匠の家の二階から艶めかしい笑聲や箏の音が聞えてくる。文吾はこの浮き立つやうな曲調を聞きながら、何んの感動も興味も起らなかつたと見えて「今日は日曜だから」と云

つて横側に投がつてあつた括枕を取り寄せて頭を載せた。そして目を閉ぢて見た。

何時の間にか熟睡したと見えて目を醒した時は氣持が惡い程身全體が溫い汗に粘つてゐた。口を嗽がうと思つて起き直つたまゝ薄暮の障子の色を暫く血の漲つた紅い眼をして呆然凝視めてゐたがとう〳〵起つて勝手へ下りて行つた。

プンと葱汁の香が鼻を刺戟する。流に食器を洗つてゐたお千代は文吾の顏を看上げて、

「大そうお顏が紅うでございますよ」と洗ふ手を止めて云つた。

文吾は唯好加減に「少し頭痛がしてな」と答へて仕舞つた。

「頭痛ね？ぢあ」と云ひながら被つて居た手拭を解して濡れた手を拭きながら、

「あの何と云つたつけ、頭痛の妙藥だつて、赤だあつたね婆や」と茶の間の方へ行きかける。

「なに、もう大丈夫なんだ」と言ひ殘して茶の間へ來て火鉢の前へ物懶るげに坐つて煙管を取り上げた。

「今の晝寢は餘り藥ぢやごうせんわな」

「なにしろ此の暑さですもの」

文吾は其れを聞いてゐて馬鹿な答をしたものだと獨りで可笑しくなつて來た。

軈て夕飯の仕度が出來て、三人は一つ食卓で夕餉を濟ました。お千代は洋燈の下へ今朝張つてゐた夫の着替だと云ふ單衣を運んで來て縫ひ始めた。文吾は復た火鉢の側へゴロリと轉がつて、お千代の針を運ぶ手付きや布を潜つて行く針なぞ暫時眺めてゐたが、

「阿前の顏は何うしても蒼いやうだ、何處か病い所があるんぢやないか」と訊くと、

お千代は別に病所はないけれど唯時候の爲で少し頭が重いやうで氣持が惡いのと云つて、偶と思ひ付いたやうに、

「あ、あのね、ちと先差配のお姨樣がわざ〳〵來たから拂つて置きました」と云つて夫の顏を一寸と看た。そして突と起つて簞笥の上から小さな手箱を持つて來て其中から水戸の伯母樣が買つてくれた紀念だと云ふ十八金眞珠四個入眞中にエメラルドが入つてゐる指輪を一個摘み出した。流石に言憎かつたと見えて獨言のやうに、

「此賣つたら幾何になるかしら」と寂しい笑を含めて横目に夫を偸んで見た。嘗てお千代が「此は私の唯一

の財産よ」と云つた事を文吾は記憶してゐる。何んとなくお千代に濟ないやうな感じがしてきた。けれども幾何になるとも答へないので、お千代は張合が抜けて指輪を其處へ置いたまゝ、再び針を探つて縫ひ始めた。

「お千代、劇場へでも行かうか」と突然に言出した。お千代は行つて見やうかとも思つたけれど、「何うでも」と判然答へずに針の手を休めないでゐる。文吾は起ち上がつて着流しのまゝパナマの中折を帽子掛から取り下して「おや行かう」と促がした。お千代は妙な顔して夫の顔を看上げたが、急いで帯丈仕替へて、

「婆や、濟まないけれどね、賴みますよ、直ぐ歸つて來るから」と賴んで二人は表へ出た。

兩側から光つた店の燿きに、街路は白く晝のやうに照らされた。晝間の燠くやうな暑さに燠んだ人は、此涼しい夜の空氣に恢復しやうと、散歩旁遊に出たものと見えて大通りは仲々の賑ひ。横町を曲ると、猝に樂隊の音が聞えて一層人通りが繁くなつて來た。二人は人の固まつた中を通つて舞臺の中へ這入つて行つた。最早ギッシリ詰り



（地賞）見物人　脊森　松尾千代子

切つて、黒い頭が夢のやうに蠢めいてゐる。文吾は緩くり見やうと思つて棧敷へ上つた。けれども何となく心が落着かないで、見やうと思つた舞臺へは眼を注けないで、唯無意識に人の顔なぞを、他から見て氣の毒な程凝視てゐる。人の吐き

捨てた溫い空氣と、煙草の煙とが、時々ムッと胸の中へ押込んでくる。文吾は最早厭になつて「何うも暑苦しい」と突と起つて見たが矢張駄目だつた。お千代は何う感じたか一寸と夫の顏を視て可憐な微笑を洩らした。

中入の太皷が喧ましく敲かれた時、二人は遁れるやうに舞臺を出た。店の光りは大分閉ぢられて、火番の人が赤い提灯をブラ下げて拍子木を打ち叩いて來た。お千代は買ひ馴れた荻野屋へ寄つて、婆やの夏物を買つて行かうと思つてたけれど、もう戸が閉つてゐた。二人は薄暗がりの横町を通つて、夢のやうな氣持で自分の家の戸口に立つた。

拙い作では無い。氣持の一部が書けて居る。たゞまだ霧を隔て居るやうなのが缺點だ。(評)

【秀逸】

○母親

神田基子

お客を送り出してから、小一時間、取り散らした、四邊を片附けるでも無く、お晝に間もないのに、食事の仕度を仕樣でも無い。お妻は唯凝と考へるよりは、寧ろ工夫を巡らしてゐるのだ。櫛卷の根が、ずるこけて、後れ毛が、ばさ〳〵と落ちる。白ばつくれた紺絣の縫絲が弱り切つた綻びらしい、袖付の邊りに、ぐつたりと片頰つけて、末子の武次が無心に寢そべつてゐる。時々大きな蠅がぶーんとくると、顏をしかめて、めそついては、又寢入る。お妻は自烈たさうに、其度ゆすぶりあげては、舌打をする。

射りつくやうな日が照る。戰き怖れたやうに、色を失つて、俯向いてる窓先の草木が、丁度自分等親子の、運命のやうだとお妻は思つた。

懷しい初湯を使つた、東京にも住み難くゝ成て、此麼田舍へくすぶつたのも、唯回復しやうが爲だつたけれど、依然駄目だ。ちつともよい方へは向かない。子供が三人ふえたばかりだ。

主人が、とゞの詰り、漸くかぢりついた、町役場の小使位では、此大勢は思ひも寄らない。遊び盛り勉强盛りの長女は第一の犧牲になつた。

が、氣丈だからこそ、此位にやつて退けた。お妻の骨折は又一ト通りでない。で此五六年は目に見えて、やつれた。四十そこ〳〵とはどうしても見えない。

カラコロ〳〵と可愛いゝ下駄音がだん〳〵近く、とう

とう「おつかあさあん」と馳け込んでくる。
學校からお晝に歸つた姉妹である。
お妻は驚いたやうに、立つたけれど、お菜に困つた。
「あら何にも出來てないの？」と姉妹は鼻をならす。
「あゝ生憎、お客樣でね。いゝ子だから、二人共お鰹節で我慢してお呉れね」と、すかす樣に云つて、ガチガチと、かき出した。
「お客さまつて、誰方？」姉娘が目を見張るのを、「兄樣のお友達なんだよ」と母親は、後を繼がない。
姉妹は無言つて喰べ出したが、何時の間にか、飛んで行つて了ふ。あとに座つて、さく／＼つてお茶漬を、掻込んだお妻は、一寸おくれ毛を、かき上げて、武次の負ひ紐を、ぐつと締め直すと、其儘、一寸門口に障子を、ひいたなり、出て行つた。
夫は一丁ばかり先きの兼吉といふ、俥屋に賴みに、行つたのである。
二十分程經つて、お妻は歸つた。今度は、ずつと落付いて、洗濯など始めた。既う一トしきりで、ゆすぎ上げ樣とした時、脊中の武次が目を覺ましたので、地織の前掛で、手を拭き乍ら、明るい所から來ると、一時くら／＼と目の痛むやうな、薄暗い土間の、高い上り框に腰を下して、乳を含ました。
其時だつた。此家には、絕えてない、俥のとまる音がした。
「お內儀さんえ、お出ですよ」とは、兼吉の聲だ。
「まあどうも御苦勞樣でしたよ、いづれあのね」とお妻が表へ出やうとした時、ガラ／＼つと俥は既う遠ざかつた。と、引違つて「お迎へでしたから」と二十一二の靑白い顏をした男が、古い麥藁帽子を手にし乍ら這入つて來たのを見て、お妻は、さも懷かし相に、
「あの私も思ひ餘つてね、何實は今朝、ほら例の靑田さんが來なすつたのさ」
と、其人の勸めてゐる、稅務署は丁度今缺員があるから、望みがあるなら、いくらでも骨折るといつた事を告げて、
「本當にねえ、私は願つてもない事だと思ふんだよ。夫に、ぢき本人にもして下さるんだつてさ、考へても御覽よ、お前、あんな名ばかりの華族つてば華族さ、位倒れの高が別莊番なんかしてさ、今の若さに、什麽なるもんかね。
お父樣の苦情？」
「夫さ、夫には私も弱り切つてるのさ、慥うして呼んだ

のも、實は夫れでね、あんなに、昔堅氣の、頑固な人だからね、夫りやもう、お株が屹度出るよ。でも出るといつてお前、總領のお前の出世にかゝはつた事だもの。構やしない。どうせ、始終ぶつ／＼してゐる人間なんだからね、母子の度胸できめて了はうぢやないか。其先きは又、どうにか、ならうからね、願書丈けお書きよ、さあ愚圖々々しないでさ、さつさと上つてさ」答へもさせず、墨やら硯やら、埃だらけなのを、今仕舞つたばかりの、チヤブ臺へおし並べて、否應なしに筆を執らせた。

書き上げたのを、ひつたくるやうにして、兎み角み、結構だよ、立派だよと繰り返して、力なさ相な、息子を勵まし乍ら、又兼吉を傭つて三里の道をおくらした。無論、途中なのを幸ひ、願書は、青田さんに屆けるやうに言ひつけた。

さあ、此處迄、漕ぎつけてみると、今更、主人の不服が思はれる。一口飮ると、さつと顏色變へて、爪垢程のことを、大仰に怒り立てる。茶碗をなげる。德利を抛る。

お妻は、ぞつとした。

もう洗濯を續ける氣もしない。武次を抱いたまゝ、ぼんやりと、丁度魂の拔けた人のやうである。

すこし、ゴチヤツイて居る。そして、もつと落ち付いた、しツとりしたものを書いてほしい。（評）

○手紙

神奈川縣　梅子

內弟子のお秋へ宛てゝ手紙が屆いた。封筒の裏には只、野原としてあつた、それを師匠の娘のお秀が受取た。而して少笑ひ乍ら「花井お秋樣へ」と云て投る樣に置いた。「然うですか。」と一寸顏を染めたが默て、懷へ押込んで了た。お秀は平氣で傍へ座て仕事を初めたするとお秋は氣を變へた樣に、「何を云て來んだか？」と手紙を出して、よみ初めた。時々頸を傾げたり、笑顏をしたりしてゐた。お秀は上眼で一寸々々と樣子を眺めて、癪にさはる女だと思た。お秋はよみ了ると、元の通り青い封筒へをさめて、封筒の裏表を幾度も返しては見てゐた。「聞いて貰ひたいんだらう……男からの手紙だものだから。」とお秀は心に思た。而して、「貴女の樣な方は、隨分思出がいろ／＼とあるでしよね、樂しい……」と眞顏になつて云ふと、「えゝ、色々と云

ふ程でもないけれど……此手紙の人ね、」と云ひかけるのを、お秀は「分明てゐてよ。だから貴女見た樣な方は、仕事の內弟子等止めて了て、早く何うかなされば

いゝと思ふわ。」と、かう云て苛々し相に、針できをグイとした。

お秋は愕ろいた。而して不快らしい顔をして默て俯



（入賞）さまよひ　新潟縣　村田けん子

向いて居たが、暫くして、「貴女の樣な人つて、一體私が何うかしたのですか？私の身の上は、御存じやありませんか、止めて了つて何うかなるのなら私々……

お秀さん餘りです。」と泪聲が顫へた。「お氣に障つたの？だつて貴女は……貴女を何うかしてくれる人があるつて云ふぢやないの？だからさう云たのよ。それが何

うかして？え！何うかして？」お秀は氣色ばんだ調子になつた。「何うせ私は弱いんです……から。」と、悲しさがこみ上げた樣に、裁板の上へ突伏した。

お秋が此家へ裁縫の弟子に入つてから三月になつた。お秋はお秀の亡父方の遠い緣を引いてゐた。東京の女學校を一年程やつて、父が亡くなつた爲め退學して了つて、お秀の母が、弟子をとつてゐるのを幸ひ、こゝへ内弟子に入る事になつたのだ。お秀は、かうした自分と同年輩の娘と共に暮らすと云ふ事が樂しみでも、氣兼でもあつた。お秋はお秀に對しては、お師匠さんよりも却て便りにして慕つてゐて、彼の不機嫌の時は何より辛く、心細く思つた。平常お秀はお秋に對して優しくしてゐた。只時折お秋の談す事が、耐らなく癪にさはる事がある。東京にゐた頃の生活の有樣や、自分が戀された男の事等を平氣で、寧ろ誇らしく語る時であつた、而して其お秀の顏色もよまず、喋舌りつゞけてゐる時にお秀は、突然立ち上て、自分の縫ひかけの物をバタ〳〵振たりする。「何かなくて？」と彼が尋ねても、知らぬ顏して、尙も座つてゐた、座蒲團をめくつて見る。「針でも落して？」とお秋迄立ち上つて、お秀の顏を見る。お秀は默つて、併し口の中では何かブッ〳〵云ひ乍ら、バッタリ座つて、濃い眉を激しくよせた儘、又仕事にかゝる。お秋は其樣子を見ると、何うしたらいゝのだらうと云ふ樣な、悲しい淋しい顏をして、時によると泪ぐむ事もある。

而して二人共默々の間に、暗い水が入つて了つた事を、首肯き合ふ。お秋は只悲しかつた。けれど何と彼に云ふ言葉も知らなかつた、只お秀の方から、解けてくる迄、ぢつとしてゐるより外なかつた。お秀はむしやくしやしてゐる。誰れが打解けてやるものかと那麼氣がしてゐた。お秋はさうした素振りを長くされる時には、悲しさに耐へかねると云つた風に、巻紙へ何か書き初める、二三寸書いては消し〳〵してゐるが、了ひには細かく一面にすら〳〵書く。それを誰れに出すのだか、お秀は見たいものだと思つた。併しさも見たくもないやと云ふ風にしてゐた。で今日も其手紙の事から二人の間が暗くなつた。お秋は仕事を片附けて、隅の方へ座つて巻紙へ例の通り書き初めた。時々泪を落したりした。お秀は、それを憎らしく眺めた。夜になつた。お秋は涙の頰を化粧した。而してお秀の母が今日出來上つた、着物を屆けさせる積で下女に賴むでゐるのを、

「お師匠さん、私序がありますから……」とお秋は云つた。「さうかへ？では氣の毒だが。」と氣の毒らしく云ふのが、お秀には苛々しく思へた。お秋は出かけに、又鏡の前へ立つて、前髪や帶を直したりしてゐた。お秀は故意と、直ぐ後ろへ突立つた。お秋は半ば鏡の中へ浮いた、お秀の淺黒い顏と見合せて、眼で笑つて見せた。お秀は「厭やな事だ。」と云ふ風な顏でゐた。お秋は一寸振り向いて、「御一緒に散歩乍ら如何？」と誘つた。「私今頃、ブラ／＼歩きするの嫌ひ。」と素氣なかつた。お秋は何とか彼の皮肉に對して云ひたかつたが適當な言葉が見出せなかつたと見えて、默て悄然げて藤表の東下駄を引ずつて出た。お秀は、灯のチラ／＼した初夏の街を、水色の帶しめた、白い顏のお秋が一人で歩いてゐる事を浮べて、ぢつとしてゐられない樣な、何うかせねばと、無性に淋しくなつて、何となしに門口へ出て見た。

も一息と思ふ。自分はこの作者に、現代名家の作を精讀するやうにすゝめる。(評)

○影

名古屋　月　靈　子

熟れて少し柔らかくなり過ぎたバナナを喰べた晩、靜子は烈しい吐瀉を起した。其れから一日二日と頭があがらなくて、遂々四日目といふ朝まで床を離れえなかつた。友治は的りバナナの故と定めて了つて居るけれど、靜子はまだ外に原因があるらしく思へた。

起きて、髮を結つて、新らしい單衣と更へたけれどたゞ久しぶりだつたと云ふ氣がするだけで、氣分は矢張り重かつた。

四日前に洗つて笊に伏せて置いたなりの、皿も小鉢も埃に塗れて使はれないやうになつて居た。其れを洗ひなほしたりいろ／＼してゐるうちに、靜子は不圖若しや……と思つた。さう思へば思ひ當る事が幾つも幾つも數へられた。乳首の黒くなつたのも氣になる……。

日が經つにつれて靜子は食物に好みをつけるやうになつた。大好だつたミルクが見るのも嫌になつたり、御飯の臭が死ぬ程胸にこたへたり、代りに酢いものを喜んで食べたり、さうして眞赤になつてえづいたりした。

「眞個に什したんだらうなア、胃でもどうかしやしないか、一度醫者に見て貰つたらどうだ。」

友治は全く思ひもよらないやうな顏をして居た。此の場合靜子は何んと友治に云つていゝかわからなかつ

た。恥かしいとか、云ひ難いとか、さう云ふ優しい單純な感情で、正當に人の母となるべき女は幸福だと思つた。

　夏へ向けて一日〳〵と暑さがまして行く。たゞさへ弱い靜子はもう三日と續けて、機嫌よく床を離れて居る事は出來なかつた。友治も漸く其れと氣づいたらしく、妻の苦しむ有樣を、冷たい眼で傍から眺めて居ると云ふやうな態度が著しく目に立つやうになつてきた

「意氣地がない……」、這那呟を聞た時にはハッとして靜子は實際川へつき落とされたやうな氣がした。

　或日、靜子が眞蒼な顏をして起て居た朝だつた。

「嫌、々、汚ない」、這う思ふ存分露出しに云つて顏をしかめながら、友治は妻の手をはらふやうにして、一人でネクタイを結んだ。衰ろへた顏と、亂れた髮の、恐ろしくつて鏡も見られないやうに思ふ今の自分でも友治の言分には、體中が慄へる程腹が立つた。

「這那に誰がした！」。けれど流石に口に出しては云ひえなかつた。

　友治は鏡臺を遠くに置いて、根氣にネクタイを結びかへた。靜子は、髯の剃りたての、髮を綺麗に分けた友治の水々しい顏を嫌といふ程見せつけられた。遂々何とも云へない……自分の體がだん〳〵小さくなつて消失て了ふやうな氣がして、淚がホロ〳〵ひとりでに零れてきた。

「どうしたの？」、たゞ這う云つただけ、一寸冷笑したやうな眼を向けて、友治はどん〳〵出て行つて了つた。

「いゝはどうなつたつて」、さう云つたけれど靜子には既う以前のやうな、反抗する力は少しもなかつた。もう如何する事も出來なかつた。

　梅雨にはまだ早い筈だのに、もう其れらしいジメジメした日がつゞいた。さうした佗しい中を、友治は雨傘を抱へて、友の家で夜を更して歸つてきた。と、何時か日を越えて歸るやうにもなつた。

「貴郞宿るだけは……」、靜子が云ふと、よく友治は門を出しなでニヤッと笑つたなり、默つて帽子のツバを前へこいた。靜子は云つた後で何時でも烈しい屈辱を感じた。けれど先づそれよりも前に、既に何等の權威も持たない自分を咀はないわけにはいかなかつた。「妻？、其れよりも自分は母だ」、さう考つた時靜子は始めて、小さいまだ見ぬ影に今まで覺えた事のない、溫かい感じを濺いだ。而して其れによつて新しい慰めを得

る事が、寧ろ靜子には不思議でならなかつた。

或る夜の十二時過ぎ、友治はひッつれたやうな顏をして歸つてきた。靜子が手燭を持て迎へに出ると、イキナリ其の肩にしがみついて、

『靜や、僕、僕……あゝゆるしてくれ。』

靜子は酒の故かと思つた。なアんだと思つて馬鹿馬鹿しくなつた、寧ろ呆氣にとられた。と、友治は衝と靜子を突き放すやうに押しのけて『馬鹿』と我と我を嘲けるやうに、大聲に笑ひ出した。しかも其の蒼褪めた頬を、ころがるやうに涙が零れた。



環ちやん　茨城須磨子

『どうしたのよ』、靜子は友治が何をどう思つてゐるか情緒の一つ〳〵を嗅ぎ分けて見たいやうに思つた。併友治は其所に倒れたなり、もう泣くやうに口を曲めて他愛なく眠つて了つて居た。

翌る朝、友治は六疊の部屋に寢そべつたなり、四角な高窓から灰色の低い空を眺めて、何時までも〳〵死んだやうになつて居た。

『小供が……』、かう僅一口妻に云ふ事が、慰めるまでもない、たゞ聞くだけの其れが、友治には怖ろしくつてならなかつた。今更訊くまでもないけれど、もし、萬一……さう云ふさもしい事も心に願つた。

靜子は勿論『小供が……』と云つて、友治に告ぐべき動機を持たなかつた。

概念だけだ。これはしかも概念にまちがひがある。(評)

○夫婦

牛込　岡野八重子

お米は今朝床を離れるのが苦かつた昨夜は夜通し下腹がピン／＼と痛みつゞけで一夜うと／＼としたり醒めたりして居た置時計が五時打つと間もなくであつた側に寢て居た俊作の聞き苦しい鼾がパツたり止んだと思つたらむく／＼と床の中から四つんばひにはひ出して雨戸を開けお釜の下を焚き付けてくれた明け方に成つて漸やく痛の薄らいたお米は起きようと思つて居ながら遂いつの間にかねむつて仕舞つた。

『お米々々……此のふてくされめ』

健に横腹を蹴られた痛さにお米はハツとして眼が醒めた枕元には俊作が何日も腹の立つ時には必つとやる癖の眉をピク／＼させて棒立ちにつッたつて居たうつ伏に成つて頭からすつぽり夜具を被つて居たお米は起直り様に『あんまりだわ』と言つた

『なゝにがあんまりなのだ』

『だつて蹴らなくたつていゝでせう』

『フヽン蹴る理由があるから蹴つたのだ亭主が味噌をすつたり飯を焚いたりして居るにあんけらかんと太陽の當るまで寢て居る妻が何處に有るもんか馬鹿ッ』

『だつて夕べつからお腹が痛みつゞけで』

『それでよくあんなにグー／＼寢られるナー』

お米は何日か泣聲に成つて夫を怨めしげに見ながら

『もう前つから身體の具合が惡いんですもの……働くつもりなんだけれど身體の方が……それを貴郎は察しのない事ばつかりおつしやるんだもの』

『だから醫者に見てもらへと言つてるぢあないか』

お米は少しせき込んで

『貴郎はさうおつしやるけれど肝心のお金を下さらないんだもの行かれあしないわ』

俊作は苦り切つてプイと次の間へ出て居つた暫く簞笥をあけたてする音が騷がしかつたがやがて跫音荒らく務に出たお米はぢつと耳をすませて跫音が漸く遠く聞えなく成るまでぼかんと床の上に座つて居た折から茶の間の時計がだるさうに九時打つたお米は一寸驚いたやうに顏を上げたがつまらなさうにホツと深い吐息をもらした俊作は何故あゝ邪見なんだらうお米は斯う思ふと一人手に涙がこみ上げて來た病氣して居ても優しい言葉一ツかけて下さるぢあなしお金の出る事と言ふとむきに成つて怒るんだものあんな不人情なしわい人とよくまあ三年の間一所に暮したもんだ最早々々私は世間の人になんて言はれたつていゝかまはないから離縁して仕舞はう斯う思つたお米は俊作の泣く顏が眼に見えた而して何日になく胸がすく／＼としたお米はお茶漬を二杯ばかり流し込んで直ぐ又床に入つた三時間ばかりグツすりと寢込んだお米はやゝ頭が輕くなつて急いで着物をかへて臺所で夕飯の仕度に取りかゝつたお菜を煮ながらも絶えず夫の歸が待たれて時々時計を見い見いした夫が歸つて來て火鉢の傍へ座つたら直ぐ離縁の話を言ひ出して夫の吃驚する顏を早く見て冷笑したいような氣がした而して言ひ出す順序などを胸の中でくり返し／＼して見た。



詩

河井醉茗選

○十八歳の春に歌へる其二（天賞）

和泉　金田代志子

薄暮の漂浪女

晩春の逢魔時の片田舍、
薄るゝ光背に受けて
色白き二十ばかりの法界が
絃の弱れる月琴をかき鳴らしつゝ、
い、、、、
しよんぼりと歌も唱はず伏眼して
淋しげに歩み來れる。

絃にあつ指のさぐりも早や萎えて
重き響は病ましげの夕の空と
まだ寒き濕地になげき
靜かに暗き軒に泣き入る——

そのにほひ——其の音色——
俯首れし法界の淋しき姿——。
哀れ見よ、早や、煙草賣る店の軒端に
色赤きインキの瓶の如くにも
いと小さき街燈の火ぞともりたる。
そを彼女はいま〳〵しげにつと見上
又俯首れてしよんぼりと、
人も無き淋しき路を
また月琴の弱りたる絃かき鳴らし
おづ〳〵と足を運べる——
其あとを暗ぞ追ひ行く。

幻

かゝる時君が前にも
幻の我が影浮くや。
美しき月の夕に
香料の匂こもれる
薄黄ばむ鏡の面を
見つむれば、何處ともなく
幻の君の影浮き
美しく我が眼おほへり。
君も又ほゝゑみながら
我が影を抱かんとするや。
我は只ひしと熟視し
幻の笑ふとおぼえ
いと甘き夢見心地に
哀にも抱かんと思ふ、
あゝ若き君のまぼろし。

老成したる技巧である、或は摸倣と云ふ人

もあるか知らぬが、これだけの摸倣は容易の修養では出來ない、深く腹の底まで新しい詩人の作を味つた人だと思ふ、眞に十八歳の春に歌へるものとすれば、才能勝れし人なるは疑ひなし(評)

○慾心(地賞)

神戸　田中落葉子

あゝ運河よ——
幾多の勞働者の疲勞を吸收したぬるんだ泥水——息も吐かない
今勞働者が心と肉體との困憊を癒すための、たはむれだらうか
對岸の灯影の美しい遊廓からきこえる聲
私は一人淋しい岸に彳むで
灯影や聲やまだ灯のつかぬ運送船を見て居る——運河の底から湧て來る惡瓦斯に醉ひながら——
そして自分の居る灯一つもない岸と賑はしい對岸とを比較して居る
この岸の方が——こゝの方がと肉體は動かない——
胸の暗室の片隅でたゞわけもなく何物かを求むる心とが衝突する
そのとき柔かい羽音をたてゝ
薄もやの中を飛んで行くものがある
蝙蝠だ——陋隘な軒をぬけ出た——
このときこの瞬間に私の慾念は
何をも顧ず、胸の室からぬけ出した
羽音靜かに——
あゝ軒を出た蝙蝠と
あゝ胸から出た慾念とは
今何處で何を求めて居るだらう

新しい氣分の動いてゐる作だ、向ふ岸と此方の岸とを强て對照せしめやうとしたのは徒勞で、未だ上手とはいへない、併し全體に緊張したる表現だ(評)

○迷ひ泣くかげ(人賞)

東京　章子

此思、瞳を伏せてまことの聲を叫びての後、
走らんか、あゝされど柵かたし。
たぎるゝ亂心小さなる胸に守りえず
僅にものがれんと、さまよふ暗きあこの武藏野のくさ原。
遠き哉蛙の聲、近きかな蟲のこゑ、切にもかなし。
ひやひやと風の漂ひ、冷たき涙の雫たぎるゝ血の冷却されん時ぞまつ——
武藏野の小丘が原きりぎしの土、
ほろろ、なやましきおもひの、
行つまりてはこぼるゝ如き其悲しき囁き——ほろほろ——
きりぎしをおつる冷たきさみしさ、
其聲と、此胸の熱き大なる叫と、
入亂れ入亂れ夜の氣にからまる、
狂亂へる心！熱せる思！
この叫びを噫誰が胸の大土にまかんか、たが胸に……
熱涙そゝぐ人にそむきて、たてる子の淋しき孤影。
月よ星光よ永久にてらす勿れ。
暗こそふさはん、衆人のあざわらひ
吾齒のすできしりね、白きならひ

さあれよし、吾心には一つなるかたき力あり、此動くまじき強心を吾れは永久に守りてあらん、唯これのみあをじろき素足と亂れかゝる黒髪とをもてる少女の影はよわけれど。

毎々云ふ散漫の弊は此作にもあるが、此位なら恕しても宜い、「なやましきおもひ、行きつまりてはこぼるゝ如き囁き――ほろほろ――きりぎしを落つる冷たき淋しさ」は好い句だ（評）

【佳作】

○燈火消して

萍

重い身體を闇の室
の眞中に投げて
遠い木立から
洩れて來る寢鳥の
息さへも聞えるやうに
靜かに……靜かに
……更け行く夜
ぢーつと見つめて
居た華やかの灯火
が、今どうなるで
あらう
火桶の火は盡きて
マッチも此處に置
いては無い
熾んな光を放つて
居る眞紅の焔を、
いと易く滅し得た
其瞬間に
私は心よい小さな
誇りを得た。



折もの　本所　安藤えい

死人の肌にふれるやうな蒲團の冷やかさに驚いたけれど、もう泣く力は無かつた。

あゝ何處にか夜天の明りを洩らし得る隙もないだらうか。

『底知らぬま闇の大洞窟に、夜の匂ひは濃くたゞよひ、
黒く澄める眞清水の中に、盲ひた魚の群が、燐光を發して互に闘ひ合ふその光が目に浮ぶ。
閃々として鋭いものに私の瞳はいたむ』

あゝ〳〵、私は今果もないケーヴの大奥に、眼を閉ぢながら歩み行くのである。

散文詩として申分ない出來、經驗ある人の作たることも疑ひを容れない(評)

○花の涙

上野　森下　仙子

昨日、ふり出した雨は未だ止まない、庭の小さい木に咲いて居る美しい白い、五つのばらの花は、皆うなだれて仕舞つた。

今にも、土につきさう、もう一つの花は地にすれて居る、そして、そして、此五つの花は、絶えず、ボロリ〳〵と悲しさうに涙を落して居る、

あゝ此の哀な五つの花、あれ一番大きい花が、ひら〳〵と一つの花びらが散つた。

あゝ此の哀な五つの白い花は、このまゝ、こゝに散つて仕舞うんだらうか、あゝ可愛想に、雨はまだ〳〵止みさうにもない。

伸びやかに、情緒に濕ひのあるのは宜い(評)

○二つの詩

越後　枯　尾　花

雨ゆく夕

落日の彼方は今し、靄深き夢よりさめて、
沈默の夜の思ひ、かすけくもきえぬらし、
雨ゆく夕べ、しと〳〵と、
何ものか我むねそゝる。
思ひ出よ　あゝおもひでよ、
わづか――
甘き昔の思出の、にほひたゞよひ、
夏草のなえたる如き、身のつかれ、
僅にうつる、あゝうつる。
あまき過去の、さゝやきの、
闇の中より、きこゆとき、
ふと現在にあり。日は全く、
暮れ終てたるを、いかにせん。

梅の實

まさぐりつゝも、
思ひ絶えなん、胸の戸に、
光さす日よ我はいのらぬ。
重なり合つた、綠葉だ、一雨毎に、
重ら枝垂れる。
或日の朝、其葉の間から、ボトリ
落ちた。

何？手に取つて見ると、梅の實が、
青い毒々しいいきを、たえまなくは
いてゐる。すてようか、否とたぢろ
いた。
それ頂だい、ふとふりかへると、き
りさげのかあい子が、兩手を出して
かさねて居る、「とくですよ、てんな
もの」つといきほひこめて地上にな
げた。
私の聲は、するどかつた。かあい子
は唯々、どろにまみれてころげてゆ
く、あのにが／＼しい、實を拾ひた
さうな顔をしてゐる。

「雨ゆく夕」にも「梅の實」にも淡い哀愁が漂ふてゐて、何となく詩になりさうな心持を表はしてゐる　此君、未だ初心に相違ないが、前途に見込あり　評）

○瞳

麻布　葉隱れ花

つと見返し、瞳の影――、
或は笑ひ、或は怒り、
蹌踉として街を行き
足あらゝかに踏むかとすれば
また立ち留り人を見る、鋭き瞳よ
憂はしげに、佗びしげに
唇顫へ、微かに戰く、
あゝ呪はれし人の子よ、暗きを辿り
世を――すねて幾年の
心は空の燃ゆる思ひに倦き果てゝ
現世の樣を嘲笑ふ、淋しき影よ、
鋭き凄き瞳の影、光と影！
腕こまぬきて、空を仰ぐは
星の光りを嘲笑見る。
ひし／＼と打たれし如き咎故か
涙涸れし目は悲しげに
また光る瞳よ、痛ましき
痕を僅に殘す凄き瞳よ、
世にすてられし幾年の、
思ひの儘に醒めもせぬ
苦しみの過去はあゝ越方は、
思ふも憂し見るも辛し。
僅に思ふ神のたはむれ
たはむれの、呪の鞭を、美し花
見出さむとてそをあやまちて
握りし犧牲の人にあらじか。

此人は散文を書いても、詩を作つても、或る一本調子の強い執着を持つてゐる、餘程内面的生活に苦悶があつて、それを言ひ表はさう／＼として獨り激してゐる形がある（評）

○綠草

札幌　淸川ゆき子

しゞまよ――、永久にしゞまよ
音もなくねむるがごとき大氣の中に
あゝ――あゝ――かなしきこゑす
つかれはてたる
こゝろのさけびよ――。
あかねさすそらに
雲いでゝまたさりぬ、
（雲よ！　雲よ　おまへはほんとう
にしあはせだよ、私も、――あゝ
――このまゝ眠つてしまひたい、

何時までもだえてゐるのかしら)
はるかあめつちのかなたに
沈みあへるあかき日をみし今
走らんとするこのこゝろ——
のがればやとあせる魂!
あゝ——されど、されど、
あみのごとはりたる
運命のなはは今ぞもつれぬ。

あな狂ひたる我こゝろ!
今ぞ走らん、奮はんと、
一日は一日ときめく胸も
あゝ、あゝ——むなしきかな。
淋しき詩うたふをみなのなげき……

眞實の氣が籠つてゐる(評)

○野の夢

下總　月沖百合枝

野末のかなたに
はつきり浮ぶ月波峰の頂をめぐつて
純白な雲の色。
そこはかと撒きちらされたたんぽゝの種子が暮春の空氣の中にまじつて
織りつゞる白晝の眠り……。
忘れかけた少女時代の
微かなる夢の追想——。
滑かに情緒はいと快よき夢に醉ふ。

口語を使ふ以上は、使ひ甲斐のしない文語は思ひ切り捨てた方が好い(評)

○星

播磨　笹舟

夢の樣に私の心はさまよつた。
かすかな顫ひもせないでポプラは壓へる樣な空に靜かに立つてゐる。
時々埋められた樣な空の中から青い〳〵星が冷めたい光を投げてゐる、
私の瞳は暗い中に輝いて其光を吸はうとあせつた。
泥んだ池には薄い星の光が映つて居る。
濁つた水、其深い底から青い光を吸ひ取る樣に思ふ、
美しい〳〵其光を……
私の心は次第に濁つた水の中へ染み込んで行くやう
あの美しい光を私の心の中へ染ませたいこのくらい〳〵心の中へ……
濁つた水がふとゆれた
私の心もゆれた、薄くなつた光を望んで……。

物象と心象との融和したところに詩を見出さうとするのは宜いが、少しわざとらしいのが缺點である(評)

○園にて

名古屋　岸つぎ子

あゝ思はざる
思はざる新綠のうなだれに
梅雨ばれの空
曇り行く——
星一つ見えざる淋しさ
さまよへば、たゞ
昔戀ふおもひでの
其れのみに、ふさはしき夜なる哉

ふとも見ぬ
白熱瓦斯のかゞやき
まぶしさに眼をてそ被へ
ふりはへては暗にも去にしか――
あはれ、鳴きも得ぬ小鳥の吐息
また、落ち
もえぬ夜露
のふるひ
そを、さな
がらの魂か
徐ろに歌な
どうたひ
さまよへ
ど、まどへ
ど、
あゝ遂にわ
が影のあはきさへ
見出べきゆくへを知らず

因はれたる技巧は早く脱しないといけない
上手になりやすい人は用心を要す（評）

○河原

京都市　要司村福子

春は夢と去つた。
私はよろくと廣々した河原に立つ
た。
夏だ。容赦なく太陽は眞すぐに照る
わづかに小さいパラソルでよけて、
ちよろくと流れる水際に立つて、
あたりを見た。
あら、私一人だと思つたら――
向ふにも、むかふにも――



野の路　岩代　鈴木葉陰

立つてる人、座つてる人、寝ころん
でる人、皆連もなく一人――歩みに
くい河原に、しかも夏のま晝に何し
に來た人か、
世の弱者、
戀の敗者
いづれで
も、私は早
く此處を去
らうとし
た、目的も
なく人ない
處へ行かう
と思つて、
あるけれど
向ふに見え
る立つてゐる人、
無言の人が――
あゝ去れない。

一寸興味はあるが、餘り漠然として甚味が無さすぎる（評）

新詩句

○人を欺すやうな明るい初夏の雨　西多摩　霞子

○屋根の花、何うして咲いてゐるのだらう　葉隠れ花

原作「いつから咲いて」

○おや、私の後ろに誰か立つてゐる　麻布　ゆき子

○パッと灯が一つ暗い海から　岐阜　蔦の葉

○眼の細い男は心配がないらしい

新詩句にあらず、警句なり

○私の淋しい跫音が殘つてゆく　下關　山本芳子

原作「濕土に殘る私の淋しい跫音」

○月見草の花が破れた、荒んだ朝　大阪　高山米子

原作「まるで暴風雨の樣」

○あれ―押さないで頂戴弱い私を　京都　要司村福子

○石竹の苦痛、雨に腐つた心　羽後　ふみえ

原作　雨に伏して石竹が苦の夢をみる」

○瞳が美しい、露に濡れて　麻布　美耶

原作「白い顏瞳は美しい露にぬれて」とあつた、白い顏はなくても宜いのです

○山の上から風が流れて來た、滿山の百合　備中　篠原繁子

原作「百合の香を溶かした風が流れて來た」とあつた、香は百合のつきゝのだ、香と云ふ字を除いて香をきかしたら何うだらう

○男もゐない、女もゐない、私獨りだ　胡蝶

原作「世界の人間が皆な死んで私一人になりたい」は詩でも何でもなく、たゞの言語である、而かも餘りに露骨な言語で平凡たるを免れない

○誰かの膝にもたれて泣いてみたい　福井　片山里

○靜かな眞晝！思ふまゝに泣きたい　茨城　紅百合

前者は場所を指し、後者は時を指す、前者は通常の女性のあまつたれたる態度を表はし、後者は稍氣取つてゐる、前の涙、或は甘からむ、後の涙、或は冷たからむ

○魔でも住んでゐるやうな青い池　小樽　清田芳枝

○誰です、私の冷たい胸の扉を打つ人は　越後　吉田ひな子

○無意識にこんなに拾つた散る花を　遠江　富永雪子

原作「詩の種を拾つた散る花に」は月並調といふべきもの

○嫌なまア、まだ追つて來る　土佐　澄子

此外、此人の作に「赤いネクタイ、下つた眼尻」といふのがあつたあまりにふざけても困る

○十六の女、能く笑ひ、能く騷ぐ　信濃　きし子

○暗い空の星、私の顏をのぞく　岩代　武藤多美子

○なんにも知らぬ私は娘だ　大阪　福井眞砂子

○夢がさめたかなしい　大阪　やせ子

○雨、雨、雨、道が泣く　千葉　君香

○月見草が靜に落ちた　はなえ子



散文

編輯局選

（特別賞）

○昨夢

夢の女

新しき日記帳より

けふも朝から雨が降る。しめやかにさゝめく音をききながら新しい蛇の目の傘をさして、ま晝の雨の町を歩いた。家にゐて淋しさに倦きたころはいつも恁うして街をひとり行く。花やかな光と、色彩の美しい暖い空氣の中に、泌々と感ずる甘い哀愁をもとめて、常に好んで夜の町を彷徨ふ。新しい生涯に入つた今もなほ然うなのだ、思出も涙も自覺も反抗も、更に大きな或物をも過去のすべてを捨てゝしまうた私を、友は人は何と見るか、をとめらしくは裝へど僞りと知らぬ人に對して苦しい。此麼ことを一度定樣に云つて叱られたこともあつたけれど、ともすれば暗きに沈んで流れる涙女の心持がどうして男にわからないのか、謎のやうな女だと評した人さへあつた。

北國の友から文が來る。敗れた戀を三とせ守りながら思ふ人があつても魂は常に一人だと泣いた人、家を捨て、北の湖畔に奔らうとする前夜、霧の町を歩き乍ら泣いた姿が瞳に殘る。涙が落ちた。單純な心に人を信じすぎたのを憾むばかりだけれど……すぐに筆執つて長い手紙をかいた。

月はわづかに五度變つたばかりですのに、すべては返らぬ過去のものとなつてしまひました。あなたはむかし信じたあなたぢやない。矢張りあなたも女だつたのねえ。多くの人に辱かしめられた女の名、ああ私は口惜しい。

多くの人の欺きに心敗れた私をあなたも欺かうとな

さいますか。

筆が澁つてかけない、よみ返して破つてしまつた、ただみじかく

過去はながいゆめと忘れて、一郎樣の許にいらつしやいませ、新しい生活に御入りなさるのを私は心からよろこんでゐます。

夕方門に立つて、かるとすゞめが、夕化粧の美しい姿を見た。すゞめの桃割は變らなかつたけれども、かるは島田に結ひ替へてゐた。今日の人はすでに昨日の人ぢやない。ひとり過去に執着する悲しきわが性、私は泣いた、何とはなしに……。

雨ふる宵

京にあそんで舞姫の振袖を共に見やうと約した、とかいてある。東京の靜かな町はづれに二人の家をつくりませうと語つたことも新しい日記のはしにかいてある。幼ひ胸に謎のやうな思ひを抱きながら生ひ立つて少女となつたひとゝ、戀と知つて泣いた、二月の山のおもひで、青山の夜の彷徨、櫻が散つた夜だつた……夢…ゆめ、皆運命だ。自棄の境にもおちていつた、反抗の刄も握つてみた、けれど短い間だつた。所詮人は運命のまゝに生きなければならないのだ。机に向つてのべた紙に「二人が恁うなつたのも皆生れ落ちた時から定められた事なのでせう。あなたに依つて再び明るい世に出たひとりの子を、いつまでも忘れて下さいますな

今日も靜かに暮れてゆく。月なき夜の中天にながくながく尾をひく彗星を見た。

星ケ岡のあつまりに餘興室の人なき襖の蔭にかくれて夢の女は泣いてゐた。花やかなる紫の女、美しき紅の女は夜に入つて皆散つたその日わが初めて見しこの君はまだ十八のをとめであつた。絕頂に達したる悲哀をいだいてともすれば人無き野にあこがれんずる心をおさへつゝ强て誌友會に來たのであつた。誰か知るつぎの日、夢はうつゝにかへて今日の人はすでに昨の人では無くなつた。細雨花に洒ぐ千點の涙、鷓鴣啼いて深花の裏に在り、あゝこの人。自分の喜ぶのはあどり覺束なき人を導いてやがて思ふがまゝに步み得るを見ることである、心の扉をやぶりし若杉のみづから醒めてちかくわがふるさとに歸れることも喜ばしい、この君の筆を加へてしかも一つなるたましひを辱しめざりしはさらによろこばしい。(夜雨)

逃れて

私は此ごろの單調な生活にまつたく飽きてしまつた。夕暮れになると倦み勞れてぼんやりとした心持ちになつて町の角にたつてとがある。何をか求めるものゝあるやうに、夕暮れの街を徘徊する若い子——の私を、人は皆疑惑の瞳にとめてゆく。振り返り見る人すらもある。けれど私の頰には羞恥の紅ものぼらない。

過去も未來もはつきりとした印象は心にひとつもないたゞむやみと動搖せる空氣に觸れて、單調に倦んだ心

から逃れたいと焦つてゐる。徒にいら／＼した心ちになつて人波に交り乍らあてもなく町を歩き出す。芝居の繪看板の下には、人が大勢たつて眺めてゐた。どんどんと、淡く遠くに太皷の音が響いてくる巨像の様な敎會の鐘樓から澄みきつた空氣をかすかに顫はせ乍ら夕の祈禱の鐘が打ち出された。やしき通ひの女工達がうす汚くよごれた袖に空の辨當箱をかゝへて、一日の勞働をのがれて彼らの家に歸つてゆくその、けだるさうな足どりと、青白い額にかゝる赤い髮、そして語りながらぞろ／＼と橋を渡つてゆく姿を眺める時、または放浪の唄人が樂器を腕に收めて無言の重い唇に、聲もない悲しみを湛えながら商家の軒にイむを見る時など、その、敗殘の悲しい姿を華やかな町の表面に對照して、はじめて私の哀愁はうごく。私は到底、人と諸共に在ることはできないのだ、孤立の運命を荷つた女――私は若い子だのに。愛



小牛濱松曾田きん子

の住家といふ家庭——その家庭は私の囚はれた牢舍なのだ。絶えず自分を見まもつてゐる多くの人の瞳から離れらるゝだけ遠く逃れてきて、いま自分の立つてゐる周圍のものと、自分とは何の係りもないのを思ふ時、孤獨をたのしむ心が悠々と起る。そしてえしらぬ哀愁が甘くなつかしく擴がつて行つて胸いつぱいになつてしまふと、その境にいつまでも執着してゐたいやうに思ふ。寂しみを慕ふ心は變らないけれど、暗い山野にさまよつて泣いた過去とは十年も間を置いたやうに思はれる。一日一日と私の心は移つてゆく、變つて行く。昨日の心とすらも離れてゐるのだ。此麼時、私の本統の心といふものはどこにあるのかわからないしかもそれを求めやうともしないのだ。たゞいつまでも處女として、しかも青春に別るゝ痛みをしみ〴〵と心ゆくまで味つてみたいと思ふ。

若い女の動搖してゐる 情緒が實に能く表はれてゐる、以て歌ふべく、以て叫ぶべし、此種の若き哀愁、誠實なる 現代婦人の絕叫は滿天下、わが「女子文壇」を除いて何處にも聞くことを得ず　（評）

〔記者曰〕新しき日記帳よりも 逃れても各選者が最上位に推擧せしもの併せて此欄に置き特別賞を附與し以て異例を拓く。

○夜の室にて　（地賞）

柴井やよ子

思ふ事を云ふ故に眞の快樂を得るのでせうか。感極まつた時大聲で叫けんだなら、さぞ宜い氣持ちでせう。然し私は叫ぶことを怖れます、あんな大聲で叫ぶなんて、ために我が持てるものを失はれるやうな氣がします。私は言ひたくない。一つの想ひの微なふるひでも自ら抱いて居やう。人が血を奪ひ時を奪つても尚我が思想をも奪ふ事は出來ないゆゑに私は心强い。たゞ熱烈な感謝の望み、人生の苦中の快味の發見。これのみに努めやう、私はうれしい。思ふのみです。私の言はないで得る快樂は、人のあたたかき囁きより、烈しい三絃の亂調より、もつと〳〵強く深く私を喜ばせる——

○

さう書いて見て筆おいた。部屋の隅に白い顏がふうと浮んですぐ消えた。おゝ君さん、君さんの私を想うて下さるお心は私に解つてるけれど、私は厭だ。あのセンチメタルな君さん。白色の——今年十七といふ可愛い子「わたし——ほんとに貴女すきよ——姉さんと呼ばせて頂戴な」と云つたあの笑顏——瞳——。可愛いけど私には。

怨まれたつていゝ。私は人の想ひを容れたかない。自分をだつて人に許さないのよ。母樣の胸にも私は全く這入つて居られないのですもの。といつても自分でも持てあまして居る。何うすればよいのか。

私が強い女なら自ら進んで切り開いても行かうけれど、私は弱い、光りに怖れ、音に驚き、大勢の人にまじつて行く苦しさ。人に許さず許されず、戀の味も知らない私は不幸でせうか。

行く路があつたら行きませう。行く時があつたら行きませう。よわい女はせられるまゝに成る他仕方がないのですもの。——ねえ。

夜は深い。立つて押入あけて中をみると、蒲團裏の赤と敷布の白が目を射た。あの白時代は過ぎた——そして燃えるやうな赤にもなれない私——。いえ悲しかない、羨ましかないのよ、些つとも。と云つても涙は頰に冷たい。

顏を押しあてゝ「やよさん——。。。やよさん——。。。」と私は自分の名を呼んだ。

極端までイゴイズムを發揮しましたね、恐らくこれほど個性の著しい文章はありますまい。

女が自個を思ふといふことは、男が自個を思ふと云ふことよりも意味が複雜してゐます、男が自個を思ふのは當然のことで、自個を尊重しないやうな男子は、世の中へ出した處で餘り役に立ちませんが、女子となると、自個を發見してゐても、未だ「光に恐れ、音に驚き、大勢の人に交つて」ゆきにくい弱さを持つてゐます、何んなに理性の強い男性的女性でも猶此の二分の弱點があります婦人問題は此處から出發しなければならぬと同時に、女子自身も自覺した以上は「私は弱い」とばかり言つてゐないで、もう一歩踏み出してみたら何うでせう。勿論眞面目な態度で——(評)

○白無垢 （入賞）

安木はる子

「三人共、一寸お離室まで來て下さい」斯う云ひおいて母様は出て行かれた。私等が何か惡い事をすると何時でもお離室によんでしんみり云ひきかして下さる……いえお一人で泣いて終はれる方が多い……三人は顏見合せた、私は考へてみたけどこの一週間ばかり叱られるやうな事をしてゐないので、一種の誇の目で妹等をみて立ち上つた、二人の妹も悄然とついて來る、そつと障子をあけると「こちらへ」と仰有る、づつと入つて母様の横へ坐ると、ま！赤いの、白いの、模樣の、縞、絣、目もあやに山とつまれた、それは皆母様がお嫁入の時持つてらしたお召物、御帶、「何御用、」と手をつくと「此れをね三人にわけて上げやうと思つて！」と病み上りの青い面に淋しい笑を浮べなさつた、何やら知れぬ或者に、おさへつけられたやうで自然と涙含まれた、よくさわぐ妹等も靜に坐つてゐる、母様はそれを一々手にとつて似合はしいのを三人にわけて下さつた「菊さんには菊の御模樣がいゝね」十四の妹は袖にかけ胸にあてて嬉しさうな笑を浮かべた、「敬さんにはこの千鳥がいゝでせう！　藤さんには雪中の梅をあげませう」こんな風に大きなお召の山はくづされて、また更

に小さい三つの山が築かれた、「それからこれ！」一番終ひに白羽二重振袖の三枚襲ねを出して「私が嫁た時の御衣裳ですがね、藤さんの御祝儀着にして貰ひます」一時は口に出してまで獨身を云つた私、この不言の敎の前に只「は」とばかり聲が出なかつた。「頂きます。」私はふるふ手に受けた。「着て下さる？」おやつれなすつた顔に満足の笑を浮かべて「この次の日曜に寫眞を撮らうかね、皆にこれを着て貰つて！紀念によーホヽヽ紀念には可笑しいけど――」とお久し振りの笑聲、「あゝお母様」私はお膝にすがつて泣きたいのをぢつと耐へてうつむいた。

其事柄は嚴肅、其文章は切實、何んなにうかくしてゐる若い女でも、此文字の前には何事をか考へるでせう（評）

【佳作】

○猫の兒

筆子

「あッ」勝手元で輕い叫びが起る、慌てゝ私が馳け付けた時、母は竈の前に屈まつて、上蓋をめくり、「シッ、シッ」と何やら追つて居た。「何です、お母様」「何にお前、猫がね、宿なしめが何疋も〱子供を引張つて來て……」「え」と云ふなり私は好奇心の眼をして椽の下を覗き込んだ。濕氣臭い中に、糠味噌桶だの、薪や木片を詰め込んだ、わづかの空地に、眞黒い猫が金色の眼をぴかりとさせた。

厭な眼！何て厭な眼だらう、あれは世の強者を咀ふている色だらう、掃溜やら下水の溜りやらで、辛くも食に有付いてる此猫は、全く人間と云ふものゝ冷酷なるを自覺して居るらしい。「畜生々々」と母は長火箸で矢たらに突付いた。と、「フウー」と呻つて恐しい眼を剝き、びくともしない。「まあ、此猫は何て圖々しいのだらう」母は一層むきになつて、「シッ〱、さあ出ろ、出ないかよッ」とぎゆつと突いた、すると、今迄親猫の下に竦んで居た、小さな斑や黒だのがむくむくと動いて、よた〱と薪に蹉跌いたり、竹籠に頭を突込んだり、鉢合せをしたり、それは既う五疋ばかりが一生懸命に藻掻き出した、まあ親猫の凄い眼色！「お母様」と私は呼んだ。もう止めて下さい、貴女が彼不敵な親猫にお加へになる迫害が却つて這麼罪もない弱い者に振掛りましたもの、堪忍して遣つて下さい、いつか子持になつた宿無し猫を考へれば、可哀さうではありませんか。而してまた、斯様な狀態が往々現社會の人等にも見る様な氣がした。それでも母は「飽れた畜生め」と冷然と彼等を追拂ふ可くつとめた。どうしても、彼等はわづかに得たる安樂の地から、叉々放浪すべき運命となるのだ。腰障子をあけた外には初夏の日が、カン〱と照つてゐる。

深刻なる觀察、例に依つて人生の暗い半面が襲ふて來るやうに思ひます（評）

○さらば健在なれ軍艦出雲よ

越後　木村みしま子

艦内を皆見終つて、私共四十人は、再びハシケに乘つた、そして引き船の來る迄を、出雲艦の艫につながれて、恰も子が其母にすがる如く、すりついて波をよけて居た、甲板の若い短剣の人の視線は、皆一様に此のハシケに注がれた、處女の胸の其鼓動――頰はほてる――

太陽は水平線下に落ちて、夢の様に浮かんで居た佐渡が島ももう見えぬ、毒々しい赤い雲の上からは黒い暮色が迫つて來た、金波銀波の其輝きは刻一刻に薄らいで行く。



涼み　新潟　吉田とし子

海の面がドス黒くなるに従つて、波は荒らくなつて來た、ずつと向ふに起つた波のうねりが、近づくにつれて、大きくなつて、一番終りにこのハシケに打つかる時は、思はず身を引きしめて、目をつぶつて終ふ、何だか波が船の中へは入る様の氣がしてならぬ。あとからあとから絶えまなしにうねつて來るこんどこそあの波がは入るんだらうと思つてると矢張りは入らずにすつと一尺も船を持ち上げる。こゝにかうして搖られて居る内に、大抵の人はもう醉ふて終つた、日はとつぷり暮れたが引き船は未だ來ない、月も星も無い暗い晩である、目に入るものは只、將校室の窓にヒラ〲するカーテンと甲板を忙はしげにゆきゝする白服のおぼろ姿だけである、鹽氣を含んだ磯臭い風は

薄い夏衣を透して脊中をひや〳〵させる、船べりに額を當てじつと濤のどよめきを聞いて居ると、何とはなしに淋しい思が切れ〳〵に迫つて來る、逆まく浪……破船……藻屑、あゝこのまゝこゝの藻屑となつて永久歸らなかつたら……私の目には今朝見送つて呉れた祖母の顔妹の顔が悲しく映つた。

これらの思を無理に打ち消し打ち消し私は皆が歌つてる離れ小島に聲を合せた。「――筑紫潟佐世保の海を船出して――潮路ゆるかにきさらぎや、春まだ寒き沖の風、波のまに〳〵うき船の、マストにかゝる月影や……」女性獨特の細い高音が低音の海の響きと和して波のうねりと共に限りもなく遠く〳〵其音波を傳へる。

やう〳〵引き船が來た。さらば健在なれ軍艦出雲よ幸くておはせ若きものゝふ、いざさらば白きカーテンよ赤きともしびよ、……ハシケは軍艦からはなされて遠ざかつた。

つと何物か鋭く目を射てあッと面伏せした、探海燈、あゝ探海燈、私は筆にあらはす事は出來ぬ、魔の世の樣な眞黒の海の面を、電の如く闇との境界をはつきりたてて白く〳〵照らしてゐる、其照らしの中には入つた友の誰彼のまぶしさうの顔を私は實に美しいと思つた。

陸へ上つて後戻りする砂原を歩るきながら振り返つて其美しい大きな光と、其光りによつておぼろにみえる黒い小山の樣な軍艦とをみた時、私の一生を通じてこんな事はもう再びあるまいと強く思つた。

別に誇張した文字でもないが、健實に描いてある、其場所其時の樣子が歴然と分る、此君亦散文壇に未來を持つ（評）

○羽蟲

麻布　ゆき子

椽側の柱に倚つて、とりとめもない空想に耽て居るとふと小さな羽蟲が一疋椽の端を這つて居るのを見出した。よく見ると絲の樣な細い足を急がしさうに働かせて、木目の細かい面の上を傳つて、我々が一歩にも足りない所を蟲は懸命に辿つて行く、何處へ行くのかしら？何を求むるのでしよう、こんな疑が湧いた。

けれども蟲は這つて居る。好奇心にかられてフッ！と吹いて見た。巨きな此の狂暴者の惡戯に耐へ得られないで羽蟲は大きな體をよろめかして五六寸戻つた。不意の暴風に恐れたる如く蟲は暫く其所に小さな體を踈めて動かなかつたが、もう事なしと見るや又歩み初めた。私は強者の力を無視されたやうな氣がしたので威力を示さうと此度は稍強くフッ！と吹いた。

矢張強者の力は大である。まー彼の小さき者の周章ざまの可笑しきこと！一尺もあなたへ身を轉がして飛んだ。今までの彼が勞役は水の泡となつた。彼にとつて

は一里も後へ飛び戻つたのでしよう。けれども又々身を動かしてはかなげに辿つて來る。あゝ努力よ！小さい者の努力よ。私はもう吹く氣になれないで又じつと這つて來る彼を見詰めた。

とうく羽蟲は椽の隅の方に隱れて何處かへ行つてしまつた。私は急に淋しい心に囚はれてあてもなく又庭に眼を漂はせた。その淋しい心の奥をまだあの小さな羽蟲が這つて居る樣な氣がする。

普通の描寫とも違つて、何等かの意味を齎らして來る處は侮れない（評）

○私

繁子

一體私は此ごろどうしたのでせう？自分で自分がわかりませんの私の心は動搖して又氣まゝです。家から此度はもう歸つたらよからう今話されてる所も大そうよいしそしていくら學んでも獨りでは居られないのだから、又今の中でないとよい所へもゆかれなくなる等と言つてよこされると妙に反抗してみたい。自分の嫌な所へ行きたくないし、又勉强すればそれだけ人も立派になる、決して私は物質上の慾をみたして生きたくない、趣味のある生活がしたいから、も少し勉强さして下さい、とお願ひした。其後人とのお話の序に家庭上の事が出たり小說雜誌等を見たりするとやはり親の命令通りにした方がよくはあるまいかなどゝ考へます。其時に家からそんなら許すから充分勉强せよなどゝ言つてよこすともう何だかわけもなく悲しくなります。噫なぜ無理にも歸れと言つてよこさないだらう、そしたら歸らうものを………もう私は華やかな樂しい家庭もつくらず、此やうにもゆるやうな愛を捧げる人もなく毎日情も何もない敎師について冷かな勉强するのかと思ふと淋しくて悲しくて恰ど枯れた廣い野に獨立つて居るやうな氣がして、胸もかきむしりたいやうに、悲しくなつて、一人泣きあかすことも幾夜でせう！さうかと思ふと一度先生やお友達に立派なことを言つて出て來た身！どうして此まゝ歸れやう成功しない中は決して歸らないと、勝氣な私！只勉强しやう、そして立派に身の修養をなし、趣味も高め、それから家庭を造つてもおそくない、さうなつたらどんなに幸福だらうと一人うなづいて一心に勉强する。

しかし日曜の朝等すつきりと晴れた空に心地よく通りを眺めて居ると、赤いてがらに品のよい髷の人が二人で樂し相に希望にみちた顏で語りつゝゆくのを見てはやはり女です折角の決心も鈍ります。私もあゝなつたら親も喜ぶであらう自分も樂しからうと思ひます。又新聞等で米國に於て何々女史がなどゝいろくの事のかいてある文字を見ては胸を躍らします。自分も斯

く目覺しく教育界に働いたら等と思ふと自づと固い決心を起させます。あゝ私は何れを取つたらよいのでせう、如何して自分に定められないのでせう！斯して居る内にも日は一日々々とすぎます。心の中ではいらだつばかりです、誰か嚴にかうなさいと言つてくれる人はないものでせうかほんとに私は迷つてます、あゝ！

これも迷へる現代女の一人、併し餘程世間的ですから間違はありますまい（評）

○變化

四年生

大河内

「私達がもう最上級に成るのね、幅のきくのは嬉しいけど責任が重く成るのが嫌ね……本當よ、でも苦しい思するのも後一年限ですもの。しつかり勉强して模範級に成りませう皆樣！――出來る丈御仰にそひませうオホヽ、が私にはむづかし相よ――あの隨意科に割烹が有るわね？貴女遊ばして？――えゝ勿論――私も仕てよ樂むでたのですもの――鳥渡、代數と教育學が增すのね五年に成るの心配だわ落第して殘り度成つちまつてよホヽヽ――代數の先生ね夫りや氣短で怒りつぽいですつて――マア恐い奈如仕ませう、私算術出來ないのよ……禮式の先生の白眼逃れられると思へば夫より以上の……一喜一憂つてねえ……桑原々々……オヽヽ。

五年生

御一緒に机を並べるのも數へる程ねえ、忘れずに御手紙頂戴ね！屹度よく〱――仰しやる迄もないわ、貴女もね！電車なら四十分位ですからね御遊びに被入いな朝からゆつくりね――えゝ有難う御邪魔するわ貴女も是非ねよくつて――東京の方は羨しいわ私なんか國へ歸れば夫こそ〱御手紙頂く樂より無いわ、飾氣なしの委しい廻狀を願つてよ。――夫りや相だわ僞かいたつて詰りませんもの。淸い田園生活を其才筆をお振ひ遊ばして何卒！――マア！……昨日のS先生の御諭皆樣どう思召して？あんなに身に泌みたこと無いわ――しんみりした御聲だつたわねえ、もう〱二度と再いくら伺ひ度と思つても伺へ無いのかと思つたら堪らなかつてよ――私達よかれと云つて下さるのに何故空に今迄聞き流したでせう。――も少し眞面目に勉强すればよかつた遊ぶこと計り考へてたわね――私こそ、あゝ――大變しめつてね、家に居る樣に成れば騷げなく成るでせう、思出に思切り遊ばうぢや有りませんか？さあ外に行きませう――えゝ仲よく御別れにねテニス？ダンス？――

卒業生

學生の方はいつでも御若う御在ますこと、活々飛び出し相で御羨しう御在ますねえ――眞實で御在ますよ家

持ちに成つちや往生で御在ます――貴女が其麼事仰しやつては……子持に成りますとねえ、遂最早かまけまして私なんか御話にも成りませんで……習つたものもすつかり忘れ返つて、夫でも高女出かいつて主人によく笑はれますの――いゝえ私だつて御同樣で御在ますよ。義妹が時々敎へて呉れなんて持つて參りますと眞實に赤面致します。是でも出る前には時代に遅れない樣修養し樣なんて考へたもので御在ますけれど――娘時代の想像はすつかりはづれました、てま〳〵毎日追はれまして。今日出ましたのも漸の思なんで御在ますもの……。

四年、五年、卒業と書きわけた手際は此君ならではとも思はれる（評）

○友情

麻布　美耶子

戀しい君、花樣、否え姉樣、昨夜のお別も辛かつてよ、本とうに、どうしてでせう、自分にもわからないの。若い女が二人で人目の多い通りで、立話は惡い〳〵と思つても、華やかな電燈の影でお話はもう十分して來たんだからと思つても、此所まで送つて來て戴かなかつたと思へばと思つてもだめ、お話が切れなくつて、否えお話が切なかつたぢあ無いと私は思ふの、互の胸に深い抱合つてる友愛の情の迫て別れ難かつたんでせう、姉樣は何う思つて。お互に筆にも口にもする事の出來ないのを恨んでる程の熱した胸、熱した心を抱て熱した思ひを語り合つてる二人の身にも、さすがにふけ行く夜の冷氣が迫つて來て、まあ大變人通りが少なくなつてと始めて時の進んだのに氣が付て、よぎない訣別。別れがたい別れに涙をおさへて、姉樣は坂の下へと、私は坂の上にと、限りなき悲しみを抱て、限りなき辛さを耐えて、いく度もいくたびも返り見ながら。あゝ何時んなつたらあのお別の時の悲さを忘れる事が出來るのでせう。お目にかゝつた時の嬉しさとお別れの時の悲さとは、喜びと憂ひとの極端から、極端よ、だから辛いの、苦しいの、どうかして調和する事は出來ないものでせうか。あゝあゝ。姉樣今宵は何にをして居被る事。私はね昨夜の今頃はお懐しい姉樣と對座して親しくお話して居たと思ふと、もう〳〵おそばへ行きたくつて、行たくつて、たゞ〳〵戀しい姉樣のことを思ひながら、姉樣が心こめて送つて下すつた「一と日には十度び百度び君思ふ思ひせまりて戀ひしとも書く」と云ふあのお歌を口の中に繰り返しながら、燃ゆる樣な思ひを抱いて、夜の庭に立つて居りますの、あゝ此の思ひなせ、ほのほとなつて空高く昇らないでせう。なぜ〳〵ほのほとなつて夜の空を飾らないでせう。今

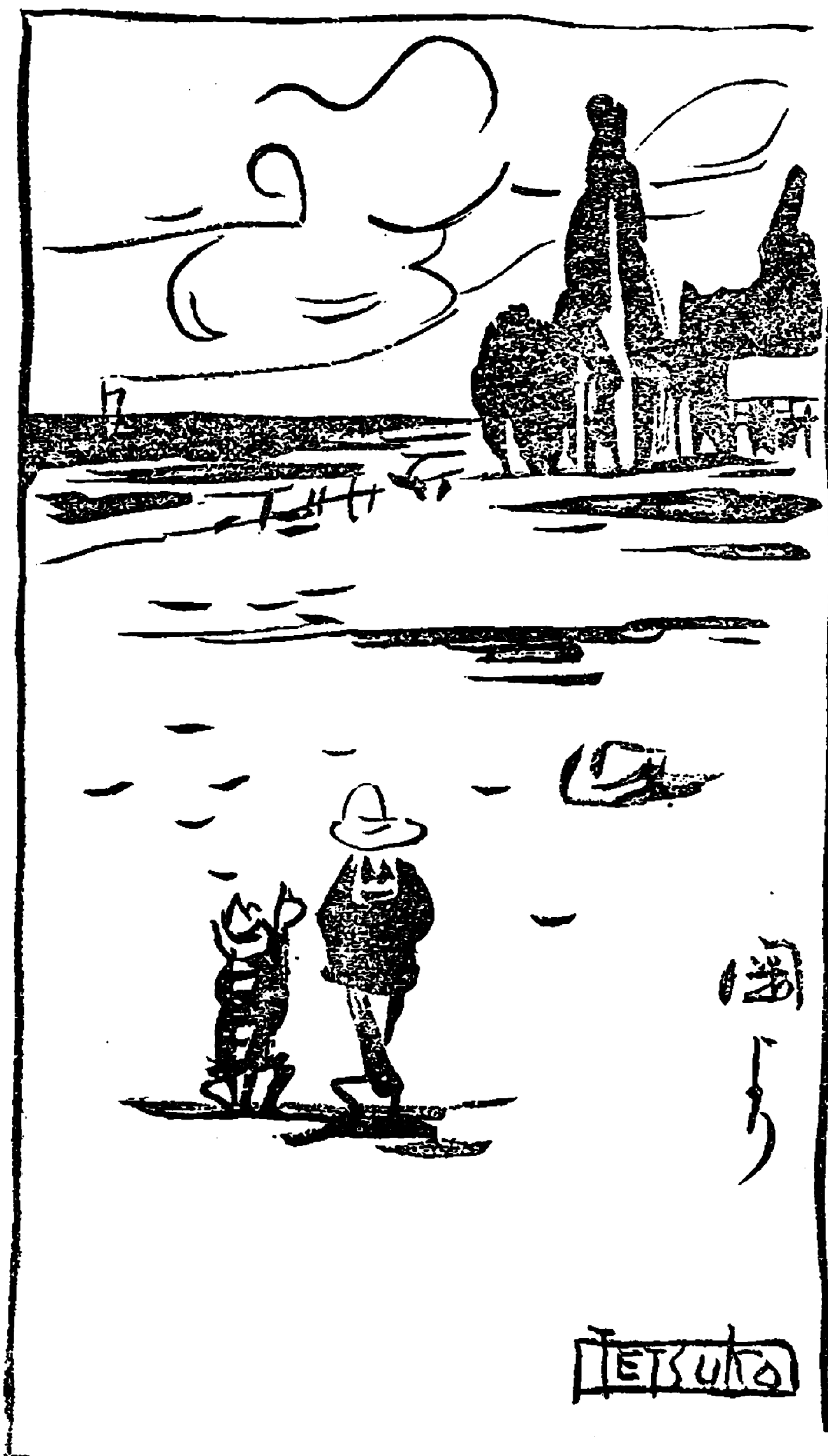
宵ももう時と云ふ物に迫られて、熱した身を床の上に横たへなくつちあならないの、どうせ安らかな夢は結べないんですけれど心から安らかな夢を結ばうとするには姉樣と起居を共にする樣にならなくつちあ望めないの、あゝあゝ。

あどけない處も少しはあるが、全體に感情の烈しいのに驚く（評）

○燭の火　萩の花

料理屋の女將といふのが、さすがお手の內とてか、三枚の裾綿の厚いのを一寸のすきもなく身體にしつくりあふ樣に、白茶に、金絲で芙蓉を織り出した幅の廣いのを胸高にお太皷に結んでくれた。何をなさるでもなく白の丸ぐけの帶止を一つしつかり握つて目を離さずにみてらした母樣は此時、遠慮がちな—でもこらへきれぬといふ表情で、たゆたひ乍ら「ねえまだ若いからたて矢の方が！」「あゝ左樣で、ほんにね、まだお若いのですもの、是は氣がつきませんでした」と女將はすぐに快よくきつちりそひつく樣にたてやに結びなほした。大きい菊花の重い雨のさしてみに—是が初めでかつ最終の高島田の根が少しつるので、氣にかゝつてももう手もあげ得ぬ位身は美しき絹にしばられて居た。只鏡の前に茫然立つた、何を想ふ餘裕もなく—。と、「もう一寸丈が高いとねー」母樣のお聲。「いえがあれ位なら澤山でございます。女の餘り大きあら〳〵しくて。それに先方樣でも小造りの可愛らしくとのお望み、眞に繪に書いた樣です、お可愛らしいつたら何と申ていゝか」「ほんとにね、可愛いお嫁樣が出來ました、お美しい上にお召の模樣もひつたつて！……」こんな聲にふと、噫嫁くのかなあ—と今更乍ら思つた。然して此瞬間に變る女の身の—（華やけき淋しみ—）にうたれた、鏡に映つた姿は世にすねた影も消えて只々幼なく柔しく美しい、ふせ目がちのかつての我にないおとなしい羞恥を含んだ姿—。「ホヽヽ十八にしちや全くやゝ樣で、身體も心も十五六ですものーでもあゝした所は平常のやんちも見えず、可愛いお嫁樣ですがホヽヽ」くづれる樣な母樣のお聲。慾目には百倍も美しくも見えるだらう、丈のひくいといふたのも實はやさしいと云はせ度ての……急に胸が迫つてきた。さらり障子が開いて「此お嫁樣はぼんやり立つてさ……」と叉後前から眺めて「噫國のお父樣に一目なりと此姿を……」私の目からは涙がホロヽヽと垂れた。「ホヽヽ此兒は」と母樣は柔らかな絹のハンケチで靜かに拭つて下すつた。然してとみかうみ、髮をなほし帶をなほして、御自分はとみれば御紋付の給を背中につゝこんで召して、只々私の事のみに御心を。彼お琴の會にゆく時も母樣は此成長した——既に母樣

の御胸を知つた——兒に、みつ兒の樣に頭から足の先迄、それをうるさいと母樣何卒彼方に行て頂戴！と、いつでも私はさうだつた。けれどもう、もうそれも出來ぬ、噫母樣、母樣！お心ゆく許りお世話を……。そして一時なりとも眞の眞の母樣一人の子として一時も長く—。人がなかつたら、否他人樣の家でなかつたらあたりかまはずおすがりして母樣かにして下さいまし今迄の不孝を…と泣きもしませう、が既に一歩ふみ出したてゝには世の嵐といふのが周圍に充ちてます物を。「車やが……」此聲と共に私はいふ樣ない、も凡ての終りの樣な忙し



岡より　福井　岸本てつ子

い何も彼も一時に押寄せられた心地で救を乞ふ樣にしつかりお手にすがり、つと母樣を仰ぎ見た。銀燭に輝やく露の光が母樣のお胸にもつたへたでせう……噫此涙！やがて—いえ此宵—今瞬間の後には私の母樣は他に出來て—そして其心も噫刻刻と他の胸にうつゝゆきて終には此母樣よりも—。噫此涙、十八年を肉をそぎ血を絞つて育くんで下すつたのも此涙が—混ろみのない最後の感謝—噫—母樣は其樣な事をいささかも御愁ひ遊ばさぬか只嬉しさうに動ていらつしやる。親と子と——最後の別離の只此涙の色をお悟りなくてか——。

女の情や千差萬別、感情に活き、性の姿に活きる女の 聲の如何に強く響き來るか、男性の知らざる境、あゝ女をして 女を語らしめよ（評）

○或る夜

牛込　流水女

汗ばんだ胸苦るしい、腦の重い身體を、小さい布團の上に横たへると、その儘疲れが出て、ぐつすり寢入つて仕舞つた。

――いつとも知らない、不圖眼が醒めた。

四邊はしんとしてゐる。セコンドの音と鼾の聲とがくる。つと私を取り卷いてる樣だ。夜の色が薄く白く透いて見える。私は窓の玻璃が半分程開いてるのに氣が付いた。そうつと手をのばして、力まかせに引いた戸はぎうつと云ふ音を殘して閉ぢる。――ふと其時空を見た。碧い紫がかつた深い海の中に、キラ〳〵、キラ〳〵、と少女が漸く美しくなる樣に、浮上つて來る星の姿が眼にうつつた。もう一度見たいと起上つたが、ぐたりとなつて又横になつて仕まふ。眼許りの大きな人の顏が暗らい所から、此方を見つめてる樣で、どうしても、戸を開ける勇氣が出ぬ。――セコンドの音が又強く響く。

遠くの方から、うら悲しい聲がきこえてくる？……

――人々の顏は憂愁につゝまれてゐる。薄い青い光が新佛の前に灯つて線香の煙がゆるく流れた。

彼方の老人のひとかたまりと此方の若人のひとかたまりとは、別々の心を以て、別々の事を話し合つた。が皆私の父樣の事を思つて呉れた。未だ若いのに惜しい事したと云つて呉れた。父樣は四十三であつた。

その次の晩、母樣は八疊のお室に、妹を抱いて、私をその傍に寢かせたが、私はどうしても寢られなかつた。で母樣のお顏を、ぢつと見たら薄い豆洋燈の光に輝らされて、彼のきれいなお眼に、涙が一杯たまつてゐたつけ。――母樣は嬉しい事があつても悲しい事が有つても直ぐ泣く人であつた。「母ちやんは涙ばかり出て困るねえ――」と仰つた言を覺えてる。

御祖母樣もお叔母樣も皆私は嫌だつた。只母樣と妹のつうちやんと、叔母樣の子の芳夫樣だけ大好だつた。――芳夫樣には、もう奥樣がお有りになる、今頃は甚麽夢を見てお出でやら…………、刀劍の音と、靴の音とを一緒にして、遠くの方から巡査がきた――。

しんとした此夜半、點々と輝くみ星も仰ぎ見られないで、只、カチツ、カチツ、と云ふ音を、暗を照らす光と見て、闇の道をたどつて行く巡査！彼には何の望が有るか……何の樂みが有るか……。

――私は、皆人が夢の境に遊んでる時、――死んだ人間の地に、孤り動いてる人を、一番哀れなものと思つた……。

少し散漫です、まだ人をひきつける力が足りない（評）

○何の箱

大阪　杉山花枝

昨日里井の坊ちやんが、小さい〳〵桐の箱にきちんと水引をかけたのを持つて來て、此中に何が入つて居るか、云ひ當てたら上げます、と云ふので皆が其箱を一生懸命で振つて見たり、嗅で見たりしても一向分からない、何でもいゝ物だと云ふので――、私は指輪ですかと云ふと否と云ふ、友がお菓子だとか石だとか玉だとか色々云ふ、或は空だとも云つて見たが皆違ふ、仕方がないので終に蓋を開けた。見て一同びつくり内から出た物は何でせう思ひも掛けぬ小さい可愛い龜の子ですもの、道理で割合重かつたなど一同大笑ひでした。龜の子はもらひました。

鉢に水を入て其に泳がしたり、酒を飮ましてをどらして見たりして居ましたら科長樣が庭の池に放してやれと仰しやるので皆其れに決まつて池の邊迄持つて行て放つてやりましたら嬉しさうに泳いで行きましたが浦島の樣にあの龜が大きくなつたらお迎ひに來るよと科長樣は笑つていらつしやる。

今朝早く池のはたに行つて見ましたが龜は一向見えませんでした、どうしたのか死んだのではあるまいか、又は小供でも戯らに夜の間に捕つて行つたのではないかと心配して先生に云つたら、それは岩の影にでも入つて居るのだらう朝早いからさ、も少し立つたらきつと出るよと仰つた其れで十時頃又行つて見ましたら先生が仰つた通りに池の中にある岩の

上に小さいのが登つて居ました、まづ安心――暑つい〳〵夏の日光は此小さい龜の甲の上をも燒くが樣に照りつけてる、池の水に金魚がパクリと頭を出して又沈んだ。

庭の朝顔も早しほれさう。

面白い事柄(評)

○先生を訪問す

岡山 M・F・

門をはいるとチリ、ンと可愛い鈴が鳴る。

「御免下さい」といはふか、「御免下さいませ」と云はふかと躊躇つたが思ひ切つて「御免下さい」と音づれた、答がない「御免下さい」「ハイ」と澄んだ聲と共に、先生は昔ながらの風で出られた。「オヤ、吉井さん、まあよくきましたね」「マア先生」といつたぎり、逢つたら、あれも話さう、これもと思つてた、語は急にひつこんで、舌は人を馬鹿にした樣に一寸も動いてくれない。

「何日きて!」さう、昨夜更かしたものですから、今やつと起きた所なのよく散らして居ますが、さあお上りなさい。」と慈愛に充ちた眞珠の樣な瞳を上げて、手をとらんばかりにおつしやる。あまり遠慮してもと玄關に上つた。

私はショールを傍に置いて、几帳面にかしこまつてゐると、後の障子をガタピシいはしてゐた方が「英さん(先生のお名)一寸あけてくれないか」私は「ハイ」と口の中で返事して作法で習つた樣に明けた、「いやこれは失禮」と吃驚したやうな聲で「ハ……」と笑つてトン〳〵階段を踏ならして馳け上られるやうな音がする。「御主人だな」と獨がてんして居ると

「まあそんな隅でそんなに遠慮しないでこちらへいらつしやいな」ト隔の襖がスーツとあいて、衣づれの音サヤ〳〵と白粉の香が妙に匂ふ。一二度お辭退したがとう〳〵座敷へ通つた。まあどうでせう、私の席は床の正面、チヤンと左に火鉢が、これへどうして座られやう、妾はどんなにいつても、下座へやつて下さらないのでほんとに困つてしまつた。こんな時はどうしたらよいかよく西森先生にでもお伺しておくのだつたに。御丁寧な御挨拶、さすが先生だと感心した。「學校では諸先生おかはりはございませんか」「はい及川先生もよろしくと云はれました」と後は紋羽二重の袖をまさぐりながら。

「やあよくいらした、どうぞそのまゝ〳〵」と以前の方は懇な御挨拶、三人巴になつて火鉢に手をかざした。お子樣があればいゝにと私は思つた。

飾の無い、たちのよい文章、今後の勉强次第で上達が出來さう(評)

○女生徒の見たる先生

花 一 輪

N先生。音樂專門、スタイルの好い事は、後姿だけならふるひつき度い位なれど、前は餘り感心致しません、短氣で、猶、非常な機嫌かひには生徒はどの位迷惑致すでせう、「まあほんとに能くお歌ひになつてよ」と、仰せになるかと思ふと、「それじやだめよ、眞面目に遊せな」なんて、ピヤノを非常に強く御彈きになる、叱られながらも、細き御手の、折れねばよいがと心ひそかに思ふことも幾度やら。

M先生。短氣な事はN生と、いづれをいづれとは申されませんけれど、近頃は少しやさしくお成りの樣です。今、猶、上野の研究科に御出遊すとか。

H先生。御美しいのは體操科には惜しい位とはいへど、體操服を御召し遊した所は、何にたとへてよいでせう……。天才の御ありのことは、誌上で度々拜見致して居りますのに、また、當月の或雜誌によると、畫にもたけて御出の樣です。

T先生。方舞も御上手ですが、實は數學、皮肉なことは校中第一、引つめた束髮、飾らない御召はよくその氣質を表はして、或組ではお閻魔樣の尊號を奉つたとか。

F先生、もし、T先生を御閻魔樣としたなら、この先生は、雷樣とでも申しませうか、一週二回の物理の時間には、たしかに二三年づゝ、この

大切な壽命が縮まります。

何處の女學校にもあるのは、先生の蔭言らしい(評)

○乘合馬車

羽前　英子

酒田鶴岡間馬車取扱所、と大きく屋根の上に書いてある。

「御めん下さい」「ハーイ」と莊内特徴のだるい聲で返事をして、店の番頭が出て來た。

「馬車何時頃立ちますか」と私はつとはいる。

「お掛けなすてお休みなさいまし」

と若い女の聲が奥から聞えた、私はまづ腰を掛け硝子戸ごしに表を見て居る。

いろんな人が通る。風呂敷を負つた呉服屋の小僧、自轉車の學生、人力車の人、はては一目にそれと知れるあだ姿、裾さばきさらくくと足駄カラコロ、女乞食、紙屑拾ひ、豌豆賣、紫の袴胸高に若き美しき女學生。濱の魚賣る女の魚籠を肩にぱくりくくと何やらぱくつかせながら通る等仲々に面白い。

ガラくくと空馬車を背骨の高い二頭の馬に引かせて、二人の馭者がやつて來た、二十二三の男、目のキョトンとしたいやに氣取つたのが。茶褐色の煤けた中折れ帽子を後生大事とかゝへて居た、いつそ新らしい麥藁帽か鳥打でもかむつた方がいくら氣がきいて居るかも知れぬ、一人は十二三の汚ない服裝の小僧。

時計が一時を打つた「吹け」と小僧に腮で指揮をする。

「ピーピーピッポー」と汽笛を吹く、馬車だから馬笛だらうかオホヽヽホ。

中學生が一人かけて來た、粗末な木綿の筒袖に同じ袴、私の弟と同じ年頃なので何となく懷かしい。

六十ばかりの婆さん小風呂敷片手に急いで來た、「私まだゞらうと思つてうつかりして居たんだよ」と腰をのす、馭者殿フンと冷笑一聲。

「我等は軍隊式でナア一時つたら一時ちやんと定つてあるんだ」

小僧は尚ピーくくと吹き立てる、私はやかましさに耳をふさいだ、私はもう此時馬車に乘つて居た、いくら吹いても來ぬ客は來ぬ、客はこれつきりらしい。

「駄目かナア」とちよつと馭者は舌打ちをする、客の少ないのに不機嫌だ

○或日の感情

屋根の草

人がいくらピカくくするリングをはめて居やうが流行の召物をドンくく召さうが強いて羨しいとも眞似たいとも思ひはしませんとはいふものゝ女ですもの、まんざら無神經とは云へませんでしやうが――只私が寐てもさめても不愉快で堪らず、さなきだにせまい胸を猶一層引き縮められるやうな思ひになやまされ泣きつゝいたづらに青春を過さなければならない、これも運命と思へばそれまでゞすが、この解がたい運命てふものに打勝たうとあえぐはなかくく單純な涙では承知出來ません、さらば身も死ぬばかりに泣けばいゝぢやありませんか……あゝ私はどうしてこんなにつまらなく生れついたのでしやう、泣くべくかまへて置いてさあそれが泣けないのですもの、熱涙は眼中にほとばしつて居乍ら情けないぢやありませんか「私に何の不自由不平があらう心氣一轉あゝ實にこゝにありだ」と覺えず知らずとび立つて鋏片手に朝露の庭におりました、そして白のしやくやくをとりました、あゝこれ何者のさしづなんでせう實にこゝ迄書いて來ましたらまた復新した涙が生れました……

斯の如き淺墓な弱い子は過去十八年の時に射られた胸のピストルのいたでをおさへくく來ましたがこのいたでは現在に於ても依然としていえません、それのみかもろき子は一人ひそくくと叱いた手に苦み泣き終のであるといふ事をよく自覺してるのですされば今の暇多き内に治療でもすればまんざら不可能にも終らないでしやうけども、みすくくうつちやるのですもの、そして時々餘計な琴だの花だのといつたやうな方面のものをまだも欲深く習つてるではありませんか……あゝ此暇にこそ今頃

なやむ學問の勉強につとめはげんで思ひのまゝをすら〳〵公表でもさしてもらつて批評でもうけてそして痛みにともなふ涙なるものゝ性質を會得したならば、運命の勝利者ともなる事が出來ませうに、何ものゝ見ても讀んでも善き神のさゝやきにあづかる如く胸中はいつも美しき天然に遊ぶが如く平和をたもつでせうに、これと裏はらの私は針ほどのやうなしげきを棒に受けてみぢめな涙を頬に傳へたりぬぐつたりまたそれをきたない頭にさも大事さうにひめたりして今日を過し明日を迎へて、とう〳〵弱い子の一代はつき果てるのぢやありますまいか。

○あの話

名古屋　胡　てふ

エ、そりやまあ一話はどの位もあつたかなか〳〵覺えてなぞおられません、始めての時が十六のお正月でしたが、私の十六位の時はそりやねんねいでしたからネ、お春と伯母樣の家へかるた取に行つた時床の間の柱にもたれて居た方が、それだつて後できゝまして、好いも惡いもない只厭だ〳〵ととう〳〵厭にしてしまひましたよ。それから十七の春これは私の一寸とも知らぬ間に見られたのですつて。

其後も小田樣親類の内へ何氣なしにまねかれて其時もネ、たけど其時は、私の知らない間に見たり何んかする樣な方は厭なこつた、と小田樣の前で言つて叱かられましたつけ、見合ひでしたのが十八の春でした、其時は自分にも承知して居ましたし母が貴女大變な氣のりで御紋付を染めるやら、エ、この大判が其時の寫眞です、お仲人の吉田樣のお茶席でネ、どんな方だつて、そんな時に顏なんか上げられるものですか、今ではこんな事まで、づう〳〵しくお



日　に　紀伊　穆田みつ子

話もしますけれど、其の時分は譯もなしに恥かしいの一點で御座いましたよ、それもいけないわけでネ、山田といふ方ですかあれは十九の丁度こんな暑い時分で御座いました、實業家といふので皆んなが進むで結納まできまつてから私共が御存じのあの大災難で此樣になつたから、何んだ彼だとぐづ〲言ひ出したのですよ、結納まできまつてから貴女、災難にあつたからつてかれこれ言ふ樣では私も厭になつてしまつたものですから先方でぐづ〲言ふて居る間に、こちらから斷つてしまつたのですよ、氣が早いと被仰るのですか、ホヽヽ……貴女は可愛い事を被仰るわネ、今度きまつたのですつて、もうそれをおきゝなさいましたか、なんの貴女御存じの我儘を言ふて居りましたが母があの通りですから私は一度も見るでもなし眞實母の犠牲になるつもりで、大人しくして居るのですよ、自分は死んだつもりでネ、エヽ胡てふはもう死ぬのですよ二十年は夢でしたわネ、でもよく我儘を申して困らせましたから、エヽ有難う貴女ばかりよ私の事を知つて居て下さる方はさうして同情して下さるのはお蔭でよい娘になりました、母の犠牲になるのだからと自分で自分を慰めてゐる中から、こんな者でも悲しくなつて夜なんか泣きあかすこともいく度で御座いましたらう——、もう泣かずに置いて頂戴、貴女にさう泣かれては私が堪まりませんから、とんだ愁歎場をお目にかけました事、御免ん下さいまし。

○森

横笛

コバルト色に澄み渡つた空が榎や楠の高く茂つた梢の爲めに危くかくれさうに成つてゐる下をあてもなく歩いてゐた私は、前に立つてゐる高い高い梢を仰ぎ見た時フト思つた「まあ此森の木は幾百年こゝに立ち盡してゐたのだらう、此の後もいつまでかうしてゐるのだらうか」と……。然しいつかそんな事も忘れてとある老楠の根方に腰おろして紅絹裏の袂に忍ばせて來た本取り出して讀み始めた。

風の吹く毎にあの澤山な森中の木の葉が一度にザワ〱と丁度波の遠音のやうな音を立てては遠く消えてゆくのだ。やがて讀みさしの本の上にチラ〱と葉の影が映ると私は神々しいと云ふやうな感を烈しく起したがよく見てゐると何だかどの葉もどの葉も不安さうにふるへてゐるやうで私も思はず立ち上つた。

尚よく見てゐると四方からだん〱私の身のまはりに幾萬と云ふ青葉が追つてくるやうだ。あゝ私は青葉の中で死んでしまやしないかと思ふともうたまらなくなつてかけ出した。やうやく稲荷樣のところまできてホツと一息つくまもなくスーと烈しい風と共に又あたりの木は一ゆりゆれてザーとあの物凄い音を立てた。

私はまたかけ出してやつと森の出はづれまでくることが出來た。

あゝ憶病な小さい少女はかくして森を逐はれたのだ。

あゝ大きい森はかくして少女を逐つたのだ。

○寂しき心

櫻草

襞なりに色の褪めた紫袴を丁寧にたゝみ、座布團の下に敷いて机に向つた。これから又古書を繙いて故人と語るのだと思へば、寂しい中にもかすかに光りがあるやうだ。「知らず生まれ死する人、いづ方より來りいづ方へか去る。又知らずかりのやどり、たれがために心をなやましなにによりてか目をよろこばしむる」。……考へて見れば自分の今の生活ほど無意味なものはない。何のために十里もはる〲故郷をはなれて、こんな山奥にやつてきたのだらう。一家の生計を立てるため？自分の口をぬらすため？否々。さらば花々しき處女時代を寂しく悲しく只一人送らんがためか、さうださうだ。きつとさうだ。自分は世の中の人々に憎まれてこんな山奥に追ひやられたのだ。かくて私は深山に咲く石楠花のやうに、見る人もなきうちに朽ち果てるのだ。在學中の成蹟が何にならう、優生も劣生も出れば同じ事、尻から二番で卒業したAさんは、にぎやかな町の千人も生徒のあるやうなところにやられて、花々しく日を送つて居る。それに自分は……あゝこんな事思ひ出すと氣がくさ〲しつちまう。つまらない。やめよう。



和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　磐城　森　文尾子

ほとゝぎす啼きぬ緑の山肌のかたへ崩れてしろき雨の日

○（地賞）　豊後　菅原芳子

天地を守る神よりひじりよりわれを忘れぬ人をたふとぶ

○（人賞）　陸前　浮草子

世の常のみ言葉にかく涙する少女ごゝろは君の知らなく

【佳作】

○　京都　町田てる子

くれなゐのダリヤを活けし文机に初夏人はものをこそ思へ

○　伊賀　山村龍子

美くしく身づくろひして少女子の物思へるが常夏に似る

○　備前　和氣落月子

蝶などをとるは好まずなりけれどまだ世なれたるわれならなくに

○　伊豫　たけ子

月の夜廣野にたちて尺八を吹きに吹くなるあはれなる兄

○　箱根　安藤澄江

相模のや箱根の裾の墓場なる女は泣きぬ夕暮の雲

○　臼杵　吉良靜子

戀しりて初めて見たる天地のつよき光に胸をどる人

○　阿波　玉野美人草
恐ろしき毒草の花數しらずかざして笑める人をみるかな

○　麹町　牧野半人
蔦の葉のあかき岩根にしみ〴〵と人を思へば秋雨降るも

○　下關　山本芳子
幼き日われ抱かれて黒髪の香などを嗅ぎし叔母も死にける

○　麻布　樋口朝江子
日はさむく吾を照しぬ黒鐵の扉によりて歎思ふとき

○　徳島縣　吉田紫花
爪赤き蟹も這ひ來よじみ〴〵と錢苔匂ふ五月雨の庭

○　牛込　平塚白百合
わが心朽ちゆくことを五月雨の七日見ぬまにおぼえにしかな

○　飛騨　知代子
破りてもなど入るとせぬ中のはた扉によりて泣く子もあるに

○　山城　木の花
夏ぐさのあざみの花のそれよりもいとゞ多かるわがとげに泣く

○　信濃　宮坂明子
そのかみの戀の類にすべて似ず悶へ多きは三十路してのち

○　大阪市　山内富子
紫の藤の花咲く下に來て始めて君とよろこびをいふ

○　高知　秋野とよ子
君が手にまかれて夏のよろこびを語りし宵の梔子の花

○　下總　月沖百合枝
くさ色のとばりを輕くひるがへす水無月の風をよろこべる人

○　越後　吉田ひな子
初めても人にもの言ふごとくにもかんらんの實の熟ちて俯く

○　鳥取　安木はる子
戀人は花の野道を水色の絹傘さして來るものと思ひぬ

○　淡路　加藤菊子
彼の夜の君がみ息とわが髪を思ひ出ではうちなげかれぬ

○　千葉縣　林美津子
過ぎ去りし事など胸にうかべては思はずわれのさびしくなりぬ

○　水口　鈴蘭
遇はずして相思ふてふ君と我宿緣いとも淺からぬかな

○　筑前　三好みどり

疲れたる淋しき瞳そとあげてわれ何物かさがしてありぬ

長崎市 永井主子

○

日は暮れぬ眞白き花に風吹きて光さやけく窓に入る月

小樽 矢木律

○

何事か足らざる心これとても戀にあらねど寂しき心

福島 木下春子

○

あやふかる戀と知りつゝ家をすて親をも捨つる心になりぬ

新潟縣 高橋やす子

○

雨に咲く林檎の花のいろのごとさびしき人と云ひ給ふかな

紅花

○

胸はいま霧ふり心何となく悲しさ覺ゆ君見てあれど

越後 榛信子

○

とひ給へ夏木の中に花咲きてあたら床しく匂ふ橘

下總 小澤まゆみ

○

松の花さびしき人に別れ來し初夏の野の忘られかねつ

大阪市 田中いね

○

月見草咲きぬ河原に人聲す堤はなれて月照り渡る

京都 水野まさ子

○

おとろふるわが身の影を打ち眺め初夏の日の鏡とありぬ

伊賀 きよ子

○

くれなゐの撫の花はわが心君が心の花と云ふべく

堺市 白菊女

○

この日頃育てし黄菊咲きそめぬ高く薫れな亡き母のため

北海道 吉野雪子

○

少女子の長き袂をいでし日は藤の花見ぬわが紫の

近江 降霞

○

何となく胸の亂れぬ憂き事の言傳をする雁ならなくに

大和 靜子

○

くれなゐの薔薇をも共につみたりとゆめ人々に知らせたまふな

防府 池田花子

○

悲しみの胸に湧く日は磯に立ち雁の行方を打見まもりぬ

出雲 森千代子

○

戀しさは君を見ぬ日の一瞬に老いも果つべきこゝろとなりぬ

羽後 三浦ふみえ

○

唇の色さむる日はこの頃の戀は悲しき思ひ出ならむ

陸前 小岩やなぎ

○

戀にやむ少女のさまと春雨にしほるゝ花といづれ優るや

横濱 君子

○

君思ふ心すこしも變らねど涙に曇る時もありける

丹波 月眉

○

きみ逝かばかくもありなむわが心思ふもさみし夕ぐれの雲

京都市 靜月

○

しづかなる丘の邊りに眼をとぢて忘れ能はぬ君を見るかな

佐渡 本間緑子

○

君かへり撫子咲きぬ此頃は思ふ事なきわが世となりぬ

姫路市 菅原靜野女

○

しづやかに夏は來にけり水色のリボンを我も黒髪にかざしぬ

下總 鈴木たけ

○

今日もまた白百合かをる野に立てり秋刈るべく歌想ふべく

伯耆 新田文子

○

君と吾れ私語きあひし松の蔭年ごとにしも葉のしげりつゝ

岩代 桑原仙子

○

かくてたゞ君を戀ひつゝ色あせてゆく少女子を忘れ給ふな

福井縣 片山里

○

弱き子よ狂へよ死ねよ汝が爲に吾れは泣かむと兄の云ひたる

越後 新井田つね子

○

何ごとか逢はま欲しさに我は今日白菊添へて君に文しぬ

札幌 幸坂隆子

○

長閑なる春の日影は傾きて遠山かすむ夕暮の里

群馬縣 江澤紫城

○

鏡臺に鏡をおかぬそれよりも書多く見ぬ我れは淋しき

信濃 玉川星子

紅の雲うき出でぬ日に近き煙もをかし夏の夕ぐれ
熊本　金子きぬ

○

わが背子にならび座ればよそ人は皆はづかしきたはむれをいふ
失名

○

春雨にましろき薔薇の一片の落ちしを見れば我は淋しき
四谷　桝崎佐喜子

○

身に近く舞ひくる蝶の羽のかぜは戀しき人の言葉に似たり
上總　鶴岡一二三子

○

そよ風の野邊の小草の露の上に隈なくすめる夏の夜の月
伊勢　香宮登葉子

○

燃ゆるごと夕山つゝむ紅き雲君懐ふ子の心ともしれ
丹波　大槻幸枝

○

山百合の白きを見ればなつかしき君がおもかげ忍ばるゝかな
本郷　齋藤八重子

○

ある時は柩の蓋に打つ釘の胸に響くとおどろくおのれ
飛驒　眞砂子

○

み心を映さむによし否われの胸をてらさむ八花鏡
神田　よし子

○

落髪の一すぢ毎に君思ふ君を恨みて春くれてゆく
さゆり

○

かくて今われもし死なば夜の夢に君をうらむと見えむかなしさ
土佐　ゆふかり

○

飼ひ犬に花笠させてよろこびしきのふはわれも少女子なりき
長野縣　津金壽枝子

○

われなげき苦しき夜半に筆とれば二ひろすぐる文ともなりぬ
長野縣　臥雲よしはる

○

鄙びたる里歌うたひ牛かひのいそぐともなきたそがれの路
下谷　佐藤幸子

○

笑む子とや昔の思ひわが胸の奥にひそみて淋しきものを
東京　深山渓江

○

永き日に巣を作りけり四十がら若葉の蔭のうつろの中に
大阪　杉山花枝

○

父君が手植ゑの牡丹色褪せて思ひ出多き春は今逝く
長野市　美池子

○

やはらかき朝の香よ卓上に夢を見るなるくれなゐの花
越後　大石孟

○

淡々と木の葉に夏の月おちてくさひばりなど鳴くかなしさよ
美濃　葛の葉

○

夕日さす野に撫子をひきてみぬうす紫のなつかしき故
麻布　藤村ゆき子

○

かへりきて母と住居る寺町の青葉の家に來鳴く鶯
麻布　伊藤みき子

○

幼き日好み見にける錦繪のその一と巻に君を見出でぬ
能登　勝田せい子

○

ことよろづひと時にきて心の臓かきむしる哉秋の雨の夜
やねの草

○

月見草咲く裏庭に人さけて捨つべき文をまた見つゝ泣く
京都　齋藤香野子

○

戀すてふ甘き言葉に欺むかれ落ちたるばらか口づけて見む
金澤市　藤永靜子

○

六月の暑き日かげを葉に受けて赤き莓の實はもえてけり
能登　近江加能惠

○

山中の沼は森陰青き花渚に咲きて月うすうさす
長野縣　川澄紫露子

○

しろかねの風鈴ならし夕暮の涼しき風は川より吹きぬ
みを萍

○

どよみより少！後れてひとり行く少女を君は誰と見るらん
霞子

○

やうやくに忘れんとせる我胸に君またなげぬ悲しき戀を
靜岡縣　壽賀

○

この時に君ゆゑぞよきもしあらば御手とりわれは死にに走らむ
下谷　林久榮子

○

何ごとも只何ごとも大神のよざしのことと泣く人を見ぬ
福井縣　片山里

○

誰も皆この言の葉に欺かるとこそは思へ憎くからぬ君
京都府　竹村槇子

○

待ちわぶる君歸りこず白百合の花の青みて月は暮れけり
札幌　喜代香

○

傘深うさして君ゆく紫の袴の裾に白き花さく
淀橋　水口しん子

○

み空より女神の使來るごと光すゞしく螢流るゝ
下谷　田邊まさ子

○

さばかりに強き心も君ゆゑに涙の多きわれとなりにき
下谷　田代房尾子

○

吾がなげき五月の空の日にも似て日に幾度かかきくれて泣く
淺草　藤波

○

ほろがやの中なる兒に風やりぬむかしの夏を忘るならねど
成田　登子

○

亂れ咲く卯の花涼し星月夜三つ四つ二つ螢とびかふ
伊豫野　菊

○

何ごともおもはず髮の五尺ほど風になびけて野に立つわれは
麻布　葉隱れ花

○

一と日には十たび二十たび君思ふおもひ迫れば戀しとも書く
伊勢　露木雅子

○

うば玉の夢路に泣きて恨みせし君にむかへば涙こぼるゝ
西茨城　田村波津子

○

この夕べ百合の花つみ莖かみてつれなき人をまたも戀ふ哉
大阪　花子

○

この日頃何ともわかぬかなしみに母にかくれて泣く身となりぬ
阿波　迷草

○

一里ほど人影見えず風冴えて雲のみだれのものおもはしき
長野縣　淺田千代子

○

何事も打捨てわれはすみやかに君がやさしの手によりなまし
長野縣　古畑よしみ

○

葉櫻の茂りをもれて思ふ子の家ほのに見え夏の風ふく
前橋　みどり

○

なにとなく我には疎き君なれど君にはうとくわれよそほへど
長岡市　二九子

○

悲しさをかくす術こそ知りにたれこのよろこびをいかに云ふべき
千葉　岩澤周子

○

思ふことかなしき宵にひしと我が胸をもろ手に抱きてぞぬる
徳島　紫陽花

○

夏の夜や青葉かくれの金星か輝やく露か君が瞳か
大阪　高山米子

○

幾とせか胸に秘めたるかなしみを友の語りて笑みし冷たさ
失名

○

ふるさとのみどりする野の朝風に柳の如く髮なびかする
阿波　白百合

○

山松の並ぶ緑の下蔭にばら白くして夏の風吹く
韓國　富迫稻子

○

暗き日の淋しさを好く姉君の瞳し見ればわれも泣かるゝ
奈良縣　中富よしみ

○

一度はあざみし君が涙をもあはれと思ふ我がよわさみよ
秋田　愛子

○

ひとりねの夢よりさめし我が額を葉越にてらす十六夜の月
石狩　王子　きよし子

○

おとろへし身は十字架をだき締て神の御園に眠る夢見る
京都市　要司村福子

○

若き母女を生みぬうらがなしもの思ふ子と又もなるらむ
伊賀　文子

○

大空の星の數よむすゑしらばわが此心よみこゝろみよ
うた子

○

見る事の遲かりけりと云ふことを初めての日にきくもうれしき
羽前那賀

山住みのわびしく暮す月日をば名無草にもたとへこす人
能登　向井志保子

○

花一つ野中の池におちしごと浮くも沈むも人の知らなく
大分縣　山本春子

○

いつよりか胸に祕めたる甘き蜜くれなゐの蛇そとなめて行く
土佐　澄子

○

白百合の花に來れる揚羽蝶麿の羽の色おもほゆるかな
山口縣　あやめ

○

蛙なく聲もつれなく耳に入る君をまつ日の灯ともし頃を
奈良縣　千代女

○

此戀ひ人に知られん悲しさにさうびなどをもかざすわれかな
西多摩　三ケ島葭子

○

二つなき心を神と戀人にさゝげんとしてまどひぬるかな
長野　加藤二葉子

○

何となく高鳴る胸に双手措き仰ぐ眞闇に白き花散る
美濃　酒井蝶子

○

山に摘み人に贈ると白百合に紅さして見る夏の日のわれ
和泉　金田粹月

○

わが胸の園に來て見よくれなゐに黄に紫に花の匂へり
相模　濵波子

○

胸閉す灰いろの雲いつしかに晴れてぞ消ゆれ君と語れば
神戸市　緑髮子

○

薄闇に君が姿を待ちつつもわが美くしむ白あやめかな
備前　落月子

○

ほとゝぎす多く啼く夜は立ち出でゝなにとも知らず我もなかるゝ
牛込　流水女

○

雨だれは母思へよと響くなる五月の頃の京の家かな
遠江　川瀨宮子

○

戀をしる少女子ならで月の夜の落花を惜しと誰の知るべき
大越のぶ子

○

かりそめの話ながらに何となく胸に殘りて消えざる言葉

○

初夏の眞晝の中に漂へる淡き悲しみおぼえぬわれは
茨城　川和田初子

○

夢のまに時の小ぐるまとくめぐり淋しさをしる日ともなりぬる
福岡　建部艮久子

○

亡き人とダリヤを愛でし初夏になりぬと云ひて旅に行く人
百合枝

○

百間の瀧のしぶきにそぼぬれて姫百合の花ゆらぐ涼しさ
八戸町　西村みや子

○

わが十九戀しき人に別れたる寂しさいだき初夏に入る
中津町　橋村伊都

○

憂きこととたのしきことのこと〴〵を緒にぬき遊ぶゆく春の人
北海道　日暮子

○

夏の宵淡き螢の火を見ればうすら冷たき悲しみ來る
和泉　櫻木やす子

○

青空に白雲の居る靜けさに似たる人としわび給ひける
岐阜縣　春野秋子

○

物皆をとかす力のありと云ふ八月の空の日光に似る
上總　土井たい子

○

北上の流れの上の湯の宿に瀧の音ききわれ思ふ君
宮城縣　眞野圓葉

○

夏さむき山路を來ればしかすがに人の歌など誦されぬるかな
長野　淸水あや子

○

戀の子は二人眠れり魔の國に落るが如き恐れをしつゝ
大阪市　向井白露

○

をとこへし亂れしまゝに朽ちぬとも嘲み去にけり昨日の少女
美濃　藤井すみれ

○

夕姿前の河原のなでしこに似たるおのれは戀する少女
筑前　笹つゆ

○

夕ぐれの五月雨晴れし芭蕉葉に蝸牛はふ二坪の庭
橫濵　橋木まき子

○

能登　柊るり

日もすがら物想ひするうきわれに似て咲く花のをみなへしかな
淡路　留子

○

病む少女姉なる人に手とられて須磨の海邊を歩む夕暮
石川　むらさき女

○

さなへ取る少女の足に音もなく降りそゝぐなり六月のあめ
豐後　冬野花子

○

月の夜の白き光の中にしてわが云ひしことうたがひそ君
伊豫　しら萩

○

遠山の上なる月を美くしとたゝへて居ればほとゝぎすなく
大阪市　春の日

○

獅子のさま佛のすがたさまざまの雲ならびゐる夕ぐれのそら
伊　知子

○

ひたすらに君を待つなる心にはたゞにさびしき夕顔の花
遠江　大城すみれ

○

二人無きこひしき君の消息に似ることを云ふ春の風かな
栃木　丸山ふさ子

○

つく〴〵と君を思へば梅雨の雲涙のごとき雨零し行く
北海道　金子竹枝

○

くろ髪も日毎おひゆくうきわれを三年の後に見むと誰れ云ふ
甲斐　網野やす子

○

春の窓もれ來る日陰いとにぶく針もつ膝に白き花散る
成田　登子

○

夕風のはだへに寒し藤の花青葉がくれに見えそめながら
甲府　ちよ子

○

さくらちり小鳥も歌ふ昨日今日などてかひとり我はなくらん
南千住　堀桃園子

○

君がみ名かきては消しぬ幾度か君とかたりし濱の眞砂に
札幌　中原春子

○

空に鳴く小鳥の如く君と我心行くまで泣かんとぞ思ふ
下關市　山本芳子

○

少女子は夏の夕の風しげき闇の燭の灯のあやふき如し
千葉縣　石井よし子

○

しと〳〵と降る五月雨のわびしさに一人日記かくたちばなの家
東京　谷口桂子

○

此吐息炎となりて天のぼれ君すむ國に火をふらすべく
大久保　葉山靜枝

○

うす墨のにじめる指のつめたさを机にもたれしみ〴〵と見る
新潟市　吉田かほる

○

たちばなの花やがてちりかの君にわれ嫁ぐべき日のちかづきぬ
大阪市　山内花雪

○

雨後の月靜けき夜半に大和なる君を思ひぬ山吹の家
大阪市　山内溪子

○

我れをしも何と思ふや三年前からくりなどに喜びし人
長野縣　宮坂明子

○

星影に霜のやうなる落花見てつく〴〵覺ゆ春の名殘を
信濃　臥雲たつ子

○

朝霧の深くもとざす谷あひに聲ひゞかせて駒鳥のなく
能登　勝田清瀬子

○

吾かつて胸の中にしきづきたる墓にも似たる灰色の雲
下谷　中村操子

○

玉簾柳かくれに少し捲きこがくれて聞く君の横笛
下關　山田くに子

○

夕されば滅びし國の鐘の如君呼ぶ我れの聲ぞ悲しき
麹町　牧野銀杏庵

○

あさましき心の如く彗星夜毎〳〵にうすれゆくなる
赤坂　あや子

○

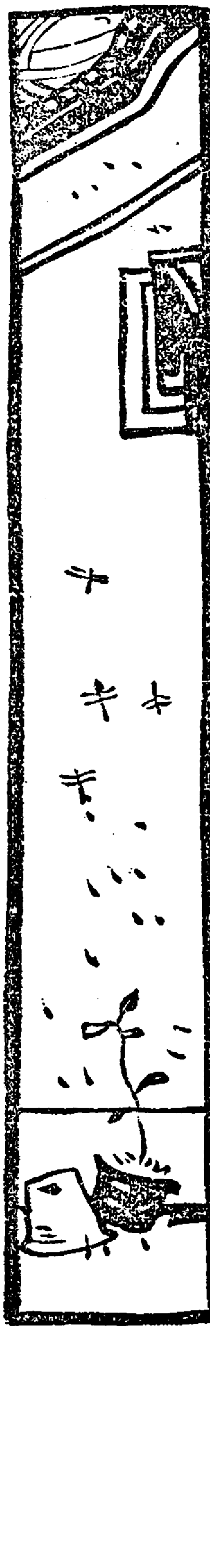
大波のくづるゝ如くくづれては磯に這ひよるわが思ひかな
相模　塚口よし子

○

さがみのや山の幾うねのび〳〵て小さき海を抱きぬるかな
大阪　淺野たみ子

○

なめらかに都言葉をあやつりて鄙に物賣る見よげの男



日記

横瀬夜雨選

○お稽古通ひ（地賞）

野の百合

もう何處の家も〳〵繭で一杯角のうちの嫁さんが白い手拭被つて細い手にちよい〳〵撰つて居るのがほんとに可愛いこと。畷へ出るとお〻早い何時の間にか麥は赤るんでもう刈られたところ三分刈つてる處が二分位彼方でも此方でも荷笠の人等が刈り取つたのを長い柄の槌でとん〳〵とん〳〵打つて居る遠い處のなんか黄な中から交ひ違ひ〳〵に槌だけ見えてよつぽど面白い早苗田ももう五寸ものびて風にそわ〳〵とほんに涼しさうだこと。向うの畦から大層人が來る近寄つて見ると小學校の女の子等先生に伴れられて皆お尻端折りで苗代の蟲追一本づ〻竹の棒持つてザブ〳〵可愛足ではまつては一心に取つて居るいたいけなこと、田舍の兒等は幸福なかうして自然に親しみながら知らず〳〵の中物の大切な事など覺えて。「ハイ〳〵」て後で云はれたので片寄るとお馬を曳いたお百姓さんもう新田おてしと見えて泥まみれ、マー好い馬駄馬には惜しい樣なあの歩み振り品のあること、母樣がよく「品は金では買れぬもの」と仰しやるがほんにさう生れ付は何うにも成らぬものか駄馬にもあんな凜としたのもあるし、おや私の前行く內儀さんの何て無神經な赤ちやんの首がもげさうなのにあんなに反りかへつて……アレ洋傘のさきが目に……ア〻あぶない、手があて度い程……ット植田病院へ這入つて行つたマー安心したは。

右手の岡に下から刈つては上げる麥を一心に乾してる娘の子の古風な樣子市女笠に紅い紐とつて同じ襷に同じ帶黑い脚半に白い腰卷して、おやこつちを見るはまだ日やけせぬ柔らかな頰ぱつちりした目、口で結んだ紐がよくうつ〻て…まるで繪…あら餘り見惚れてホ〻つひ束ねわらにつまづいてしまつた、あの娘が笑うて居るの——恥かしい……。

もう町ばなからは側目もふらず眞直にお師匠樣へ。よ

くマーと大層喜んで下さるお稽古の雲井の曲と外に態野をさらつて下さつた。

馬の目きゝまでするに至つて其才やおそるべし。たゞ文章に輕浮なところがあつていけない。

○午後（八）

近江磨志緒

針の手を止めて時計を見るとまだ三時、もう一時間と待遠しく思ひながら又指を動かしてゐると絹ずれの音がして襖がスーッとあく。マアびつくりしましたいつお歸りなさいましたの。今。お早う御ざいますのね。今日は頭が痛んだから早く歸つたのさ。私はお裁縫を向うへつきやつて、お茶を入れやうと立つと、アア痛ッ顏しかめて居被る、痛みますかつて頭へ手をおくと私の顏じつと見て、腹、腹。存じませんさつき頭が痛むつて仰つて。だつて今は腹が痛んできたんだ、お前の氣が早すぎるんさ頭なんかおさへてつて笑つてお了ひなさる。

おゝあなたお風呂召して居被い。沸いとるのか。えゝ沸して呉れましたの、でもおからだが……。何腹の痛いのは冷えてるんだから溫まるのがいゝが、よし頭丈は出すとせう。又あんな事だれがお湯に頭ごと入るもんですか。だから出すんぢやないか。言ひ〳〵室を出てお湯殿の方へ足音が聞える、私は一人笑つてゐた。私もお湯をすませて、お書齋をうかゞふと別に勉強して被居る樣子でもないからお傍へ行くと剪とつてお出持て行くと、足お出し。マア爪で御ざいますの、私きりますそんな失禮な。でも之迄一人で切た事ないだらう。えゝでもよく一人で切ります。いゝぢやないか。いえ手なら切て戴きますけれど足はほんとうに失禮ですから。ほー大變な事を言ひ出すね、手切て戴くなんて媒介人呼で來やうつて妙な顏なさる。又笑ひ出してあなた御病人の癖にと言へば、だから慰めてやるんだとほんとうに每日笑ひ〳〵日を過して了ふ。

蜜月の夢まさにこまやかなる君だちに物白す。結婚はたして樂しき乎、見よ一双の孤雁地を撲ちて高く飛び、一對の鴛鴦池邊に獨立つ、はたには困るものがゐるのに。

【秀逸】

○晝と夜と

安木春子

五月十九日晴　常より一時間も早く目が覺めた、ハレイ星の通る日。暗い中に髮も結び新聞もよんだ、妹が起きてから一緒に散歩した、あらゆる色彩をもつて飾られた野には朝の氣が充ち〳〵てゐる、日の出前の東の空には美しい雲が流れてゐた。幸さんに逢つて「ぢやいよ〳〵今日限り？」「何卒次の世にもよろしく」こんな事を云づて手を握合つて別れた、十時すぎNさんに誘はれて高野橋に出た、墨をぬつた硝子の破片は何の用もなさなかつた。二人は蓮華田の中に座つていろ

いろな事を話した、私が蓮華の花を嚙んではすて、嚙んではすてしてゐると、「まア蓮華を喰べてるんですか？」と美しい眉をひそめなさる「えゝ死なれないとなると、苦しい現實にかへらなくつちやならないもの私、お腹がすいたのよ、所謂パンの問題？」「まア驚ろいた、貴女の口から、パンなんて言葉が出ようとは思はなかつた」「だつて生きてるんだもの、けどこれは甘いわまア喰べて御覽なさい、甘い現實！」と大笑ひした、Nさん人は去れりの詩を皆おぼえたと大自慢なさるので「ぢや云ッて御覽なさい」と云つてたうたうたはせてあげた。

「水も流れよ雲も逝け――」この一節を二人で幾度ともなくくり返した、夜父と舟で千代川に出た、網を打ち打ち舟から遠ざかつて行く父の影をみながらひとり舟にとゞまつて知る限りの詩をうたつた、天にも地にも月の光はあふれてゐる。ハレイ星の行方は終に見ぬ。薄倖な處女を聯想する月見草、甘い野茨の香、南の空にはきらゝ雲が浮いてゐて月は西洋柳の梢にかゝつてゐた、この夜床に入つてからどうしても眠れず手をのばせば、今日借りた卽興詩人があると云ふ事を思ひ思ひ二時すぐるまでうつ〳〵してゐた。

『屹度覺え帳』に含める滑稽あくどいけれど、蓮華草を唇で嚙む位はお孃さんやりかねまい。千代川に舟を浮けて網を打ち〳〵遠ざかり行く父の影を月下に見るあたり光景夢の如し。

○細雨の日　　冷花

なにかさゝやいて居る樣にも、敎へて居る樣にも思はれて、青葉にそゝぐ霧雨を見て居た。

開きし花は散りもせず、蕾の花の散りて行く、花も我が子も此の如く、無情の風に誘はれて。しめつた空氣の中を緩く緩く歌聲が流れる、鈴の音が近づいて、白脚絆が門に立つた。黑い手に布施してやつて、見ると色あせた鬱金木綿に通した手を母の肩に掛けて、乳飮子が、淋しい御詠歌にまもられて無心の夢を結んで居る何處まで行くの？と聞いて見度い樣な氣がした。

御祖母樣の切髮結んで上げて、裁板の前に座る。午後スバルが來た、バラバラ繰て居ると、「京都より」の處が出た、「明眸も死にひとし抱かねば彼の三桀のあたひ無きこと」大可樓の夜を、舞扇たゝんで人は去つた、寢衣着て、匹田の帶クルクルと卷いた處へ襖が開いて、我が前に振を重ねて並びし人のほゝゑみを、美しいと見たのは苦知らぬ子が京の旅した十七の春であつた。黑塀に花の友染着た、すぐれて美しい人の名を、三桀と宿のお絹がさゝやいた。鴨川の灯のまたゝく晩で、香水やら、匂ひ紙やら與へたら、美しい瞳が喜びの色に輝き合つた。都踊に出るのだと云ふ、稍丈のびたのが廊下を通つた、「いゝ色」と紅の頰を賞めたら、紅と白粉とまぜて置いてつけるのだと、美しい人に敎へられた。よき衣着て、舞うて醉うて若き命の長かれと人の世を祈る。

夕方雨が止んで、知らぬ間に「植村」「黃名瀨」「やなゐ」

と濡れた曇り硝子に朧の灯が入つた。夜母様と宮川町へ行く、美しい石敷きつめた明い風呂場、ぬる湯につかつて、目を伏せて、〇〇様の小鼓を聞く、身を世をすべてを忘れ得た。

通は淋しい、兩側の瓦斯燈の灯が遠く迫つて、路はゴッチヤになつて見える、彼の火の中へ入つて行くんだと何とはなしに思うた。

三榮に對する過去の思ひ出と現在の感想とはどこで分けてあるのか、風呂の中で聞いた鼓はどこで打つてるのか、わからないぢやないか。

○屹度覺え帳

下野　朝明野

今日の日曜日は、まづ三木野さんへ伺つて御自慢の草花を拜見してから、河邊を上て城山の方へ散歩する筈なので仕度の忙しい事つたら。夫にはセルの單衣に着せ更へて上げて置いて鏡に向ふと、頬の黑子が氣になつて堪らない。硝酸で燒取れつて云はれるけれど痕になるから困る。髪を結むでから白粉を薄くつけて、さて昨日屆いた縞お召の袷に手を通すとまあ、何んといふ仕立て方なんだらう、胸のあたりがぶく〳〵してるんぢやないかだから番頭にあれ程寸法を繰返して云つたのに。『女つてものは面倒なものだ、今少し仕度の輕便法はないもんかね、三枚の新聞を讀み了へて、欠伸を廿五度半したんだがねハヽヽ』なんて夫が後へ立ち乍ら皮肉るのが、口惜いつたらありやしない。そこへ相憎にも夫の同僚の荻野さんが來て、『やあ御揃で御出ましの所かいこいつは恐縮だ』とあの重いお尻を火鉢の前へおろして了つた。恐縮なら歸て了へば好いのに、決して御ゆつくりとはお止め申ませんよ。ほらほら御得意の金口の煙草が出た。これで一日あのお尻の上りつこなし、とう〳〵今日は樂みにした散歩もおじ



在校なら　野の百合

やんになつて了つた。妾はもうやけで一寸挨拶したきり座敷に出ない事にした。夫も仕方なしにお相手してあの駄じやれや面白くもない清元の講釋を聞いて居るお花にお茶を出させて、妾はこの帳面へ筆を取る。おやく＼變な聲でまあ何んだらう。これは三保の松原に——だと、まあ近頃は謠を初めたのかしら、蟲持ちの子供にはきかせたくない物だ。それにしても夫の心棒強い事、よく我慢して聞いてる事、やれきれやしない。おやもうお賣ぢやないか、又御酒だろう、あんな奴には惡くなつたのを、いや＼けれ共夫が呑むから矢張りいけやしない。お花にお酒を運ばしてやるとまあどうだらう。醉つた加減とは云へ人の事を、あらまあ『追出して了ふまでさ』だと、ち畜生奴、お花にそ云つて箒を立てゝやれ。

おやく＼不思議に今日は歸りが早い、と思たら夫まで連れて出かけるぢやないか、本統に＼＼どこまで意地が惡い日なのか。荻野、荻野、荻野奴！この恨み蛇度忘れまじく候。

達者な筆だ、どうかすると上へ惡るの字がつく、察するにこの君おん年二十五のふるづまであらう、いかに。

○植木のひつこし

麻布　美　耶　子

「其松は子供と一所に育つたのだからどうぞ枯さない樣に」と言ふ母樣のお聲に、ふと目が醒めて、時計を見れば八時、氣まりが惡いので手早く床をたゝんで、着更をしてもうとつくに起てたと云ふ樣な顏をして出てつたら父樣に目早く見付れて「おゝ先生のお目醒か」つてお聲に、母樣がふり向いてにつこり、早く御飯をお食べと仰つたので、植木屋の親方てば一寸ゑしやくしてお孃樣お晝の御飯には、ちと早う御座いますだつて、本とうに氣まりが惡るかつた。

十人十色と言ふ樣に、其れ＼＼得色の有る五人の植木屋の手も足も口もまんべんなく動いて、庭の主に植つてた、又植るべき松は、母樣の御注意があるので、ことに念入れに根かためをして、檜は丈が高いので隨分骨が折れたらしかつたが、四本とも、此度新に買つた家の庭に運ばれた。其の松は自分よりは、よつぽど年長なのだけれど、母樣のお顏とお乳を持つ事としか知らない頃から、共に育つたのだと思ふと、何んだか自分の齡を守つてる樣に、懷しく思はれるので、松と一所に其家へ行つて見た。父樣はもう行つてらしつた、「ねー父樣もう此家は保險に入れたんでせう」「まだまだ」もうぢき向の家も書更へなくつちやあならないから」「だつて其れまでに火事があつたらどうするの」「なに大丈夫だよ」さうつて聞ながら、父樣のおそばにあつたお菓子を、お皿ごと引寄て食べ始めたので、父樣が、私の顏をのぞき込ながら「よく食べるな、よく這入るな」と仰るのをかるくほゝ笑に受けながら、とうとう食べ盡して「父樣何時頃此所へ越して來るの私達は」「未わからないが夏の最中頃になるだらう」と仰る

のを聞き流しに家へ歸る。總べてスタイルのいゝ木は皆んなぬかれて、其の庭の面影たらと驚てる所へ、草抜の兄樣が居らつして「何んだか間がぬけちあつた」と仰つたので、思はず本とうねー兄樣、何んだか眉毛の無い人の顏の樣だわねつて、つい口走たのを、兄樣てば時こそと言はぬばかりに「うまい〳〵さすがにちがつた者だ文章家は、お父さんも此間、君は文章家にしたいつて言つてらしつたから是非」だつて「いやな兄樣、冷かさなくつたつて」と半分言はない内に、「冷かしぢあーない〳〵つ」て手をふるので「それあー兄樣の樣な多識な方なら、何んて言はれたつて冷かしとはお思ひにならないのでせうけれど、私の樣な不才な者には、冷かしとしか受取れないんですもの」と、又候冷かされない中に奥へにげ込んだ。十二日記。

「植木やは磯平といふ丸い顏のひどく腰のひくい男で、あとの人は弟子と見える大層ていねいな詞遣をする積で兎角自他を間違へる、昨日はなぜ休んだのときくと、御用がおありになりましてといつたやうなので……」腹が痛くなつてそれで美子先生逃げこんだのであらう。けれど一つ不思議なことがある、美子さんには兄弟がないときいたのに、ひよくり出て來たこと。

○らく書

ふもと子

何か書かうと机によつてみる。胸の扉を悉く明け放た樣に心地よいので、緒さへ見出したならすら〳〵と譯けなく書けさうだ—と思ひながら、又いつもの樂書きを始める。「月は靜かに照つて居る。初野さん、初野さん、私は今夜も迷ふてゆく……男だと言つて威張つても情の前には膝を折る。膝を折つてひれ伏しても……」燃えもゆる苦い胸を抱いて死むだときいて、其の人が其の文が殊更によくなつた。同じ文章世界の投書家萩花と云つた人、耶麻は晝もほとゝぎすが啼き候と書いた、君も久しく病に惱むで逝つた。女は泣くべき者と思つて居る私は、男の涙を痛切に感じる。そして血に染む樣な君の文がすきであつた。詩はうたつて想ふ、好きな文は書いて思ふのが樂しみだつた。それから人をかく。若い女許り、丸髷が一番氣に入つた風に書ける。次が銀杏返し、庇髪はバンカラに成つてしまつて、表情的に書けない、一番むづかしいのが島田。襟のあたりは夢二樣のに習つて、いくらか出來るけれど、袖から手がどうも出來ない、私のノートには顏と襟丈けの人が大勢居る。落花にたゞずむ亂れ毛の人など、思ふ樣よく表情的に書きたいと思つても想像だけで、此の間など妹に「幽靈の樣ね」と笑はれた。チャームある目を想つて書いても、皆滑稽的な物に成つて了つて、人になど見せられはしない、見せられないと言へば、此の前のノートを紛失したと思つた時程心配した事はなかつた。一寸袂へ入れといて、お湯から歸つて來て氣がついて、見つけたけれど無い、きつとお湯で落したに違ひない、誰に拾はれるで有らうと思つた時には冷汗が出た。表は小さく號を記しといた

丈けだけれど、樂書の中には名も有るし心の奥で秘かに叫むだ聲もある。あの時許りは心から神佛を念じた。心ない子供の手から川へでも流してもらふ樣にと。幸翌朝あつたけれどそれからはもう、自分のノートへは自分の名を記さぬ樣にして居る。（日記のうち）

らくがきなるかな。

○七月のある日

牛込　平塚白百合

電車にのると鞄や包をかゝへた學生らしい人が新橋方面へと大分のつてる。

一たいに身體がゆるんだせいか居ねむりの男が二三人でくすいてゐるので速力が加はると共に壕からくる風がほつれ毛をかほにもてあそびながら後ろの窓へとにげてゆく。

私はしよざいなさに折々瞳を走らせて車中の人を見まはした。

一番端が縞絽の羽織着た夏帶の五十位の男、どう見ても平打の指輪といひ金歯といひ、相場師といふ格。

隣が中學生らしい小倉袴。重さうに鞄を膝の上にあげて傍にも一つ包がかさばつて置いてある。お次がパナマの脊廣服、次が紫紺の袴の折目もくづれた女學生風の女。間を置いてお壕のよどんだ水がギラ／＼光つてゐる。

次が絽の重ね召した三十五六の奥樣。着物を腰のあたりでゆるめて洋傘を膝の間にはさんでゐる。こんな方は雨がふつたらそれこそ見得もなく裾をかゝげてお歩きになるらしい。

次が子守。すぐきつしりついて番頭らしい男。折々コックリ／＼とやつては子供の方へよろけるので子供は白い眼をしてゐたが立つて此方側へ腰をかけた。

お次は白髮まじりの髮を分けて帽子をかぶつた小使らしい男。ねずみ色した辨當箱らしい風呂敷包をかゝへて、右隣の角帽が默讀してゐる英書を眼鏡の上からにらんでゐる。

と見てゐるうちに赤坂見付で電車がとまつた。

乘かへの連中がドヤ／＼とまぎれ込んだので切角のもめちや／＼になつてしまつた。

私の正面はこん度鼻眼鏡の若い男がのつた。

望小太式のハイカつた樣子が何だかいやだ。眼鏡でしにヂロリ／＼賣品でも見るやうな見方をする。

何んぼうり物でもとおかしくなつたので窓の方へかほをよせて見ると眞實の賣物が絽縮緬の羽織を細い肩にかけて、三越ブエールにかほを包んでスラリ／＼と素足を長い裾にからませながら步いてゐる。

「何ぼ賣物でも」女の人はまつたく賣物だ、絽縮緬の羽おりを着た「眞實の賣物」と違ふ點は親が聟に賣るのと自分で遊冶郎に賣るのとたゞそれだけだ。

○嬉しかつた記

筑前　四手絹子

亡き母樣の十七年と云ふので、三年ぶりになつかしい故鄕の地を踏んだ。酒向敏子樣を、御訪ねすることにした。一面識もないのに、きつとお轉婆だと思召すだらう。と心配し乍ら後河原をサッサと御表札を宛に步いたが、夜のことでよく分らない。星の淡い光でかすかに酒向樣つてまあ妾どんなに嬉しかつたか知れない。杉垣めぐらした立派なおかまへ、こんな靜な所で河の流の音を聞いて、お好な詩文を想の儘にお作り遊ばす、何てお羨やましい方だらう茫然考へ込んでると、ハ……と誰樣かのお笑ひ聲、ハッと氣がつくと妾は門前につッ立つて居た。ためらつては仕方はないと思つて御玄關に立つて、御免遊ばせ、と聲かけると、やさしい方が出て來られた。早速來意を告げると、しばらくと仰有つて奧へいらした。今更らしく胸騷ぎがして、今か今かと待つてると靜な足音がしてやがて出ていらしたのが敏子樣、まア飛付きたい程嬉しかつた御愛嬌のいい小柄な美しい方、ボーとして、初對面の御挨拶も何て云つたか分らない。只嬉しさに夢中だつた。サア何卒おあがり



をさな心　下谷　安田榮

下さい少しは良いぢやありませんかつて大層喜んで下すつた、嬉しくて〳〵、でも餘り遲くなりますからつてお斷りした。ソウですかではきつと御ゆつくりお遊びに被來いつて、幾度も仰有つた。それでは又きつと參ります。と御玄關を出ると、まあ勿體ない門の外までわざ〳〵お送り下すつた。ソレではきつとねえ妾待つてますからつて、餘りの嬉しさにホロリとした。では左樣ならと盡きぬお別れをして、河沿ひにほてつた頰を、涼しい風に吹かれて家にかへつた。病院の汽笛は今十時を報じた。

その時敏子さんはどんな着物を召してゐたか、頭は島田だつたか束髮だつたか、それとも丸髷だつたか、たゞ「小柄なお美しい方と」だけでは印象がはつきりしないし、あつけない、ちかごろ住所姓名を書添ぬ人多し、冷花、美耶子、ふもと子、花子、貞子、躑躅及野百合、みなそれなり、四手さんもその一人なり。以後はゆるさず。

○地久節

淡路　加藤菊子

五月二十八日、朝から雨降りなので小舍芝居のやぐら太皷が聞えない、昨夜風が吹かなかつた樣に思ふけど新聞も來ない、所在なさに姪のいゝさんのお相手に太皷叩いて遊んで居るとまだ齒のはえぬ唇を動かしてヴアヴアア〳〵、オツチヤアなどゝ大人ではとても發音の出來ない事を言ふ、可愛い紅葉の手でお太皷叩いてるのもほんの瞬間で今度はハンドル、オルゴリンを持つて遊ぶ、是も暫くで次はゴムハンドルをお尻から口へ入れたりお頭から頰張つたりする、いつ迄連れてゐても倦かぬのは小供ばかりだ、無邪氣で可愛い――

午後旅行中の父上より御音信あり、共進會より直に那須の鹽原へお越しの御樣子、共進會は見たく無かつたが溫泉へはお供したかつた、相州鎌倉の繪葉書だつたのでお父樣にしてはハイカラだねえと云ふと皆が待かねたやうに吹出した。

妹四時過ぎ學校より歸る、地久節なれど田舍は式もなかつたとの事、あゝ過ぎ去つた少女時代が懷かしい、今一度寄宿舍生活がしてみたい。

手紙出す、三とせ前の今宵不如歸の武男さんになられた友の許へ。

かさねて言ふ、川島武男まことの名子爵○○○○○さんは金まうけの上手な趣味の低い策略の多い所謂當世紳士である、不如歸を讀んで泣くやつもコケ助だが、武夫さんをなつかしがるやうなのもしようがない。

○兄妹日記

麻布　花子

姉さんはしめだけでよいのよ、かいて頂戴！　とまたもせがむ、……でも學校の宿題じやあ無いの？私には書けやあしないわ！と優しくなだめても、――日曜だと云ふのに、母樣においてきぼりくつた口惜さに、一寸御不機嫌のてい、兄さんにあたつたり、私に怒つたり、さうかと思ふと奧で一人で――まあ泣てゐるので

せう？脱捨た母様の着物の上にかぢりついて！そんなにも淋しいのかしら……日頃の惡口もどこへやら……もう今年十五だと云ふのた……末ッ子は慘めなものだ……二月第三日曜日。

妹も行つた、兄さんも愈々出かける、お辨當持てきて愈々おみこし樣の御出かけ……やつと安心天下晴れての私の世！早く行けかしと祈てゐるのに——やア？、君、もう行くのか？あんまり早いぜ——と外からお友達！君まだか……まだかも無いものだ洋服も着ず遊びにくるとは、呆れる——もう九時過じやあ有りませんか、幾時に初まるの——と眞面目に聞てやつたら行た時から初まるのだ——まあ君上り給へと引かへし上り込んで朝はらから「箙」をうなり出した、これでも、先生のある官立學校の學生です……三月二日。

姉さん今日も早引するのだから——書て頂戴と云ふもう今日は快いじあ有ませんか早引なんぞしなくつても——いやだの、昨日も今日もむづかしい試驗だから早引してさらつたと思はれるのが、だから、今日ももう一日するの、いゝえいけません、お父樣が御留守だと思て勝手なまねは……日記も書てないじやあ有りませんか——小言いひ〱とう〱、云ふが儘に書て與へた、小言も通るけれども、母樣の手前、妹に一歩ゆづつたのだ——負たのじやあない、あゝ、どうしても内面と事實、外面と眞實とは一緒にはできぬものだ、實の姉妹の中にも目に見えぬ、ある、一種の制裁の爲に、違へられてゆくのだ——三月十日。

兄さんと弟と妹とをうはツつらだけあてこすつた文なり、これ位書かれたつてへこたてる氣支もあるまいが、御近所づから江森よし子さんが遊びにいらすと妹さんは中間入して盛んに何やらを吐くといふからいづれ十七あたりにはなるだらう、こまる、こまる、から上下からいぢめられては。

土手のすゝき

△わたし一生お太皷には結ばない積りなのよ(みや)

杖を突いてよだつてるようになつてからも矢の字を背負つて歩くつもりだと見える。

△お前は涙の十の字も知るまいつて、まー先生憚りさま、これでも女學校は優等で卒へました、假名でも眞名でも「なみだ」位ぞんじてをります。(蔦)

そりや、えらい。

△弟がハンケチで包んだものをぶら下げて來て、姉さん兄樣があなたへてよこしました。まあさうといそいそ受取て明けたら、青いのや紅いのやいくつも蛙がはね出して。(名なし)

蛙がもし蛇だつたら。

△「お前は幾歳におなりだい」と歳改め、そらまた始まつたと思つてゐると、「何だ二十九？うそお言へ、九つはおまけだらう。私なんかお前の年にはこゝへ來てゐて、一度だつて仕くじらない、よく届く嫁だつてほめられてゐたものだ、いつ迄も飛廻つてゐるのはよして早く家事を見習ふようにおし」病氣だといふからお

見まひに上つたのに……。(千とせ)

千とせさんのお年が二十九でないことはわたしが保證する。それから誰かさんのように美人の自慢もなさらないけれど、手だって指だって第一つ持ったあとの無いほど美しうおはすことも保證する。

△夜、古事記を讀む。明日は叔母様がお出る日。(みい子)

甲乙丙丁相ひきゐて『不如歸』『己が罪』に渇仰してる中にありて、ひとり古事記に喰てかゝるのはたしかにえらい。試驗してあげう夜多能、比登母登須宜波、火朧里安理戸毛、泳富岐美志、余志登岐古沙婆飛戸利阿理登母。右說明

△さあ今日はお餅搗だからと幾どゆすぶつてもグウグウばかり、何て氣らくな方だらう、やつと起こして杵をもたして、旦那さまのつきて、私のこねとり。(まさ)

御馳走さま。

△十月三十一日。國の義妹から「姉さん氣をおちつけてよくよんで下さい、あのね姉さん、義兄さんが死なれたんですよ、十月二日に、何病氣でかまだわかりませんけれど、お知らせします」とあつた。あゝ私は生來こんな悲しいことは知らなかつた、おうつし出して涙のかぎり泣いた。あゝ兄さん私は何といふ不幸でせう。(〇〇)

十月二日に死んだ兄さんを三十一日まで家から知らせなかつたのだらうか、あのねといふ書き方にもおどろいたが、あゝ何といふ不幸でせうと泣いたにも驚いた。

△廣い森は非常に靜かで、千妙寺の鐘が村を越え川を渡り森をすぎて平和なひゞきを傳へる。私は何となしに泣いた只ひとり世に殘された思ひがして、牧場に新しい星が輝いた時、冷たい頰して野の家に歸つた。(枯葉)

常陸騰波江村若柳とある、自分の村とは一里しかへだつてない、しかも堀一つで境を接してゐる、千妙寺は黒子のお寺なのはわかつてるが、牧場はどの邊にあるのですか。

△お仕事はそつとしておいて頭を左右にふつて考へたが、母さまに見つかつてはと心配で顔はほてる、眼はぼうとする、あゝやつぱり沒書になるだらう。(足立子)

頭などふるからよけいいけない、泣くのが一番いゝのです。

△夕方柿を落してると隣の勇さん學校から歸つて來てデモちやん扇がてはれるよといふ、大きなお世話よ。(ちよ)

面目躍如、こんな細君をもらひあてた人は幸福だ。

△短文が小さい字で出てゐる、天賞にならなくも出てさへゐればいゝ、記者さまは不公平をいやな方ばかりと思つてゐたらさうでもない。(大)

御めんなさい、わたしはその上わる口が上手ですから。

△伯母さまいらしてよく精を出すねとおつしやる、義兄さま、日曜には誰かゞゐるもんですからつて、憎いこと。そのくせ姉さんにはやさしいのだから。(慎)

あゝ人生聟となる勿れ、おや父の外に小じうとがゐる。

△いよ〳〵今日「女」にならなければならない……私はやはり嫁ぐ人なんだらうか。(あい子)

人妻になることを沼津あたりでは女になるといふのですか、驚くことはない、あなたはいまに男にもなるのだ。

△この次には六圓にしか願へませんなといふ。誰がお

前のところへなど二度來るものかと口の中で言ひ〳〵質屋を出る。九段下まで古本屋を一つ一つあたつたけれど去年から探してる「みだれ髪」はやはり見つからない。（春）

質屋通ひを遊ばしながらみだれ髪をさがすと聞いたら晶子さんはよろこぶだらう その子二十くしに流るゝ黒がみのおごりの春のうつくしきかな けれどこれはこの人をさすのではない。

△雨の音をきゝながら知らず〳〵涙がにじみ出る、深刻な春の哀愁にいつしかとりつかれる。（翠）

狐がとりつく幽靈がとりつくといふことはある、心ものいゝものぢやない、春がとりつくといふのもキビがわるい。

△烏にまでアホと鳴かれると世の中がいやになる、いきなり夏蜜柑の種をはふりつけてやるとどつこいといふ顔をしてよける。（文月）

蜜柑のたねの屆くところまで來て烏は鳴いたのだらうか、それとも種が松の木のテッペンまで投がつたのだらうか、どつこいといふ烏の顔はどんな顔か。



支那人の行商　新潟　水澤蝶子

△おゝ母上妾は御身の想像したまへる女にあらず、妾は溫和の女にあらず、御身の賴となすべき價なき女なり、淚しきりに出でゝ路加傳十八起ちてわが父に往かむの句を思ふ。（敏）

今の世僞善者の最も多いのは宗敎界である、うすつぺらな信仰をいだいてアーメンぶつてるクリスチャンが多いからとて、この人の涙をないがしろにするのでは無い、果して確固たる罪の觀念を

持つてゐるかどうかそれを危ぶむのだ。敎へられたるバイブルが何になる。たゞ純なれ。

△すると車にのるのに丁寧に下駄をぬぐんだもの、人の前が耻かしくて／＼あんなひどい目にあつたことがない。(靜)

そして蹴込に腰をかけてさあ車やさんやつてと言つたでせう、話し家の話しを應用するとは。

△大禮服のまゝ腕輪も頸輪もとつてない、髪は亂れてリボンは解けてゐる、櫛も皆机の向うに、洋服の裾はふうわりと椅子のあしにまとひついて、靴の紐も解けかゝつてる、何といふだらしない姿、望んで居たハート形の中央にルビ・の星のついた衿止は、寢臺を覆ふ白布に織り出だされた撫子の花の上にある、夜、母樣と美代とに明日晝に着る衣服をそろへて頂く、紋羽二重の三枚重ねは先程着たのよりは幾分か模樣は宜い、然しこんな袂では地にひいて了ふ、帶と指輪だけはさよが見たてたゞけ氣が利いてる、長襦袢だけは自分ながらふるひつきたい位、クリーム地に織り出された胡蝶蘭がすきだからだわ、帶止の金具は金をすみれの花形に打つたので、その花の心にちよつと綠玉のみえてるのは、ちと、ハイカつてるけど大すき。

からだ中御光がさゝぬばかりに光つてゐるので、お家は瑠璃階上ニ赤沙ヲ布キ、碼瑙盤中ニ眞珠ヲ撒ク」といつたような大家かも知れず。惡くおどかしたものだ。

△Ａさんがガラリと戸を明けた、ＷＣに行つて來たのよ、とまた床にもぐりこむ、私もまたうと／＼……と夢にマイデヤレスト澄ちやんにあふ。(花)

ＷＣつて何處のことですか、マイデヤレスト澄ちやんはMALEですか、それともFEMALEですか。

△そりや姉さんなど毎日針と睨めくらでものいゝわ、私は學校があるのですよ。また學校／＼つていふ、遊びにゆくようなものだわ、ずゐぶんね、姉さん位ねることのすきな方あらしないことよ。あらあなたゞつて朝寢に來たように起さなけりやおきぬくせはとまた喧嘩だ。(一子)

こんなけん／＼わなら喜んで拜見します、負けた方へすけてもよし勝たかたにくみしてもよし。

△ことしは十七、人からは年頃といはれるし義兄さんまでゞきに嫁さまだなんておつしやるけど、いや／＼、私兩親共ないのに、浪さんぢやないが千年萬年おそばにゐたい。(みどり)

どなたのおそばに居りたいのか知らないが、肺病でもないのに武男さんと兄さんを一しよにしては小說にならない。

△雪江樣からお見立祝の御招待狀をいたゞいた、御不自由のない方は、おぐしの物からおはき物まで立派に仕度ができたとやら、けれど羨しいとは思はない、物質的の滿足を私は決して／＼思はない……もし私がどこかへ嫁く時には決して見立祝なんてしてもらはないつもりだ。(優梨)

つまらぬ事に苦勞する。

△房子さんが嫁入る……あゝ羨しい、二つも年下の方に先がけせられて、自分一人とりのこされたようで、

此事にのみ冷淡な兩親がうらめしい。（寒ちく）

あなた着物のほしい時お母さんに言つて買つていたゞくのでせう怨めしがつてばかりゐずと大びらにおねだりなさいまし。

△今日は新婚後はじめての野良行、あまり見にくき姿もならず、さりとてあまり美しきもならず……。（みち）

誰に氣がねして困つてるのか。茨城縣に稻葉といふ多額納税者がある、そこの先の嫁さんは埼玉の縣隨一の素封家から來たのだが田舍だからやはり野良へ出された、その時上には黄八丈の何とかを着て下には何とかを着て頭へは何とかを冠つて、まるで、芝居のお姫さまそつくりの仕度をしたので、それなり歸された。あなたもあまり美しうなさらぬ方がおためなり。

△蟬がてちてちやる、おかしいこと、けれどあれでどうしてSEXを見わけるだらう（あさ）

誰か鳥の雌雄を知らんやといふけれど、蝿だつて女は櫛もさしてれば笄も挿してるだらうと想ふ、おしろいは前の肢でつけるようだし、帶はうしろの肢でなでるらしいから。

△芳子さんの部屋へ入る、ゐない 通り合したきよどんに聞けば便所でせうといふ、待つ間の退屈さに大切がつてる日記帳を（ひさ）

斷りなしに人の日記を見るのはまだい、、待つ間のたいくつと主人公の御入國の長いのを嘲つたのはひどい。

△新聞に隱坊の罪惡が出てる、私も早晩死ぬる命、どうぞおん坊先生よ、お手やはらかに。（つき）

火をつけて尻からぽつぽと燒いてくれる先生にお手柔も何もあるまい。

△夜入浴に行て久ちやんの清元をきゝながらいつか落城してしまつた。（みどり）

落城？落城とは何ぞや。

△御命日の日。（伊知子）

御命日の日、新道みち、馬から落馬もまだい、、其席でお茶をまづお祖先さんが一服立てる、つぎは伊知子さん、お父さんお母さんもめいめい立てたといふからこれだけで大分腹が張つたらうと思ふのに、切腹した御家老樣の御命日とあつて舊藩のお爺さんたち五人まで來て、五人が又五人一服づゝ立てゝ、のませたと書いてある、大概丈夫な茶釜も九九八十一杯吞まれてはいきついてしまつたらうに、よくあなたのは何ともなかつたこと。

△受信函を見ると兄からポストの原さま宛の手紙がある明けて見る。（朗）

これはどう考へてもわからない、受信函といふから中に入つてるのは外から來た郵便ばかりであらう、兄さんは出すのをそこへ入れたのであらうか、ポストの原さまといふのは郵便局ののですかそれをまた明けて見るとは馬鹿もこゝ迄來るとえらいものだ。

△カラッと晴れ上がつた空に華やかに皐月の光が射して鯉幟が元氣よくはためいてゐる。今日學校からの歸り女子文壇を讀みく乾いた道を歩んで居ると色の黒い中學生が「生意氣な奴だなあ。」とさも憎く相に言つて過ぎた。妾は何だか心元ない哀愁が胸に漲つて冷い涙がホロリと落ちた。都だつたらこんな事なんか。（すみ）

東京ではしかし電車に轢かれませう。

△菜花の咲くころは草木も眠る。（宮）

咲くころ草木が眠るなら散るころはさめるといふのですか。草木も睡る丑三時といふことばはある、萬籟死したる深夜を形容したのだ。あなたはよいかげんなことを揑ねあげてひとりで眠がつてゐるのだらう、第一菜はそのねむるといふ草木の草ぢやないか、咲くころ眠つてしまつたら蝶のお宿をどうするのです。

以上　六月十五日　閱了



論　文

編輯局選

○觀劇趣味の變遷（天賞）

德島縣　吉田紫花

おぼこ髪撫でられし四つ五つのころには、芝居といつても芝居其のものが面白いか何うか分らない、只芝居に行くといふ其の事が嬉しいので、母や祖母などが仕度が遲いとじれて泣きだした事があつた、其癖見る段になるともう睡くなつて場所のどこであるかも忘れてお菓子握つた儘お祖母樣の膝を枕に睡つて仕舞つたものだ、小學校へ行く樣になつては同じ年頃の子供が忠義とか孝行とか善い行ひをするのが眼に付いて、自分もあすからあんな善い子にならう、きつとなるのだなどと、一人棧敷でかたくなつて見た事もあつた。

十二三の頃には、藝題の何であるか位に注意して來たけれど、まだ／＼切なる淨瑠璃の文句よりはお姫樣のビラ／＼簪が羨しくて、何だかリボン一つの自分の頭が淋しい樣にさへ思つた、其頃芝居と云へば一番に千疊敷を樂しんでゐた、牡丹や櫻や菊などのきれいな繪の付いた數へ切れぬ程な襖がスラ／＼と開いて、一番最後にずつと奥の／＼所に小さい障子が入つて無數の燭火が穩やかに靜かにゆらめいてゐる、あの樣な御殿へせめて一日でも子守になりと奉公して見たいと思つた。

十五六の頃からは次第／＼に劇の内容が解つて來て、賴母しい忠臣義僕の最後や痛ましい節婦の末路、戀に悶ゆる可憐の娘の上などには眞の涙を流して泣いた、其内さわりの多い藝題が好きで、妹脊山のお三輪が鱶七に刺されて死ぬ所が格別好きであつた、赤い友仙の振り袖を着たお三輪が、赤い絲を巻いた緒環を命の樣に掻き抱いて「此の主樣には逢れぬか、どうぞ尋ねて—求—さ—ま—」、血を吐く樣な臨終の繰り言、若い血

の湧き漲る同じ年頃の女の身でどうして無心に見て居られう、狂言とは充分知つて居り乍ら矢張り泣かずに居られなかつた。

二十の坂を打ち越えて、世の中を知つた今日となつては、芝居以上の慘事悲劇の事實が間斷なく耳目に入る計りでなく、人の上と計り思つてゐた悲歎は皆我身に寄せて來るので、態々芝居にまで泣きに行く餘裕などないと思ふ位である。

何事に就けても、あどけなかつた幼時を忍ぶ事は誰も同じであらう、亂れ髪掻き上げて明日の運命を思ふ夕、近い田舍町の芝居の太皷を聞いてそゞろに繰り返す心の歴史の芝居の頁、最初は無心に、中頃は同情をもつて聞いた科白も今は我身の上を謡はれる様に思へるのである。

之を論文欄に引張つて來たのは一記者の仕業で元來は散文として來たものです、勿論散文でせうが、比較的理智を辿つて書いてある、批評眼が高く、現在の自己を離れて客觀してゐる(評)



めをと　京城横田月子

○私の見たる東京（地賞）

美濃　篠田とみ子

東京は華かなそして汚い處だと思ひました。實際只今の東京には飽足らなく感じました、そりや三越や白木屋などでは眼がぐらつき出しかけましたが、總體に思つた程振つては居ませなんだ、新橋の停車場へ着いた時あたりを望みながら、あゝこれで日本一のと……小首をかしげました、でも御話してる間に御飯が出來たり、かん〱かゝん電車の便利、ぼう〱ぶう〱自働車の往きかひ、黒

塗の二頭馬車、上野や向島其他の櫻、續いてお花見に出る人の樣々、夜の淺草公園、銀座街、丘や坂の多い事、郵便の快速、お髮の工合、時間を惜む樣、皆東京ならではみられぬ圖だと思ひました、東京の水ときたらあまり綺麗でないと言ふより外ありませぬ、水道のねぢを捻ればざあ〳〵どぶ〳〵出ますけれども、繪もたゞならぬ櫻の手前言ふのが氣の毒だけれども隅田川の水つたら泥色して居ますもの、水晶の樣な長良川の水をみ馴れてる私ですから異樣に感じました。櫻田御門をは入つた時は身も心も引き締つた樣でした、畏くも　陛下が……と仰ぎ奉つては、遙かに九重の雲深く仰ぎみ上る計りでした、たらつと石垣から老松が吹き下す風に水なれてひた〳〵と何か神秘を語つてる樣で如何にも重みがありました。淺草へ行つて一寸遲くなりましたら、見も知らぬ男子が言葉やさしく、貴女は何處迄いらつしやるの私もあつちへ行きますからとか世間話から人情話を持ち出し、默つてりや途方もない手など握り出して料理店を指し乍ら何か一緒にいたゞきませうかなんていふのです、けれどもそれ位にはいはい言ふ私でもありませんから、出放題に大法螺吹いて私は劍術も柔道も習ひましたが、一度も眞實間に逢つた事はありませんからあんな事つまりませんよつて高笑ひしてやりましたら、遂に向ふから失敬と逃げて行きました、氣弱な女など幾何勉强つたつて、ぽつと田舍から飛び出して來る處ではないと思ひました、而し成功も東京ならではと感じましたけれど。

葛の葉さんの體格と、劍術を習ひましたと云ふ言葉と、其場の樣子を思ひ合して破顔一笑を禁ずる能はず、近來の大出來〳〵(評)

○はなれぐの家庭と學校(人賞)

睞布花子

就學生徒の保護者と言はれる人達はいかなる人だらう實際を見たいと思ひまして、母の代りに妹の學校に參りました。當日招かれた家庭は二年と五年でした、一級百三十名合て二百三十名は確です、夫れに對して集つた家人は二十名程でした、意外の少數に驚きました、中に父兄とも見るべき男子は唯三人でした、先生方にもお氣の毒に感じました。

たま〳〵口を開けば、異句同音に、どうもお轉婆で、どうも親を馬鹿にして、少しも申ことを聞きませんでと言ひ合て居る、淺ましき女よ、母よ、私は深く常識のない親達の多いのを恥ぢました、あゝ全校六百の少女達よ、淺ましき母を持てる家庭の中から常識ある人が出るや否やを怪みます。

せめて人の母たる人は、語るに足るだけの常識と長所

潮が欲しい。

常識は一朝一夕に得られるものでは有りません、日常の感化が大切で、缺點のみを語つて謙遜の態度と思ふ程の親達では情なくなります、夫れは缺點もよいが語る處によると思ひました。せめて家庭は子女の一擧一動に注意して、いづれに趣味を持ちいづれに特長あるかに氣をつけて欲しいのです。

缺點のみ聞かされた先生達は、必ず生徒に注意を與へます、家からくると叱られると思ふので生徒自身は家人足止の工夫を考へます、又家では暇をつかつても得る處が有ませんから自然と遠かります、一度熱した教育熱もさめます、倦怠を感じます、無理ならぬ事ですあゝ教育家の立脚地も哀れです、社會の輿論に身を傾けては時世を思ひ輿論に滿足させ樣と焦ります、焦せつて熱誠に生徒に説いても、實行の芽を出さない内に家庭の爲めに摘れます、意志の違ふ家庭と學校の間は近くとも連絡は付きません、同じ靴を穿いてゐても、校門をくゞる時と歸つて靴下を脱ぐ時とは心持が違ひます、學校と家庭と別々の頭を持たなければならない生徒も可哀さうです。

眼の着けどころは至極痛切でしたが、文章の垢拔しないのが惜しいと思ひます(評)

【秀逸】

○時間の正確

府下 水口しん子

家庭の信用不信用とは、日暦がはがれて居るのと居ないので解るとは、昔からよく申された事で御座いますが、此頃では時勢の進歩につれてそんな不秩序な家庭が少くなつたのは喜ばしい事でございます。然し一般に時間を正確にしようとする今日では、時計の正確不正確が其家庭の信用不信用を語つて居ると思ひます、午砲もなく汽車もなく其他時間に關しての機關のない土地ならばいざ知らず、一日少くとも一回は座して居ても驗整し得る折が有ながら、分秒を爭ふ今日にても五分十分甚しきは三十分以上の時計の差を其まゝに置き、平氣の顏して居らるゝ家庭が澤山でございます。此れ等の家庭では些々たる面倒の爲めにかく差をつけて居るのでしようが、知らず知らずの間に千金の値ある時を日々幾何かつゝ損して居るので、これが月に積り年に重ねては大きなものでしよう。又之が爲に蒙る損害、迷惑が夥しからうと思はれます。然らして時計を正しくすることは、一に其家庭にある婦人の責任だらうと思ひます。

適切(評)

○紫と葡萄の女

妙子

時色よりも、白が好き、水色が好き。藤色よりも、納戸が好き、紫が好き、茶よりも、鐵が良い、紺が良いと云ふ女が紫派。反對が葡萄派。と私が感じて。細くて高くてホヽと澄ます女は前者に多く、丸くて白くてオホヽと媚びる女は後者に澤山あります。

紫の女は姫様と成り妓となり俠となり毒となる、葡萄の女は娘となり新造となりお三となり痴となる。都新聞に續きし洗髮のお妻の性格は、紫に似て紫にあらず、葡萄にして紫派を愛するの人。漱石氏に書かれし女は殘らず紫派の人、濃きに那美さん、藤尾さん、細に入りては後日に申し薄きに美千代、小夜子あり、一つも同色に非らず、同型のみ。青春の繁は葡萄の純なるもの大方の女性大方葡萄なり、一つは作者が男子にして男子は概して葡萄派を好むの故にしもあらんか、紫の女はすつきりとして、きりゝとし、しやなりとして、やさしきは葡萄の專有に屬す。時に紫は男子を下視して低きを選び自ら下るを悲しむの性あり……。羞を包みて紫怒れば葡萄笑つて無禮を見逃す。理と利、義と技、而して葡萄の女多し。紫に稍筆を利す、筆者の罪なり。紫の罪なり。人の妻には葡萄よろし。紫の女は獨り住居に月影清く夫よりも情人を好む。情人あるは葡萄、持つは紫、下つて妻となり、笑つて妻を與ふは紫。…などといつも。

一寸眼を惹くが、奇を衒ひ過ぎる嫌ひがあります(評)

○公と私と

香なき花

私の縣には縣の公有物としての馬車があります。公用にせよ私用にせよ縣の馬車ですもの。知事様が乘られるのは誰しも不都合を叫びません。而し縣の所有物、苟にも公の所有物を少し道理を辨へたものが、公用はとに角、私用に思ふまゝ使用すると云ふ事が出來ませうか。知事様のみならまだしも夫人令息令嬢下婢に到るまで横柄な顔して乘つて居らつしやる。私は女故かく思ふのかは存じませぬが、實に驚くの外ありません。知事様は縣の長たるえらい方でございますもの。私用にいか程御使ひなすつたとて少しも異存はありませんしかし夫人令嬢など、別に肩書もついて居らず、私らと同じく人の子ではありますまいか。只妻と云ふだけではありますまいか。偉い本人は如何ほど御使ひになつたとてあたりまへですが、夫人初め外の方々は何の名義で御使ひになるのでせう。果してその權利がありませうか。過日も七八歳の令息の只一人停車場より、御歸になるところを見ました、高が一人の子供故に、

苦しい思ひをする馬丁や馬や、果ては車の出し入れする人の手數如何ほどでありませう。私、世間の方々に今少し公私の別をよくわきまへて戴きたいと切に存じて居るのです。

成程一理はありますが、主人公をたてゝ、夫人を落した處は、まだ田舍式たるを免れません、痛くない腹をさぐられる恐れがあります、論文としては宜い題材でした(評)

○煮物について

四谷　桝崎佐喜子

東京の人は昆布を煮る事を餘り良く知らぬ樣です。八百屋の前を通ると昆布を水にひたしてあるではありませんか。こんな愚な事がありませうか。昆布の正味が皆取れてしまひます。昆布の正味を味ふには其儘頂くのが一番で煮るには砂と鹽だけ取つて鰹節を入れて煮たらおいしく頂かれます。それを水にひたすと味がなくなつて無味になつてしまひます。筍を煮るにも其通りでゆでるのは考へ物です、ゆでると本統の味が出てしまひます、ゆでないと白くなるのが嫌と云ふ人もあるが正味を食するにはゆでず鰹節を入れてやはらかになつた處へ昆布を入れると上等です。種々煮方を知つて居らるゝ方も多う御座いますが、知らぬ方も多い樣です。折角おいしく頂ける物を、まづく食すなんて實に詰らない事です。殊に女子は煮物にも心



食卓　麻布　津川ふみ子

を用ひなくてはなりませんから知らぬ事はきいて上手にならなくてはいけないと思ひます。

斯う云ふ話もためになります(評)

○虚榮の一種

東京　加藤さつき

私は昨日東京座の角で、内で使つてゐる木挽に、お花さん今日は、と聲懸けられて、ハッとした、もの心覺えてあんなきまりの惡い目に逢つた事はありませぬ、腋の下から冷汗が出て、顏が火の樣になつて、もうもう恥かしくて〱、思はずあたりを見廻しました、人通りの多い三崎町の事ですもの、行く人も來る人も一樣に私の顏を見て、冷笑する樣な氣がして、あんなみなりの人と、心やすいのかと思はれるかと思ふと、本當に侮辱された樣に思つて、昨日一日、氣持ちがわるかつた、今度うちへ來たら、けつして人通りの多い所で言葉をかけてくれるなと、おこつてやるつもりよと友の花子さんはさも〱口惜しさうに話しました、私はこれは大層な間違ひであると思ひます、虚榮であると思ひます、たとへ自分のうちで使つて居る人にせよ同じ人間ではありませぬか、又その木挽も、自分が使つて貰つて居るうちの娘であると思へばこそ、敬意を拂つて年少なる花子さんにも挨拶をするのではありませんか、侮辱されたと思へば、腹も立つでせうが、それは自分の一つの虚榮心であらうと思ひます、挨拶は貴賤上下の別なく人の禮義であると思へば叮嚀にうけなければならないでせう、それを侮辱されたと立腹するのは大なる間違ひではないでせうか、又人に見られて赤面したりするのは大なる虚榮ではないでせうかあゝ私等女子の最もつゝしむべきものは實に虚榮であると思ひます。

尤もです、そんなわけの分らぬお孃樣の行末が案じられますね(評)

○失禮な所感

尾張　朝香

草深い私の地方では嫁の話が出ると一口に「女學生上りなんか仕樣がない」とけなしてしまふのです、それが相當の位置にあん時代の新思潮にふれていらつしやる方々が、皆さうなのですから聞捨て難いのです。それを人は反抗とか生意氣だとか云ふのでせう、此點になると義務教育を了へた位の女の方は自分は學問がない、智慧が足らないと云ふので、姑や良人に服從する念が強いのでせう、此點を世間で歡迎してゐると思ひます、しかし盲從を歡迎するのかも知れません、若、そであつたなら同意は出來ません、が其内に是非學ばねばならぬ點もあると思ひます。

中等の敎育を了へた女子と云へば一家の主婦となつて

充分他を導き得る資格があると思ひます、それになんぞや學問もしない方と比較せられて弱者の位置にあると思ふと殘念に堪へません、之は詰り學問に醉はされて居るのであらうと思ひます。それが良人や姑を輕視する事になるのでせう。

はたして之が原因をして居ると云ふなれば女學校など卒業した女子としては在學中に養ひ得た素養を深く深く心の奥に秘めて置て一方には昵と耐へて他方には確い信念をもつて一家一族に化せられ乍ら化すると云ふ心掛けが肝要であると思ひます、であつて見れば世間の人は「二十世紀の家庭を形造るべき主婦は少なくも中等の敎育ある女子でなければならない」と此處に天地一變歡迎して止まないことであらうと思はれます。

行きづまつた意見ですけれど、新人も、舊人も、此說には反對が出來ますまい（評）

○良妻賢母と健康

伯耆　新田文子

何事をなすにも、身體が健康でなくてはなりませんが妾は、こゝに良妻賢母は必ず健康でなくてはならんといふことにつき、拙い筆で書いて見ようと思ひます。凡そ一家の内で主婦程家人に何事にも直接影響を及ぼすものはありません。主婦の一擧一動は、家人を快ならしめ、又不快ならしめ、善ならしめ不善ならしむるのです。されば、一家の主婦として良妻といはれ、賢母となる要素の一として健康の二字、最も必要だと信じます。

ごらんなさい、主婦の常に青き顏して、藥瓶のたえない樣な家は、何となく寂しく暗いではありませんか、そんな家に、成長する子供は、大抵因循で且つ沈默勝ちです。即ち嬉々快々の內に圓滿な敎育を受けないからです。ましてや、夫の事業を補助して、家運の隆盛をはかるなどは、夢にも見られません。近時中流以上の婦人などには三度の御飯が、味よくのどに通らず、病院に通ふのを仕事として、ゐらつしやる人の多いのは誠に嘆かはしい事です。妾は昔しスパルタの一婦人が、「あなたの身體は、牛の樣ですね」つて、或る人から云はれた時「ハイ妾もさう信じてゐます」と答へた話を、いつも心地よく感じるのです。然し是れは極端に走つたことですが、要するに我々は處女時代から、適宜に身體を鍛錬し置き、一家の主婦となつた後は健康な身體で家業を補任し子女をよく敎養し、以て良妻賢母と尊重せられ、國家、社會に、有用な婦人とならねばなりません。

確論（評）

○歩きながらの話

神戸　綠髮子

此んなつまらない事を申しますと御笑ひになるかも知れませんが感じたまゝを申します、迄二三日前の事で御座いました、私が學校から歸り道に私の前を某學校の方が三人程聲高らかに話しながら歩いて入らつしやいます。

お話しがはずんでお出なさるせいで御座いませう、御足が大變遲くて後から來た方がずん〳〵先へいつて仕舞ひますのに其方々は平氣で饒舌てをられます、私は道々大聲で話して歩くのは傍から見てゐると非常に嫌なものだと思ひました、なほ聞くともなく御話を聞きますと小説の有害な事を大變八釜ましくいつておらつしやいます。此方達のお説に依りますと、小説は若い人々を墮落さしたり又虚榮心を強める物であると云ふお話で御座いました、世の中には小説を讀むのは絶對的に惡るいと云ふ方も御座いますが、それに就まして私の愚考をいさゝか申し上げます。

小説に依つて、どう成つたとかかう成つたとか云ふ事は、ちよい〳〵聞きますが、それはつまる處自分が作中の人の樣に成りたいと云ふ心になるからでは御座いませんでしようか、小説を讀みましてから其終りを考へるのが必要で御座います。そしてあの樣な事をした結果此樣になつたとか此樣な事をした結果は彼樣な風に成つたとか考へます、又彼樣な惡い人も世の中にはあるとか、此樣な誘惑もあると云ふ風に廣い社會の有樣を知る事が出來ます、只それを讀みます時に自分の心さへしつかりして居りますならば、却つて社會の裏面を知り、合せて文章や本字を知る樣になりまして善からうかと存じます、つまらない事を申して御免下さい。

○交際欄に就いて

福井　北犁

私は交際欄に就いて、自分の思ひを述べて見ましよう、つまらぬ事ですがしばらく由自に語らせて頂戴、此の欄は尠らぬ利益あつて、又興味あります、如何に奥山がくれの人にても田舎都の隔てなく四方の人々思想の交換ができます、又土地の狀況も察しられ、何分か地理的、歴史的の觀念をも養はれます、私の樣な不才でもお蔭にて少々は知識も發達されたかと思ひます、しらぬ地の珍しいお話も聞き、此の頃は地理を學びましても何となく樂しく感じます。斯の如き益もありますが時によると非常な害を受る事があります、今の女子文壇の愛讀者は女子に限らず、男子にも多く愛讀せられるやうです、交際を願ふ者は女子に限つて居ないのですもの、りりしい男名を持ながら、卑しき女名に僞るとはめゝしい人と思ひます、私は三四名しらずに男子に交を願ふた事ありますが、其文字でも文句でもやさしく書いてあるものですから、女子だと信じて文通しておりました、もう交際の日も深くなつたと思ふ頃、始めて僕は男子なんだかばかにされた樣に腹立つて泣きましたが、親しくしてゐたものですから、ことわるもわるく、まー今まで潔白だつたから止せと思つて免します、「古人曰く過つて改むるに憚る勿れ」こんな詫でわびてきました時には、「朱に交はれば赤くなります」此度は男子となのつたものですから、堂々たる戀愛の文面をよこします、止さう〳〵と思ふ中惡くかんかされます、それですから少女時代の弱き心は、ともするとだらくの糸につながれる樣になります名を僞るやうな男子には必ず潔白な人はないと思ひます、御交換家諸孃よく〳〵御注意下さいまし。

○女教師

大和　靜子

よく世間では女教師は間に合はぬ、研究心に乏しい、やれ愛情が偏するの、常識に缺けてるの、事務が出來ないの、なんのかんのつて惡口許り私は殘念で〳〵堪りませぬ、そんなに女教師がつまらないものなら師範（女子）の必要もないでせう、立派に教員養成の目的を以て建てたからは是まさしく必要のある所以、然るに鬼や角と惡口許り。男教師だつてやれ誰がすきだの、僕は花をして居るのだ、君いゝ加減にして歸らうぢやないかそんなに働いたつて、なんぞ言ひながら事務を滯らすものもありさして研究もしてゐる樣には見えない、又時折授業を拜見さしてもらふと夫れは〳〵可笑しい許り常識にはづれた樣なものもあります、然るに女子のみに缺點をつけるのは何故でせう。



書簡文

編輯局選

○肩揚を下ろして（地賞）

中津町　橋村伊都子

私しこの前の日曜にに始めて肩上をおろしたわ、何だかきまりが悪るくつて斯う肩の邊が妙に寂しい様で表へなど出るとはづかしくつてならなかつたの――通る人が皆が私しを見てる様で――　宅の兄様つたら男のくせに第一番に目つけて「おや」つて變な顔してお笑ひなさるの、私し「はつ」と思つたが知らない顔してると「伊都ちやんもいよいよ一人前になつたんだねえハヽヽヽヽお目出度う」ですつて、ホヽヽヽほんとうに人が悪いたらありやしない、ですけどねえ、私し心の遠い遠いところで何んとも云へなくうれしかつたわ、おろした當座は自分でもをかしい位逢人に目がついてならなかつたの――お腰の曲つたを婆さんでもお父様に手をひかれていらつしやる様なお子さんでも――其うしてまだ下ろしてないお方を見ると何んとも云へない一種のブライドを感じますの――一人前になつたと云ふブライドかも知れないは――ホヽヽヽ私しは肩揚を下ろしたのよ、大人のおなかま入をしたのよ、ですからねえ此からは其のおつもりで御交際をして下さいましな、近々に變なスタイルをお目にかけるかもしれません、くだらない事を申して失禮、左様なら。

若い女が肩揚を下して感じる誇と、男の子が肩揚をとつた時の感じは非常に違ふ、女の誇は熟したる誇だ。此手紙はよく這般の消息を道破して居る、併し慾にはモツと深刻な鋭い感じが欲しかつた。（評）

○雨の日友に（人賞）

香野子

綾子さん今日の雨は如何。シト〱と粉雨の降る中をツイ〱と横に地をかすめて飛ぶつばめなんて實に實に詩的ね、此の雨を詩材として何かお作り遊はしてきかして頂戴、綾さん今お琴を遊ばしてたでせう、尺八は

どなたお上手ね、曲千鳥ね、あらかくしてもそりや駄目よちやんと二つの耳を持つてる私ですもの……青葉の影にほの見ゆるお二階のお障子なかば開いて遊ばしてる樣はさながらエンゼルの天降つたやう、ホヽ實際。綾さんちとお出かけなさいましな。雨ふり故おいや、何ですね日本の女が……貴女は雨がこわいの。それでは犬はりこね、ホヽおや失禮でめん遊ばせ。さあ何にしてもいらつしやいよ琴でもしらべませう、もうねちやんと仕度してあるのよ。すぐいらつしやいおめかしはぬきよ、お嫁にいらつしやるのとは違ひますからね「チチキトクスグコイ」の電報受取つたおつもりでね大至急よ。おめかし遊ばしたつておほめ申はしませんよ、今ね貴女のお好なものが出來たのよほらお汁の下に何とか云ふ字が附くの。ですから尙急いでね、さめぬ中に今は雨も小止となりましたから此の間にかけ出していらつしやい。然してろんではいやよ。

才氣の迸發なか〳〵スバラシく、イヤに美文辭典をひねくつたやうなお手紙よりこんな方がズッと面白い（評）

【秀逸】

○私の只今を春野樣へ

福井縣　片　山　里

お手紙は十三日の午前十一時、桑をこいて居りまして畑で受け取りましたのですが、あまりのおなつかしさに何回讀まして戴いでせう。すぐ御返事をと思ひましたが、あひ憎夜うらを三十枚宛もとらねばなりませんのでしたので、すんだのが丁度一時、毎日十二時より早う寢た事がありませんので、身體が綿のやうになつてよわつて居ります爲め、居間へはいるとすぐ臥れて、そのまゝになつてしまひまして、つひ心ならずも今日まで御無禮致しました。

私の只今。これだけで十分お察しが付くでございせうが、いつもならば機でも掛けやうか、小賀路樣へ裁縫によせて戴かうか、と思案する位ですが、何しろ今年は蠶に家中の手がひかれまして「水が無い苗が枯れる、豆や小豆の追付植を仕なくてはならぬ、菜種がしやがれる、二毛作も後くれた、中打よ、芋よ、胡瓜よ」と毎日てん〳〵舞ふやうにして居ます。今日も貴女朝から、桑が止まつたので樂ですけれども母と二人で、九十枚からの不眠を選つたのですよ、今、時計は三時をうちましたが、これから髪を一つ結つて、久しぶりで水風呂をたてゝ、四眠起きるとまだ〳〵忙がしうなりますから、副葉を斗鍋に一ぱい仕立て置かうと思ひますの、然し十時位に寢られると思つて居ます。青葉の里にて。

田舍の生活がよく分るやうにかいてある、氣取つてもなくスラスラと出來て居る。手紙文としての上乘（評）

○出でゆく前

愛知 華影

涼しい〳〵事ですけれど其の風をじつと樂しんで居られませんわ、何だか蓮の葉にコロコロする露、キラキラ光る朝日、趣ある海も旅の身には心せかれますのね昨日月の夜でしたつて其れは〳〵美くしい海景色、ああ佳い事〳〵と詩人ぶつて見とれて居てとう〳〵お揃のあの空氣草履に涙がどぶつと、察して頂戴、又之れから汽車に搖られて、今夜の月は汽車の中ですと、星ばかりの夜の方がなつかしいぢやありませんか、五日後には屹度歸りますよ、左樣なら。

言葉があまり省略してあるので、舌たらずの子供の手紙をよむ樣な氣がする。汽車の中でかいた樣な手紙だ（評）



郊外 青森 江渡けい

○さみだれの日

信濃 露の葉

樋を傳ふ雨垂れの音に、一との日靜寂は纔かに破られて、濁つた空としめぐ〳〵した地と、何のひゞきもありませんネ、さみだれの日の幾日はかくて暮れ、かくて明け、濡れた木の葉のうす光りが、さびしい色にゆらめかうともしないこんなとき私は泣きたくも泣けない叫びたくも叫べない、西南の空に雲の隙に洩れた青い色が丁度沙漠にオーシスを望むとき

は斯うだらうと、なつかしい。瞳をすえて見つめてゐると、あの雲の上を渡つて行きたいやうに思はれます、そしたならば其處に日の光が華やかに輝いて、美しい春を見るやうな國が、きつとあるだらうと思はれます。すべての物が目に馴れて少しの變化もない、私は急に思ひ付いて、爺やの鏺を借りて裾を端折つて小徑を步いて見ました、青草の露に白い素足の濡れた心よきに初めてひとりでほゝゑみました、後で母樣に叱られることだらうと思つてゐます。

机の上の燕子花がしほれかゝつたので、情なく今日は抜きすてゝしまひました。

雲に掩はれて居る山の向ふの國がなつかしさに堪へられません、此頃ちつとも郵便夫が來なくてさびしいのです、御察し下さい、さらば。

何だか手紙らしくない文だが、美しくかけて居る。趣きのある作だ(評)

○君樣に

濱松　萩花

「あら！時鳥が！時鳥ですよ」「なあに、あんな時鳥があるもんかい」――昨日もけふも一昨日もこんな事を云ひあつていまだに判決がくだされずに居ます。君樣承れば神經衰弱で御入院との事、驚きました。其後如何？ね、君樣、御病氣が御病氣ですから强いておすゝめ致しますが貴姉、當地へいらしては如何？田舍の事で何もお氣に召す物もないでせうが、宅の二階は全くいいですよ、此頃はお麥がすつかり、かりとられましたのでむかふのやぶの赤い花迄見えますよ、晴れた日は富士の遠望も又よろしうございます、すんだお月夜にぼんやりかすんだ遙の森の灯など見ますとお針やお總菜に追はれてる此頃でも懷かしい昔の憧憬をよび起さずには居られませぬ。思はず――ふと目はさめぬ五年の――などといつちやからかはれてます。塵の中の白いベツトに毎日思ひつゞけてゐらつしやるよりも決心してお出遊せな、新綠の香をかいで森の中をさまよふた許りでも病魔はにげちまひますわ、そして此二十日から半月餘演習にゆきますので私獨りで如何もならないんですの。御得意の西洋料理も御願ひ致しますから其おつもりで白いギタヤつきの前かけを――ね。其代り家をもつての初夏ですからまだうちは一本ありませんわ、お臺所も扇子よ――。二人で理想生活やつてみませう、あの時鳥の判斷も貴姉にお願ひ致しますから早くね――是非いらして……。ではまつてますわさよなら。

怖ろしく調つた文だ、照應法とか何とか舊式の修辭法の立ち場から見ても缺點のない作だ(評)

○別所溫泉より

長野　優梨子

二三日前に此處へ參りました。此間差上げました上田

橋の繪葉書ネ、千曲川のあの長い橋を渡つて、三里の道を車に搖られました。

小砂利の敷いた田舍道には、もうウンザリして終ひました。ゴム輪の樣に、音も無くすーつとなんて云ふわけには行きませんからネ。何時もより少し御念入れに結つた髮が臺無しになつて終ひました。

今日は朝から細い雨がしと〳〵と降つて居ます。只さへ寂しい養蠶時の溫泉場に、一入の淋しさを添へて居ります。暑中の賑やかな溫泉場許り見て居ました私は斯うした寂しい靜かな溫泉宿もまた好いと思ひます。お祖母樣は頭痛がするつて、お晝頃から寢んで被在います。私は所在無さに南の障子を細く明けて見ました。と、霧をふくんだ冷たい風がすーつと、吹いて來ました。石湯から淡く湯氣が立つて居ます。

石湯！千鶴さま、私は此湯が堪らなく氣に入りました自然に出來た岩の窪み、それへ湧き出る自然の湯！ゆるく漂よふ湯花の香に醉ひながら、底まで透き通つて見える湯にとつぷり浸つて、じーつとして居ますと、清水の湧き出る小石の下から、可愛い蟹が這ひ出して來るんですもの、堪りませんわ。千鶴樣は自然的とは思召さなくて？

信州は溫泉の多い處、隨分私も溫泉歩きをしましたが、此湯が一番氣に入りました。其かはり、町がせまくて、見る處は少しもありません。

難除の觀音樣へは、もう四度許りお詣りしました。只無意味にお祖母樣の後を附いて行くのです。未だ五六日は居ります積り、退屈で困りますから、何ぞ御手紙をいたゞき度う御ざいます。

溫泉場の便りには、もつと鋭い觸覺的の記錄がなくちやなるまい併しシツトリと、よくかけて居る。乾いた作ではない(評)

○萩香樣へ

牛込　平塚白百合

萩香樣、一年ぶりで環樣のソロを伺ひました。

場所は有樂座。はなやかに裝てらした人々の間にはさまれた私は百花咲き亂るゝ溫室にでも入れられたやう電氣の光かゞやく廣舞臺のたれ幕が音もなく上がりますと、右手からスラ〳〵と藤色裾模樣の長い裙を輕くさばいて、何人からかのプロセントの花輪さゝげて舞臺に立つた時、熱狂したやうな拍手は一せいにあびせられて、かろく會釋すると伴奏のピアノは鳴り出しました。歌はセーデの急激調、つゞいてグリーグのよき朝、幾度聞いてもあのふるへつきたいやうな肉聲には魅せられてしまひます。

樂の終つた時、よみがへつたやうまた更に拍手は去りゆく人の後から盛に起りました。

二度目は大きな花束をもつて舞臺に立たれましたの。あのチャーミングな容と肉せい。花束さゝげてうたつた姿は、一度お目にかけたうでざいます。

樂が終つて後もなほ拍手の音は去つてしまつた環樣の美しいお姿を舞臺に五度迄も呼びかへして、かるいほほゑみうかべた挨拶を皆熱望して舞臺は只環樣ある計もう五度目には去つて行く時、長い振りの袂に頰をおさへてはづかしげにお去りあそばした後姿。白い琥珀のおみ帶の蝶がぬけ出して羽ばたきしさう。まるでお畫でございました。

からうつとりして居りますとまだなめらかにメロデアをすべる肉聲の美しさが濃艶な紫のもやにでもつゝまれたやう、うつとりとなつてしまひます。

樂壇はまた花やかな昔にかへりました。秋頃はきつとまたでございませう。その節こそきつと〳〵御上京あそばしませ。これで有樂座の樣子が三分の一なりともお胸にゑがかれますなら結構でございますが……さよなら。

相變らず色彩の華やかな、併し刺戟性のない、金魚のやうな文章だ、美しいのも結構だが、手紙文とある以上は、もつと情緒のうるほひがなくてはダメだ(評)

○早く歸つて頂戴な

京橋　清香

兄樣、私の大事な〳〵玉やが昨日死にました、それは〳〵無慘にかみ殺されたのよ、ア、思ひ出してもゾッとする、いつも兄樣が獰猛な顔をして居るなと仰有つたあの眞黑なきじ猫に、ア、私まだ手がぶる〳〵振へてよ、咽喉を見事に嚙み切られて、あの可愛々々い眼をぱつちりと開いたまゝア、あの眼……可愛々々いあの眼、はつきりと今もなほ私の眼の底に殘つて居りますわ、私ね可愛想で、可愛想で聲を上げて泣きましたのよ、そしたら皆して馬鹿だねつて笑ふのですもの……ア、誰も一處に泣いて呉れないで……私口惜しくつて口惜しくつて、兄樣！兄樣も皆と一處にお笑ひなさる事？ね、お願ひ兄樣だけは笑はないで頂戴よね、そしたら玉やも私もどんなにうれしいでせう、私今日は淋しくて悲しくて一人で泣いて居りますの、兄樣どうぞ少しも早くお歸りなすつて頂戴な昨日までは玉やが居たから兄樣留守でもそんなに淋しくはなかつたのですけれど今はもう私一人ぽつちですもの淋しくつて、淋しくつて又母樣の事までも思ひ出されて――、ねえ兄樣早く早くお歸りなすつて頂戴な、もうお土産なんかいらないのくはしい御話しは御歸宅の上にて草々。

初めは平凡だと思つて居たがよんで居る中に感情の激した樣がヒドク胸をついた(評)

○海の國より

安房　篤子

愛樣、私今日海水服の儘海に立つて、富士の峰にかゝる華やかな夕日に彩られた鐘ケ浦の雄大なる景に、チャームされちやつてたんです、すると例のEさんが「ホ、モデル宜しくのスタイルよ」つて後から笑つてるんですもの、ほんにもう此頃のEさんの口惡たら一層よ、磯の子にすつかり感化されてしまつたんです。

色も眞黑だし、それに河童跣足程近頃は進歩したんですもの、私の下手なのを齒がゆがつて、無理に深い所に連れて行かれるには、一番閉口、此間なんかも少しで土左衛門になりそこねたのよ、で今ぢやあ此の御親切を無にして、浮と親友になつてぽちや〳〵やつてます、しかし愛さんの御出で頃には、屹度御師匠樣位になれますワ、早くいらつしやいネ、錺磨の帽子に服を着れば其割に黑うなりやしませんよ、大丈夫ですから氣取らないで早くいらつしやい、Eさんが御得意の、鮮魚料理を御馳走するさうですから。

之れから、夜の散歩に出掛る積りです。

清い月影に涼しい波の音、夢の様な島の向ふに、漁火三ツ四ツ水に漂つてる　が又素敵なんですよ愛さん。Eさんが、是非天晴れ海國女子の、鼻息を伺ひに來て下さいつて御傳言でした。さよなら。

隨分お轉婆よろしくのスタイルだ、（これは失禮）こんなのもキビ〳〵して居ていゝ（評）

○お母様に

直江津　磯巾着

お母様昨日は夏物色々送つて頂きまして有がたう存じます、手拭から夏りボン等何から何迄お心配下され、只々嬉しくて、包を抱いて泣きました。先日の帶祖母様のお氣に召したとの事何より嬉しうございます、深く先生に感謝致しました、お母様御深切にもお豆煎澤山下され、いつもながらの御いつくしみ、もつたいないやら何やら、涙と共に三粒四粒をグツとのみ込んで仕舞ひました。

額の汗をふきながら、かまどの前に煎鍋廻して居るお母様のお姿が目先に現はれます。今日は早速お心づくしの絣に着かへました。もう腰上げ無くした方がいゝと先生が被仰つて下さいますから取りました。帶の下から赤い紐がチラ〳〵見えるのが譯なくをかしうございます。母様本當に八月から退くのでございますか、其積で勵んで居りますけれど何だか殘惜しうございます兄様の大島の羽織は滿點頂きました。只今先生の羽二重の三枚重ねして居ります。先月三好様がお退きになりました。母様御存じでせう、よく私の家へ遊びに被居したハイカラな方ですよ、お姉様とお暇に居らした時泣いてお歸りになりました。私へ事とは思へませんでした、私も遠からずの中だと思ふと、身ぶるひがしました。私家へ歸るのが悲しうございます。朝晩先生の圓滿な家に家の者同様にして頂いて晝は多勢が一ツ板に並んで、面白い話しながら裁縫し、夜は小説等のお話承る、それが急に淋しい田舍へ引込んで、松に歌ふ嵐とくさむらに鳴く蟲の音を聞くより外にないのですもの、涙が自然に流れます。まあ母様とんでもない不孝申ました、お赦し下さい一日も早く母様の許でお手傳するのが私の義務ですのに、餘る二月を一心にはげみます。さうして先月送つて頂いた着物、皆仕上げて一負脊負つて參ります。其日には母様もの老松にもたれて待つてて下さい。



植木屋　下關　山田くた子

○姉様に

大和　靜子

姉様今朝小包がつきまして何處からだらうとみますと姉様からほんとに驚いてよ、急いで中開けてみてまたびつくり、實はね私姉様仕立直しの御仕事を送つて來たのだと思つてたの、そしたらまあ嚀しいわ、い丶柄ね、母様はね美もこんなに氣がつく様になつたかと大喜び、あの叔母様にも大自慢よ、夫から御申越の事父母様はね勉强するのはい丶が高師は止めて置く樣との御事、母様はね、いつ迄も一人で淋しい思をさすのは可愛想だから、早く嫁入さしたいそして孫を見たいとさオホ……、姉様ほんとに御止めなさい、ね何程い丶着物をきたつておめかししたつてあの御存知の池田先生の樣だつたら、つまらないわ、私達ねいつもオールドミスで惡口ばかりよ、夫よりも姉様あのアダム振の樣に實現して欲しいの、私は早く姉様が赤いてがらをかけた丸髷姿をみたい事よ、ね姉様さう遊ばせ、そしてね氣樂に御遊びなさい、そんなに勉强すると近い目が尙近くなります、眼鏡かけたもハイカラですが丸髷にはちと不似合よオホ……、昨日呉服屋が來まして餘りい丶柄だつたので送ります、姉様は色が白いからきつと此の色はよく似合ふでせう、先は御身御大切に、休みを樂しみに待つて居ます、さよなら姉さん。

きかぬ氣の妹さんと云つた風が現れて居る。女らしい常識的の文章だが、なか〳〵面白くかいてある(評)

○病める友に

金澤市　文月

花江様お手紙有難う、此頃は大分およろしいつてネ、まあ結構ですこと、私ですか相かはらずですよ、今では私人間ぢやないのよ、お不動樣になつたんですの、けれどもお互に忍びましようネ、とかく世の中つてものは成るやうにしか成らないんですから、いくら悲觀したつてするだけやぼよ、だからあなたも樂天家におなりなさいな、先日もネ口惡の兄が「何だお前のは馬鹿悟りだよ」つて笑ひましたよ、けれども私いくら笑はれたつて馬鹿悟りしますわ、馬鹿煩悶よりかよいと思つて、けれども二人は淋しいのネ、例のテニス會のことを思ひ出すとほんとにあの時は樂しかつたのネ、其選手が二人迄も揃つてこんな身にならうとは……あゝ思ひませんでしたわ、けれども花江様お互に運命だとあきらめましようネ先日送りましたハムレットお讀みになつて？若しおすみになつたらお知らせ下さい、此度はいたづら小僧を送りますから、ずゐ分面白いのよ。折角お氣永にお養生あそばせネ、病人には取越苦勞は禁物ですから　さやうなら。

不動尊と樂天家とはどういふ關係があるのか、しらないが、病身で居てハムレットなど讀むからいけない(評)

○日歸り

橫濱　貞子

お手紙拜見致しました、毎夕〳〵靜かなる高原に出て、あの靜寂なあたりの景色をながめつ丶、考るのが何よりの樂しみで御座います。私はもつと〳〵人蹤絕えた山の中が戀しう御座います、併し斯う蚊や蠅を厭ふ樣では其れも案じられてなりません、先達てはほんとうによくお立寄り下さいました、あまり突然なので今も未だ夢の樣でなりません、丁度一歲ぶりですわね……おめづらしいお話もたんと伺ひたう存じましたが、喜しいのでなにもかも忘れて仕舞つてました、あの日は無論お宿りの事と思つて、何のおかまひもなく、ほんとうに失禮して仕舞ひましたわ。お宥るし下さいませ。ほんとうにおつかれで御座いましてせう、折角お出で下さいましたのに、もうこれからは日歸りなぞいやで御座います、あの明る朝父も母も思ひ出した樣になんだ村本樣は今日もう千葉なのかつてほんとうに烟の樣な印象をのこしてなんだかものたりなくて仕方がありません、どうぞ又お出でになる時は御ゆるりとお宿りかけで來て下さい、松青い十二天のあたり又見落しがたいところも御座いますで。

ちよいと器用に書けて居る。烟の樣な印象は面白い(評)

○都の姉君へ

柏木　水口しん子

しと〳〵と寂しく降りつゞく此頃の梅雨都にはいかに見そなはし候らむ浮世はなれし片山里には陰鬱の稼さこゑといふ御心づかひならんも、時な

らずこわいものなき家には今少し降れよとの願に候。田草茂るに心置かる父上も都より初段の先生隣村に來ませりとて泊りがけに趣かれ、母上は好き雨にこそとほゝ笑まれ日毎日毎朝とくより御佛參に忙しく、兄上は去年姉上が縫はれた袷今年は二寸伸して檢査の晴衣とばかりにて昨日町へと旅立たれ候、何しろ時ならすこわいものなしの家は私が餓鬼大將妹と弟の喧嘩がたえまなく大騷ぎに候。梅雨降らぬ今月の始め兄さんと裏の畑の草刈りて田畔にふみ迷ふ旅人に、赤い襷のおかみさんと呼ばれて道問はれ、其夜は内一ぱいの笑となり申候、其御かみさんのがき大將が振舞は都の空にも可笑しく映る事と思はれ候。戰ごつこに勝つた者には賞品として庭の紅の焰と咲く石榴の花を授かる始末に候、美しき譽をこの片山里に朽ちん事の惜しまれて、其花一つ押花として封じ置き申候いかに武勳の芳しきかを御笑覽被下度候、餘り長〳〵と書き居る間に三眠よりさめんとする蠶の桑の葉つむを忘れ申候殘り惜しうは候へ共こゝに筆とめ申候。つぎは兄上の檢査の結果と田草刈りの面白き唄申上げて暑き都にそゞと田舍の風さし上可く候かしこ。

都會離れのした文だ、「赤い襷のおかみさん」は奇拔でいゝ、併しこれは柏木の事ぢやあるまい(評)

○旅立たんとして親しき友に

宮城縣　眞野圓葉

親愛なるH樣、私はとう〳〵明後日住みなれた家鄉を後に遠く旅立たねばならぬ事になりました、年の行かぬ妹は只一人知らぬ地に行く私の心中も知らずに姉樣が居なくなると御本や算術を復習つてくれる人が誰もないそれが一番困るし髮ももう結ふて貰へないと每日申してゐるんですよ、可哀想でたまりませんわ、殊には年來御親しくして下すつたあなたとも御別れせねばなりません、海や山やを隔てた地へ參るのですから一寸歸つて參り度いにも中々思ふやうにはなるまいと存じます、で此後何時またお會ひ申す事が出來ますやらまるでわかりませんけれどもたとへ春秋は幾度めぐるとも私は決して懷かしき故鄉を忘れは致しません何卒私の居ない後はH樣、妹の事をくれ〴〵も御賴み申ます眞の妹と思召してよく叱つてやつて下さいましこれさへ御承知下されば私は大安心でございます、あちらへ參りましたなら御手紙は度々差上げますからあなたもどうぞね、立つ前にお宅へ伺つて重ねて御賴み致す心ではありますが種々用事が滯つて居りますから或は此儘失禮するかもわかりませんが其節は何卒惡しからず思召し下さいませ。

眞情を以て優る、但し此世智辛い二十世紀の世の中に「春秋はいく度めぐるとも」などといふ甘い文句は少々困る(評)

○巡り逢ひて後

淡路　加藤菊子

季子樣、私はまだ夢から醒ませんわ、あなたが人妻となられて此島へ被入るなんて眞實に夢としか思はれませんもの、御免下さい、彼の日對座してお話しながら何だか狐につまゝれて居る樣な氣がしてなりませんでした、あんなお小さな赤ちやんがお在りなさるのに態々とよくまあおたづね下さいました、病の爲めに望も捨てて此處に佗住居、月にも花にもはぐれて此世淋しく暮して居る身にはどれ程嬉しうございましたか、今少しお止め申して寄宿舍の現在、友の行衞なども承りたう存じましたが丁度先生が被居つたので其意を得ませず殘念で御座いました殊に嫂樣がお留守で女中も使に出したあと病人の私一人でどうする事も出來ませず澁茶一服でおかへし申たのをお耻しう存じます。然し季子樣、最早途も家もお覺えになつたでせうから是からは赤ちやんをお連れになつて屢々お遊びに被入て下さいませ、今後はあんな失禮は致しませんから、久しう都にお在で遊ばして突然こんな離れ小島へ被入るとさぞ御不自由にお思ひなさるでせう、でも住めば都で私なんかもう何とも御座いませんよ、あなたとても其内お馴れなさい升よ其處は濵邊ですから漁人の娘たちの荒々しい行動、言語などはお驚きなさるでせう然し人情に於ては少しも異りは有まんが、旅の御身にはお心細う思召なさる折も御座いませう、私もお伺ひ申たいのですがいつそ梅雨があいてから海水浴に御地へ出て行く事に致し升、途の二十丁位健康で御座いましたら每日でもお邪魔に

上り升が今は中々容易では御座いませんの、是も寄宿舍に居た頃遠足好と評されて威張つて居たばち當りでせうね―又くだらぬ事を申上て失禮致しました、お手紙下さる時は郵便よりも魚賣にお渡し下さいました方が遙かに便利で御座いますから何卒左様遊ばして下さい、では是で

少し冗長だが心持はよく出て居る只もつと引緊つて欲しい（評）

○都の姉へ

山形　英子

姉さん私早く赤ちやんのお顔をみたい事、近ければ飛んでも行きたいワ、女の子ですつてネ私ほんとうに〳〵嬉しい事よ。

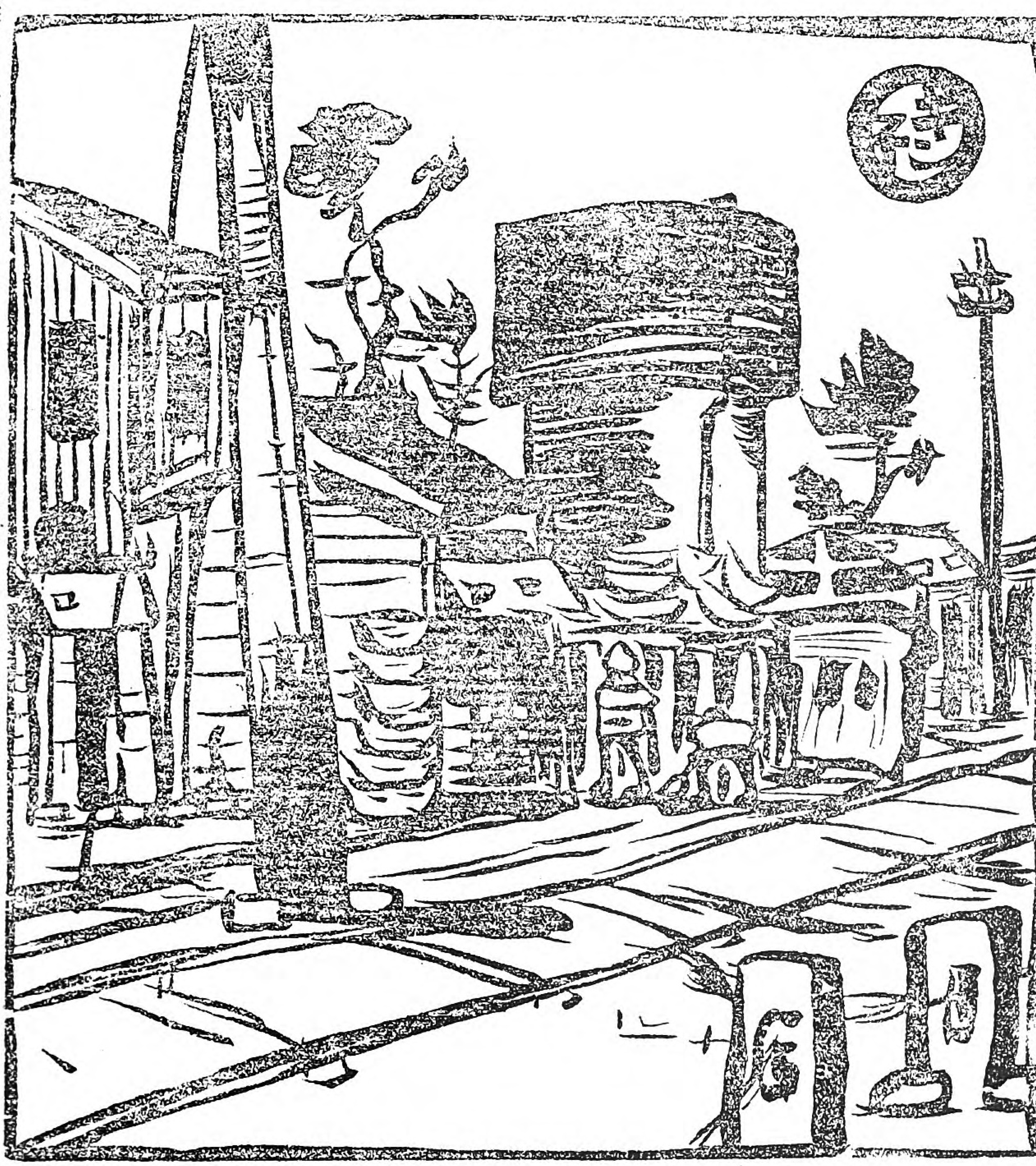
皆様は何故ぁ男が好い〳〵つて云ふんでせう私男の子大嫌よ、宅の謙ちやんなんかほんとうに仕様がないの毎日いたづらばかりして私の身體の半分しかないくせに延び上つて私の頭を打つのよ私と毎日けんくわばかりして居るの、だつて憎らしいんですもの

姉さんお名は何、思ひ切り――ハイカラなのを付けておやりなさいな、そして定つたら早く知らして頂戴、お何なんて付けちやいや私呼ばないからい、ワオホヽヽ

赤ちやんどんなお顔をして居るの、どちらに似て居て、姉さんに似たら丸くつて可愛い、でせう、儀兄さんに似ると大變ネあんなにお色が黒くつてそしてお顔が長いんですものオホヽヽヽでも儀兄さんにおつしやらないで頂戴お願よ

早く早く赤ちやんのお顔を見たい事、私お被布縫つて上げますは、そして私の人形も上げる事よ、左様なら赤ちやんへも、よろしく。

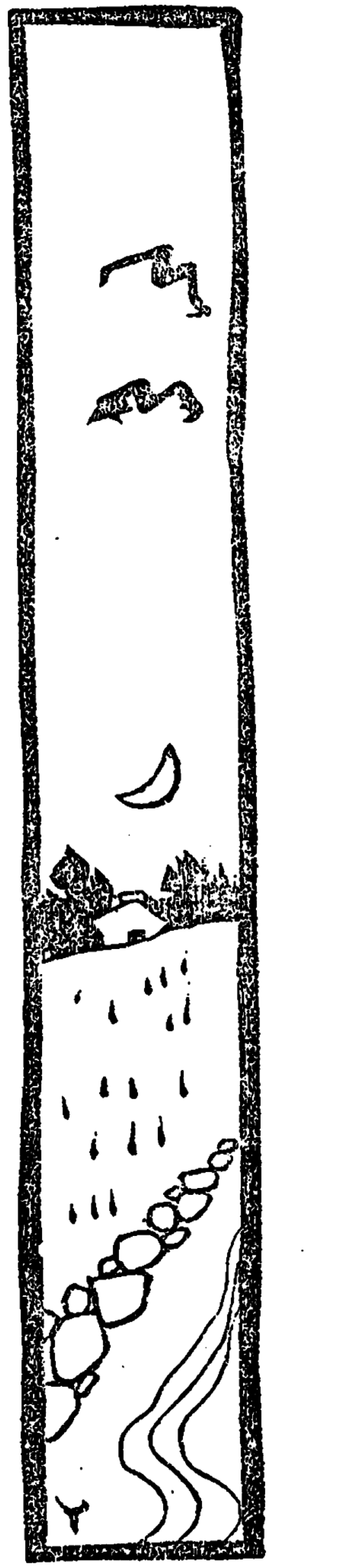
男の子大嫌ひといふ大氣焔が面白い（評）



濱松停車場　濱松　曾田きん子

短文

編輯局選



○狂氣の友（地賞）

石狩　みどり子

妾の親友の豐子さんは、幼い時親に惠川の岸へ捨られて居たのを、今のお母さんが拾つて育てたのだそうで妾は桃太郎みたやうですねと言つてお母さんの御恩の有難いことを、始終申して居りましたが、今春から精神に異常を來して遂に狂人になつて終つたのです、そして今ではお母さんに向つてお前は舌切雀の慾深婆あだなどと申して居ります

評　不盡の悲痛この飾らざる文より出づ

○蚊張の内（人賞）

本郷　齋藤八重子

蒲團の上へ起き直つて、恍然蚊帳越しに海を眺めると、樺色を刷いた空が綾に包まれたやう。帆の影も無く只、遠くから大きな浪が膨れ上つて來るばかり。と、沖から渡る曉の風が、そよ〱と吹き込んで、總ての景色が木目のやうに動く。

評　清爽、豪快、「遠くから大きな浪が膨れ上つて……」再讀

【秀逸】

○走馬燈

筆子

橋の袂に瓦斯燈がボーと燈つた、汀の柳が漆のやうな暗中に浮ぶ、雨上りで濕ひのある晩だ、泥濘が光る。と、黒い影繪が現はれる、笠を被つた人、提燈が飛ぶ樣に來る人力車、若い女の影も出る。斯うしてぢつと見てると、全で大きな走馬燈だ。

評　描寫の精彩を取る

○殿樣の御通り

福岡　建部眞久子

お父樣はお夕飯を召し上がると、晝のつかれが一時に出て、蚊の喰ふのも覺えずに、ゴー〱と鼾をかいてうた〱ねをなさいます、其時お母樣が「殿樣のお通りと云へば直に止む」

と仰しやつたので、其通り云ひましたら、まあ不思議、今迄の高鼾が、ハタと止みましたの。

評　可笑し、但し笑つて了ふにはあまりに意味深きところがある

○彗星　牛込　平塚白百合

髪もといた。お湯棺もすました。眞白な衣を冷たい肌に着せて椿の花の花冠頭に置くと、しゝ置のよい母様は少女のやうな潔らかさ。十字架を首にかけて六尺の棺に収めると、手洗に出た妹が、彗星つと、私は知らず身ぶるひした。

評　「わが父の家には弟宅多し」の語もかゝる時にこそ胸に泌まめ

○初夏　山城　木の花

賑かであつたお茶畠がシンとして遠近で蛙がなく、其聲の深底を聞きたいと焦て見た、一疋の蛙が啼く樣である一人ぽつちは寂しいでせうと重みのある風が頬に當る何やらの香もした、山の上にスウと雲が浮んでゐる、時鳥がなきさうな暮である。

評　何やらの香！捉へんとすれば既にあと無し

○豫想　深川　武田富美子

私が何か豫想すると、結局屹度それと正反對な結果になる、それはをかしい樣に此結果を生み出す、何故でせう？近頃はヤケで、自己の思想の逆に逆にと豫期すれば、意外!!此逆なるもの豫定は不思議に的中するサアかうなつてくると、氣はクサクサして妄念は益々蔓延うとする

評　老いるとだんだん分らなくなる

○夕の小川　水戸　白つゝじ

夕べの星のまたゝき始めた頃そゞろあるきに小川の邊に出るとギイーと音がして重い高髷うつむけた人と白條帽冠つた弟らしいのをのせたボートが前を行きすぎた、女の手には白や赤のコスモスが持たれて水にうつつてゐた……舟江橋の下へと………

評　小説のやうな景色

○盲目女　相州　和田學子

毎朝つい二三年前、盲目になつたと云ふ、面長のくつきりとした、三十才位ゐの、女が通る、いつも大きな聲で歌を唱つて行く、今朝も例の清しい美音で、「泣くな歎げくな諦らめしやんせ夢の浮世と誰が云ふた」、うつとりする樣な聲だ、あーこは彼れが終生の哀史ではないかしら。

評　夢と見んには淡からず、詩と云ふには慘に過ぎたり

お敏さん　大阪　葉紫枝

お敏樣は可憐想よ唯た二十三やそこらで後家に成つてと謂つてたのが一昨年の春其秋には誰彼の世話で金物屋とかへ再婚なすつた、『矢つ張りね』

と眉を顰めたのは此間の樣でしたに繼子があるとかで始終ごてごての揚句去年の暮戻つて去つて『獨身の方

が何程好いか』と笑つて被居しつた
が昨日髪結の話ぢや怎も……。

評　時の流れ、慌だしき人?

○夢　静岡縣　壽賀

でう文壇紙上の誰かと話をして居る「いゝわね」……はつと目がさめる。自分は日記文山卓の上にふして居た、終りのすが子とい人が何となくなつかしい「いいわね」…の前は何といつたらうどうしても思ひ出せない。

評　をかし

○ふたりの女　大阪　福井まさご

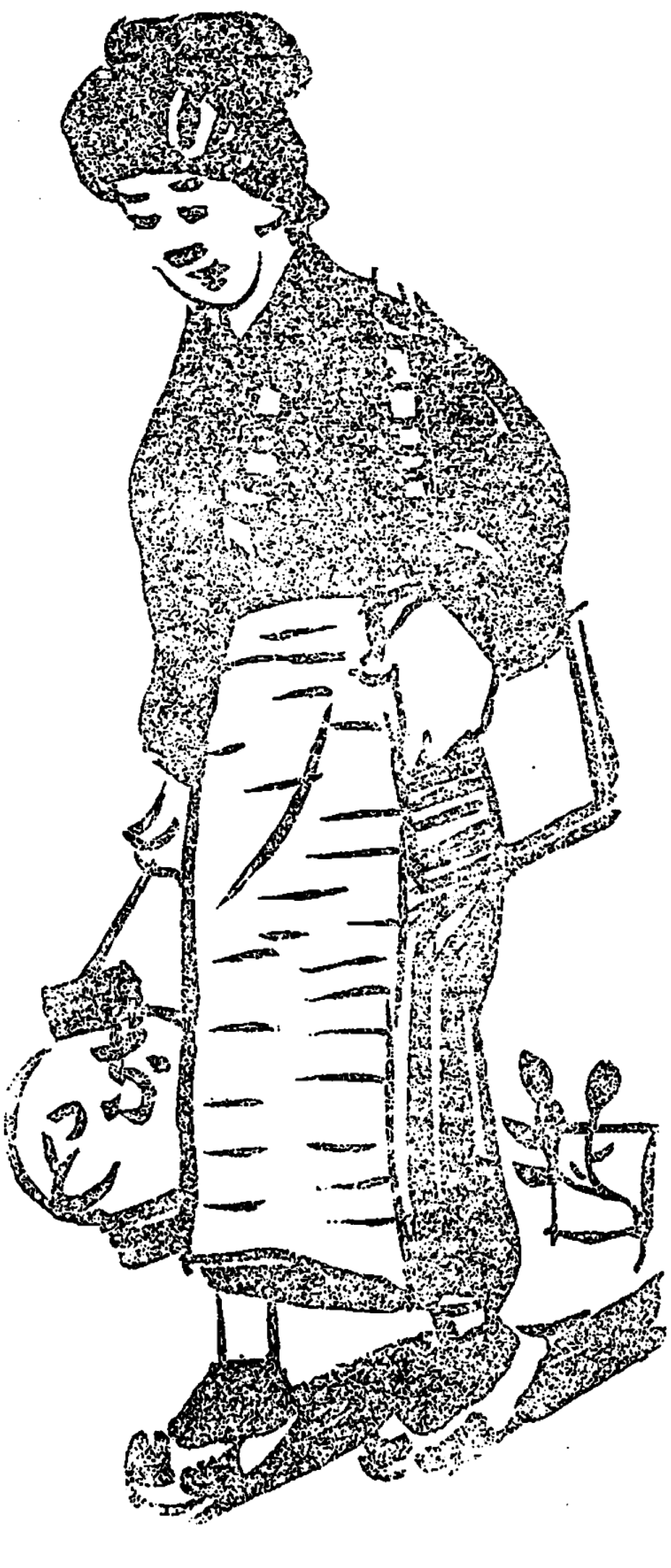
虚榮に憧れて資産家に嫁いだ妙子樣は幸福に暮して居る、名譽を思はず富貴を捨てて戀に勝ち得た春樣は矢張貧しい生活をしてゐる、妙子樣がゴム輪でかけ廻つて婦人會の音樂會のと交際場裡の花と愛でられてゐる時、春さんは良人と二人づれで縁日の植木屋を冷かして歩いて居る。

評　いづれがい、かまだ分からぬ

○五月十九日　霞　子

去年來待ちてがれて居たハリー彗星が今日こそ太陽面を通過すると云ふ當日往來へでるとあつちでもこつちでもいぶし硝子で太陽面を見つめて居る、やがて駄目だ〳〵と方々に絶望の聲が起てる鼻の先や目のふちへ見事に油煙をつけてる人もあつた。

評　莊厳の天、泥溝の地、而して滑稽の人?



小娘　和歌山市　かたばみ

○豆むき　熊本　波の花

梯子段を昇るにも道を歩くにも必ずその歩數を數へ障子の間、天井の板目時計の音、疊の目はては物縫ふ針目まで數へるのが私の癖、今豆むきの最中、あまり默つてるので話かけられ返事する間もむいたので三百五十七

までで分らなくなつた、惜しい。

評　こんな癖はいゝ

○夕　　韓國　露はぎ

漢江の濁流を眞紅に染めた夕空も次第に淡くなつて、峰から谷、谷から峰へと連つた四圍の古城壁から起る暮靄は徐々に雜然たる京城市街を包んで行く、佛蘭西教會に撞く鐘聲が止むと統監邸のアーク燈がパッと明るくなつた。

評　アラランの唄は如何

○蚊　　麻布　葉隱れ銀花

障子に止つた蚊をつぶした。罪だ罪だ、どうせ長い生命でもないのにお前は罪の子だと呵かれたが、あの醜い長い足を見ると殺したくなる。ブーンと耳元で鳴れた時は殺せ殺せと心が云ふ。殺しても殺してもとても盡きない、私の心の敵もこの樣――に盡きないのでは………。

評　殺せ、殺せ！あゝ恐ろしい字だ、實は蚊をつぶしたのだ

○勤め　　うすゆき

「石川先生、今日二時間早退さして頂きたいので御座います」、許されるには定つてゐる、けれどもそれだけを云ふのに如何程氣兼かしれない、教頭の席を幾度か覗いては、側の由起樣にも一早く仰しやつてお歸りなさいな」といはれる、家の病人も心配だ、「何卒宜しく」、包を抱へて職員室を飛び出した、初めてホット一息…………。

評　この間の氣苦勞、知る人ぞ知る

○昇級　　京都　京子

夕方役所の給仕が良夫の包みを持て夜は遲くなるとの言傳だつた包みの上には書簡一封殊更らに置てある縣廳からの辭令らしく封も切て有たから抜きだして見ると果して昇級のそれ豫て噂は有たものの今更の樣嬉しさに胸がをどる夜遲く待ち兼て御歸り早々御祝詞述べたら良夫は滿足そうに笑顔をなされに

評　おめでたう御座います

○家からの手紙　　大和　靜子

父樣はいつも勉強せよと仰しやる母樣は無理をしない樣身體を大切に、兄樣は試驗勉強はいけない、姉樣は友達にきらはれない樣、そして妹や弟は姉樣早く歸つて頂戴、迎へに行くわなんて。

評　かう云ふ人は幸福の具體者であらう

○笛　　篤子

ぐつと胸を張つて、首をかしげて、妾は、鏡の前で、笛を吹く眞似を始めました。白い五指の動きに、緋房がゆらと動いて桃割れの丈長まで、すつきり寫る美しさ、滿ちたほこりを、面にあらはして、明日から御稽古を始め樣と思ひました。

評　亦青春のおごり

○三色　　美濃　萬の葉

書かうと思ふ事がうまく頭へ浮んで來ないのに頭は人一倍くしや〱する、何ぞ氣の晴れそうなものと眺め廻つても高が室内、赤い日記簿が遊んで居るからと、瓶から青い蓬と菖蒲を抜いて露が滴るのに、夏密柑の皮をそのはたへ、無造作につけてこれで一安心、一寸氣がはれた。

評　これも近代人のすさび

○裾野の暮　　信濃　紅百合

草かりの馬の鈴音と幽かな歌聲が、コバルトに暮れかゝつた野面に浸み込むで夕日を受けた美蓉の峰がほんのり白く浮ぶと涼しい風が立科の麓に起てサヤ〱と濃く薄く緑の波をたゝせる靜かな八ヶ岳の裾野の暮鐘の音もきこえぬ。

評　羨ましい境

○白日の下　德島縣　玉野美人草

庭の向ふに教會堂の白壁が青葉がくれに見えてゐる。前の空地には一面に赤い夏の草花が燃ゆる樣な焰を吐いて喘いでゐる。其上に六月の太陽が明るく照つてゐた。教會の窓に繇へる白いカーテンの蔭には瞳の青い少女が一人立つてぢつと此方を見つめてゐる。靑葉を渡る風が折折其長髮を搖すぶつた。少女は默つた儘ほ、笑んだ。

評　とこしへに沈默

○母となつて　麴町　こう子

惜氣もなく白い胸を出して從姉樣が愛子へ乳をやるのを見る度埓らなく恥かしさを感じて居た私ももう母となつた今日極平氣で乳を出してそして少の羞耻も悲みも覺えない母となつたと云ふ一種の誇を感じて私は何だか强い〳〵ものになつた樣な氣がする

評　欺かずユーゴーの言

○雪　松江　淸き花

雪は淸きものに候。塵塚の上の雪も、破れし家も淸く候。雪は無情なるものに候。可憐なるたるひろひを泣せ候。雪は春の先導者に候。枯木に花をさかせ候。雪は憎きものに候。屋根より落ちし雪は友を殺し候。雪は憎きものにて候。

評　しかし雪自身はそんな事一向知らないのに候

○私の野心　秋田縣　齋藤りゑ

花の露を集めて風呂をわかし、湯上り姿に、ローズの香高きうすぎぬをまとひ、胸にスミレの花をさして、洗いたての黒髮には、白百合の花をかざし、櫻の雲へのつて、椿の宮とかへ行つて見たい。

評　お齡は幾つ？

○冷たい雨　南信　ひなげし女

何と無く濕ぽい、寂寥しい春雨の降る夕暮れであつた。

暗い冷たいシートには、柿色衣の囚人が二人、編笠を被た、死人の肌の樣な青い顏は、何時の間にかうなだれて、深い〳〵嘆息が、冷切たシートに波打た。

看守の物凄い悲慘な顏。氷の樣な鐵の鎖。汽車は冷たいレールの上を暗い冷たい雨の中へ。

評　「今朝遞途春雨冷、檻車排夢渡幽關」と豪嘯したのは昔しとなつた。

○夜の病院より　信濃　淺田千代子

幾晩も眠らせなかつたので、今夜は more く眠で下さる。お母樣に斯樣な苦勞をさせていたましい入院してからもう四週間、格別全快とも思はれない。敷布、壁、カーテン私しを圍むものは皆白い、更けゆく宵のどこかの室から、時々苦しそうな呻吟聲が——肺臟を突く。

評　煌々たる燭光の不安は如何

○水村にて　西多摩　三ケ島よし子

菅笠と頰かぶりと散らばつてゐたのが列を作つたやうに田の畔を步いてどこへか消えてしまつた。燃え狂うた夕日は空の限を眞紅に染めて、はてしない田の面は血しほを流したやう。折しも夕しほさへさして植ゑたての苗が浸されてしまひさう。

評　いつものやうに振るつて居ない

○この刹那　茨城　川和田初子

私の家の裏に一本の大きな欅の木が有ります私はいつも夕方此木に心ゆくばかり身を凭らせて瞑想に耽るのが常で有ります。すると或瞬間私は殆んど自我を意識する事が出來なくなる時が有ります。私は此の刹那の事を筆にしたいと思ひますが書けません。

評　書かうとして焦る勿れ

○一種の不安　大阪市　鹿島綾子

大工と石工と庭造りとが每日出這入をして、裏の新築も來月あたり竣功るだらう。姉樣の緣談も既う整然と定つたらしい。一月の後姿に新しい兄樣が殖るのかと思うと何となく嬉しい。が、又其處に何とも言ひ知れぬ一種の不安が胸に蟠つて居る。

評　此種の文を見ない事はない、只御尤とのみ。

○わからない　四谷　荒木むら雨

「あゝ淋しい。外は面白いでせう私外へ行きたいわ」つて悲しさう、誰かが「それぢや連れてつて上げよう」と云へば嬉ぶと思ひの外きツと「厭」つて頭を振る、そして「私外へ出たいの行きたいわだけど行くのは厭なの」つて涙ホロ〳〵零す。私は一體何で泣くのでせう、何が悲しいのでせう。

評　此種の文も亦多い

○返辭と顔　花一輪

「妙さん一寸何々して頂戴な」と、母の云ふ時、「今是してからで好いでせう」と、入の字をやゝよせて……」「妙ちやんそれを取つて呉れんか」と、大兄樣の聲のする時、「また兄樣が……」と口にはいへど、笑つて居る「オイ妙さん芳を呼んでおくれ」と小兄樣の氣むづかしい顏の見える時、「ハイ」と直にはいふけれど、「またむづかしやが」と、心ひそかに叫ぶ。

評　なかく複雜なものだ、おかげで私も修業しました

○雨後　登葉子

兩岸の喬木は鬱く茂り續いて居る。千曲の水は緑をたゝへて滑かに辷つて行く。私は傘を傾けながら舟橋の中央まで來た。雨はさと止んで飯繩の雲は眞紅に輝き初める。近い山々を離れるふくよかな雲は脚下の水に浮んで私の赤い袖の影ともつれる。水は種々の色彩を亂して辷べる

評　釋氣を愛す

○朝露　沼津　渡邊とよを

草苗の先に美しい朝露が一ツブゝのつてゐる、朝日がさすと黄、青、赤むらさきと、いろくに光るその美しい事といつたら、夜のうちに空の星が、みんな落たかと思つた。

評　これもその單純なのがいゝ

○空き家　札幌　中原登美子

今年も昔と變らず隣の家は林檎の花で埋つて居る。池の水は綺麗に澄んで居るが魚の影も見えない枯た花片が澤山に浮いて居る許り庭にはあやめ牡丹が美しく雜草の中に咲いて居るが見る人もない蒼白い月は淋しくこの空き屋敷を照してお池で無數の蛙が鳴き出した實に淋しい屋敷である。

評　林檎の花が最情をひく

○月の行方　上總　青柳女

N先生の時間。目はいつも私の右を通り過ぎてK子さんの顏へ行く。そうく數へて置く積りだわ「夫婦は相和樂しなければならないです」ニヤリと笑ふそら又目が行つた。此時間はメて十八度。放課時間にT子さんがS子さん此時間は二十四度よナラぢあー私が六まけてね

評　驚いた、そんな事して勉强に身が入りますか

○矢張常陸が一番よい　古島花子

あゝ私は東京のやうな繁華な地へ生れたかつたなぜこんな淋しい所へ生れたのだらう私の故鄕は常陸の草深き山里である華の都と常陸野どちらがよかろう明けても暮れても私はあの紫の筑波おろしの風に吹かれて千草の葉末の虫の聲を聞いて月日を送つてをるけれど私には矢張故鄕常陸が一番よい。

評　矢張りさう落着くでせう

○兄妹　本所　きく子

隣の家の今年四つと六つの勝坊とはる坊とけんくわしてゐる髮の毛をむしられたはる坊はわあわあ泣く。通りかゝつた私は勝坊を叱つてにらみつけるとはる坊は姉ちやん馬鹿と攻擊の鉾をこちらへ向けて來たあゝ兄妹。

評　擧國一致の活小摸型？

○白百合の花　遠江　富永雪子

三年程前に、清子樣がお別の紀念にと、あの暖かいみ手で分けて下さつた、お庭先の白百合、昨日迄大きなふつくりした蕾が、今朝見たらもう眞白な、いや味のない花が開きました。さて清子樣はどうでせう別れてから今迄只一本のお便りだにありませんが今はいづこの邊にどんな月日を送つて居るでせう。朧。

評　花に聞かばやく

○思ひ出　讃岐　野菊

餘りの徒然に私は古い日記帳を取り出して見て居ますと、思ひがけなくも朝顔の押花がはらりとこぼれますのそうとひろひ上げてよく見ると墨あとあざやかに「明治四十二年の分この花は弟の植ゑしもの今はもう亡き人あゝ」と書いてあるのです、あゝ其時の私の心弟の眠るが如く逝きし面影がありくと胸に浮んだ、と同時にあつき涙がほゝを傳ふのを覺えた。

評　はかない思ひ出、はかない花

○蠶　福井縣　片山里

今日は四眠の起蠶をとるので、いつもよりは一時間許り早く起きて、桑を配る前に糠をふつて男はすぐ棚を拵らへにかゝり女は虫を拾ひにかかつた、晩に數へて見ると四劃掃して百二十枚になつて居た、夕飯の時には冷たい茶で、香の物ばかりを、この次には皆が棚へ寐ねばならぬそしてまたく忙そがしいぞと樂しさうに話して、甘さうに食つて居た。

評　充實した喜び、

○みぎわ　大阪　春の日

生温い潮風を袂に受けて漣の寄せる汀を見てゐると綺麗にすんだ海の底はよく見える汐の加減で小石が轉んで行く跡を砂が追かける細い細い藻がユラユラと夢見てゐる樣に浮いてその下を小魚が一匹白いお腹をピカリと光らして沖の方へ行てしまふ

評　潮香

滿殘

○傘のうち　野の百合

庭掃きながらフト節穴見つけた出來心一寸覗いて見る丁度きれいな孃さんがーとこれはあられもない當のお口へ何やらツトとたんお向ふからガラリ皺樣がハツト洋傘がかしがると風にも得堪えぬ

なよやかに中をゆかしく通つて行らつしやる

○五月雨の庭　徳島　西野富美子

燃ゆる樣な紅のさつき、寂びしげな木犀の白い花、芽葉の赤い楓の外は皆涼しげな緑葉、切石の上に一匹の蝦蟇が折々ベロリと舌を出してなに者かを覗詰てゐる、水門のきはに赤や黒の蟹が大きな鋏を振り立てて地下の穴に餌をはこんでゐる。



太郎さん　新潟　村田すみれ

○穏かな朝　長野縣　宮坂明子

私は美智子を抱いて前の田の畔を彷徨してゐた。不圖私は美智子を搖り上げて水面を眺めた。向ふの山、紅雲の斑に飛んでゐる空、若葉の森等が鮮明に劃然と田の底に映つてゐた宛然水彩畫を見る樣で私は凝乎と見惚れてゐたすると水の底の底の方に空がある樣に見えて來た。



俳句

内藤鳴雪選

○（天賞）

一人寢る奈良の旅籠やほとゝぎす　豊後　菅原芳子

○（地賞）

初夏の人なつかしき小雨かな　千葉縣　林美津子

○（人賞）

卯の花と知らで垣結ふ男かな　小樽　清田芳枝

【秀逸】

柿の花幾つこぼれて日は暮ぬ　備中　篠原繁子

早乙女や戀知り初めて美しき　相模　抽木とよ子

薫風や紙の折鶴甦る　越後　白石櫻村

五月雨に死るが如き案山子哉　町本ふさ子

あけ放つ寶庫涼しき青葉哉　島根縣　森千代子

朝露や蛙飛びかふ畔の道　大和　靜子

白躑躅壁に古びし詩一首　越後　藤原竹子

山見んと障子明くれば風薫る　櫻井了子

兒の蚊帳によべの螢の又來る　萩原とよ子

金魚屋の軒のしのぶも夏近し　陸奥　三八城の月

日盛や染めほす布の藍かをる　陸前　仙崎幸子

露深き佛師が宿の螢哉　美濃　藤井すみれ

歌占のわるきは流せ夏の水　兵庫縣　林光枝

鶯や梅雨晴るゝ日の雜木原　京都　三宅壽賀子

蠻人の笛吹く舟や夏の月　神戸　森本豊子

溫泉疲れの眼に富士見れば甦る　伊勢　河戸しん子

歌思ふ窓に散りけり梨の花　伊豆　土谷すゞ子

白百合や谷間の清水わく處　西茨城　田村波津子

尺八の音は何處ぞ月涼し　信濃　麻田いと子

夕涼み顔恥しと月の人　千葉縣　佐瀬よし子

五月晴蝸牛のつのの長さかな　大阪　高山米子

對島見ゆ三層樓や青簾　韓國　露萩子

喘ぐ牛問ふ人もがな夏の道　大阪市　鹿島綾子

鯨よる宗谷の沖や春の雪　石狩　げん子

引かれたる我袖もあり土用干　同　王子　きよし子

物賣の聲高く夏は來たりけり　京都市　要司村福子

五月雨や雞も聲さへわびしくて　伊賀　文子
衣更へて青葵の庭に遊びけり　下關市　山田くに子
藻の花に蝶の飛びかふ入江哉　東京　牧野銀杏庵
燈臺に灯とぼす頃や凉み舟　同　石井すみえ
つれなさや花咲く頃の夜半の風　和泉　金田文子
歌低く桐の花散る夕かな　美濃　酒井蝶子
百舌鳴くや松の並木の朝曇り　岐阜縣　春野和子
ほとゝぎすなくや河原の月見草　松江　清き花
夢もまた匂ふ小窓の月夜かな　群馬縣　きよ子
はだぬぎて登る峠や風薫る　長野縣　臥雲紫子
うちはもつ女美し夏の月　府下　霞子
夕風や椰子の木かげに戀もして　大阪市　森柾葉都枝
池水や月にうつらふ姫小松　香川縣　香川國子
我衣あせたり花の散る夕　東京　林久榮子
行く春や何を噪ぎて木の鴉　福井縣　片山里
杣が家に宿りし朝や岩清水　府下　水口しん子
紫陽花や廢井の水の上を澄み　京都府　竹村槇子
蝙蝠や眞田が陣の二日月　東京　田代房尾子
雲を見る千疊敷の凉しさよ　同　樋口朝江子
蟬ないて清水に筆を洗ひけり　同　藤波
南門の巨人像や秋の風　越後　金塚美代子
箏の音や風の吹き來るすゞみ臺　三河　天野清子
車下りて紅買ふ門の柳かな　福井市　岸本てっ子
吹き颪す風冷かに紅葉散る　伊勢　田中みね女
燈を點すまつりもどりや五月雨　東京　桝崎さき子
五十三驛早馬の鞭風かをる　越後　新井田つね子
山寺や庫裡のうしろの瓜の花　岡山市　片岡民子
五月雨やあぶらもぬけし傘の色　群馬縣　江澤紫城
夕暮や蟬なきやみし奥の院　伊勢　村田よね子
埋火やかき起したる歌まくら　信州　山本操
菫野や乘らで具したる女駕　愛媛縣　近藤留代

灘十里眠るが如き霞哉　千葉縣　石井よし子
大座敷はなればなれの晝寐哉　小樽　矢木りつ
萩咲きて古りにし戀を思ふかな　東京　よし子
春の日や靜かなる野に雲のかげ　長野縣　津國泣月
舞姫のみ袖の匂ひや百合の花　東京　布川糸子
椽先や燒酎を吹く足暑き　新潟縣　高橋やす子
青葉して丸木の橋や雲近し　大和　堀好子
行く春の桑にかくるゝ小村かな　出雲　石合子
月一つかげ一つなる水の上　佐渡　本間綠子
別荘に近き此磯夏の月　土佐　保猪
蚊張越しや飛ぶ蝙蝠を月に見る　新潟市　水澤筆子
月影に昔しの聲よほとゝぎす　沼津　鳴田若緣
鳴き馴れぬ蟬や木の間の夏殘し　福岡縣　仲道靜江
賑しく群る蜂や藤の花　筑前　仲道澄子
長堤や木の間〳〵の常夜燈　東京　藤波
日盛りの香に吾醉ひぬ百合の花　同　佐久間貞子
黃菊よきか白菊よきか小春畑　越後　棒信子
溫泉の客の髮結ひ合ふや五月雨　下總　月沖百合枝
川魚の夕食の膳や月がさす　京都　水野まさ子
畑中や子に乳のます春の風　堺　中島白菊女
麥秋や里の乙女の麥細工　岡山　ちよ
欒玉や君がわすれし檜の扇　羽後　三浦ふみえ
橘の雨に庵主の病哉　同　菊地マキ
僧の行く後姿や夏の月　横濱　君子
白百合を手折りてかへる小雨哉　丹波　大槻幸枝
夏の月うずれて明くる波濤かな　東京　齋藤八重子
窓明けて虫の鳴く音を待つ夜哉　福井　北犁
一ト溪は我物顏や駒鳥の聲　長野縣　宮坂明子
足洗ふ小川の上の雲雀かな　千葉縣　佐久間和子
飛て來て書室に光る螢かな　越前　宇佐美貞子
夏の夜や病みます君を夢に見て　長門　須子花月子

誌友作家の進境

一記者

中

葉山しげ子　二三年前から増刊などのある毎に、ちよい／＼顔を出してゐる、材料を捉へることは甚だ機敏だ、『都會の婦人』に對話上野よりを書いたのも此君である、前號の裏の家と云ひ、其近業を見ても、如何に此君が一個の才媛であるかが知れる、餘り筆が切れすぎておつとりした處のないのが缺點であらう、此點に於ては水野仙子が田舍に居て修養を積んだことが、多くの功を成してゐる。

つゆ草　散文を書く君で、名が變つてから一寸眼に着かなくなつたけれど、此君の作には懷みがある、書いてゐることは多く主觀を離れた描寫であるが、何處となく苦勞人のやうな面影があるので、初め若奥樣だらうと思つてゐたが、矢張令孃であつた、日記風の文章が殊に自由で、女性的分子は著しく見えてゐる。

花子　麻布、葉隱れ花も同じ人で、此君の文章は混亂してゐる、甚だ讀みづらい、併し其狂亂的筆致の下に隱れたる熱があつて、一種呪はれるやうな心持がする、迚も女性でなければ書けない文章だ。

八代やゑ子　單にやゑ子として出すやうだ、此君は花子に似て、更に理性的、男性的の分子が加はつてゐる、自己を尊重することに於て、現代婦人の型に洩れないが、其誠實にして熱烈なる個性は、正しく尊重して宜からうと思ふ。

太田きし子　餘り多く作らないのが惜しいけれど、藝術を尊ぶ人と認めたのは恐らく誤りではなからう、作は多く詩であつた、其詩も作れば必ず人を動かするので、他の滔々たる模倣者流とは全然人格を異にし、一際眼に立つて強い情調が表はれてゐた、近く傳聞する處に依ると此君、遠く海外に赴く由、願はくは藝術の爲にも健在なれ。

山田邦枝子　多情多感の詩人肌である、此君、今は都會の渦捲の中に在り、男子ならば軌道を逸する恐れがある、婦人だけに常識的に自覺すれば、一家を樹立するに足る才能は持つてゐる、詩も作り、歌も作り、文も作る、今後の問題は、如何に世の壓迫に堪へつゝ自個の能力を發展し得るかと云ふことに歸着する、乞ふ幸に自重せよ。

前島優梨子　男性女性共に信濃からは文才の人を多く出す、本誌誌友中にも少からずあるが、山田太田を數へた吾人は、次で前島ゆり子を選ばねばならぬ、時に本多氏などに叱られる事もあるが、小說は確に上手になりつゝある、散文となると投げやりにして勞力を吝むのかも知れぬ、小說にも散文にも力を入れて貰ひたい、なほ年齒も弱からうと思ふから、將來がたのしみである。

吉田てま　紫花の雅號もある、德島縣の人、同縣からは比較的原稿が多く來る、今は此君が代表してゐる菊子に追隨して一方の驍將たるやも知れぬ、只餘りに冷かだから若い作家として花やかでない「**家庭日記**」に一飛躍を試み、爾來相當の作があるけれど、胸の血を躍らすやうな作はない、それを此君に望むのは不當かも知れぬ、寧ろ多方面の觀察を希望した方が適切であらう、多方面に進んだ方が發展の地の廣いことは素よりで大成すれば立派なものだ。

内藤千代子　折々彗星の如く現れては、彗星の如く去る、君は女性中の怪星である、文學に於ては解放されたる婦人の一人で、思想は必ずしも深くないが、或る一部の若き婦人が道はんと欲して言ひ得ざる處を道破するので、喝采の聲が其身邊に集るのであらう。

平塚白百合　東京印象記に現れたる一文は、平素の作に比べて一段の精彩があつた、短文が得意らしい、此君も能く書き能く語る、平面的ではあるが、觀察に女性らしい閃きがあつて、多くの讀者には慕はれる方であらう。

霞子　此君も以前の名を隱して了つたから新しい人のやうだけれど、もう二三年以前から筆を執つてゐる優しさと、柔かさと、淸らかさとを兼備してゐるから女性の散文家として申分はない、只多くを言はうとして、淺くなるのが弊で、之れ亦一面女性的の證左であらう。

せいらき　向日葵とも云つた、まだ外にも名があつて、此號にも好い文章は載つて居る、烱眼な讀者は屹度看破したであらう、初め詩に來り、後ち散文に移つた、眞情を僞らず表白するから、何人も動かされる、假令境遇が變つても執筆の自由だけは保たれたいやうに思ふ、此才を埋めるのは餘りに惜しい。

萩花　既に人妻としての思想も發表してゐるから、其前生涯の華美な文章を知らない人は、何人であるかを怪むかも知れぬ。併し對照してみると、處女時代の

作にも、家庭時代の作にも、一味の純情が流れてゐて、如何に若さに憧憬してゐる人であるかゞ知れるであらう女性なるかな。

矢野君子　他のものは餘り上出來でもなかつたが、小説は巧みであつた、暫く紙上に名を見ない。

月雫子　詩の方では岸つぎ子と云ふ、詩は少し無理があつていけないが、小説の方は巧みだ、小説の方には未だ是といふ人がないから、大いに振つたら宜からふ。

鈴木梅子　たへ子　多分姉妹であらうと思ふ、小説を出すやうになつてから、日尚ほ淺いが、小説の外に手を出さぬだけ、小説には得た處がある、未だ二人の中で何れが進んでゐるとも斷言は出來ないが、自分一個の考へでは梅子の方が好いやうに思ふ。

篠田とみ子　葛の葉とも云ふ、氣焔を擧げる人はわが文壇に少いが、此君は能く女性の爲に氣焔を吐く、滑稽の才と、機智の才とあつて、而かも甚だ眞面目である、長い文章より短い文章にテキハキとした逸品があつた、地方誌友中の一異彩に相違ない。

むらさき　石川縣のむらさき女も以前からの投稿家で、名が變つたけれど、作物には一つの特色を持つてゐる、詩も散文も小説も出來るが、何れも今一歩といふ處で、進みかねてゐる、何か一つに全力を擧げてみたら發達しさうに思はれる、此君は文字の才が多い割に、觀察が鈍い、文藝はだん／＼生物扱ひにされて來たから、地方に居てもうつかりしてゐてはいけない、大いに生きたものを俎上に載せて、料理する方法をわきまへねばならぬ。

篠原繁子　中國の人、紀行文がゝつた自然の描寫が多いやうだ、わが文壇には天然を描くに妙を得た人は少いから、少し奮發すると、眼に立つて來るのだが、まだ此君も稚氣を離れない、併し文章の質は好い方で記者は毎に注意して見て居る。

磯巾着　まだ特色は分らない、越後の人、毎月二三篇の文章は必ず見るが、女性らしい觀かたもある、今後の發展は何う？

以上の外、猶ほ蒲原早蕨、安木春子、美耶、佐分華影、曉花、金田代志子、原田琴子、あらゝぎ、片山千里、木村那賀子、夕ほし、三島葭子、鈴蘭、木村みしま、新田文子、笹舟、常世草、野の百合、加藤菊子、桝崎佐喜子、若杉とり子など澤山餘してゐるから、今一回短評を續けよう。



読友倶楽部

交際を望む

○三味線と琴　皆様私は西の都に日本音樂を何よりの慰藉としてゐる年若い者でございますが、私は三味線（シタン、コクタン、ケーキ）を三箱持つて居ります此頃又琴を習ひ出しましたが若し皆様方の中で右の三味線の一つと、琴とをお換へ下さる思召しがありましたらお願ひいたします、私は住所本名は社に通知してありますから往復ハガキで女子文壇社へお尋ね下さいました上で、何うぞ御一報下さい（S女）

○すゞ子様へ　私も同感でムいます、けれど殘念な事には有りあまる家事に忙殺されて居る次第でとても會の運動など出來ませんけれど誌友の方方が集合遊ばしたら面白からうと存じます、貴女方主唱者として熱心に御運動あそばして下さいな（長岡市の一寒女）

○あざぶの美耶様　私も先日まで麻布に居りましたの御交りはとても願はれませんけれど蔭ながらどんな方かとお慕ひ申してをります、都

會の婦人に出てをりました、始めて師の君を訪問せし記。始めから終り迄、續けてよむに堪へませんでした、私は悶えて泣いた彼の時を思ひ出してまたも新しい涙は……忝じけなき、師の君のみ心に反き、……公然と投書さへ出來ない身ですもの、樂しき集ひをよそに見るのは當然でせうわね、當日御出で遊ばしたお二方、あなた江森さまぢやございませんの、師の君のおん文にもございました。それとも花子様？（芝夕ほし）

○韓國より　學校を出ると間もなく父と共に當地に參りました、淋しい日を送つて居ります何卒熱情ある方に御交際をねがひます、寫眞の交換もね（韓國忠清南道論山中井事務所内、花代子）

○米國にて　私は三年以前故國を出で丶北米の野に彷徨する身ですが、文壇は今なほ愛讀してゐます、殊に繪ハガキ交換に趣味を持ちまして、昨年五月私より十枚、私の友人より五枚交換をお願ひした處が只一名の返薬ありしのみ本年二月又五名の方に願ひましたけれど只の一枚もお返しがないので、情なくなりました、貴重なる紙上を汚して不正なる行爲をする人があるかと思ふと口惜しくなります、何うか制裁の方法はないものでせうか（在米紐育、愛讀女）

○皆様へ御ねがひ　私は此の三月和歌山の女學校などに隨分な御轉チャンですが文學が非常に好きですのよ、と云ひますと一つぱし上手らしいけれども下手の横好きときてるのですものしかし私もこれからは出來るだけいろ／＼の束縛をうけぬ方面に修養して行かうと思つてますからどうぞ永久に御交際下さいましなそして私十八になりましたのなるべくならば同年位の方に御交際して頂き度いのよ只今はこゝ南紀の一山村に歸省してゐますが御手紙はどうぞこちらへ（和歌山市雜賀屋町出谷春子）

○御わびまで　大分御無沙汰いたしましたが誌友のみな様にも御變りもございませんか此四月頃から先日まで床に付て居りました爲めつひ皆様に御無沙汰いたしまして御ゆるし下さいま

せ其れから林久榮様先日は眞に初めてにて失禮いたしましたどうぞおゆるし下さいませどうぞおひまにはお出下さい（淺草區榮久町八番地島田ちか子）

○歌好きの方に　私は片里の賤が仲間の一人として、花や草木に憧憬れて、寂しく歌の中に日を送つて居ます、同好の諸姉様よ、可憐と思召て、どうか御交際を願ひます（丹後國加佐郡高野村薹内文子）

○永久に　御なつかしき本文壇お愛讀の姉上様方よ私は今年で前後六年間本誌を愛讀して居ります信濃のごく山の中に淋しくたゞ本誌を竊一の友として暮して居る者ですが、本誌のおかげにて西の都に一人眞實の姉様を得ました、なにを伺つても教へて下さる、私を妹として可愛がつてお交り下さるのよ――姉上様方よ是非自筆のエハガキ當地のエハガキ草花玉章の御交換下さいまして、お嫁に行つてもお子様が出來ても永久に御交際下さる方に願ひます御優しい同情ある方によ、一時的と男子の方は絶對にお斷りしますよ、都會、山國、海國、いづれの方にてもよいのよ。（長野縣下伊那郡鼎村五六二番地下枝よし子）

○歩かれぬ身　四谷の荒井すゞ子様谷中の倭子様おなつかしうございます、私も不具な身を泣いて居ります私のは足でございまして行きたい所へも行けず遊ぶお友達もなし只女子文壇を樂しみに生きて居るのでございます何卒誌上でお交り下さい、其他何病氣にかゝはらず不治のお病氣のお方は御互に淋しい心を慰め合つたら如何でございますお伺いたします（金澤ふみ子）

○俳句か和歌　妾は養蠶の片手ひまに歌をよんだり句を書いたりしてるのですが趣ある方々に限りエハガキでも單にハガキでもよいですから詩の一句なり歌なり句なりかいて送つて下さい妾は即時返信いたします（秋田縣由利郡院内村四十八番地薔薇園養蠶部内三浦ふみえ）

○俳句交換　本誌愛讀者の中で俳句の好き方は何卒永久に俳句の交換を願ひます（京都市上京區春日通吉田東道角、中島鈴子）

○皆様に感心　親密なる諸姉様よ私も讀者として頂きました故末々迄も妹と思ひ親しく御交際して頂戴よ投書の方は出しましたけれ共下手な私が書いた物ですが出ました時には笑はないで見て頂戴よ時々雜誌を見せて頂くに上手の御方ばかりですから私心から感心して居りまするよ又後誌にて（日本橋區本石町三丁目十四番地伊藤金之助方輝子）

○京阪神誌友會に就いて　大阪の畋野たけ子様先日は失禮誌友會の事[illegible]の通時候がどうかと思ひますから秋になつたら必ず開きましようね京都大阪神戸の愛讀者の方々様秋には誌友會を開きましようね大阪かどこか便利の宜しい處で開いて皆様に來て頂きましようね（神戸、百合香）

○虚榮を離れて　私は東京の隅の方まあつまり田舍ですねそこに淋しい月日を送つておる者ですが諸姉様のうちで虚榮をはなれて心より御交際下さる御方はないでしようか御手紙下すつた御方にはきつと〳〵御返事しますわ（東京市牛込區姿見橋傍稻葉海月）

○佐賀より　誌友の皆様私は當地高女卒業後わびしき月日を過して居りますから同情ふかき姉君方よ一時の徒然をなぐさめる爲でなく永久にゑはがき御玉章の御交換を願ひます（佐賀縣佐賀市柳町三〇、副島なか子）

○樂しき物語　此間淺野さんが見えて、又新しい本誌の愛讀者園部はる子さんを紹介して下さいました、三人で五六ヶ月前からの女子文壇を出して見て、いろ〳〵評をするやら、無遠慮なことを云ふやら面白うございました（麹町、伊津子）

○三河島より　私は先頃まで根岸の方に居りましたけれ共都合が有りまして片田舍の三河島に來ましたがこれからは益皆様と御交際致しませうと存じ升から皆々繪葉書なり御玉章なり御惠み下さいまし私は神に誓つても必度〳〵よ一層に御交際申たいのが栃木縣の方外國に御出なさる姉上様方とは御交際申度のですけれ共如何で御座りましよう、何分〳〵御願致します（東京府下三河島村三十四番地保坂定吉方、一枝子）

○變性　七月號に交際を求めましたら送られた葉書に玉章が、十三通あります。其中に男と思はれる物が五通あります。失禮かは存じませんが夫等の方には返書は致しませんでした。私は斯様女名に僞る様な男！男とは交際は出來ません。男なら男名で立派に交際なら交際をすれば可いぢやありませんか。無理に女名に僞つて交際を得ないでも。だから男名で一人玉章を下

さつた方がありまして、其方には返書のみは送りました。誌友姉樣方の中に私と同じ思想の人がおありだつたら、何卒玉章なり葉書なり送つて下さい、私は同じ思想の方が眞から好きなのです。若し私の考が違つて以前に玉章なり葉書なり下さつて返書しない方の中に、眞の女の方がおありなされたなら最一度、煩しいけれど通知して下さい、お詫びして改めて交際を願ひますから。（信濃の明子）

○再び　神戸のある學校に學ぶこととなりました結果いろ〳〵の都合で、しばらく諸姉上樣とお別れをいたして居りましたが、またこんどなつかしい姉上樣がたに誌上でお目にかゝることになりました、どうか以前にも變らない厚い御交際をお願ひ申します。（播磨揖保郡伊勢村藤井梢子）

○お別れ　記者樣はじめ博愛賢明の諸姉樣妾は悲しい事が出來ました、其は或る事情の爲め本誌へ投書する事を止めねばなりませんやうになつたのです記者樣今迄下手な妾の文を載せて下さつた御恩は決して忘却は致しません妾は投書は止めても本誌は捨てません清い〳〵愛讀者です皆樣妾を忘れないで頂戴よ蔭ながら本誌の益々榮え行くやう祈ります、次に是迄御玉章物品等御惠み下さつた伯耆の川崎爲子樣山田市の岡田てる子樣新潟の山田荻野樣小石川の市來みさを樣名古屋の加藤蝶子樣是れも前世の約束と思し召して許して下さいね、牛込の平塚白百合樣吉田紫花樣内藤千代子樣伊豫のよしゑ樣益々御振ひ遊ばして美しいお文拜見させて頂戴ね　さらば皆樣御名ごり惜しう御座います（備前國八濱町片原筋、板崎好枝）

○草深き田舍より　見知らぬ誌上のお姉樣方久し振りに誌上に顔出しましたは、私父の職の爲め、こんな草深き田舍へ來てゐますの、ほんとに淋しいわ同情のおありなさるお方がありましたらどうかお玉章なりと、御めぐみ下さい不束ながら御返し致しますからそして繪葉書や色々の雜誌を澤山に持つてゐますから御交換を（島根縣飯石郡來島村、深谷清子）

○お返事がない　繪ハガキ通信などを差出しても返事の無い方があります、其内、數人は京都の信子さん、今坂ならさん、名古屋の和子さん、新潟のみまりさん、京都の靜月さん、茨城のひさ子さん、同縣の霞桃さん、柴田仰子さんなどです（岐阜縣、加藤一子）

○廻狀　に御贊成を願ふ、誌友の皆樣御互に新思想の材料がえられて有益ぢやありませんか同趣味の御方は本月中に御送り下さいな私方で一巻として來月二日からお廻しいたします何卒盛大なる廻狀とならん事を希望して居りますの（京都市出水通土屋町松木絹子）

○看護婦になりたい　私はある事情のため京都若くは東京の大學病院の看護婦に成り度いのです愛讀諸姉樣の内で病院入學の規則御存知の方は何卒御知らせ被下度御禮として繪葉書御送り申します（大阪市南區生玉前町一六〇　崎方、小浪）

○疑はれたる女　誌友の諸姉樣方に不束の私しは去る三月號に自分の煩悶を他に洩す餘地がないので遂ひ誌上に訴てお情け溢るゝ御玉章や御寫眞など頂戴してほんとうに嬉しくつて〳〵仕方有りませんのよ而し困つた事には自分があまり亂暴の字を書きますので皆樣が男子の方と御思ひになつて御〆事下さらない御方も御座いますし私しは女性だと思うて文通したのに男子であつて見れば一時も交際出來ないなんて云うて來るので隨分困りますのよ、で色々云ひわけしてもお聞き入れ下さらないのです嗚呼どうしたら皆樣の御うたがひを晴す事が出來ませう自分は男では有りませんよ涙もろい不幸の一女です何れ近々に見苦しい自分の寫眞を皆樣に御目に掛けて御うたがひを晴して頂きます（柏木にて、細井芳枝）

○姫百合　七月の誌上にて御願申ました廻覽誌に御贊成被下ました廿名の諸孃には厚く御禮申上ます廻覽誌は姫百合と題して口繪には姫百合本欄には月の出、邪宗門より、一代志より皆樣へ、和歌紫靑（會員作）俳句詩（會員作）お知らせ夏木立（朝日新聞）みどりかげ（實業新聞より）其の他新歌謠雜誌二十八宿より等を掲載致しました、尚八月號には和歌俳句詩小品文俗唄なども掲出致しますから何れなりとも盛んに御寄稿を願ひます〆切は八月十日以後毎月十日〆切で毎月廻覽して樂しまうと思つて居ります、新らしき方の御入會を一入希望します（和泉信達局男里村八七金田よし子）

○東京林子樣へ　私六月號の本々壇で、あなた園藝に趣味をお持ちと承りお懷しく存じます

澤山お珍らしい草花種苗が繁殖して居るそうで御座いますが何卒私にも御分配下さいませ何卒何卒お願ひいたします（大分縣直入郡城原村四六九、渡部艶子）

○東京花子樣に　園藝に深く趣味を御持ち遊ばすよしほんとにほんとうに御なつかしく存じます私の方にも隨分いろ〳〵のものがあなたの方にないのがおありでしたら取つていたゞきませうねえ一度は話し致度ございますから御手紙ちやうだい（大阪北區澤上江町、古山ヶス子）

○昔に倍し　私は或る都合の爲久しく御無沙汰致して居りましたが又先月から愛讀者の一人になりましたから昔に倍してお交りを願ひます岡山市野ばら樣どうぞお交り下さいませ（岡山市下之町、立岡房野）

○音樂をお好の方　皆々樣の中にて音樂に趣味御持ちの方又ハーモニカを御吹き遊ばす方と清い〳〵御交際を御願致したく存じますもしや御交際下さるなれば御住所御氏名を誌上に御願申ます（リリーオフゼバレー）

○始めて　私田舍の邊りに一人淋しく暮して居ります不束ものですが今日より始めて皆樣の御仲間入りさして頂き度いのよどうか御同情の方が御座いましたら御玉章繪はがき、リボン栞等の御交換を願ひます御返事はきつと〳〵致します、先着四名の方へは熊本名所繪はがき一組づゝ差上ますよ（熊本縣益城郡高河原米村友子）

○誌友會の事　福井まさ子樣御芳志ありがたうよ誌友會の事については兵庫の浦上百合香樣當地敷津町の川崎道江樣方から御はなしもありましたが時候がどうかと存じます寄つて頂く方にどうでせうか先生方にも御説が伺ひ度うムいますまさ子樣御盡力被下な（大阪市、吹野夢垣）

○大いに同感　七月號にお出になつた京女樣よ未だ御容顏には接しませねど私は元より誌友會を京都にも開いて戴きたいと切望して居つたのです、不束かな者ですが力のあらん限り會の事には働き度う御座います何卒、京の皆樣の内にも御同感贊成のお方は下名迄お力ぞへの御交下さい糾京女樣もね、そして一日も早く開き度いわ（京都市堀川通今出川上ル北舟橋、要司村ふく子）

○花蘭　文學研究の目的で廻覽雜誌「花蘭」を發行して居ます。七月一日第二巻第七號を出しました。同好の御方は投稿して下さい（岡山市内山下石山、梅本方神崎白水）

○文藝趣味　私等愛讀者が寄りて、文藝趣味會を起しました、同じ文壇に親しむ皆樣は御加入して下さい、問合せは往復ハガキ、次に本年の秋に女子文壇の愛讀大會を京都で開く相談が出來ましたから、申込んで下さい、（京都市健仁寺町四條下ル健仁寺中之門本田ハル方、新趣味女子文壇愛讀總代）

○筆蹟を乞ふ　懷かしい慕はしい山村龍子樣内藤千代子樣平塚白百合樣蘖山しげ子樣御厚情を以て短册か色紙に美くしい歌を書いて頂戴未た御交際を致しては居ませんけれど是非御願致します（出雲國大京町、山本靜子）

○歌の趣味　誌友の皆樣の内に歌を御好みの御方樣に御交際を御願ひ致したいのよ……私は和歌に初心の者ですが極く趣味を持つて居るのですから御見捨てなく御交際を御頼み申します（神戸市御幸通六丁目九拾七番、川野美風）

○察して頂戴　讃岐白萩樣同情致しましたわ私もある方に寫眞送りましたらお返事がありまんで再びハガキ上げても何んとも仰つしやらないのよあまり酷ひわね……次に永久に御交際をお願ひした方がありましたからハガキ送りましたら一時的で悲しくなりました幾度ハガキ送りましてもお返事のない方が五人ありましたよ私不束者だつてあまり酷ひわね察して頂だいね…（ホアイトローズ）

○西洋草花の種子　御なつかしい誌上の姉樣方の中で西洋草花の種子御持ちの方に折入つて御ねがひ申ます誠に申かねますが春蒔でも秋蒔でもどちらでもかまひませんからどうぞ御めぐみ遊ばして下さいませんか當地の繪葉書かみにくいのですけども姿のうつしゑで御禮は必ずいましますからどうぞ御ねがひ申上げます（福井市佐佳枝上町八三、福岡きぬ枝子）

○左の諸孃よりは例の通り交際を望まれました記者も亦例の通り誠實なる交際を結ばれんことを祈ります先づは紹介まで

○遠江榛原郡勝間田村靜谷、川瀨宮子
○秋田縣南秋田郡脇本、小貫ちわ子
○清國大連市、市場岩佐内、河村その子
○三重縣鈴鹿郡白川村、若林綾子
○磐城西白河郡白河町大字天神町、今井德子
○愛媛縣宇摩郡關川村大字上野、井上艷野

○大阪市内安堂寺町二丁目六十九番地、吉田富子
○京都市小川通り竹屋町上ル、中川志奈子
○佐賀 佐賀郡諸富字橋津、野中音松方、菊子
○陸中鹿角郡狹布の里・豐口節
○愛知縣海西郡鍋田町末廣、横井五三郎方、横井雅子
○大阪東區大手通二丁目百番屋敷、田野しか子
○靜岡縣濱松町板屋、大杉きみ子
○神戸市相生橋畔、生司病院内、三浦ゆん子
○大阪府泉南郡信達村大字馬場、辻井信子
○北海道室蘭町母戀東町、藤山方幸子
○岐阜縣加茂郡黒川村遠見場六二、加藤一子
○府下、南品川五日市四八、伊藤はる子
○群馬縣多野郡藤岡町小林、中野佐久子

繪葉書を好む

○私は繪葉書狂でよくお友達に笑はれますの、で今度各國の瀧の繪葉書を集め樣と思つてますわ皆樣ほんの一枚でも宜しふムいますから送つて頂戴な私は只取などは神にちかつて致しませんお禮は金津の名所繪葉書でいたします世に知れてをる瀧でも宜うムいますがなる可くは山間僻地の世に知れぬ樣な瀧を切望しますの（金津若松市南町新屋三三九、丸山方樋山伊勢子）○妾は千鳥に名を得し淡路島の大濱海岸に物學びする不束な少女で御ムます只今は五十餘日の休暇を愉快に過さん爲至つて寂しい田舍に歸つて居ますの何卒北海道千葉縣神奈川縣の誌上の御やさしい御姉樣達に御願して御地の名所の御ハガキ御惠みして頂きたいの御返しはね珍しくもございますまいが淡路の島の名勝で致しますからどうかよろしくね（兵庫縣淡路島津名郡尾崎村字遠田、清木波留子）○妾手元に臺灣總督府發行の畵はがき種々スタンプ付きが十組程あります故諸姉樣方の畵はがきか或は寫眞とでも交換しましようか生蕃の寫眞はがきも少しはあります（臺灣、臺中新盛街森田方、福地さき子）○誌友の皆樣何卒繪はがきの御交換を一時的でなく永久的にお願ひ致します（栃木縣足利郡足利町榮町、柳田君子）○私ね此度都合で次のケ所に轉居致しましたのよ希くは諸姉樣よどうか以前に倍して繪はがきの御交換を願ひます重て來。リボン。ヒシツキ等の御交換も（熊本縣上益城郡大島總藤澤方松崎澄子）○五月號で繪葉書の交換を願ひましたら早速御送り下さいまして有難う御座います尚今後も御交換を願ひます（東濃多治見郡小栗重郷方澤田ヨシ）○皆樣の内に寫眞機械御不用の御方は御ゆづりくださいませんか又日英博覽會紀念繪葉書御持の方は私の四十一年陸軍特別大演習紀念繪葉書と交換してください私の手許に少女世界女子文壇なんか澤山不用になつて居りますから御入用の御方はハガキにて御申込くださいすぐ御送りいたします（大和國北葛城郡磐城村竹内伊瀬たきの）○私は何により繪はがきがすきで有りますから皆さん風景美人風俗名勝紀念等のをお持ならば惠んで下さい二組以上（十二枚）惠み下されし方へは川原湯四萬等の繪はがきで十二枚必ず送ります（上野國長野原局區内日影村富澤きく子）○五月號の繪ハガキを好むといふ中で繪ハガキをあげましたのに返事を下された姉さまは四人でしたなんと記者樣ひどいではありませんか（姬路西宮田町、大野つぎ子）○何卒エハガキの交換をして下さいまた趣味ある手紙の往復をも願ひ升手もとに今縣内名所の寫眞が十枚ありますからお禮にあげますから（羽後國由利郡院内村、佐藤みつ子）

記者と讀者

○記者樣、私は詩と散文が好きでなりません、けれどどうしても譯もわからず作ることも出來ません、澤山此等の文の本を讀んで作つて見ればよいと、誰でも仰しやるから、文學的の本も大ていのは見てをります、新聞などで文學的のがあれば之を切り取り讀んで見る、新たに詩の本が出たといへば早速、買つて來る、こんなにしてゐるけれど、作れないです、野に山川、海、よく自然に接して詩の思想を拾はうと、あるきますが、やつぱり駄目です新詩作法、新詩自在の何を讀んでも作れない、私は高女も卒業してゐる廿一才の女ですどうしたら自由に作ることが出來ませう（石川縣のちよ子）（記者曰、それほどにして作れないなら天分がないと諦めるより外仕方がない、併し何もずぬけてえらい文學作家にならうと云ふわけでなく、普通の文章の書けるやうになりたいと云ふのなら、常識があつて、少し根氣もあり、負けず魂があれば出來なければならぬ筈です、若し出來ないなら何か一つ缺けてゐるものがあるのでせう、自分で其缺けてゐる者は何であるか自覺の上で、努力をなさつたら屹度普通の文章位は書ける[illegible]

なります。あなたの外に小倉の花子さんよりも同じやうな問題が來ました、お答はこれと同じことですから別に言ひません）○原稿の送り方に就いて尋ねる方が澤山ありますが毎々申上る通り開封でよろしく、又二三種同封でよろしいのです、誌友くらぶを除くの外は凡て半紙に限ること、また鉛筆で書いた投書は採用しません（記者）○土佐もゝのはなさんに、お禮の繪ハガキを拜見しました折角美しい浪は紫のインキで汚れました、あなたは能く紫のインキを使ひますが、にじんでいけません、外の色をお使ひなさい（記者）○在米の愛讀者さんを初め本月は繪ハガキが澤山參りました、記者は一々保存してゐます、山岳、深林、地方風俗などのも二三枚ありましたが皆宜いと思ひました（記者）○格別お答はいたしませんが來信を拜見した方々のお名前は左の通りです、無學女。伯耆、足立春子。しづ子。寺島代富子。小出すゑ子。足利、柳田君子。愛知、中川撫子。越後、齋川幸子。越後、若葉子。京都、千夜子。韓國龍山、千代子。長崎縣、志柿多摩。三重縣、長井百合枝。羽前、木村清子。京都、松木きぬ子。名古屋、鹿鳴草。栃木、愛讀者。山口縣、松尾しづか。岡山縣、甲本夏子。岡山、曙子。伊豆、土谷すゞ子。青森縣、佐藤きく。

個人消息

○本年富山高等女學校を御卒業遊ばした在原梅子樣の御郷里御存知でございましたら御手數でございますが御知らせ下さいませんでせうか、若し御知らせ下さるお方がございましたら粗末な品でございますが京都の名所繪葉書二十枚一組を御禮のしるしまでにきつと差上げます。尙誌友の皆樣御交際を願ひます（京都府天田郡金山尋常小學校野の花子）○土佐の桃の花樣へ、一面識もない私より突然こんなこと申しては失禮ですが是非私はあなたにお伺ひ致したいことがありますので何卒御住所を下名まで（筑後三潴郡江上村、柴田百枝）○中洲の井上樣、先日はお熱い所に、わざ〳〵御出で下さいましたのにまことに御無禮いたしました何卒御ゆるし下さいませ、あの御注意にあづかりました事、未だに手紙も來ませんから御安心下さい、實は御手紙を上げ樣と思ひますけれど、御住所が不分明ですから、誌上にて御禮を申上げます、尙職人町の令孃にも宜しくお仰しやつて下さい（住吉村花園建部夏久子）○八幡てつじ樣磐城のお方です、四月十六日に横須賀から北國に向はれて小樽よりお出しの玉章五月二日に着きました、其後どちらにおいでやら、御宿所御存じの方はお知らせ願ひます（陸前宮城郡七北田村萱場喜代乃）○岡山縣の入江曉花子樣御懷しうございますほんとうに御無沙汰致しました貴女は御變りは御座いませんか私は無事に暮して居ます（京都松尾露子）○本誌御愛讀の諸姉樣方の内に青森縣の青森市か弘前市に住んでおらした島谷とき子樣の只今の御住所御存じの方はどうぞ下名まで御知らせ下さいませ御禮は雜誌か當地名所繪端書できつといたします（福島縣小倉市米町浦野方、百子）○名古屋伊藤友江子樣遠から御返し申さねばならないのですが他友の爲でそちらこちらに飛び廻つて居りますの餘り暇ですが今暫らく待つて頂戴な佐渡の本間綠子樣、頃は御作が御見へになりませんのね私の父も佐渡よ御手紙下さいな待つて居りますわ（石狩國厚田區内發足池田綠子）○京都大島裁縫所に居らつしやる皆々樣は誌上にて交際をおもとめに成て一度二度ならず御返事なさらない、私の友達もこゞと言つてゐました、御注意なさいよ（あけぼの子）○横須賀の渡部樣君には何か深き仔細があるから清き交際をしてくれとの仰せですが其理由御話の上ならばいざ知らず只あれだけでは何うも異性の方と御交際は出來兼ねますから一寸餘白を借りてお斷り申ます（新潟縣南蒲原郡井戸場村、萩野子）○桑名の水谷もと子樣繪葉書難有う早速御禮を差出しました假附箋がついて歸りました何卒最一度私方へ御所を書いて送つて頂戴（神戸御幸通にて難波）

持つてゐる書物

讀みたい書物

○日露戰爭の頃から　集めた繪葉書が三百枚と姿の手だしなみの栞が十三個あります言海と我家の新家庭と其外小説お送り下さつた方へお望みの品と交換いたします、新式造花獨けいこ藻かり舟、美文かきふり和洋料理法なども不用になつてをりますから何かと御交換下さいね（愛媛縣宇摩郡野田村、石川喜代子）

○夢二畫集　春の巻花の巻とも不用ですから

詩集二十八宿か其他のもの と御交換下さいませんか（安本はる子）

○ゆかり樣へ　御相談申ます、貴女の藤村集と私の憂子と御交換下さる事はできますまいか、若し御承知でしたら下名まで（福岡市外住吉村建部頁久子）

○樂譜　どなた樣か唱美歌讃御前（鶴が岡べの春深く）の譜をドレミフワか一二三で書いて送つて下さいませんか御禮を致し升から、其他、小學唱歌でなくしてヴアイオリンで彈けるのでしたら何でも宜しいから譜を添て御送り下さいませ（淡路三原郡賀集村の内田中、加藤菊子）

○今私の手許に　新譯アラビヤンナイトカーライル、常識の修養實業之世界海水浴等御座いますが皆樣の内ハガキ文學、新潮、婦人畫報、文藝クラブ文章世界其他小說類と御交換下さいませんか又ユーゴーの噫無情を是非讀み度いと思ふております誰樣か御ゆづり下さる方は御座いませんでせうか煤煙と共に御願申ます（佐賀縣藤津郡久間村、野田千代）

○舞姫其他　妾には、晶子の舞姫、柴舟の銀鈴、薫園の我が思ひ、天外のコブシ上中下、櫻郎の琵琶歌等不用になつてありますから交換お望みの方は妾宛に一報下さい但し交換の書は單行本小說に限ります（秋田縣由利郡院内村院内小川はるよ）

○作法と本誌　諸孃樣の中で和歌の講義錄新體詩作法　美文作法、本誌四十二年の三月號お持ちのお方は私の本誌第五年紀念號同三月號昨年の一月號及五、六、七、八、家庭日記其他古女學世界婦人世界數冊ございます故御交換下さいませんかお疑ひのお方には私から先に送本致しますす故御入用の本を仰せ下さいませ（筑前國鞍手郡直方町新町二丁目六十六番地、香原ふさ子）

○小說類　今まで家の都合によりしばらく御無沙汰致しましたが、又お伺ひに出ましたからどうぞ可愛がつて頂戴、左の不用書がありますから皆さんのおうつしゑや絹ハンカチーフ、ヒジツキ、絹リボンや寫眞掛等で申し込んだ方にお望みのを差し上げますわ、常夏、生、新美文植物叢話、夢、新不如歸乳姉妹前後、朝ばれ自然と人生、すみれ集、玉琴、緣不緣、こゝろの日記、戀と戀の外雜誌古本澤山あります（秋田縣山本郡藤琴局區内梅澤英美子）

○奥州より　今年も暑い夏が參りました、記者樣始め誌友の皆樣にはお變りもなく御勤勉の事と察し上げて居ります。私の生國は名にしおふ奥州の山おくで、谷深く水清くて避暑の必要もない仙鄕です。此際に好きな讀書を致したいですが、本年一月以後の女子文壇お持合せの方は（何號でも宜しい）どうぞ御寄送下さい、お禮は必ず相當に致します。男子の方もかまひませんの！名古屋の森樣、永らく御無沙汰しましたね、御遠方ですがお寫生にいらしてはいかゞ（宮城縣仙臺在七北田村、菅場福晉女）

○新聞の切拔　當て毎日電報に揭載された松居松葉氏作小說女優及び目下連載されつゝある田山花袋氏の緣其他同紙に載つた事のある泉鏡花氏の月夜車眞山青果氏の雨の日等の短編、小說切り拔きしたのがありますから面白い小說文學雜誌少年雜誌未使用のエハガキなどと御交換しますお望みの方は九月の誌上で住所氏名を御知らせ下さい私の方からハガキを差し上げますから（羽後紅雲子）

○不如歸の會　御懷かしき誌友の姉上樣に妾の樣な不束者が赤面も省みず御相談おいや御贊成め願ますわ妾は學校に先生連の御贊助を得まして雜誌の回覽會を開きましたの夫れで誌友の姉上樣に御贊成を御願申ますのそして入會して頂きたいのですよ會名を不如歸の會といたしまして會員は總て御情けある御婦人に限られて月月僅かな會費で多くの修養になる雜誌が愛讀できますのです、只今では會員が貳拾貳名ですが贊助員が五名あります、そして只今の回覽雜誌の種類は甲種婦人世界女學世界女子文壇の三種なのです、乙種婦人くらぶ婦人界新文林の三種なのです、御贊成の姉上樣は紙上で御尊名御洩し下さい（南陽、不如歸の會女）

○雜誌進呈　今此處に本誌秀才文壇文章世界等が何れも去年壹月からのがあります（けれども其の間は程かぬけて有るかも、知れませんけれど）皆不用になつて有りますから、其の内でもし御入用が御座いましたら、其の他の繪葉書で御申込み下さい早速御送致します、郵劵等は一切御無用東京市淺草區橋場町二三七、横張作子）

○文學書類　諸姉樣方、私の手許に、新體詩作法、響、花紅葉、黃菊白菊、天地有情、東西英語お伽噺、英文幽靈話、小形言海、秀才文、本年一月より五月まで新文林等があります、

去年の增刊、家庭日記、思ひ出の記、新片町より、インキツボ、花袋集一、二、四十二年頃の本誌と、御交換下さいませ、決して不德義なことは、致しません、男子の方でも御親切な方は御願ひします（高知縣香美郡山田町鍵山方小松千枝子）

○つれ〴〵草　おなつかしい諸姉樣お手許につれ〴〵草おもちでございましたら暫く拜借いたし度うございます女子文壇女學世界冒險世界婦人畫報何れにてもおのぞみのもの御禮として差上ます（岐阜郡上西和良加藤雪香）

○編物と書物　私はね病氣のため女學校を半途退學して片田舍に淋しく〳〵暮らしてゐます妾編物大好き、あみ物してる方よ、ハイカラな巾着、しをり、下すつた方には何かできつと御禮致します、雜誌なら本誌四十一年からひき續いて今月まで、姉さんので古いけど女鑑女學世界婦人世界、少女界など小說では德富先生のみんな金色夜叉、己が罪、母の心、女心などあります（茨城縣龍ヶ崎町在馴馬齋藤光子）

○誌友の皆樣の中で婦人畫報の增刊東京婦人風俗が御座いましたらば何うぞ御送り下さい御禮はきつと致します又前號にも申しましたが晶子先生に和歌御存じの方は何うぞ御敎へ下さいませ誌友の皆樣暑さがきびしう御座いますから御身御大切に遊ばせよ（橫濱市福富町二の五四飯島方光香）○皆樣の御手許に不如歸乳姉妹己が罪其他新小說類御不用のがありましたら本誌第三號のを十部と第五年六號より六年八號迄（但今年增刊は入用）不用になつて居ますから御交換願ひ致します女鑑や少女界少年世界など添へて御禮は必ず致します又暫御貸し下さらば御禮に雜誌御送り致します（福岡縣福岡市本町山本とよ子）○諸兄姉樣の內薔薇花の寄生木浮草鏡花集花袋集牧師の家御持の方はどうか送つて下さいましなお禮には絹ハンカチーフ手製のしほり又はリボンを御送り致します（愛媛縣松山市北京町藤井章子）○皆樣方の中に不如歸、金色夜叉等不用の御方はお送り下さいませんか、御返しには屹度栞肱突などでいたします（和歌山縣海草郡宮村字有家園村柏太郎方、美子）○六月號の婦人界至急御送り下された御方には相當の雜誌にて御禮致します（橫濱市初音町一ノ十六佐藤方、小田切錦子）○諸孃樣の內に小說魔風戀風御持の方が御座いましたら暫く貸して下さい御禮は必らず致します（岩代國北會津郡鶴之內村大字宮袋中、大竹ちきの）○皆樣、皆樣の中で一葉全集、テニソン詩集、土佐日記、天うつ浪、血の淚御持ちの方は御送り下さいませんか、御禮には、當地繪はがき、リボン、美人繪はがきその他相當な御禮をいたします、御送り下さる方は、はがきで御通知下さいませ。（靑森縣三戸郡五戸村、佐藤きく）○御許に家庭敎科書、文藝俱樂部女學世界、懷中電燈、姉上樣の御仕立の淵お前掛け御持ちのお方は御惠み下さい、相當の御禮は必ず致ます、尙繪葉書下總成田山安產お守を添へて御禮します（茨城縣金江津局內戍渡山口ちう子）○愛讀者の皆樣私の手許に、小說ハイカラ令孃前後二冊、初戀、外婦人畫報婦人世界、少年少女世界粲、少女の友四十年よりの本誌全部不用書あります故未使用の繪葉書又は小說雜誌と御交換して頂戴！（栃木縣下毛足利町、柳田君子）○私の手元に古雜誌等澤山有りますから御入用の御方々は郵稅だけ送つて下されば間違なく御送附申上ます（兵庫縣明石郡明石町內字西方葉菅野方ニテ、柳川幹野）○誌友皆樣妾の所にツルゲーネフ集。女殿下忘れかたみ藤村集。沙翁十種。自然と人生紅葉全集六冊。を持つて居りますから歌集又は新體詩集。新小說などの面白いのと交換して下さい其の時きに寫眞を共に入れて下さつた方へは妾も寫眞を差し上げます又地方の名勝繪葉書も交換して下さい願ひます（越後新井町五日市早津喜作方早津心水）○妾の手許に雨月物語、旅順戰話、改正六法全書ありますから貴姉方樣に伯爵夫人、夏子、俳句集（新派）一萬句集ありましたら送つて下さい交換しますから（秋田縣金澤町すみれ會內大越のぶ子）○誌友皆樣の中に自然と人生、後の不如歸、想夫憐、ハーモニカ、右の中いづれにても御惠下さいませんか私のモデル姬海底奇談其他雜誌女子文壇婦人世界女學世界等八十冊程ありますから（茨城縣北相馬郡北文問村大字長沖宮久保秋水）○今手元に文章の作り方中外今古の英雄軍談女子美文の資料、學生祝辭演說小說嫁と姑、悲戀悲歌、心の鬼、不如歸、魔の池、茶の湯と生花ふところ日記等不用になつて居りますから皆樣の中で女學世界でも婦人世界でも今年發行の雜誌や小說と交換を願ひます（千葉縣山武郡白里村四天木內山健方にて靜子）○諸姉樣編物御持ならしばらく御かし下さいね又四十二年の文壇何號でも構ひませんから御惠み下さいきと御禮致します（伊豫川江坂本出張所みさ子）

紹介

【注意】

▲女中、小間使、女書生などに雇はれたい方、及び職業を求める女子は、自分の年齡、略歴、希望を簡單に明記して申込みなさい。

▲女中、小間使、女書生などを求めてゐる方、及び女子に職業を授けたい方は、其要項を明記して申込みなさい。

▲右、雇はれたい方も、雇ふ方も、紙上には匿名又は別名で發表して差支ないのですが、紹介掛へ申込の時は、必ず住所本名を詳しく明瞭に記添へて下さい。

▲此の紹介欄を見て、此の女を雇つて見たいとか、此方に應じて見たいとか思はれた時は、其番號を書いて、本社紹介掛へ往復ハガキで問合せて下さい。

▲紹介掛からは、問合せがあり次第、直ちに其本人の住所氏名をお答いたします、其上で直接双方で御掛合の上、雇ふなり、雇はれるなりして下さい。

▲記者は聊か愛讀者に酬ゆる爲め、紙上で双方の紹介の勞を取る譯です。

▲掲載は、一切無手數料です。

紹介掛

女子文壇

【應ずる方】

一　東京　三浦女

年齡　二十四歳

略歴　高等女學校卒業

希望　東京の會社、銀行、商店の何れにてもタイプライターに雇はれたし

二　近江　愛讀女

年齡　十八歳

學歴　縣高等二年卒業後補習科三年修了

希望　都會にて交際廣き家庭に女中又は小間使として雇はれたし

三　山口　菫女

年齡　二十歳

學歴　現在は小學教師

希望　上京して體育會附屬體操音樂學校に通學したし、女書生として學費を支給下さる家に行きたし

四　茨城　花心

年齡　十八歳

學歴　高等女學校技藝專修科卒業

希望　中流以上の小人數の家庭に小間使となりたし夜間勉學の自由を許さるゝ軍人又は官吏の平和なる家庭を望む

五　大阪　一女

年齡　明治二十六年三月二十九日出生

學歴　岡山縣津山高等女學校、第三學年まで修業せしも家事の爲に退き目下大阪某家に奉公中

希望　行儀見習ひと、少しは勉强を許さるるお宅を望む

六　名古屋　一女

年齡　十八歳(初奉公)

略歴　高等女學校二年修業後は家情の爲め中止、目下裁縫を習ふ

希望　東京市内の華族に附添若しくは小間使として雇はれたし、但し夜間二三時間の獨學の自由を許されたし

【求むる方】

三　神田　愛文堂

一　東京へ遊學希望の方を一名丈け御世話すべし

一　年齡は十七八歳より二十二三歳までの事

一　雇ふにあらざれば一ケ月實費の半額金四圓を要求す

一　通學自修共御隨意尙ほ御希望なれば餘暇に裁縫を教ふ

編輯通信

『地方の婦人』

本誌第三增刊『地方の婦人』は愈よ來月十日に發行される、時は大暑の折、北は北海道より、南は九州の端に到るまでの、或る地方〳〵の婦人の生活狀態は勿論、山岳、河海、風景等の記事は全紙に滿ちて、好個の讀物たるを失はぬ。編輯の方法も例に依りて意を用ゐてあるから、讀むにも快きこと勿論、材料も充分精選して他の雜誌では見られぬ特色を存してゐる。

『少女』一週年紀念號

本誌の姉妹雜誌『少女』は、來る九月一日に創刊滿一週年紀念號を發行する筈である、例號よりは內容を新くし、紙數を增加して、紀念號たる名に背かしめぬやう面目一新した雜誌をこしらへる筈である。

餘興課題 燈火

燈火可親と云ふ言葉から思ひつ いたのです、燈火に就いてのさまぐ〵な感想を書いて下さい

▲燈火に就いてもいろ〳〵種類がありますが先づ普通多く使はれてゐるのはランプでせうけれど、其外に電燈、瓦斯、カンテラ、蠟燭、行燈など▲燈火に向つて何う云ふ感じを得たか▲燈火は何う云ふのを愛し、また愛する所以▲今、現に使ひつゝある燈火▲燈火の美▲或る時或る場所で見て忘られぬ燈火▲山間僻地の燈火▲都會の燈火▲燈火の光と物の色彩▲妖火怪火の類▲餘り題が多くなつて迷ひすぎても困りますから、先づ此邊に止めて置きませうが、要するに燈火に關することなら何でも宜しい▲十六字詰、十行內外、振假名をつけることと▲題には餘興燈火と書いて置くこと▲懸賞例の如し▲締切も例の本月十五日限り

因に云ふ、本號發表の餘興『婦人旅行談』は特に本欄の終りに揭ぐ(初めの三人入賞)

暑中の挨拶

一年中の最も暑い時が來ました、わが讀者諸孃も、定めて休養を取られることであらうと思ひます。精神の休養と共に、身體は大いに夏期的活動をやつてほしいと思ひます、殊に女學生には夏の休みに於て、身體を練ることが最も必要でせう、幸に皆さんの健康を祈ります。

塔の繪葉書に就いて

私は本誌前號に於て 塔の繪葉書を皆さんに求めました處、篤志なる皆さんから約二百枚頂きました、其中には塔でないもの、例へば紀念碑墓碑、燈籠などの類ゐも大多數ありました、それから間違つたものを送つて下さつた方にはお返事をあげないでであります。私の謂ふ塔、五重、三重、多寶塔の類も珍しいのがだいぶん集りました、只同じなのが幾十枚と重復しました、今左に今日まで集つた分を揭げて示します、若し此外におつら送つて下さい、繪の方には文字を書かぬこと、返事には詩の一句を書いて送ります、宛名は東京青山原宿一八〇 河井醉茗として下さい。(醉茗)

▲藥師寺▲奈良興福寺▲久米寺▲多武峰▲信貴山(以上大和)▲御室仁和寺▲眞如堂▲淸水寺▲東寺▲八坂▲比叡山(以上山城)▲淺草觀音▲上野東照宮(以上東京)▲日光▲大阪四天王寺▲同上多寶院▲山口瑠璃光寺▲出雲淸水寺▲高野山金輪塔▲嚴島▲武藏高尾山▲道成寺▲宇治浮島▲丹後文珠智恩寺▲越後本成寺▲伊豫石手寺▲尾張八事山▲弘前大圓寺▲羽前羽黑山▲名古屋七ッ寺▲加賀那谷寺▲尾張赤門寺▲和歌の浦妹脊山

二十八宿と花守

『二十八宿』及『花守』を探したまへる三宅、小川須田、篠田、北村その他の君に告ぐ。花守は絕版、市上殆其影を見ず、二十八宿はなほ大阪市某處に殘部六冊有り、郵稅共五十一錢にて頒ち參らすべし、花守は見るだけならば用立てても よし。直接御申越を乞ふ (常陸眞壁郡大寶村橫瀨)

雜報

盆の日の色彩と音樂

は電車に人が鮨の樣に詰まつて居た。いきれ臭い溫氣がムーッと肩のあたりを漂うて、目まひがしさう。刺戟の强烈な安油と、アルコール分の勝つた麝香丁幾の香が、鼻の先をこんがらかつて、ガタンガタンと車が搖れる毎にフワリフワリと石鹼玉の樣に躍る。

今日は電車の中に、美しい色彩がない。水色リボンや透綾のお太鼓や、すべて夏のシーズンを代表する淡色の音樂の顫動がない。太い線と荒い色が、ぎごちなく只平凡な圓や變化のない不等邊三角形を描いて居る。そして煤げた破三味線の音のやうな暗い肉聲が、濕潤した空氣の微分子に響く。

あゝ繫がつた停電の電車の窓から洩れる灰色の息、それが皆「あさくさ」に行く。藪入の日はつまらないと思つた。

婦人と旅館

婦人の旅行に就いて、吾等の毎に感ずる處は旅館の設備の、男子の爲に重くして、婦人の爲に足らはぬ點が多いやうに思はれることである。上等の旅館は措て置いても、普通其邊の海岸とか、山麓とかの旅館は、實に旅馴れぬ婦人をして一種の不快と、不自由と、反抗とを起さしめはしないか。海岸の旅館兼料理家などいふ家では、多く藝妓とか、何とか客商賣の女を對手にしてゐる爲か、眞面目なる婦人の旅行者に取つて、不都合を感ずることが多い。旅なれた男子などにはそれが却つて面白いかも知れぬが、年に數へるほどしか出ない婦人の爲には、其周圍が不安、不快なる爲に、折角山の景色、海の景色にあこがれて來ながら、何となく氣の置けるやうな思ひをさせはしまいか。旅館の女中、手代などいふものは、輕薄極まるものであるが、それも舊い習慣で然うなつてゐるので、設備を根本的に進歩させて、眞面目にしてゆけば、善くならぬとは限らない。輕便で愉快な旅館の設備が望ましい、今のやうでは、金を使ひながら嫌な思ひをせねばならぬ、今後、婦人だつて旅行するものが多くならうと思はれるのに、旅行先にまで、虛榮、虛飾の空氣が瀰蔓してゐては婦人の外出を妨げること少くない、殊に都會附近の地に然う云ふ妨が多いやうである。

南極探檢

探檢とか、冒險とか云ふことも、小說として聞く場合は、單に好奇心を刺戟する位に止まるものであるが、實地に之を行ふと云ふに到りては、正しく人心を壯んにする。今回、白瀨中尉の一行が、南極探檢を企てゝ、朝野の人々が之を贊成してゐるのは最もなことである。歐米各國では、南極探檢の歷史もあるが、日本には未だ其經驗がない、諸般の準備と、一行の勇氣との外に、天佑を俟つて初めて成功すべき大事業である。而かも毎に南極探檢とか、北極探檢とか云ふ事業は、海外人士に限られたやうに思はれてゐたのが、日本人として此壯擧を世界に傳へ得るのは、我が同胞の一つの誇りとし、其前途の成功を祈らねばなるまい。

新雜誌『模範』

『秀才文壇』の發行所たる神田旅籠町一丁目の文光堂から九月一日に『模範』といふ新しい雜誌が出ます、社會全般に關する模範的記事を載せる雜誌で、男子の讀物たるは勿論、女子の爲にも模範になる記事を澤山載せるさうです、從來此種の眞面目な雜誌は殆どありませんでした、發行の曉には、定めし一般の人々から重寶がられるであらうと思ひます。

夏くさ

▲富士の山開きは愈よ前月二十日より開かれた、山上から郵便を出すことも出來れば、電話で話すことも出來る。

▲東京の七月は梅雨期であつた、例年より涼しかつた、各所の海水浴も本月に入つて初めて盛んになるだらう。

▲朝顏の成育は例年より好いさうだ。

▲文壇は不振、何等大した作品も現れて來ない、活動は秋に入つてからであらう。

●●●●●

○少年文壇　九月一日に牛込宮久町の少年文藝會から『少年文藝』の初號が出る、顧問は石塚月亭氏、主として少年少女の文章歌の類を掲載す

●●●●●●●

○水彩畫夏期講習會　二個所にある、一は近江膳所町膳所中學校内で八月二十一日より一週間記名料金五十錢會費金一圓、一は福井縣三國町小學校内で八月十二日より一週間、記名料金一圓會費金一圓三十錢、何れも講師は大下藤次郎氏、婦人の入會差支なく諸般の便宜を計る

新刊

○近松傑作全集　上巻

荷くも文學に志あるほどの者で近松の名を知らぬものはあるまい、本書は近松の傑作を網羅する爲に出版されたので、故三木竹二、水口薇陽の二氏が主として校訂の任に當り、伊原靑々園氏が補助とあるからは、信用すべき書なるは勿論であらう、巻頭には明細なる解題あり、上巻に收むる處は、天鼓、根元曾我、一心五戒魂、門出八島、凱陣八島、嫗久、主馬判官盛久、世繼曾我、出世景清、佐々木大鑑、源氏冷泉節、天智天皇、日本西王母、松風村雨束帶鑑、釋迦如來誕生會、鎌田兵衛名所盃、頼朝伊豆日記、百日曾我、當流小栗判官、源氏烏帽子折、浦島年代記、長町女腹切、淀鯉出世瀧德、蟬丸、大掛物十幅一對、曾我五人兄弟、大磯虎稚物語、加古敎信七墓巡、最明寺殿百人上臈の諸篇である、製本頗る美、(正價金二圓三十錢、當分割引金一圓八十錢、東京堂發兌)

○歐米印象記　中村春雨著

著者が四年の間、北米を初め倫敦伯林に於ける客寓の情味や、佛瑞露に漫遊した印象を細叙したものが、此の尨大なる一冊となつて出版された、内容には著者の目的たる劇の研究は勿論、大陸漫遊記等に神往に堪へざる記遊の文字も見えるけれ共、全體の調子が思想的批判的で、其の一面に於いて激しき近代思潮の動搖に伴ふ著者の思想變遷を見るべく、今春出版された『牧師の家』の自己破壞的思想の裏書をしたものが、正しく此の一巻なるが如くにも思はれる、鬼に角其の反抗的態度解放的見地から、泰西文明の眞相を觀察する事深刻、暗面に探り入つて大膽に摘抉曝露してゐるから堪まらない、充實したエネルギーの沸騰し奔逸し旋轉し混亂してゐる恐ろしき一大渦旋が目前に開展されるのである、其の中には自然社會政治の方面にも亘り宗敎敎育等の問題もある、性慾問題の活事例、試驗結婚説の紹介などは、最も奇抜な大膽なものであらう。菊版クロース本四百六十餘頁、三色版寫眞版挿入寫眞が一百面と云ふ素晴らしいもの、藤島畫伯の裝幀又無比の美觀を添えてゐる。(特價貳圓、神田表神保町春秋社發行)

○怪談　高濱長江譯

故ラフカヂオ・ハーン先生が、德川時代の稗史隨筆等より譯出されたる妖怪談を、更に邦文に重譯したるものなり。篇中の怪談は何れも日本人の耳に熟したるものなれば、格別珍奇のものにあらざれど、奉行所の事を地方裁判所としたるなど、外人らしき觀察の交れるは面白し。最後の蝶、蚊、蟻三編及び靑柳物語、蓬萊は、流石に詩人の筆、詩人の譯、敬意を以て讀みたり。(定價金七十五錢本鄕區弓町すみや書店發行

○兄の書翰　高須梅溪著

愛弟に與へし兄の書翰は高須梅溪氏の新著である、普通の書翰と異つてゐる處は、單に實用とか、時令とか云ふ從來の書翰文の形式と離れて一章毎に或る敎訓と、或る意義とを含めてあることで、書翰文體である丈け、其敎訓なり、指導なりが、痛切にしみじみと身に泌むやうに思はれる、蓋し靑年の人には有益の書物である。(定價五十錢、神田美土代町富田文陽堂發兌)

○靜　鈴木皷村作

箏曲家鈴木皷村氏が高安月郊氏作の靜の歌に新しく曲譜をつけたもので、箏の譜を集めてゐる諸孃には何よりの好參考書であらう、體裁も甚だ優雅(定價金六十五錢日本橋今古堂發兌)

○小公子　巖谷小波作

巖谷小波、黑田湖山兩氏の合作、家庭劇小公子の脚本である。此劇は既に有樂座でも演じて好評を博した、今、函入一冊の美本として出版された、小公子は家庭の好讀物、脚本となつて更に光彩を添えた(定價金七十五錢、京橋出雲町新橋堂發兌)

○料理談　小川煙村編

村井弦齋氏を初め斯道の大家が、和洋料理のことに就いて話したものを集めた小冊子で、通俗な話と、大通な話とが交つてゐて面白い、且食物上の參考になる事が多いクロース本總美本。(神田富山町東明堂發兌)

○吾輩はフロックコートである　織戸正滿譯

フロックコートの一代記とでも云つたやうなもので、最初フロックコートが驕男に買はれて洋服屋を出立し、遂に質屋の藏に投込まるゝまでの道程、觀察等を面白可笑しく書いてある。滑稽の中に鋭い諷刺を含んだ時弊痛罵の快著で、讀んで肩の凝らぬ、夏向に適した書物である。(定價四十五錢東京小石川區掃除町秀美堂發行)

投稿規定

▲原稿は一切女子文壇社宛に送ること▲原稿には女子文壇原稿の文字を書添えて下さい▲文字は能く分るやうに書くこと▲小説と詩と短文には振假名をつけること▲小説は二十四字詰八十行以内、散文は同字詰三十行以内、日記、論文も同上、書簡文は同字詰二十行以内、詩は行數制限なし、和歌と俳句とは一人一首限り、短文は十六字詰七行限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、凡て半紙、原稿紙、罫紙等に限る▲圖畫は二寸に三寸の大さにて薄き日本紙に限る▲投稿は凡て女子に限る▲定期號の投稿は毎月十五日堅く締切る

○女子文壇投稿各種 懸賞定額

▲特別賞金五圓（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲甲種（短篇小説、散文）
天賞金參圓。地賞金壹圓五拾錢。人賞金七拾錢。

▲乙種（家庭日記、論文、書簡文、詩）
天賞金貳圓。地賞金七拾錢。人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、圖畫）
天賞金壹圓。地賞金五拾錢。人賞金貳拾錢。

◉各種とも金壹圓以上の價格の當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す。
壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◉賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽窃したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

○定期發行分 ▲毎月一回（一日定期發行）
一冊（一回分）定價金拾五錢……郵税一錢五厘 計金拾六錢五厘
三冊（三月分）前金四拾三錢五厘……同四錢五厘 計金四拾八錢
六冊（半年分）前金八拾四錢……同九錢 計金九拾三錢
十二冊（壹年分）前金壹圓五拾六錢……同拾八錢 計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分 ▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）
一冊（一回分）定價金貳拾錢……郵税一錢五厘 計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）前金三拾八錢……同三錢 計金四拾壹錢
四冊（壹年分）前金七拾二錢……同六錢 計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部——十六回
四冊（三月分）定價金六拾三錢五厘……郵税六錢 計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）前金壹圓二拾二錢……同拾貳錢 計金壹圓三拾四錢
十六冊（壹年分）前金貳圓二拾八錢……同二拾四錢 計金貳圓五拾二錢

▲申込注意（振替にて拂込む時は誌代の外に壹錢登記料増すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割増（收入印紙謝絶）、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……	部數多く有効に比し無類の割安
上等	一頁廿五圓	半頁……	
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢

〆切 毎號十五日前

特約取扱○日本電報通信社○明治廣告社○博報堂○弘報堂○東京勉强社

明治四十三年七月廿五日印刷
明治四十三年八月一日發行

定價金拾五錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區宗十郎町十五番地 松本愛慰
印刷所 東京市京橋區宗十郎町十五番地 國文社

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話（本局六〇七番） 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

(明治四十三年七月廿五日印刷納本)

女子文壇

第六年第拾號 (每月一回一日發行)

「明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可」

婦人の煩悶は此一言にて解決す

皆さん、若し「人生の最大幸福は何か」と問はれたらば、何と御答へになりますか、「富」と答へる方もあり又「位である」「權勢である」と御答へになる方もありませう、なるほどこれを贏ち得たる人は幸福者に相違ありませぬ、併し是がすぐ樣人生の最大幸福と云へませうか、さらば最大幸福とは何かと考へて見るに、どうしても「健康」で御座います、それが證據皆さん、病魔の爲めに苦悶し而かも生命に危險の憂ひでもあつて御覽なさい、一切の慾望を擲つて專念健康を渇望する樣になります、健康の價値は如斯大なるものでありますから、御婦人中には健康の勝れぬ爲めに憂ひ悲み、遣瀨なく煩悶に沈んで居らつしやる方が少なくありませぬが、之は誠に御尤もの次第で御座います、併し、中には一擧手一投足の勞を吝み、自分の盡くすべき方法を盡くさずに、たゞ悶えて居る人がありますが、斯ういふ人は云はゞ自繩自縛と申すものでせう、又中には何とかして病苦より逃れんとして努力しても、良治療法を見出す事が出來ず空しく暗黑の中に彷徨する婦人もありますが、此等の人は丁度暗夜深山に踏み迷ひ、如何にかして人家に辿り付かんと藻掻き右に行き左に奔り、遂に達すべき道に逢着し得ないと一般、若し此時彼方に一點の光明を認めたならば、その人は如何にうれしいでせう、此と同樣に中將湯は、病の爲めに暗黑の中に苦悶して居る婦人を、健康に達する道に導く處の唯一の光明で御座います、故に自分の盡くすべき手段を盡くさずに煩悶する婦人は早く中將湯を御上りなさい、皆さんの身體は强壯となり、總ての煩悶は雲消霧散するので御座います、さて中將湯の功能は

㊀子宮病子宮内膜炎にて白帶多く前たゞれ又下腹腰足の引つり痛む人
㊁婦人神經(ヒステリー)血の道にて氣鬱ぎ癇高ぶり物を苦にし夜眠ず
㊂月經不順月經滯り等にて吹出物多く又何んとなく身體惡き人㊃逆上頭痛眩暈し肩こり腰足冷え㊄息切れ動悸强く手足痺れ水腫㊅十七八になりて月經なく血ぶとり又月經の前後に下腹痛む人㊆白帶赤滯下多く顏色蒼白き人㊇冷症にて難産流産の癖ある人㊈産後何となく常ならざる人、嘔吐、産後古血の滯り或は日立惡く㊉此外子宮血の道月經不順に起因する諸病にてぶら〳〵と惡き人㊀定價は四日分卅五錢
㊁一週間分六十錢㊂二週間分一圓十錢㊃三週間一圓六十錢㊄五週間二圓五十錢です本舖は東京市日本橋區通四丁目津村順天堂で取次店は全國到る處にあります㊅本舖には加減薬あり病狀委しく御申越あれ

女子文壇 定價金拾五錢 郵稅五厘